

塩野西遺跡群

# 塚田遺跡

—長野県北佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書—

1994

長野県御代田町教育委員会

塩野西遺跡群

# 塚田遺跡

——長野県北佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書——

1994

長野県御代田町教育委員会

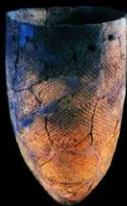


右、早期第IV群（鶴ヶ島台式）  
土器

縄文早期後半の土器 左3つ早期第III群（古屋敷遺跡第IV群類似土器）



坂田遺跡全景写真



縄文時代前期初頃の美濃土器群



縄文時代前期中葉の石器群

## 例 言

1. 本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の塚田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、佐久教育事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
3. 本発掘調査の概要については第1章に記してある。
4. 本発掘調査報告書作成の作業分担は以下の通り。
  - 遺物復原 田村朗子、伴野有希子、竹原久子、内堀久代、佐藤夫美子。
  - 遺物実測 鳥居 亮、齋藤真理、中山祐子、小山岳夫、シン航空写真(株)。
  - 遺物拓本 伴野有希子、内堀久代、佐藤夫美子。
  - 遺物精図 鳥居 亮、齋藤真理。
  - 遺構精図 中込輝子。
  - 遺構写真 堤 隆、鳥居 亮、小山岳夫。
  - 遺物写真 鳥居 亮。
  - 遺物観察 縄文早期一中沢道彦、古墳一小山岳夫。
- 表 作成 縄文前期一下平博行、費田明。
- 版 組 小山岳夫、費田明。
5. 本書に使用した航空写真は、(株)協同測量社が撮影したものである。
6. 本書の執筆分担については、文責を文頭か目次に明記した。なお、国立歴史民俗博物館水嶋正春氏、群馬県立大間々高校宮崎重雄氏、筑波大学桃崎祐輔氏、(株)パリオ・サーヴェイ社・古環境研究所から玉稿を賜った。
7. 本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに小山岳夫が行った。
8. 本調査・本報告書作成に際しては、長野県埋蔵文化財センター費田 明氏、飯田市教育委員会下平博行氏、長野県教育委員会中沢道彦氏から絶大なご協力を賜った。また、以下の方々から貴重な御助言・御配意を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。(順不同・敬称略)
  - 桐原 健、宮下健司、富沢一明、花岡 弘、白田武正
  - 寺島俊郎、細田 勝、児玉卓文、小林真寿、翠川泰弘
  - 竹原 学、市沢英利、山口逸弘、阿部芳郎、益谷昌彦
  - 藤巻幸男、小池幸夫、関根慎二、谷藤保彦。

## 凡 例

1. 遺構の名称  
J⇒縄文時代竪穴住居址 H⇒古墳時代竪穴住居址  
K⇒古 墳 D⇒土 坑
2. 遺構のナンバーは時代別に付してある。
3. 挿図の縮尺は図面に明示してある。
4. 遺構写真の縮尺は任意で、遺物写真は概ね挿図の縮尺と同じである。
5. 遺構面積の計測にはプランメーターを用い、3回の計測の平均値を面積とした。
6. 縄文・古墳時代の出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、一は不明、( )は推定値を示す。単位はcmである。
7. 出土遺物一覧表〈石器〉の法量は、一は不明、( )が現存値、( )がない場合は完存値を表す。単位は、cm・gである。  
また、 M・F=微小剝離痕を有する剥片  
R・F=加工痕を有する剥片
8. 土層の色調、遺物胎土の色調については、「新版標準土色帖」の表示に基づいて示した。
9. 挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。
  - (1)遺構 遺構断面=斜線  
焼 土=網点
  - (2)遺物 土器断面 縄文前期 含織維土器=網点  
古墳時代 須恵器 =網点  
土器表裏 古墳時代 赤色塗彩 =網点  
石器外面 砥石研砥面範圍・  
石器使用痕範圍 =網点

# 目次

口 絵  
例 言  
凡 例  
目 次

I	発掘調査の概要	小山岳夫	1
1	発掘調査の概要		3
(1)	調査に至る動機		3
(2)	発掘調査の概要		4
(3)	発掘区の設定と遺構の検出		5
(4)	発掘調査の経緯		8
II	遺跡の環境		9
1	遺跡の環境	森川宗治	11
(1)	自然環境		11
(2)	歴史的環境		11
2	層序	小山岳夫	16
III	遺構と遺物		17
1	縄文時代早期の遺物		19
(1)	早期第I群土器		19
(2)	早期第II群土器		22
(3)	早期第III群土器		30
(4)	早期第IV群土器		30
2	縄文時代前期の遺構と遺物		39
(1)	J-1号住居址		39
(2)	J-2号住居址		44
(3)	J-3号住居址		50
(4)	J-4号住居址		54
(5)	J-5号住居址		58
(6)	J-6号住居址		63
(7)	J-7号住居址		64
(8)	J-8号住居址		69
(9)	J-9号住居址		72
(10)	J-10号住居址		81
(11)	J-11号住居址		85
(12)	J-12号住居址		87
(13)	J-13号住居址		96
(14)	J-14号住居址		100
(15)	J-15号住居址		101
(16)	J-16号住居址		103
(17)	J-17号住居址		112
(18)	J-18号住居址		114
(19)	J-19号住居址		115
(20)	J-20号住居址		118

(21)	J-21号住居址	121
(22)	J-22号住居址	124
(23)	J-23号住居址	125
(24)	J-24号住居址	131
(25)	土坑	132
(26)	グリッド出土遺物	202
3	古墳時代初頭の遺構と遺物	210
(1)	H-1号住居址	210
(2)	H-2号住居址	214
(3)	H-3号住居址	217
(4)	H-4号住居址	218
(5)	H-5号住居址	225
(6)	H-6号住居址	229
4	後期古墳群と関連遺構・遺物	232
(1)	K-1号古墳	232
(2)	K-2号古墳	235
(3)	K-3号古墳	239
(4)	K-4号古墳	240
(5)	K-5号古墳	244
(6)	古墳時代と考えられる土坑	246
5	近現代の土坑	248
IV	総括(文責は各々文頭に記載)	249
1	塚田遺跡出土早期土器群について	251
2	J-5号住居址出土土器について	265
3	「塚田式」の設定とその様相について	267
4	縄文前期中葉の土器について	288
5	塚田遺跡出土土器の胎土について	292
6	前期初頭と前期中葉の石器について	311
7	縄文早・前期の集落様相	318
8	塚田遺跡におけるC <sup>14</sup> 年代測定	326
9	C <sup>14</sup> 年代の測定結果について	329
10	古墳時代初頭の土器群の位置付け	330
11	塚田遺跡の古墳時代集落	336
12	弥生式竇穴住居の変遷	340
13	H-4号住居址から出土した炭化構築材の樹種	344
14	塚田遺跡付近のテフラ検出分析	354
15	塚田遺跡付近のプラント・オパール分析	356
16	後期古墳群について	359
17	K-4号古墳出土馬の歯の計測	361
18	K-4号古墳周溝出土の馬歯・髯とその意義	362
19	塚田遺跡出土土器の石材産地分析	377

## V 写真図版

I  
発掘調査  
の概要



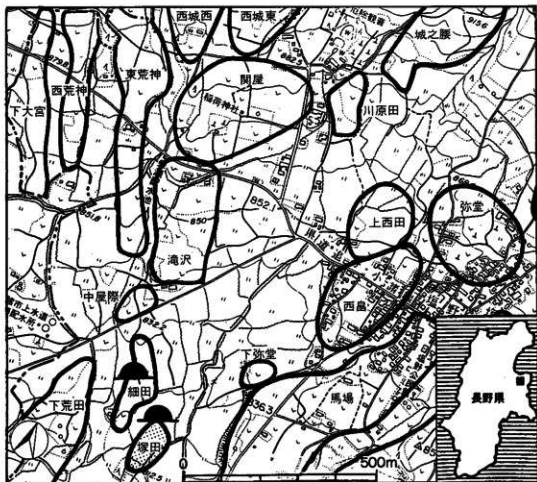


# Ⅰ 発掘調査の概要

## (1) 調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字塩野・小諸市大字塩野・八幡・柏木にかかる一帯、北大井地区において、水田経営の合理化を目的とした県営土地改良総合整備事業が平成2年より実施された。

一方、この地区には周知の遺跡が群在化しており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である佐久地方事務所と、保護部局である長野県教育委員会、御代田町教育委員会三者において話し合いがもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し、5ヵ年計画で記録保存をはかることとなった。



第1図 彌田遺跡(網点)と周辺の遺跡分布(1:10,000)

これを受けて、平成元年には翌年度工事実施地区にかかる弥堂・細尾・上西田・城之腰・川原田遺跡の5遺跡について試掘調査、平成2年度には城之腰と川原田遺跡の発掘調査、下弥堂・細田・塚田・下荒田遺跡の試掘調査、翌平成3年に前年試掘の4遺跡の本発掘調査が実施された。

## (2) 発掘調査の概要

- 1 遺跡名 塚田遺跡
- 2 所在地 長野県北佐久郡御代田町大字塩野字塚田
- 3 発掘期間 平成3年5月21日 ～ 平成3年11月12日 (平成3年度)
- 4 整理期間 平成3年11月12日 ～ 平成4年3月31日 (平成3年度)  
平成4年4月3日 ～ 平成5年3月31日 (平成4年度)  
平成5年4月2日 ～ 平成6年3月25日 (平成5年度)
- 5 発掘理由 平成3年度北大井地区県営土地改良総合整備事業に伴い、塚田遺跡の破壊が予想されるため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行なう。
- 6 発掘方針 広大な調査対象区について、居住域・生産域・墓域等全体の検出に努める。
- 7 費用負担 調査費用総額のうち、平成4年度までは77.5%、平成5年度以降は85%を原因である農政部局(佐久地方事務所)が負担し、残りの22.5%、15%については文化財補助事業として文化財保護部局が負担した(国庫補助金50%、県補助金15%、町費35%)。
- 8 事務局 ◎ 教育次長 山本岩正・藤巻興樹 ◎ 社会・同和教育係長 古越惠美夫、内堀篤志 ◎ 社会・同和教育係 飯塚守、内堀健司、土屋 寿、堤 隆、小山岳夫
- 9 調査団
  - 顧問 柳沢 薫 (御代田町長)
  - 参加 桜井為吉、田村泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、小林太郎、大井源寿、萩原弘祐、柳沢文人 (御代田町文化財審議委員)
  - 団長 土屋秀憲 (御代田町教育長)
  - 担当者 堤 隆・小山岳夫 (御代田町教育委員会)
  - 調査員 鳥居亮 (主任)、角張淳一、伴野有希子、中沢道彦、齋田明、下平博行、水沢教子
  - 補助員 小山内玲子、竹原久子、高地正雄、森川宗治、高瀬武雄、小口達志、小林嘉孝
  - 作業員 尾沼けさと、山本まさる、飯田すえの、内堀ときい、日向万平、日向愛子、古川まち子、井出貞重、萩原正子、掛川孝子、田村朗子、内堀美保子、小林満子、内堀久代、佐藤夫美子、中山祐子、中込輝子、齋藤真理

### (3) 発掘区の設定と遺構の検出

本調査の発掘区については第3図に示したとおりで、8,411㎡が該当する。

この発掘区については、土地改良総合整備事業に関する遺跡全体のなかで把握できるように、国家座標第Ⅲ系を用い、20m四方のグリッドを設定した。したがって、グリッドのY軸は真北を指すようになっている。グリッド名は、Y軸は北から1・2～、X軸は西からあ・い・う～とした。また、5列・う列の交点は東経138度29分22秒北緯36度19分36秒に位置している。

発掘はまず、遺跡範囲を絞り込むため重機により東西・南北にトレンチを入れ、調査地区内でテラス部分にのみ遺構が存在することが判明したため、そのすべての表土を除去した。

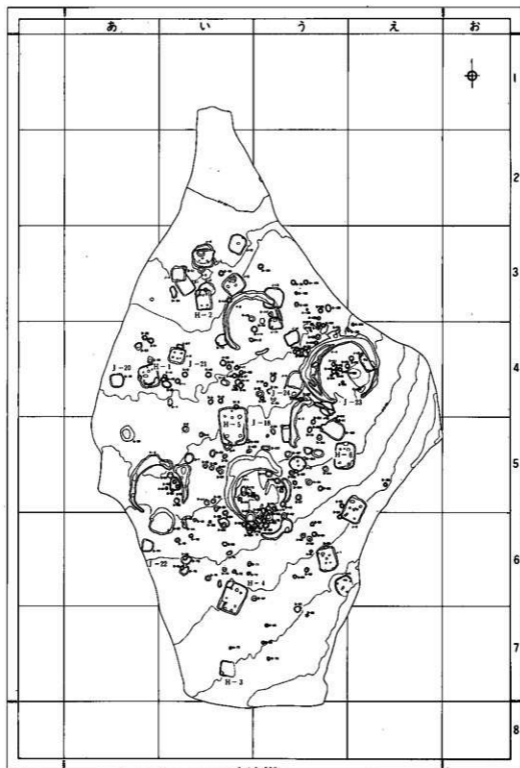
調査地区から検出された遺構の概要は第1表のとおりである。

第1表 塚田遺跡の検出遺構数

遺構 時期	竪穴 住居 等	土 坑	古 墳	計
縄文早期	0	175	0	199
縄文前期	24		0	
古墳前期	6	—	0	6
古墳後期	0	2	5	7
近現代	0	4	0	4
計	30	181	5	216

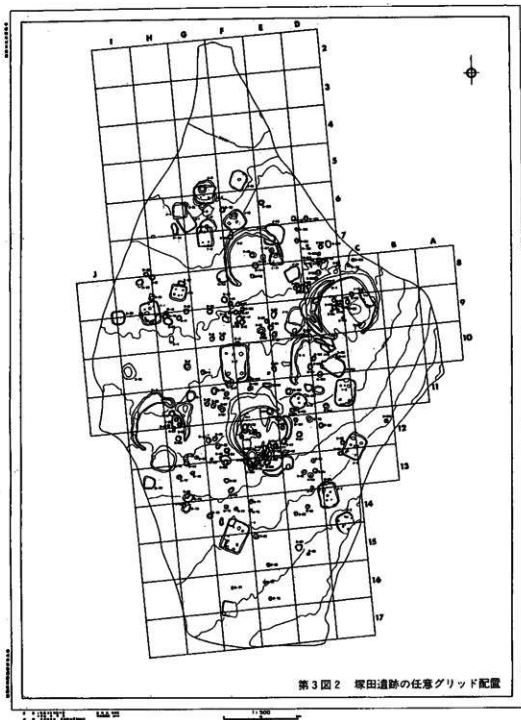


第2図 塚田遺跡全景



第3図1 塚田遺跡全体図 (1:1,000)

塚田遺跡は遺構検出時に多量の遺物が検出されたため、下記のように任意グリッドを設定してその取り上げを行った。遺物観察表におけるグリッドは第3図2のことをあらわしている。



#### (4) 発掘調査の経緯

平成3年度

5月21日

塚田遺跡表土削平開始。7月11日まで

6月27日

発掘調査開始。遺構のプラン確認。

7月4日

遺構掘り下げ開始。古墳時代住居より。

7月31日

縄文・古墳住居調査継続。古墳調査開始。

9月25日

調査継続。ラジコンヘリの空中撮影。

10月9日

調査及び航空測量準備終了。

10月15・16日

セスナ機による航空測量実施。

11月1日 ~ 平成4年3月30日

遺物整理。

平成4年度

平成4年4月16日 ~ 平成5年3月31日

遺物整理。土器復原、遺物実測等を行う。

平成5年度

平成5年4月1日 ~ 平成6年3月12日

遺物整理。土器拓本、土器・石器実測、遺構・遺物図の製図、原稿執筆、報告書編集作業等を行う。

3月31日

発掘調査報告書刊行。



第4図 表土除去



第5図 遺構の検出



第6図 遺構の掘り下げと実測



第7図 整理作業

II

遺跡の  
環 境





# 1 遺跡の環境

## (1) 自然環境

塚田遺跡は、東経138度29分22秒・北緯36度19分36秒に位置しており、標高814～818mを測る。遺跡が立地するのは、浅間山南麓の細い尾根の平坦部である。

活火山浅間山は標高2,560mをはかり、コニーデ型の裾野や三重式噴火口をみせている。浅間火山は、およそ数万年前から成長した若い火山で、その変遷は、古い順から黒斑山期(数万年前)・仏岩期(1万5千年前頃)・軽石流期(1万4千年前～1万1千年前頃)・前掛山期(数千年前)とされている。ことに、前掛山期における天仁元年(1108年)及び天明3年(1783年)の噴火は、現在の雲仙普賢岳の三倍以上の火山堆積物を噴出しており、『中右記』など歴史時代の記録に残る大噴火である。

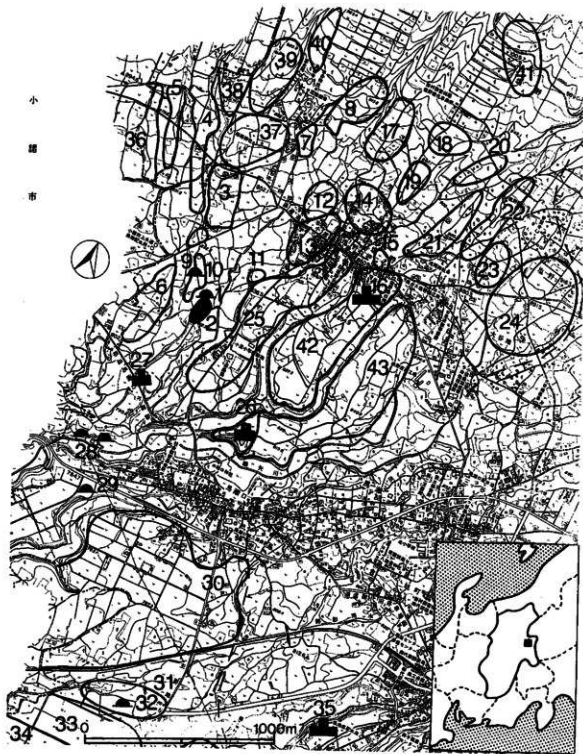
浅間山南麓地域の基盤層は、その火山噴出物により構成される。本遺跡の基盤層は主として軽石流期のうち、第2軽石流による堆積物からなっている。また、天仁元年の噴火によると推定される追分火砕流堆積物は、本遺跡から約1km以東の御代田町・軽井沢地域を覆っている。

さて、本遺跡の位置する標高800～900m地帯は、浅間山麓の第一伏流水が、地表の各所に湧出する地帯である。本遺跡の北西、真楽寺の「大沼の池」をたたえる豊富な湧水を始め、本遺跡の東方の湧玉の湧水など随所に湧水がみられ、往時の集落形成のための要件となっている。さらにその湧水や、河川の流下は、山麓末端部の軽石流堆積物を刻んで、当地方特有ないわゆる「田切り地形」を発達させている。

この地域の原植生は、コナラやクヌギなどの落葉広葉樹を主とするものであり、これにアカマツ、クリ、などが点在している。縄文時代も落葉広葉樹を主とするいわゆる雑木林的な景観を想定することができようか。

## (2) 歴史的環境

浅間山南麓の標高800～900m地帯には、豊富な湧水や動植物などの自然環境を背景に、縄文時代を中心として弥生終末～古墳初頭、奈良平安時代にかけての、数多くの遺跡が分布している(第8図)。近年の発掘調査成果に基づいて、時代ごとに遺跡のあり方を追ひ、塚田遺跡をとりまく歴史的環境をみてみよう。



第8図 塚田遺跡と周辺遺跡分布図 (1 : 20,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	所在地	時 代					備 考
			旧 石 器	縄 文 文	弥 生 文	古 墳	中 古 世	
1	塚 田	御代田町大字塩野字塚田		○		○		1991年度発掘調査
2	塚 田 古 墳 群	御代田町大字塩野字塚田				○		1991年度発掘調査
3	池 沢	御代田町大字塩野字池沢		○			○	1992・1993年度発掘調査
4	東 荒 神	御代田町大字塩野字東荒神		○			○	1993年度発掘調査
5	西 荒 神	御代田町大字塩野字西荒神		○			○	1993年度発掘調査
6	下 荒 田	御代田町大字塩野字下荒田		○	○		○	1991年度発掘調査
7	川 原 田	御代田町大字塩野字川原田		○			○	1991年度発掘調査
8	城 之 腰	御代田町大字塩野字城之腰		○			○	1991年度発掘調査
9	細 田 塚 古 墳	御代田町大字塩野字細田				○		1991・1992年度発掘調査
10	細 田	御代田町大字塩野字細田			○		○	1991年度発掘調査
11	下 弥 堂	御代田町大字塩野字下弥堂		○				1991年度発掘調査
12	上 西 田	御代田町大字塩野字上西田		○				
13	上 弥 堂	御代田町大字塩野字弥堂		○				
14	西 島	御代田町大字塩野字西島			○			
15	下 藤 塚	御代田町大字塩野字下藤塚		○				
16	塩 野 城	御代田町大字塩野字東屋					○	
17	細 尾 根	御代田町大字塩野字細尾根		○			○	
18	広 畑	御代田町大字塩野字広畑		○			○	1987年度発掘調査
19	窪	御代田町大字塩野字窪		○				
20	西 駒 込	御代田町大字塩野字西駒込		○				1991年度発掘調査
21	上 藤 塚	御代田町大字塩野字上藤塚		○				
22	東 二 ツ 石	御代田町大字塩野字東二ツ石		○				1991年度発掘調査
23	塩 野 西 原	御代田町大字塩野字西原		○				
24	湧 玉	御代田町大字塩野字湧玉		○				1991・1993年度発掘調査
25	馬 場	御代田町大字塩野字馬場					○	
26	馬 瀬 口 城	御代田町大字馬瀬口字北原					○	
27	東 十 石 城	御代田町大字馬瀬口字東十石					○	
28	めがね塚古墳群	御代田町大字馬瀬口字尻場			○			
29	下 原 古 墳 群	御代田町大字馬瀬口字下原				○		1974年度発掘調査
30	下 前 田 原 遺 跡 群	御代田町大字馬瀬口字西原					○	
31	根 岸	御代田町大字御代田字根岸					○	1987年度発掘調査
32	根 岸 古 墳	御代田町大字御代田字根岸					○	1991年度発掘調査
33	十 二	御代田町大字御代田字十二					○	1986年度発掘調査
34	前 田	御代田町大字御代田字前田					○	1985年度発掘調査
35	谷 地 城	御代田町大字御代田字榎場					○	
36	下 大 宮	御代田町大字塩野字下大宮		○				1993年度発掘調査
37	関 屋	御代田町大字塩野字関屋		○			○	1993年度発掘調査
38	西 城 西	御代田町大字塩野字西城		○				
39	西 城 東	御代田町大字塩野字西城		○				
40	大 沼	御代田町大字塩野字大沼		○			○	1985年度発掘調査
41	塩 野 山	御代田町大字塩野字塩野山		○				
42	下 ノ 平	御代田町大字塩野字下ノ平他		○			○	
43	北 原	御代田町大字塩野字北原他		○			○	

## 1 縄文時代

縄文時代の草創期の遺物は、川原田遺跡（第8図7）から「有茎尖頭器」が単独で出土しており、御代田町においては最も古い時期のものとして位置付けられる。

縄文時代の早期の遺跡は、本塚田遺跡（1）と、滝沢（3）・城之腰（8）・下荒田（6）の各遺跡がある。このうち早期前半の遺物としては、本遺跡からは山型文・楕円文・格子目文の押型文土器が、滝沢遺跡や城之腰遺跡からも楕円押型文土器の破片が出土している。また、縄文早期後半でも本遺跡からいくつかの土坑が検出されており、完形復原可能な尖底土器が数個確認された。このうちほぼ完全に復原された鶴ヶ島台式土器は、国内でも数少ない優品である。このほか本遺跡は田戸上層式土器や、絡条体圧痕土器の破片が出土した。

縄文時代前期初頭のいわゆる「中道式」を出土したのは下弥堂遺跡（11）で、竪穴住居址14軒と土坑16基からなる集落である。また、本塚田遺跡でもこの時期の集落から多量の「中道式」土器が出土した。前期初頭の住居が明瞭なカタチで検出されたこと自体が貴重であると共に、それらがまとまった「集落」というカタチで検出されたことは重要である。また、いわゆる「中道式」土器の型式学的な検討が、その豊富な一括資料から可能になった。

縄文時代の前期前半の遺跡としては、本塚田遺跡と城之腰遺跡である。城之腰遺跡においては、関山式と神ノ木式土器を含む竪穴住居址が5軒検出されている。本塚田遺跡は、当該期の竪穴住居址の10数軒を始め数多くの土坑より構成されており、城之腰遺跡と並んで縄文前期前半神ノ木期の良好な資料を提示するに至った。

縄文時代中期の集落は、川原田遺跡で竪穴住居址46軒が検出されている。舌状台地上に形成された集落からは、いわゆる「焼町土器」と言われる縄文中期中葉の土器が大量出土した。このほか中期の集落は、城之腰遺跡で4軒の住居址、また、滝沢・西荒神遺跡（3・5）では中期後半～後期前半の敷石住居址が調査された。なお、西駒込遺跡（20）の中期の住居からは、東北地方に分布する大木8b式に比定される土器が出土しており興味深い。

縄文時代後期では、滝沢遺跡から、滑石のペンダントを出土した焼骨のみられる土坑、耳形土製品を出土した立石風の石を伴う土坑など、墳墓群が検出された。また、同時期の住居も検出されている。なお、縄文時代晩期の資料は、本遺跡西南の小諸市石神遺跡で出土している。

## 2 弥生時代後期～古墳時代初頭

弥生時代後期最終末の遺跡としては、細田遺跡・下荒田遺跡がある。細田遺跡からは、竪穴住居址10軒が下荒田遺跡では5軒検出されている。従来、当町一帯の高冷地域は、稲作が営まれ始めて間のない弥生時代の遺跡は存在しないのではないかと言われてきた。しかし、平成3年の発掘調査によってこの時代の住居址が確認されるにいたった。遺跡付近では水田跡は検出されな

ったが、当時の人々が付近の湿地を利用して水稲耕作を行っていたことは十分に推測される。

継続する古墳時代初頭では、本塚田遺跡より竪穴住居址6軒からなる集落が検出された。

### 3 古墳時代後期

御代田町北部馬瀬口・塩野地区には、終末期古墳が散見されるが、本塚田でも塚田古墳群（円墳5基）の調査がなされた。しかし残念なことに、これらのいずれも畑地造成などにより墳丘が削られ、その存在が明確でなかったものである。したがって1基を除いてはいずれも周溝のみが検出されたにすぎない。一方、細田塚古墳（7）も塚田古墳群に隣接して存在している古墳で、平成4年の調査の際には横穴式石室から耳環や直刀の一部が出土した。

### 4 奈良・平安時代（御牧「塩野牧」と東山道を裏心として）

奈良・平安時代の当地域は、延喜式に見られる御牧「塩野牧」が存在したといわれる地域である。また、延喜の官道といわれる「東山道」が、本地域を横断していた可能性もある。

現在、その「塩野牧」の遺構とみられ、通称、「駒飼の土堤」と呼ばれる一辺50mの方形の土堤構築物は、本遺跡の北東約1kmの、塩野山地籍に残り、塩野山遺跡として町の指定史跡になっている。なお、この「塩野牧」の明確な範囲については不明であるが、その入口は、櫛口（ませぐち）ともされた現在の御代田町馬瀬口と推定されることや、駒などのついた牧に由来する地名から考えるに、相当広範囲に及んでいたことが推定される。川原田など塩野の平安時代の各遺跡もこの範囲に包括されており、「塩野牧」との係りも想定できる。

さて、延喜の官道といわれる「東山道」が、当時、本地域を横断していたことが推定されている。小諸から東進した「東山道」は、軽井沢・碓井峠を経て群馬へと通ずるが、そのためには必然的に本地域近隣を通過せねばならない。本地域では、これまで「東山道」そのものの発見には至っておらず、通過ルートについても諸説が提示されたが決着に至っていない。想定されている「東山道」通過ルート説は、大きくは3つあって、それぞれ「小田井ルート」・「馬瀬口ルート」・「塩野ルート」となっている。仮に、「塩野ルート」を採った場合、奈良平安時代の塩野西遺跡群の一連の集落付近を「東山道」が通っていたこととなり、その関連も無視できない。

ところで、昭和59年から62年にかけて発掘調査のなされた鎗師屋遺跡群（31～34）では、奈良平安時代の集落が充実して検出された。それに伴って多数の馬骨も出土したことなどから、鎗師屋の集落は「東山道」や「御牧」に関連が深いとする見解がある。かつて一志茂樹氏も、「東山道長倉駅」が存在したのは鎗師屋遺跡群に隣接する中屋敷地籍（小田井ルート）であると推定した経緯がある。鎗師屋遺跡群前田遺跡では、「長倉寺」と墨書された土器も検出されており、その関連性も窺わせている。本遺跡以外にもそうした関連性が考えられるところである。

## 2 層 序

塚田遺跡の基本層序については、第9図に示した。河川に近い遺跡西方は畑開墾時に大幅な盛り土が行われていたため、これを取り除いて基本層序を説明する。

### I層 耕作土層

黒褐色 (10YR3/3) を呈し、粒子やや粗く、やや粘性あり。大粒のバミス・礫を多く含む。層厚20~30cm前後。

### II層 漸移層

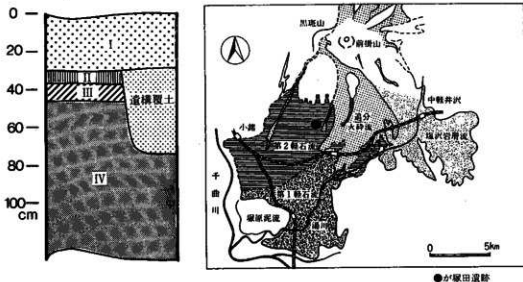
にぶい黄褐色 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含み始める。細粒バミスをよく含む。層厚8cm前後。

### III層 ローム層

にぶい黄橙色 (10YR6/4)。浅間山軽石流期の第2軽石流堆積物 (約1万1千年前)。径15~30mm前後の軽石を主体的に含み、ところにより拳大の軽石を多く含む。層厚8cm前後。

### IV層 砂層

灰黄褐色 (10YR6/2)。やや粗めの火山砂主体。



第9図 塚田遺跡の基本層序と浅間の火山堆積物の分布

III

遺構と  
遺物





## Ⅰ 縄文時代早期の遺物

塚田遺跡からは完形品4点をはじめ、縄文時代早期の土器群が比較的多く出土した。分布は特に一定範囲に集中せず、遺跡内に薄く広く散在する。まったく時代の異なる遺構から出土した破片も多い。後世（縄文前期、古墳初頭・後期）の住居・土坑・古墳などの掘削が激しく繰り返されたことにより散逸したと見てよいだろう。このようななかで遺構との共伴関係が明確なのは、完形品が埋納されるような状態でD-15号土坑底面から出土した156の1点のみである。

以下早期土器の分類を行い、説明を加える。

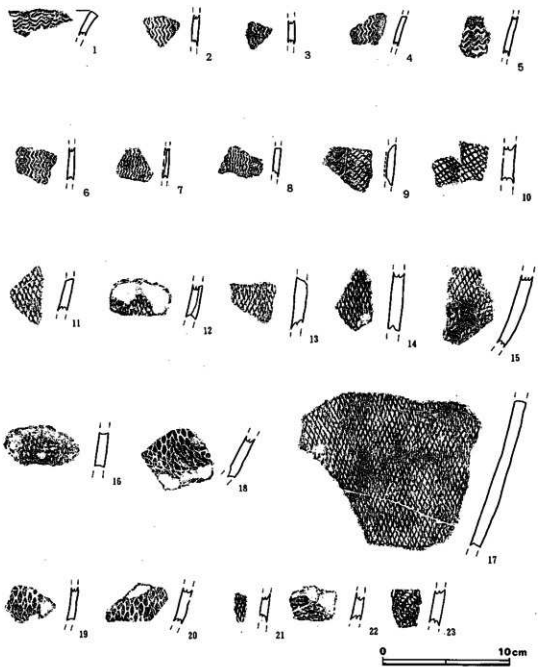
### (1) 早期第Ⅰ群土器 (第10図1-23)

早期前半所謂押型文土器群を一括した。総点数は23点を数える。1は口縁部に横方向帯状施文の山形文が施される。原体の長さは13mmと2-8の山形文の原体に比べ若干短めである。器厚は6mm。焼成は良好、堅致、色調は灰色、胎土に黒鉛を含む。沢式に比定できる。5は横方向帯状に、4・8は縦方向帯状に、2・3・6・7は縦方向密接に山形文が施される。原体の長さは2は17mm、5は24mm、6は19mm?、8は20mmを数える。2-8の器厚は5-6mm前後。焼成は良好、堅致で色調は外面橙色、にぶい褐色等で明るい。胎土には白色鉱物、雲母、石英などを含む。1-8の山形文施文の土器の半数はK3、K4出土である。小破片のため何ともいえないが、2-6は楕円式後半、もしくは細久保式前半の範疇で把えうるが、7は山形文の条が細く、2-6と原体の雰囲気異なる。

9-17は縦方向?密接の格子目文が施される。格子目文の陰刻部の彫りはしっかりしている。16では底部を一部磨消され、17では胴部を一部横方向に磨消している。9-17の器厚は8-10mm前後。焼成は良好、堅致で色調はにぶい褐色、にぶい黄褐色などを呈する。胎土には白色鉱物、石英、雲母などを含む。特に雲母が多い。岡谷市楕円遺跡出土の格子目土器に類似する。

18-20は密接施文の楕円文が施される。楕円粒の長径は7-8mmである。18は縦方向、横方向に、19、20は縦方向に施される。18は底部付近である。18-20の器厚は6-8mm前後となる。焼成は良好、堅致で色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土には微量ながらも繊維を含む他、白色鉱物、雲母を含む。類似資料は信濃町塞ノ神遺跡、更埴市森將軍家古墳墳丘出土資料などが挙げられる。細久保式後半、もしくは「塞ノ神式」の範疇で把えられる。

21-23は縄文が施される。21・22はLRの単節縄文が横方向に、23はRLの単節縄文が縦方向に施される。21-23の器厚は3-3.5mm前後と薄い。焼成は良好、堅致で色調はにぶい黄褐色、にぶい赤褐色を呈する。胎土には雲母、白色鉱物などを含む。おそらく押型文土器に伴うものと推



第10图 早期第I群土器 (1:4)

第3表 出土遺物一覧表 (縄文土器早期土器)

押型番号	器種	部位	図 号	器形および文様	陶 質 (内質)	新 土	色 調		焼成	出 土 証 書	備 考
							外 観	内 質			
1	甕	口縁	-	口縁部に東方向帯状施文の山形文 深縁の長さ13mm「口縁部群器 1」(全形・小形器参照)	黄ナデ	赤褐色 白色磁物	無	褐色 18YR 5/1	灰褐色 10YR 5/2	香	D-39 Ⅱ式
2	甕	胴部	-	東方向帯状施文の山形文 深縁の長さ17mm	黄ナデ	白色磁物 磁物	無	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	香	J-13 ⅡE I層
3	甕	胴部	-	東方向帯状施文の山形文	黄ナデ	白色磁物 磁物	無	褐色 7.5YR 6/6	紅褐色 7.5YR 5/4	香	D-9 G
4	甕	胴部	-	東方向帯状施文の山形文	ナデ	白色磁物 磁物	無	紅褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 10YR 5/2	香	D-158 -159 I層
5	甕	胴部	-	東方向帯状施文の山形文 深縁の長さ24mm	不明	白色磁物 磁物 石英(多)	無	褐色 7.5YR 6/6	紅褐色 7.5YR 5/3	香	J-4 ⅡE I層
6	甕	胴部	-	東方向帯状施文の山形文 深縁の長さ19mm? 深縁の盛り高い	黄ナデ	白色磁物 磁物	無	紅褐色 7.5YR 6/4	褐色 7.5YR 6/6	香	F-7
7	甕	胴部	-	東方向帯状施文の山形文 磨耗している	-	白色磁物	無	紅褐色 7.5YR 6/4	-	香	C-8 G
8	甕	胴部	-	東方向帯状施文の山形文 深縁の長さ20mm	不明	白色磁物 磁物 石英	無	褐色 7.5YR 4/3	紅褐色 7.5YR 5/3	香	C-8 G
9	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文	-	白色磁物 磁物石英(多)	無	紅褐色 7.5YR 5/3	-	香	D-85
10	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文	不明	白色磁物 磁物 石英	無	紅褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 5/2	香	H-11 G
11	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文 一部磨耗	ナデ	白色磁物 磁物 石英(多)	無	紅褐色 7.5YR 6/3	紅褐色 7.5YR 6/3	香	F-11 G
12	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文	黄ナデ	白色磁物 磁物 石英(多)	無	紅褐色 7.5YR 6/3	紅褐色 7.5YR 6/4	香	F-13 G
13	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文	黄ナデ	白色磁物 磁物 石英(多)	無	紅褐色 7.5YR 6/3	褐灰色 7.5YR 4/1	香	G-12 G
14	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文	黄ナデ	白色磁物 磁物 石英	無	紅褐色 10YR 6/3	灰褐色 10YR 6/2	香	D-52
15	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文 一部磨耗	不明	白色磁物 磁物 石英	無	紅褐色 10YR 6/4	灰褐色 7Y 7/2	香	G-4 G
16	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文 一部磨耗	黄ナデ	白色磁物 磁物 石英(多)	無	紅褐色 10YR 6/3	紅褐色 10YR 5/3	香	D-83
17	甕	胴部	-	東方向帯状施文の種子目文	黄ナデ	白色磁物 磁物	無	紅褐色 10YR 6/3	灰褐色 10YR 6/2	香	F-12 G
18	甕	胴部	-	東方内、東方向帯状施文の横列文 横列数は7～8mm	ナデ	白色磁物	磁目	紅褐色 10YR 6/3	褐灰色 10YR 4/1	香	D-108 ⅡE I層
19	甕	胴部	-	東方向帯状施文の横列文 横列数は7～8mm	黄ナデ	白色磁物	磁目	紅褐色 10YR 6/3	褐灰色 10YR 6/1	香	D-151
20	甕	胴部	-	東方向帯状施文の横列文 横列数は7～8mm	ナデ	磁物	磁目	紅褐色 10YR 6/3	褐灰色 10YR 4/1	香	D-108 ⅡE I層
21	甕	胴部	-	縄文LⅡ東方向	ナデ	白色磁物	無	紅褐色 5YR 5/3	紅褐色 10YR 7/3	香	D-11 G
22	甕	胴部	-	縄文LⅡ東方向	ナデ	白色磁物 磁物	無	紅褐色 5YR 5/3	紅褐色 10YR 7/3	香	D-11 G
23	甕	胴部	-	縄文LⅡ東方向	ナデ	白色磁物 磁物	無	紅褐色 10YR 7/3	紅褐色 5YR 5/3	香	D-95

定される。

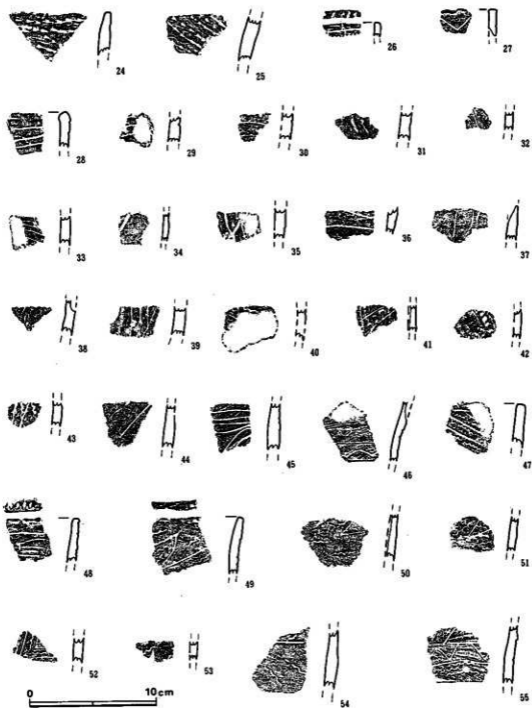
## (2) 早期第Ⅱ群土器 (第11図24~55、第12図56~87、第13図88~101)

早期前半所謂沈線文土器群を一括した。多くは田戸上層式に比定される。総点数は88点を数える。24・25は3mm前後の幅、断面半円形の連続刺突が施される。24は小波状口縁を呈し、横方向、斜方向に、25は横方向に押引状の連続刺突が施される。原体は円形の棒、もしくは竹管となろう。24は口端部がやや平坦気味に調整され、微かな刻目も確認される。24・25とも器厚は8~12mmと他の所謂沈線文土器群の資料に比べやや厚め、色調は灰黄褐色、胎土には微量ながらも繊維を含む他、雲母、石英を含む。いずれもJ15出土。施文具、胎土、色調等の類似性から同一個体と思われる。26~55、69の沈線文土器とは施文具、施文手法を異にする。ただ茅野市御座岩遺跡、神奈川県ナラス遺跡など中部、関東方面の田戸上層式、もしくはそれに併行する土器群では沈線内に押印や連続刺突がなされる例がある。また所謂相木式にも押印や連続刺突の手法がある。ここでは24、25を田戸上層式併行と理解したい。

26~39、44~46、67~69は幅1~1.6mm前後の沈線が施される。26~28は口縁部破片。26、28は横方向、27は鋸歯状に沈線が施される。26~28は口端部が平坦に調整され、26は貝殻腹縁、27は貝殻腹縁か沈線の施文具による口端部に刻目が、28では内面に刻目が施される。器厚は26~27は5~6mm、28は7~8mm前後。色調は灰褐色やにふい赤褐色を呈し、胎土には微量な繊維を含む他、雲母、白色鉱物、石英などを含む。29~39・44~46は胴部破片。29・30・33・36・37・39・45は数条、また多条の沈線が横方向、斜方向などに施される。31は斜方向に短沈線か刺突、35は幾何的な文様の沈線、46は平行沈線間に鋸歯状の沈線、67~69は斜方向に短沈線が施される。46は段をもつ。色調は灰褐色やにふい赤褐色、胎土には微量な繊維を含む他、雲母、白色鉱物、石英などを含む。器厚は5~6.5mm前後のものと8~10mm前後のものがあるが、部位による差異の可能性もある。

41~43は幅1~1.6mm前後の沈線と刺突が施される。41は2条の平行沈線間に刺突が充填される。刺突の原体は径5mm前後の半截竹管であろう。42は幅4mm前後の原体による連続刺突、43は2条の平行沈線と刺突が施される。沈線の施文具は26~39、44~46と共通する。色調は灰褐色やにふい褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、雲母や石英を多量に含む。

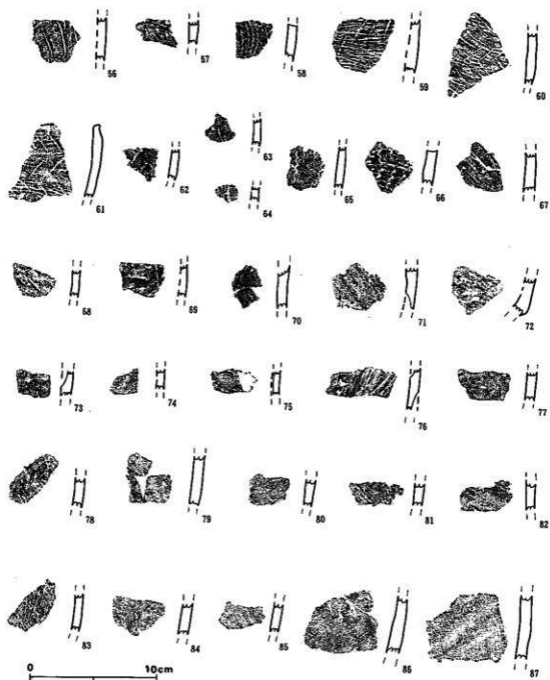
40、47~55は幅1~2mm前後の沈線と貝殻腹縁による押圧が施される。40、47~49は口縁部破片。40は器表面の剥落著しいが、斜方向の沈線と貝殻腹縁による押圧が施される。47は斜方向の平行沈線間に貝殻腹縁が押圧され、口端部下に1条の沈線が施される。平坦に調整された口端部は貝殻腹縁による刻目をもつ。48は横方向の平行沈線間に貝殻腹縁が押圧され、口端部内面は刻目をもち、焼成前に穿孔される。49は鋸歯状の沈線と貝殻腹縁による押圧が施される。口端部に



第11圖 早期第II群土器 (1:4)

探検 番号	器種	部位	注目	形状および文様	調査 (内図)	出土 層	色 調		出土 位置	備 考
							外 面	内 面		
24	深鉢	口縁	—	口縁部に小波状 装方向斜方向に押引	黒ナデ	黒色 石英	褐色 10YR 4/2	褐色 10YR 5/1	昔	J-15 1区1層
25	深鉢	胴部	—	装方向に押引 2区と同一製法	黒ナデ 黒ナデ	黒色 石英	褐色 10YR 4/2	褐色 10YR 5/1	昔	J-15 1区1層
26	深鉢	口縁	—	装方向1条の沈線 口縁部に長短波線による割目	ナデ	白色磁物	褐色 7.5YR 5/2	褐色 7.5YR 4/3	昔	J-3 1区口層
27	深鉢	口縁	—	周縁部の沈線 口縁部に斜方向の割目	黒ナデ	黒色 石英	にじみ-褐色 5YR 5/3	褐色 7.5YR 4/2	昔	D-90 田戸上層式併行
28	深鉢	口縁	—	装方向1条の沈線 口縁部に短方向の割目	黒ナデ	白色磁物 雲母 石英	にじみ-褐色 5YR 5/4	褐色 5YR 5/2	昔	F-10 G
29	深鉢	胴部	—	装方向1条の平行沈線	黒・黒ナデ	白色磁物 雲母 石英	褐色 7.5YR 5/1	にじみ-褐色 5YR 5/2	昔	F-12 G
30	深鉢	胴部	—	沈線	—	白色磁物 雲母 石英	にじみ-褐色 5YR 5/4	—	昔	D-109 1区1層
31	深鉢	胴部	—	斜方向の短条小波沈線	不明	雲母(多) 石英(多)	にじみ-褐色 5YR 5/3	—	昔	D-83 田戸上層式併行
32	深鉢	胴部	—	沈線	ナデ	白色磁物 雲母	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	にじみ-褐色 5YR 5/2	昔	E-110 田戸上層式併行
33	深鉢	胴部	—	斜方向の沈線	不明	白色磁物 雲母 石英	にじみ-褐色 5YR 5/3	にじみ-褐色 5YR 5/4	昔	F-7 G
34	深鉢	胴部	—	沈線	ナデ	白色磁物 雲母	にじみ-褐色 5YR 5/4	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	昔	I-9 G
35	深鉢	胴部	—	沈線	ナデ	白色磁物	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	にじみ-褐色 7.5YR 6/3	昔	D-9 G
36	深鉢	胴部	—	装方向2条の沈線	不明	白色磁物 雲母 小石 石英(多)	にじみ-褐色 5YR 5/3	にじみ-褐色 5YR 4/3	昔	D-90 田戸上層式併行
37	深鉢	胴部	—	装方向の沈線	不明	雲母(多) 石英(多)	にじみ-褐色 7.5YR 5/2	褐色 7.5YR 5/1	昔	D-102 田戸上層式併行
38	深鉢	胴部	—	斜方向の沈線 2区と同一製法	不明	雲母 石英(多)	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	褐色 10YR 4/1	昔	D-102 田戸上層式併行
39	深鉢	胴部	—	装方向斜方向の沈線	ナデ	白色磁物 雲母 石英	にじみ-褐色 5YR 5/4	にじみ-褐色 5YR 5/4	昔	D-106 +109 1層
40	深鉢	口縁	—	斜方向の沈線 口縁部に割目 長短波線による割目	不明	雲母(多) 石英 小石	褐色 7.5YR 5/2	にじみ-褐色 5YR 5/4	昔	J-7 1区 1層
41	深鉢	胴部	—	2条1条装斜方向の沈線 沈線区画内に短条	—	雲母(多) 石英(多)	褐色 7.5YR 5/2	—	昔	J-13 田戸上層式併行
42	深鉢	胴部	—	押引	—	雲母(多) 石英(多)	褐色 7.5YR 5/3	—	昔	D-39 田戸上層式併行
43	深鉢	胴部	—	斜方向2条の沈線	ナデ	白色磁物 雲母	褐色 7.5YR 5/2	にじみ-褐色 5YR 5/3	昔	D-32 田戸上層式併行
44	深鉢	胴部	—	斜方向1条の沈線	ナデ	白色磁物 雲母(多) 石英	にじみ-褐色 5YR 5/3	にじみ-褐色 5YR 5/3	昔	D-109 1区 1層
45	深鉢	胴部	—	装方向・斜方向の多条沈線	ナデ	白色磁物 雲母	にじみ-褐色 5YR 5/4	にじみ-褐色 5YR 5/4	昔	J-13 P11層
46	深鉢	胴部	—	装方向の平行沈線部に短条状沈線 波をもつ割目	黒ナデ	雲母	にじみ-褐色 5YR 5/4	にじみ-褐色 5YR 5/3	昔	I-90 田戸上層式併行

図録番号	器種	部位	位置	形状および文様	調査 (内面)	出土	色		焼成	出土 位置	備考
							外	内			
47	鉢	口縁	—	縦方向1条の沈線、斜方向の平行沈線跡に具装飾跡による押圧。口縁部に具装飾跡による押圧。	不明	磁器 石英	褐色 5YR 5/4	紅褐色 2.5YR 5/4	中	C-8 G	神戸上層式体行
48	鉢	口縁	—	縦方向の平行沈線跡に具装飾跡による押圧。口縁部内面に黒目、褐色の付着。	黄ナテ	白色磁物 磁物(多) 石英(多) 小石(多)	褐色 10YR 5/1	褐色 10YR 4/1	中	E-11 G付近	神戸上層式体行
49	鉢	口縁	—	扇状の沈線 具装飾跡による押圧 口縁部に具装飾跡による押圧	黄ナテ	磁物(多) 石英(多)	褐色 5YR 4/2	褐色 5YR 4/1	中	J-3 西 風岡木 根	神戸上層式体行
50	鉢	胴部	—	扇状の沈線 具装飾跡による押圧	—	磁物(多) 石英(多)	褐色 5YR 4/1	—	中	J-9 I区	神戸上層式体行
51	鉢	胴部	—	扇状の沈線 具装飾跡による押圧	黄ナテ	磁物(多) 石英	褐色 5YR 4/2	褐色 7.5YR 5/2	中	J-12 IV区II層	神戸上層式体行
52	鉢	胴部	—	扇状の沈線 具装飾跡による押圧	黄ナテ	磁物 石英	褐色 7.5YR 5/2	褐色 7.5YR 5/2	中	J-8 II区	神戸上層式体行
53	鉢	胴部	—	縦方向1条の沈線 具装飾跡による押圧	ナテ	磁物 石英	紅褐色 5YR 5/4	灰褐色 2.5YR 6/2	中	E-8 G	神戸上層式体行
54	鉢	胴部	—	縦方向1条の沈線 具装飾跡による押圧	ナテ	磁物 石英(多)	紅褐色 5YR 5/3	紅褐色 5YR 5/4	中	B-9 G	神戸上層式体行
55	鉢	胴部	—	縦方向の平行沈線跡に扇状沈線 具装飾跡による押圧	黄ナテ	白色磁物 磁物 石英 小石	褐色 10YR 4/1	紅褐色 5YR 5/4	中	F-11 G	神戸上層式体行
56	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧	—	白色磁物 磁物 石英(多)	紅褐色 5YR 5/4	—	中	J-5 V区I層	神戸上層式体行
57	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧 外表面に黒目	ナテ	白色磁物 磁物 石英	紅褐色 7.5YR 5/3	紅褐色 10YR 6/3	中	D-9 G	神戸上層式体行
58	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧	ナテ	白色磁物 磁物(多) 石英	紅褐色 7.5YR 5/3	褐色 7.5YR 5/1	中	F-7 G	神戸上層式体行
59	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧 外表面に黒目	—	白色磁物 磁物 石英	紅褐色 5YR 5/4	—	中	F-12 G	神戸上層式体行
60	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧 外表面に黒目	ナテ	白色磁物 小石 磁物(多) 石英(多)	紅褐色 5YR 5/3	褐色 7.5YR 5/1	中	J-7 III区 I層	神戸上層式体行
61	鉢	口縁	—	具装飾跡による押圧 外表面に黒目	黄ナテ	白色磁物 磁物 石英 小石(多)	褐色 10YR 5/2	紅褐色 5YR 5/4	中	J-9 IV区 I層	神戸上層式体行
62	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧	ナテ	白色磁物 磁物 石英 小石	紅褐色 5YR 5/3	灰褐色 2.5YR 6/2	中	D-51	神戸上層式体行
63	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧	ナテ	白色磁物 磁物 石英 小石	紅褐色 5YR 5/4	褐色 7.5YR 5/2	中	J-9 III区 II層	神戸上層式体行
64	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧	—	磁物(多) 石英(多)	紅褐色 5YR 5/4	—	中	R-102	神戸上層式体行
65	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧	ナテ	白色磁物 磁物 石英(多)	紅褐色 5YR 5/3	灰褐色 10YR 5/2	中	D-9 G	神戸上層式体行
66	鉢	胴部	—	具装飾跡による押圧 外表面に黒目	黄ナテ	白色磁物 磁物 石英	紅褐色 5YR 5/3	紅褐色 5YR 5/3	中	J-9 III区II層	神戸上層式体行
67	鉢	胴部	—	斜方向の短沈線?	不明	白色磁物 磁物(多) 石英(多)	紅褐色 5YR 5/3	褐色 10YR 5/1	中	D-83	神戸上層式体行
68	鉢	胴部	—	斜方向の短沈線	ナテ	白色磁物 磁物	紅褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 10YR 5/2	中	J-8 III区II層	神戸上層式体行
69	鉢	胴部	—	沈線	—	白色磁物 磁物 石英	紅褐色 5YR 5/3	—	中	E-8 G	神戸上層式体行

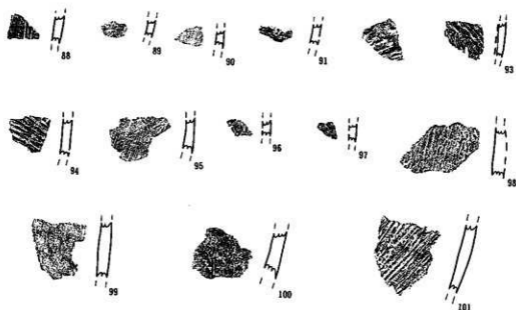


第12圖 早期第II群土器 (1:4)

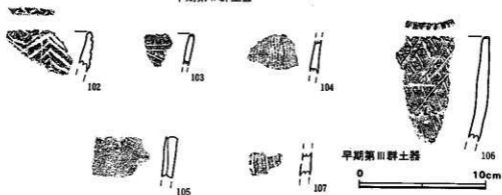


第6表 出土遺物一覽表 (繩文土器早期土器)

神居 番号	器 種	部位	法 量	器形および文様	調査 (内訳)	土 質	色		編成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
70	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色(多) 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 5YR 5/3	赤褐色 10YR 5/2	香	D-102
71	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色(多) 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 5YR 5/3	暗褐色 10YR 5/1	香	D-102
72	深鉢	底面	--	無文	不明	白色灰物 赤褐色	褐色 5YR 6/3	灰褐色 7.5YR 6/3	暗褐色 7.5YR 6/3	香	E-8 G
73	深鉢	胴部	--	無文	不明	白色灰物 赤褐色(多) 石灰(多)	無	灰褐色 7.5YR 5/2	暗褐色 10YR 4/1	香	D-102
74	深鉢	胴部	--	無文	--	赤褐色(多) 石灰(多)	無	灰褐色 5YR 5/3	--	香	D-104
75	深鉢	胴部	--	無文	--	赤褐色(多) 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 5/2	--	香	D-102
76	深鉢	胴部	--	無文	ナナ	赤褐色(多) 石灰(多)	無	灰褐色 5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 5/3	香	J-10 H区1層
77	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色(多) 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 5/2	暗褐色 10YR 5/1	香	D-102
78	深鉢	胴部	--	無文	ナナ	白色灰物 赤褐色 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 5/2	暗褐色 10YR 4/1	香	D-102
79	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色(多) 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 5YR 5/3	暗褐色 10YR 5/1	香	D-82
80	深鉢	胴部	--	無文	ナナナ	白色灰物 赤褐色	褐色 ?	灰褐色 5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 5/3	香	J-9 I区 1層
81	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 6/3	暗褐色 10YR 4/1	香	J-15 I区1層
82	深鉢	胴部	--	無文	ナナナ	白色灰物 赤褐色 石灰 小石	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 2.5Y 6/2	香	J-9 H区 1層
83	深鉢	胴部	--	無文	ナナ	白色灰物、赤 褐色、石灰(多) 小石(多)	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 5/2	暗褐色 10YR 5/1	香	J-9 H区 1層
84	深鉢	胴部	--	無文	ナナ	赤褐色 石灰	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 5/2	灰褐色 2.5Y 6/2	香	D-102
85	深鉢	胴部	--	無文	ナナ	白色灰物 赤褐色、石灰	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 5/2	灰褐色 7.5YR 5/2	香	J-9 IV区1層
86	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色(多) 石灰(多)	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 5/3	暗褐色 10YR 5/1	香	D-102
87	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色 石灰 小石	褐色 ?	灰褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 10YR 6/2	香	D-10
88	深鉢	胴部	--	外周赤褐色環状	不明	白色灰物 赤褐色、石灰	褐色 ?	灰褐色 5YR 5/3	灰褐色 10YR 5/3	香	D-154 I区1層
89	深鉢	胴部	--	無文	不明	赤褐色 石灰	無	灰褐色 7.5YR 5/3	暗褐色 10YR 5/1	香	J-15 H区1層
90	深鉢	胴部	--	無文	ナナ	白色灰物 赤褐色、石灰	無	灰褐色 7.5YR 5/3	暗褐色 10YR 5/1	香	E-8 G
91	深鉢	胴部	--	無文	ナナナ	白色灰物 赤褐色、小石	褐色 ?	灰褐色 5YR 5/3	暗褐色 10YR 5/1	香	H-11 G
92	深鉢	胴部	--	外周赤褐色環状	--	白色灰物 赤褐色	無	灰褐色 5YR 5/3	--	香	B-9 G
93	深鉢	胴部	--	外周赤褐色環状	--	白色灰物 赤褐色、小石	褐色 ?	灰褐色 5YR 4/3	--	香	J-10 IV区1層



早期第Ⅱ群土器



第13図 早期第Ⅱ・Ⅲ群土器 (1:4)

も貝殻腹縁が押圧される。色調はにぶい赤褐色や褐灰色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、白色鉱物、石英、雲母などを含む。50~55は胴部破片。50~52は鋸歯状の沈線と貝殻腹縁による押圧が、53、54は斜方向、横方向の沈線と貝殻腹縁による押圧が施される。55は横方向の平行沈線間に鋸歯状の沈線と貝殻腹縁による押圧が施される。55は段をもつ器形で、外面は条痕調整される。色調は褐灰色、灰褐色、にぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、白色鉱物、石英、雲母などを含む。

56~66は貝殻腹縁が押圧される。56、57、59は斜方向に、60、61は斜方向だが列ごとに交互に方向を違え菱杉状に、58、65、66は縦方向に施される。61は口縁部破片。口端部は平坦に調整され、貝殻腹縁の押圧による刻目をもつ。57、59~61、66は外面に条痕が施される。器厚は6~7

検出 番号	器 種	部位	出 産	検出および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		構成	出土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
94	漆鉢	胴部	—	外面糸状調整	不明	白色鉱物 雲母 石英	検出 ?	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	作	D-85	
95	漆鉢	胴部	—	外面糸状調整	ナデ	白色鉱物 雲母 石英 紫色鉄子	検出 ?	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	作	J-15 II区 I層	
96	漆鉢	胴部	—	無文	—	雲母(多) 石英(多)	無	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 5/3	—	作	D-100	
97	漆鉢	胴部	—	無文	—	雲母(多) 石英(多)	無	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 5/3	—	作		
98	漆鉢	胴部	—	外面糸状調整	糸状調整?	雲母(多) 石英(多)	検出	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 5/3	褐褐色 10YR 5/1	作	F-12 G	
99	漆鉢	胴部	—	無文	不明	白色鉱物 雲母(多) 石英(多)	検出	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 5/3	作	G-12 G	
100	漆鉢	胴部	—	外面糸状調整	ナデ	白色鉱物 雲母	検出	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 5/3	褐褐色 10YR 5/1	作	J-9 IV区 I層	
101	漆鉢	胴部	—	外面糸状調整	—	白色鉱物 雲母(多)	無	12.20 <sup>+</sup> 褐色 5YR 6/4	—	作	D-27	

「古壇堂IV群」類似の土器 第7表 出土遺物一覧表 (縄文土器早期土器)

検出 番号	器 種	部位	出 産	検出および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		構成	出土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
102	漆鉢	口縁	—	線状状の沈線 — 口縁部に割目	糸状調整 (貝殻)	雲母(多) 石英(多)	検出 ?	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	12.20 <sup>+</sup> 黄褐色 10YR 6/3	作	J-15 II区 I層	
103	漆鉢	口縁	—	線状状の沈線 — 口縁部に割目	不明	雲母 石英	検出 ?	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/4	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/4	作	J-19	
104	漆鉢	胴部	—	縄文無文 縦方向	ナデ	白色鉱物 雲母 石英	無	褐褐色 7.5YR 5/1	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 5/3	作	J-19 II区 II層	
105	漆鉢	胴部	—	縄文条線 L 縦方向	不明	雲母(多) 石英(多)	無	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 6/3	褐褐色 10YR 5/1	作	I-11 G	
106	漆鉢	口縁	—	線状状の沈線 — 口縁部に割目	ナデ	白色鉱物 雲母 石英 小石	無	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	12.20 <sup>+</sup> 赤褐色 5YR 5/3	作	J-12 III区 I層	
107	漆鉢	胴部	—	縄文 R L 縦方向	糸状調整 (貝殻)	石英(多) 雲母(多)	無	褐褐色 10YR 4/1	12.20 <sup>+</sup> 褐色 7.5YR 5/4	作		

mm前後。色調はにぶい赤褐色、にぶい褐色、灰黄褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、白色鉱物、石英、雲母、小石などを含む。

70~87、89~91、96、97、99は無文土器。条痕調整の後、ナデ消されたものも含む。器厚は7~9mm前後である。色調はにぶい赤褐色、にぶい褐色、灰褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、白色鉱物、石英、雲母などを含む。文様のある土器の胴部、底部破片の可能性もある。

88、92~95、98、100、101は外面に条痕が施される。器厚は7~9mm前後である。色調はにぶい赤褐色、にぶい褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、白色鉱物、石英、雲母などを含む。色調、胎土、調整が無文土器と同様、沈線や貝殻腹縁の押印が施された土器と共通する。

### (3) 早期第Ⅲ群土器 (第13図 102~107、第16図 154~156)

山梨県古屋敷遺跡第Ⅳ群土器に類似するものを一括した。総点数は9点を数える。古屋敷遺跡第Ⅳ群土器については野島式併行とされているが、本群についてはその前後型式のものを含む可能性もある。

102は外面に幅2mm前後の綾杉状の沈線、内面には横方向に条痕が施される。口端部には刻目をもつ。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、雲母、石英を多量に含む。

103は横方向、斜方向に2条1単位の浅い平行沈線が施され、口端部には刻目をもつ。器厚は4mmと薄く、色調はにぶい赤褐色、胎土には雲母、石英を含む。106は格子目状に沈線が施される。沈線は幅2~3mm前後で浅く、また一部は幅5mm、ナゾリ状に施されている。口端部は刻目を持つ。器厚は8~9mm前後、色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には白色鉱物、雲母、石英などを含む。102、103、106と沈線が施されるが、102は内面に横方向に条痕調整、103、106は沈線の浅さで第Ⅱ群土器とは差異が認められる。現状では田戸上層式から古屋敷遺跡第Ⅳ群までの数型式の枠の中で抱えたい。

104は無節Rの縄文が、105は単節LRの縄文が縦方向に施される。105は器厚は8~9mm前後、色調はにぶい褐色を呈し、胎土には雲母、石英を多量に含む。縄文は器面がやや乾き気味の時点で施され、接合痕は明瞭に残る。古屋敷遺跡第Ⅳ群土器に類似する。

154~156は完形復元された土器。154は口径19.9cm、器高27.7cmの丸底深鉢。D111号土坑出土単節RLの縄文が横方向に施される。器厚は6~8mm前後、色調はにぶい褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、金雲母を多量に、また石英を含む。155は口径20.3cm、器高28.6cmの丸底深鉢。D143号土坑出土単節LRの縄文が横方向に施される。器厚は6mm前後、補修孔をもつ。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は繊維を微量に含む他、雲母を多量にまた石英を含む。156は口径26.1cm、器高41.2cmの丸底深鉢。D15号土坑出土単節RLの縄文が横方向に施される。内面は条痕施文の後にナデ消される。器厚は6mm前後、色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、雲母を多量に、また石英白色を含む。154~156とも段をもたないか、丸底縄文施文の土器で雲母も多く含む点など古屋敷遺跡第Ⅳ群土器に類似する。

### (4) 早期第Ⅳ群土器 (第14・15図 108~153、第16図157~159)

所謂早期後半条痕文土器群を一括した。

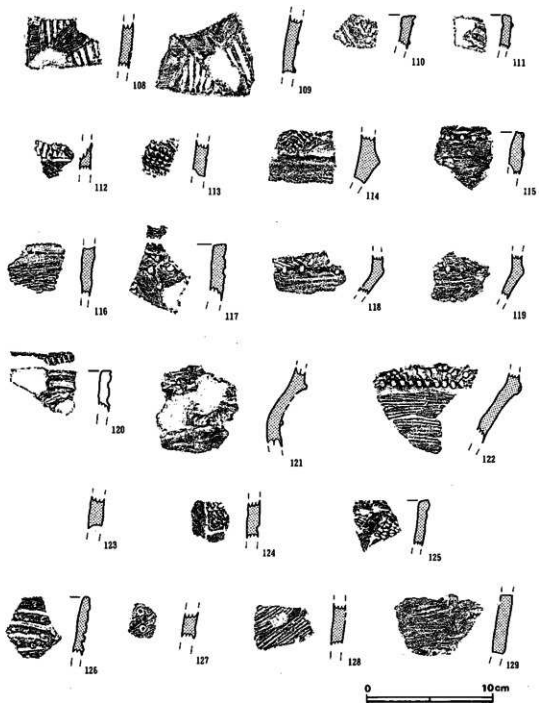
#### 第Ⅰ種土器 (第14図108~127、157~159)

鶺鴒島台式土器を一括した。総点数は23点を数える。108、109は微隆線による区画内に沈線が充填される。沈線の施文具は半截竹管と推定される。108の沈線の一部は押引沈線となる。内面は

条痕調整された後にナデ消される。色調はにぶい褐色や褐灰色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、白色鉱物、雲母、小石を含む。110は微隆線による区画内を押し沈線で充填され、微隆線上は刺突がなされる。口縁部破片で、口端部は刻目をもつ。111は微隆線上に刺突がなされる。110、111とも色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母を含む。112は沈線と微隆線による区画内に沈線が充填される。内外面に条痕調整がなされ、色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物や小石を含む。113、114は微隆線による区画内に連続刺突が充填される。114は段をもつ。色調はにぶい黄褐色、にぶい橙色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母、小石を含む。115、116は微隆線をもつ。115は口縁部。口端部外面に刻目をもつ。色調はにぶい橙色、にぶい褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母、石英を含む。118、121は微隆線による区画内に沈線で充填、117、119、122、157は微隆線による区画内に連続刺突で充填され、微隆線上に刺突がなされる。刺突は微隆線による区画の交差点部に主に施される。117、157は口縁部で口端部に刻目をもち、また118、119、121、122、157は胴部で段をもち、段部は刻まれる。色調はにぶい赤褐色、にぶい黄褐色、灰褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、石英、雲母、小石などを含む。120は沈線と刺突が施される口縁部破片。口端部には刻目をもつ。沈線の施工具は棒状工具か竹管の腹部と推定される。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母、小石を含む。123～125、158は沈線区画内に連続刺突で充填される。125は沈線区画の交差点部に刺突が、158は沈線区画の交差点部に円形竹管による刺突が施される。色調はにぶい橙色、にぶい黄褐色、灰黄褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、石英、雲母、小石などを含む。126は平行沈線間に円形竹管による刺突が施される口縁部破片。沈線の施工具は竹管と推定される。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母を含む。127は微隆線と円形竹管による刺突が施される。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母、石英、小石を含む。159は完形復元された土器、口径16.0cm器高25.5cmの丸底深鉢。D-17号土坑より出土した。段を2段もち、口端部には刻目をもつ。それぞれの段では3単位の0.6mm前後の細沈線による区画内を沈線で充填し、細沈線による区画の交差点には円形竹管による刺突がなされる。胴下部と内面は条痕により調整される。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、雲母、赤色鉱物、白色鉱物、小石などを含む。平底に近い丸底の底部形態は野鳥式に近いが、区画による交差点を円形竹管により刺突する点から鶴ヶ島台式の範囲で考えられる。

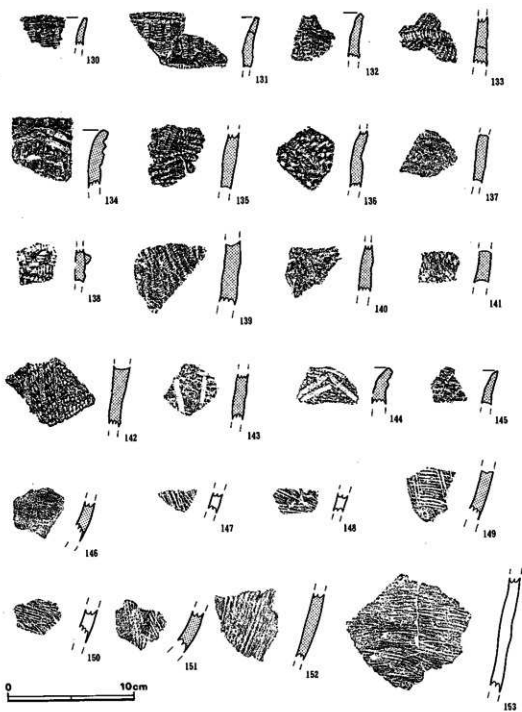
## 第2種土器 (第15図130～145)

早期末の土器群を一括した。130～133は外面縦方向、横方向に絡条体が押圧され、130～132は口端部にも絡条体が押圧される。130は131と同様に横方向の絡条体圧痕で区画された施文帯に縦方向の絡条体で押圧されたものと推定される。133は単節縄文LRが横方向に施される。色調は灰



第14图 早期第IV群土器 (1:4)

種別 番号	器種	形状	注記	形状および文様	調査 (内容)	出土 層	色調		数量	出土 位置	備考	
							外面	内面				
108	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部による区画内に比高で完 成(彫の一様性) 外面赤灰陶質	赤灰陶質 ナデ	隆縁	12.20~褐色 7.5YR 6/2	灰褐色 2.5Y 6/2	併	D-111	鶴ヶ島古式	
109	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部による区画内に比高で完 成	赤灰陶質(具 紋) ナデ	隆縁	白色灰物 雲母(多) 小石	灰褐色 10YR 5/1 10YR 5/1	併	F-10 G	鶴ヶ島古式	
110	深鉢	口縁	— —	隆縁部による区画内に引 比高で完 成隆縁上に刺突	赤灰陶質(具 紋)	有	12.20~赤褐色 5YR 5/3	12.20~赤褐色 5YR 5/3	併	D-8 G	鶴ヶ島古式	
111	深鉢	口縁	— —	隆縁部上に刺突	赤灰陶質	隆縁	白色灰物 雲母	12.20~赤褐色 5YR 5/4	12.20~赤褐色 5YR 5/4	併	F-11 G	鶴ヶ島古式
112	深鉢	胴上 部	— —	比高及び隆縁部による区画内に比 高で完	赤灰陶質 (具紋)	有	12.20~赤褐色 5YR 5/3	12.20~灰褐色 10YR 6/2	併	J-10 I層	鶴ヶ島古式	
113	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部による区画内に連続刺突で 完	ナデ	有	白色灰物 雲母 小石	12.20~黄褐色 10YR 6/3	12.20~赤褐色 5YR 5/3	併	F-9 G	鶴ヶ島古式
114	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部による区画内に連続刺突で 完 有 刺 下 部 赤灰陶質	ナデ	隆縁	白色灰物 雲母 小石	12.20~褐色 7.5YR 6/4	12.20~黄褐色 10YR 7/3	併	F-10 G	鶴ヶ島古式
115	深鉢	口縁	— —	隆縁部と刺突 口唇部外側に刺入	ナデ	有	白色灰物 雲母	12.20~褐色 5YR 6/3	12.20~黄褐色 10YR 6/2	併	H-11 G	鶴ヶ島古式
116	深鉢	胴縁	— —	隆縁部 外周赤灰陶質	赤灰陶質 (具紋)?	有	12.20~褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 5YR 5/2	併	F-10 G	鶴ヶ島古式	
117	深鉢	口縁	— —	隆縁部による区画内に刺突 隆縁部による区画内の変換点に刺突 口唇部外側に刺突	赤灰陶質 石美 雲母 小石	有	12.20~黄褐色 10YR 6/4	12.20~褐色 7.5YR 6/4	併	D-108	鶴ヶ島古式	
118	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部による区画内に比高で完 成隆縁上に刺突 有刺突上に刺突 下部赤灰陶質	赤灰陶質(具 紋) ナデ	隆縁	白色灰物 雲母 小石	12.20~赤褐色 5YR 5/4	12.20~赤褐色 5YR 4/5	併	J-3 I層	鶴ヶ島古式
119	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部による区画内に連続刺突で 完 有 刺 下 部 赤灰陶質	赤灰陶質 ナデ	隆縁	白色灰物 雲母	12.20~赤褐色 5YR 5/4	12.20~赤褐色 5YR 6/3	併	F-7 G	鶴ヶ島古式
120	深鉢	口縁	— —	比高 刺突 口唇部外側に	ナデ	有	白色灰物 石美 雲母 小石	12.20~褐色 7.5YR 6/4	12.20~褐色 7.5YR 6/4	併	J-12 H層	鶴ヶ島古式
121	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部による区画内に比高で完 成隆縁による区画内の変換点に刺突	赤灰陶質 ナデ	有	灰褐色 5YR 5/2	12.20~赤褐色 5YR 5/4	併	D-102	鶴ヶ島古式	
122	深鉢	胴縁	— —	隆縁部による区画内に連続刺突で 完 隆縁部上に刺突 有刺突上に刺突 下部赤灰陶質	赤灰陶質 白色灰物 石美 小石	有	12.20~黄褐色 10YR 6/3	12.20~褐色 5YR 6/4	併	C-9 G	鶴ヶ島古式	
123	深鉢	胴上 部	— —	比高区画内に連続刺突で完	ナデ	有	白色灰物 石美 雲母 小石	12.20~褐色 5YR 6/4	12.20~褐色 7.5YR 6/4	併	F-12 G	鶴ヶ島古式
124	深鉢	胴上 部	— —	比高区画内に連続刺突で完 比高区画内の変換点に刺突	赤灰陶質 (具紋)	有	12.20~黄褐色 10YR 6/3	12.20~黄褐色 10YR 6/3	併	D-158 159	鶴ヶ島古式	
125	深鉢	口縁	— —	比高区画内に連続刺突で完 比高区画内の変換点に刺突	ナデ	有	白色灰物 雲母 石美	灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 6/2	併	D-22	鶴ヶ島古式
126	深鉢	口縁	— —	平行比高内に同形刺突による刺突	ナデ	有	白色灰物 雲母	12.20~黄褐色 10YR 6/3	12.20~黄褐色 10YR 6/3	併	E-10 G	鶴ヶ島古式
127	深鉢	胴上 部	— —	隆縁部 同形刺突による刺突	ナデ	有	白色灰物 雲 母 石美小石	12.20~褐色 5YR 6/4	12.20~赤褐色 5YR 5/3	併	J-3	鶴ヶ島古式
128	深鉢	胴縁	— —	外周赤灰陶質	赤灰陶質(具 紋)	有	12.20~褐色 7.5YR 6/4	12.20~褐色 7.5YR 6/4	併	F-12 G	鶴ヶ島古式	
129	深鉢	胴縁	— —	外周赤灰及びナデ陶質	赤灰陶質 ナデ	有	白色灰物 雲母 石美 小石(多)	灰褐色 10YR 6/2	12.20~赤褐色 5YR 5/4	併	F-12 G	鶴ヶ島古式



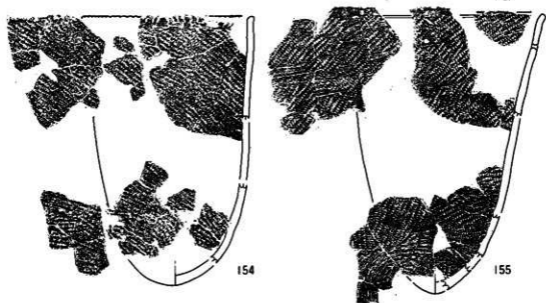
第15图 早期第IV群土器 (1:4)



第9表 出土遺物一覧表 <縄文土器早期土器>

神田 番号	器種	形状	注 意	断面および文様	調 査 (内容)	胎 土	色 調		備 考	出 土 位置	備 考
							外 面	内 面			
130	線鉢	口縁	-	外面斜方向に絡条体を押圧 - 口端部に絡条体の押圧 - 絡条体の厚さ0.5mm	ナデ	白色鉱物 雲母	灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 6/2	香	J-3 I層	早期木
131	線鉢	口縁	-	外面斜方向方向に絡条体(0段) を押し、口端部に絡条体の押圧。 絡条体の長さ20mm、幅0.5mm	高低調整 (絡条体厚さ?) ナデ	白色鉱物 雲母 石英 小石	灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 7/3	香	J-9	早期木
132	線鉢	口縁	-	外面斜方向方向に絡条体(0段) を押し、口端部に絡条体の押圧。 絡条体の幅0.1mm	高低調整 ナデ	白色鉱物 雲母	灰黄色 2.5Y 6/2	暗灰黄色 2.5Y 5/2	香	J-3 II層	早期木
133	線鉢	口縁	-	縦方向に絡条体(0段)を押し - 縦文しL R縦方向 - 絡条体厚体の幅0.5mm	ナデ	白色鉱物 雲母	灰黄褐色 10YR 7/3	褐色 10YR 6/1	香	D-147	早期木
134	線鉢	口縁	-	隆帯状、縦方向に絡条体(0段)を 押し、口端部に絡条体を押し。 絡条体厚体の幅0.5mm	高低調整 ナデ	白色鉱物 雲母	灰黄褐色 10YR 7/4	灰白色 10YR 7/1	香	F-12 G	早期木
135	線鉢	胴部	-	斜方向に絡条体(0段)を押し - 絡条体厚体の幅0.1mm - 縦文しL R縦方向	ナデ	白色鉱物 雲母	灰黄褐色 7.5YR 5/4	灰黄色 2.5Y 7/2	香	D-114	早期木
136	線鉢	胴部	-	斜方向に絡条体(0段)を押し 絡条体厚体の幅0.7mm	ナデ	白色鉱物 雲母 石英 小石	灰黄褐色 7.5YR 5/4	灰黄色 2.5Y 6/2	香	J-9 I層	早期木
137	線鉢	胴部	-	斜方向に絡条体(0段)を押し	ナデ	白色鉱物 雲母 石英 小石	灰黄褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 6/3	香	D-27	早期木
138	線鉢	胴部	-	隆帯上に縦方向、外面斜方向に絡 条体(0段)を押し - 絡条体厚体の幅0.5mm	-	白色鉱物 雲母 石英 小石	灰褐色 10YR 4/1	-	香	D-22	早期木
139	線鉢	胴部	-	縦文しL R縦方向 赤色隆帯	ナデ	白色鉱物 石英 雲母	灰黄褐色 7.5YR 5/4	褐色 10YR 4/1	香	表段	早期木
140	線鉢	胴部	-	斜方向に絡条体(0段)で押し 絡条体厚体の幅0.5mm	ナデ	白色鉱物 雲母	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 6/2	香	表段	早期木
141	線鉢	胴部	-	斜方向に絡条体(0段)で押し 絡条体厚体の幅4.4mm 縦文しL R縦方向	ナデ	白色鉱物 雲母	褐色 10YR 5/1	灰黄褐色 7.5YR 6/3	香	J-2	早期木
142	線鉢	胴部	-	縦方向斜方向に絡条体(0段)で押 圧。絡条体厚体の幅0.5mm、縦 文しL R縦方向	ナデ	白色鉱物 雲母	褐色 10YR 5/1	灰黄褐色 10YR 6/3	香	G-7 G	早期木
143	線鉢	胴部	-	斜方向に隆帯 縦文	ナデ	白色鉱物 雲母 石英	灰黄褐色 10YR 7/3	灰黄色 2.5Y 7/2	香	H-8 G	早期木
144	線鉢	口縁	-	隆帯状に1本の平行隆帯 縦文	ナデ	白色鉱物 雲母	灰褐色 7.5YR 5/2	褐色 10YR 5/1	香	J-9 I層	早期木
145	線鉢	胴部	-	斜方向に縦隆帯で押し	ナデ	白色鉱物 雲母	灰黄褐色 5YR 5/4	灰黄褐色 5YR 5/4	香	F-10 G	早期木

黄褐色、灰黄色、にぶい黄褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母などを含む。134～137、140～142は外面斜方向、もしくは鋸歯状に、また134、142では縦方向にも絡条体が押圧される。134では口端部にも絡条体が押圧される。絡条体は0段で、原体幅は4.4～7.0mmであるが、5mm前後のものが主体となる。135、141では単節縄文L Rが縦方向に、142では単節縄文L Rが横方向に施される。色調はにぶい黄褐色、にぶい褐色、褐灰色などを呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母などを含む。138は外面斜方向に、また隆帯上に縦方向に絡条体厚底が施さ



第16圖 早期第Ⅲ群土器

第10表 出土遺物一覽表 &lt;縄文土器早期土器&gt;

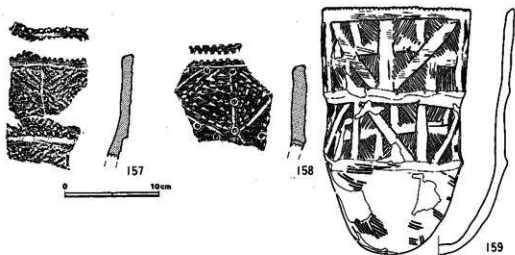
博物館番号	器種	部位	寸法	彫形および文様	調査 (内装)	胎土	色調		焼成	出土 位置	備考
							外 形	内 面			
143	鉢鉢	口縁	-	散文	不明	白色鉱物 雲母 小石	有	にぶい褐色 7.5YR 5/3	褐色色 10YR 5/1	昔	D-116
147	鉢鉢	口縁	-	外面赤飯腹線 (貝殻)	赤飯腹線 (貝殻)	白色鉱物 雲母	無	にぶい褐色 7.5YR 5/3	暗灰褐色 2.5Y 5/2	昔	D-112
148	鉢鉢	口縁	-	外面赤飯腹線 (貝殻)	赤ナテ	白色鉱物 雲母	微量	にぶい赤褐色 10YR 5/3	にぶい赤褐色 10YR 5/3	昔	F-6 G
149	鉢鉢	口縁	-	外面赤飯腹線 (貝殻)	赤飯腹線 (貝殻)	白色鉱物 小石	多	褐色色 10YR 6/1	にぶい褐色 10YR 6/2	昔	D-134 黒陶木
150	鉢鉢	口縁	-	外面赤飯腹線 (貝殻)	不明	白色鉱物 小石	微量	灰褐色 10YR 5/2	にぶい赤褐色 10YR 5/3	昔	D-112
151	鉢鉢	口縁	-	外面赤飯腹線 (貝殻)	赤飯腹線 (貝殻)	白色鉱物、多 小石(多)	多	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい褐色 7.5YR 5/3	昔	D-134 黒陶木 板
152	鉢鉢	口縁	-	外面赤飯腹線 (貝殻)	赤飯腹線 (貝殻)	雲母(多) 石英(多) 小石	微量	にぶい赤褐色 10YR 5/3	にぶい赤褐色 10YR 5/3	昔	J-15 11区 I層
153	鉢鉢	口縁	-	外面赤飯腹線 (貝殻)	赤飯腹線	白色鉱物 雲母 石英 小石	有	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい赤褐色 10YR 5/3	昔	D-129 付託

第11表 出土遺物一覽表 &lt;縄文土器早期土器&gt;

博物館番号	器種	部位	寸法	彫形および文様	調査 (内装)	胎土	色調		焼成	出土 位置	備考	
							外 形	内 面				
154	鉢鉢	足形	19.8cm 27.7cm	丸底 口縁部に赤目 縄文卑形Eノ線方向	ナテ	雲母(多) 石英	微量	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい赤褐色 5YR 5/4	昔	D-111	
155	鉢鉢	足形	20.3cm 28.6cm	丸底 底面彫りされる 縄文卑形Eノ線方向 口縁部に散文散文 輪母片あり	ナテ	雲母(多) 石英 赤色鉱物	微量	にぶい赤褐色 5YR 5/4	にぶい赤褐色 5YR 5/4	昔	D-143	
156	鉢鉢	足形	26.1cm 41.2cm	丸底 口縁部に赤目 縄文卑形Eノ線方向	赤飯腹線の後 ナテ	雲母(多) 石英 白色鉱物	微量	にぶい赤褐色 5YR 5/4	褐色色 7.5YR 4/1	昔	D-15	
157	鉢鉢	口縁	-	雲母線による区別内に連続的灰で 文様 雲母線による区別の灰点状 に明突 口縁部、雲母線の上に赤目	赤飯腹線 ナテ	雲母 石英 白色鉱物 小石	有	にぶい褐色 7.5YR 6/3	にぶい褐色 7.5YR 5/4	昔	D-134	輪+島台式
158	鉢鉢	口縁	-	丸底区内に連続的灰で文様 口縁上に同形竹管による押痕	赤飯腹線	雲母 白色鉱物 小石	有	にぶい赤褐色 10YR 5/3	にぶい赤褐色 10YR 6/3	昔	J-12	輪+島台式
159	鉢鉢	足形	15.6cm 25.8cm	丸底区内内に連続的灰で 口縁上に同形 口縁部赤目2枚	赤飯腹線	雲母 赤色鉱物 白色鉱物 小石	微量	にぶい赤褐色 10YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 5/3	昔	D-17	輪+島台式

れる。絡糸体は原体幅が6.6mmで「イモ虫状」のものである。色調は灰褐色を呈し、胎土には纖維を含む他、白色鉱物、雲母などを含む。

143、144は縄文地に斜方向、また鋸歯状に棒状工具、もしくは竹管による4～5mm前後の沈線が施される。色調はにぶい黄褐色、灰褐色を呈し、胎土には纖維を含む他、白色鉱物、雲母、などを含む。145は斜方向に貝殻腹線が押圧される。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には纖維を含む他、白色鉱物、雲母を含む。纖維の含有量等、胎土の面で戸上層式の貝殻腹線が押圧される土器とは様相を異にする。



第17図 早期第IV群鶴ヶ島台式土器

### 第3種土器 (第15図146~153)

条痕などが施される土器を一括した。総点数は43点を数える。おそらく第1種、もしくは第2種土器に伴うもの、またはその胴部と推定される。田戸上層式の条痕施文の土器とは繊維含有量等、胎土の面で様相を異にする。

146は底部。条痕調整の後にナデ消される。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母、小石を含む。

147、149、151~153は内外面に条痕が施される。条痕は貝殻条痕と推定される。色調はにぶい褐色、にぶい赤褐色、褐灰色を呈し、胎土には繊維を含む他、白色鉱物、雲母、小石などを含む。

148、150は外面に条痕が施され、内面はナデられたり、無文である。色調はにぶい褐色、にぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を微量に含む他、白色鉱物、雲母、小石などを含む。

## 2 縄文時代前期の遺構と遺物

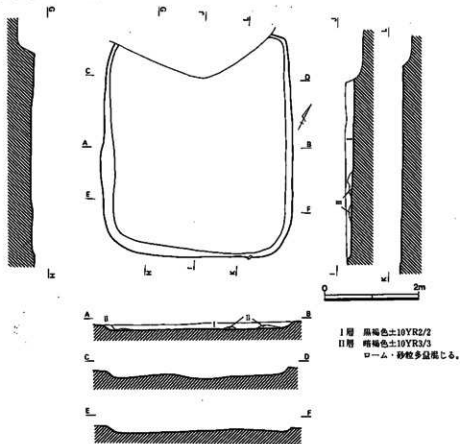
本遺跡では総数23にはる縄文時代の竪穴住居址が検出された。このうち、本書では炉・柱穴などがなく、明らかに建築址と判断できないものについても「住居址」の名称を付した。なぜなら、このような竪穴は縄文時代前期初頭の遺物が主体的に出土する例が多く、該期の住まいに当たる可能性が高いと判断したからである。

### (1) J-1号住居址

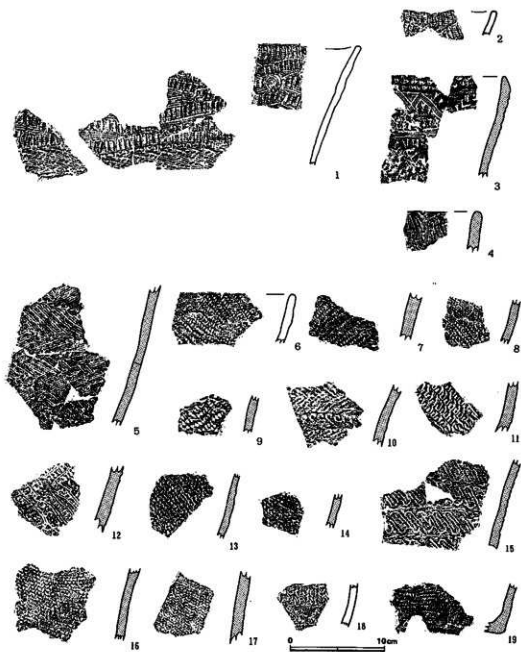
#### 遺構 第18図

本址はい-3グリッドにおいて検出された。J-4号住居址と重複関係を持ち、これに破壊される。

平面形は、東西3.70m南北4.58(推定)mの隅丸長方形を呈する。床面積は推定で16.05㎡を測



第18図 J-1号住居址実測図



第19图 J-1号住居址出土遺物(1:4)

第12表 J-1号住居址 出土遺物一覧表 &lt;縄文土器&gt;

探検番号	種別	部位	注	図形および文様	調製 (内面)	加工	種類	色調		焼成	出土位置	備考
								外面	内面			
1	埴輪	口縁	-	並紋口縁? 輪縁状工具による連続的刺文、帯刺文	ナテ	白色灰胎 黒化部分	埴	にじい・黄褐色 10YR 6/4	にじい・黄褐色 10YR 6/4	香	J-1 ワタウキ	
2	埴輪	口縁	-	平縁 帯刺文工具による連続的刺文、刺文	東方向のナテ 平縁仕上げ	白色灰胎 黒化部分	埴	暗褐色 7.5YR 5/6	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-1 ワタウキ	
3	埴輪	口縁	-	平縁 口唇部に印 (刺文) 帯 縁状工具による連続的刺文、刺文	ナテ	白色灰胎 黒化部分	埴	にじい・黄褐色 10YR 6/4	にじい・黄褐色 10YR 6/4	香	J-1 ワタウキ	
4	埴輪	口縁	-	平縁 支点が上・下に移動するナ テ具のコンパ入文	東方向のナテ 胴縁を挟す	白色灰胎 黒化部分	埴	にじい・黄褐色 10YR 6/4	にじい・黄褐色 10YR 6/4	香	J-1 ワタウキ	
5	埴輪	胴縁	-	刺文 L・R・R による同状構成	ナテ 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	赤褐色 5YR 4/6	暗赤褐色 5YR 3/2	香	J-1 (74-77-100-101-110)	
6	埴輪	口縁	-	平縁 刺文 L	東方向のナテ 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	埴	にじい・褐色 7.5YR 5/4	赤褐色 7.5YR 4/2	香	J-1 ワタウキ	
7	埴輪	胴縁	-	刺文 L	東方向のナテ 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/3	香	J-1 (13)	
8	埴輪	胴縁	-	刺文 L	東方向のナテ 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・赤褐色 5YR 4/4	暗褐色 10YR 3/3	香	J-1 ワタウキ	
9	埴輪	胴縁	-	刺文 L・R・R による同状構成	東方向のナテ 胴縁を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・黄褐色 10YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-1 (100)	
10	埴輪	胴縁	-	刺文 L・R・R による同状構成 胴縁の上端にループ文がつく(部分 まで)	東方向のナテ 平縁仕上げ	白色灰胎 黒化部分	石	黄褐色 10YR 5/6	暗褐色 10YR 3/3	香	J-1 ワタウキ	
11	埴輪	胴縁	-	多段ループ文 平縁竹管状工具に よる平行線	東方向のナテ 平縁仕上げ	白色灰胎 黒化部分	石	暗褐色 7.5YR 5/6	褐色 5YR 6/6	香	J-1 ワタウキ	
12	埴輪	胴縁	-	正反の命 $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \\ L \end{array} \right. \left. \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right.$	東方向のナテ 胴縁を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	J-1 ワタウキ		
13	埴輪	胴縁	-	刺文 $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \\ L \end{array} \right. \left. \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right.$ か?	東方向のナテ 平縁仕上げ	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・褐色 7.5YR 5/4	赤褐色 7.5YR 3/1	香	J-1 ワタウキ	14と同一体
14	埴輪	胴縁	-	刺文 $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \\ L \end{array} \right. \left. \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right.$ か?	東方向のナテ 平縁仕上げ	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・褐色 7.5YR 5/4	赤褐色 7.5YR 3/1	J-1 ワタウキ	13と同一体	
15	埴輪	胴縁	-		ナテ 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	暗褐色 7.5YR 5/6	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-1 ワタウキ	
16	埴輪	胴縁	-	刺文	東方向のナテ 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・褐色 7.5YR 5/4	赤褐色 7.5YR 4/2	香	J-1 (114)	
17	埴輪	胴縁	-	刺文	東方向のナテ 平縁仕上げ	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-1 ワタウキ	
18	埴輪	胴縁	-	帯の刺文	ナテ 帯の 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	埴	褐色 7.5YR 4/3	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-1 ワタウキ	
19	埴輪	胴縁	-	帯の刺文	ナテ 凹凸を挟す	白色灰胎 黒化部分	石	にじい・黄褐色 10YR 5/4	にじい・黄褐色 10YR 6/3	香	J-1 ワタウキ	

り、長軸の方位は N-24°-W を指す。

底面はおおむね平坦だがやや脆弱である。壁は緩い傾斜で立ち上がり、残存高は 5 cm 前後と低い。壁溝は持たない

ビット、炉は検出されなかった。

覆土は 2 層に分層された。I 層は住居中央にレンズ状に堆積する黒褐色土層 (10YR2/2)、II 層は壁際・床面上に薄く堆積するローム・砂粒を含む褐色土層 (10YR3/3) である。

遺物 第19・20図

本住居址からは多量の土器片と石器が出土した。このうち、土器は細片が多い。

1は繊維を含まない神ノ木式土器の口縁部から胴部の破片である。接合はしていないが、3破片同一個体と考えられる。かなり、硬質な焼きである。口縁部は波状を呈すると考えられ、櫛歯状工具によって、連続刺突文・菱形文が施されている。

2は波状口縁の土器で、口縁部幅狭区画帯に縦位の櫛歯状連続刺突文を施文する。口縁部文様帯は同刺突文を斜位に施し、それに沿って列点状刺突がなされ、文様を構成する。3は肥厚口縁の土器で、肥厚部に竹管状工具(?)でU字状の刺突を行っている。口縁部文様帯下端は、櫛歯状工具による条線で区画され、その中に鋸歯状の文様を描く。また、条線に沿って櫛歯状連続刺突がなされている。胴部は不鮮明でわからない。4は支点が上下に移動するタテ長のコンパス文が施文されている。5～19は縄文を施文する。無節(5)、単節(6～10)、多段ループ文(11)、正反の合(12)、前々段合燃?(13・14)、特殊な結節(15)、組紐(16・17)、東の縄文(18・19)が見られる。10の末端にはループ文が付いている。

石器は、石鏃(20～22)、石鏃未成品(23～25)、ビエスエスキュー(26・29)、石匙(27) 微小剝離痕のある剝片(28)、小形打製石斧(30～32)、剝片を素材とした石核(33～35)、磨石(36～38)が出土している。

時期

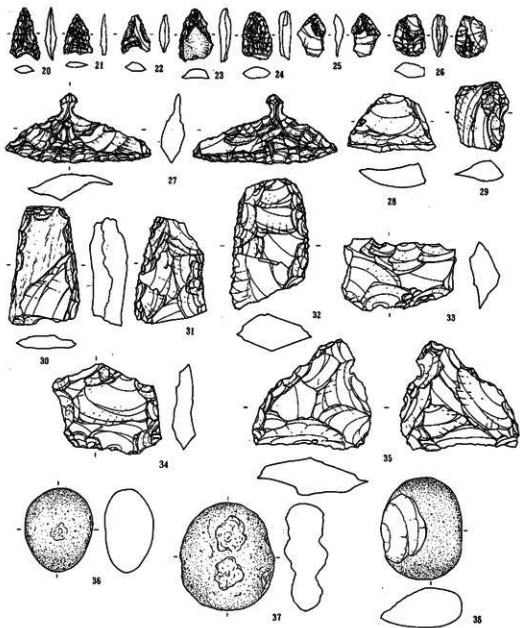
本址は上記の資料をもって、縄文時代前期中葉に位置付ける事ができよう。

第13表 J-1号住居址 出土遺物一覧表〈石器〉

採掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	採掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
20	石 鏃	チャート	2.8	1.6	0.6	1.5	No40	30	小形打製石斧	黒雲母片	6.2	3.7	0.6	19.5	
21	#	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.8		31	#	ガラス質安山岩	5.6	3.8	2.0	44.1	No10
22	#	#	2.0	1.5	0.5	—	No69	32	#	硬質頁岩	6.9	4.1	1.8	43.7	No146
23	#	#	2.8	1.8	0.5	2.4	No82 未成品	33	石 核	#	3.8	6.0	1.4	39.1	西
24	#	#	2.5	1.5	0.6	2.5	未成品	34	#	#	4.7	5.8	1.1	36.1	No49
25	#	#	2.3	1.5	0.4	1.0	No15 未成品	35	#	ガラス質安山岩	5.7	6.2	2.0	50.1	No56
26	ビエスエスキュー	#	2.2	1.6	0.8	3.0		36	磨 石	安山岩	8.6	7.0	5.1	404.6	
27	石 匙	硬質頁岩	3.7	7.6	1.3	18.2	No127	37	#	#	11.3	9.7	4.5	676.6	No145
28	M・F	チャート	5.1	4.6	1.2	18.0		38	#	#	10.6	8.6	4.2	529.2	No132
29	ビエスエスキュー	硬質頁岩	3.6	2.8	1.1	9.5									

・M・F=微小剝離痕を有する剝片、単位はcm、g





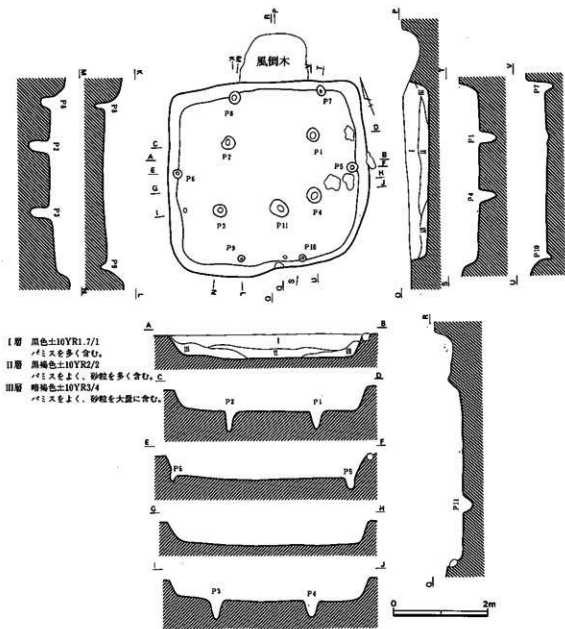
第20图 J-1号住居址出土遗物(1:2, 1:4)

## (2) J-2号住居址

住居址 第21図

本址はいー4グリッドにおいて検出された。重複関係はない。

プランは東西3.77m南北3.61mで隅丸方形を呈する。床面積は12.83㎡を測り長軸方向はほぼ



第21図 J-2号住居址実測図

N-19-Eを指す。

壁は急角度で立ち上がり、残存高50cmを測る。壁溝は検出されなかった。

床面はおおむね平坦であるが、やや脆弱である。

炉は検出されなかった。

ビットは11個が検出された。支柱穴と考えられるP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>は竪穴住居内四隅に長方形配置される。いずれも径28cm内外の円形ビットで深さ40cm内外を測る。東・西壁下中央には対面するように径20cm弱の小ビットP<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>がある。また、北・南壁下には2個一對のP<sub>7</sub>・P<sub>9</sub>、P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>がそれぞれある。P<sub>5</sub>~P<sub>10</sub>については東柱の残痕であろうか。

覆土は3層に分層された。住居中央にレンズ状に堆積するⅠⅡ層は黒色または黒褐色系の土で壁際に堆積するⅢ層は暗褐色土である。

#### 遺物 第22~24図

本住居址からは多量の土器片・石器が出土した。

1~7は口縁部である。1は4単位波状口縁をなし、口縁下に水平隆帯を貼付、波頂部より垂下隆帯を貼付し「逆T字状」をなすものである。隆帯上には刻みが施される。2は口縁部が肥厚する。3~6は波状口縁と思われ、3・4に関しては口唇端が外反し、尖り気味になる。7は口唇部に胴部と同一の原体による施文が見られる。

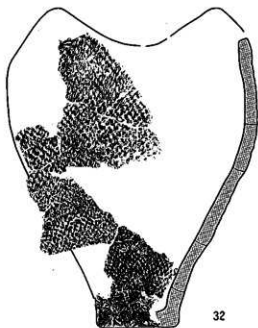
8~31は胴部破片である。8は縄文LR・RLによる羽状構成を施文後、燃糸文L1本の押圧を2条横位に施文している。10~12は縄文LR・RLにより、羽状あるいは菱形構成をなすものであり、14・17・20はやや縦走気味に縄文を施している。26は無節縄文を28は燃糸文を施している。29は器面に縦方向の条痕を施している。30は正反の合を施文後、コンパス文を施す関山Ⅱ式土器である。そのほかは単節縄文を斜位に施文しており、あるいは羽状を成すことも考えられる。

全容が推定できる土器は3点ある。32は波状口縁を持つ平底の関山Ⅱ式土器で、器面全面に多条の複節縄文が施される。33も波状口縁で器面全面に縄文LR・RLによる羽状構成の文様が描かれる。35はオセンベ土器の胴部である。

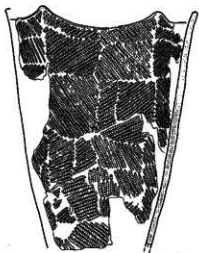
石器は、石鏃(36~41)、石鏃未成品(42~44)、ピエスエスキーユ(48~55)、石匙(45~47)、敲石(56・57)、磨石(58~61)が出土している。

#### 時期

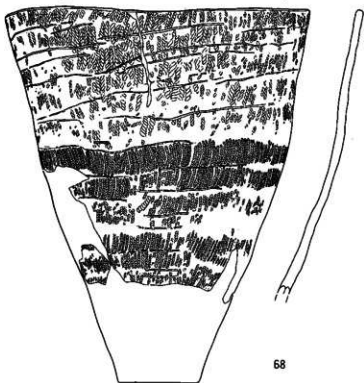
上記の出土土器は相当の時間幅を持つが、全容が復元できる土器2点(32・33)をもって本址は縄文時代前期中葉に位置付ける事ができよう。



32

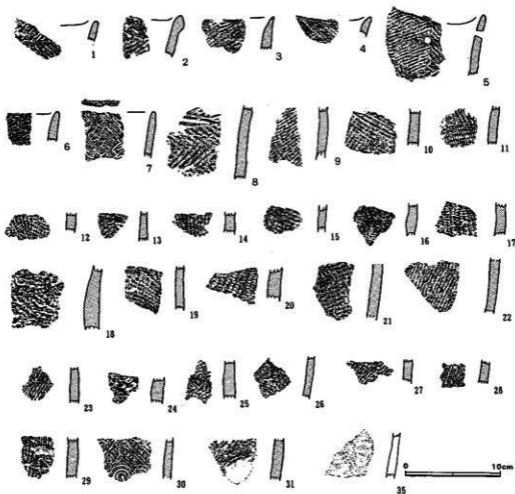


33



68

第22図 J-2・12号住居址出土遺物(1:4)〈68はJ-12〉

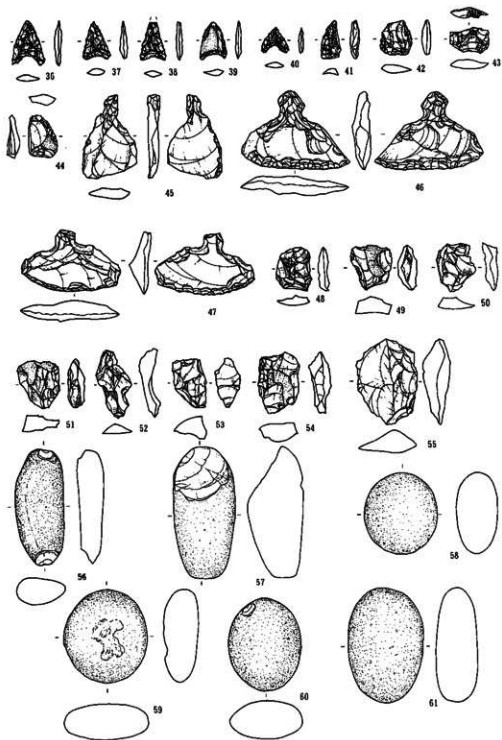


第23図 J-2号住居址出土遺物 (1:4)

第14表 J-2号住居址 出土遺物一覽表 (縄文土器)

押出番号	器種	部位	形状および文様	調査 (内装)	粘土	織成	色		焼成	出土位置	備考
							外面	内面			
1	厚鉢	口縁	4平並波状口縁 縄文Rし、Lしによる斜線織成を施す。波首飾及び口縁部下に磨擦を施す。磨擦は部分。	ナデ	白色磁物 黄化粘片	布	紅褐色 10YR 5/3	灰青色 10YR 5/2	香	J-2	
2	厚鉢	口縁	口縁部三角状 (倒置三角状) 縄文Lし	不明	白色磁物 黄化粘片	布	紅褐色 10YR 7/3	紅褐色 10YR 7/4	香	J-2	
3	厚鉢	口縁	縄文Lし	ナデ及び磨擦状の調整	白色磁物 黄化粘片	布	灰青色 10YR 4/2	灰青色 10YR 4/2	香	J-2	
4	厚鉢	口縁	波状口縁? 縄文Rし	ナデ及び磨擦状の調整	白色磁物 黄化粘片	布	灰青色 10YR 4/2	灰青色 10YR 4/2	香	J-2	
5	厚鉢	口縁	波状口縁? 縄文Lしを方向によって縦方向波状織成	磨成状の調整 (縦方向)	白色磁物 黄化粘片	布	紅褐色 10YR 4/3	暗褐色 10YR 3/3	香	J-2	輪縁孔あり
6	厚鉢	口縁	波状口縁? 磨成縄文?	磨成状の調整 (縦方向)	白色磁物 黄化粘片	布	紅褐色 10YR 4/3	紅褐色 10YR 5/2	香	J-2	

件目 番号	部 類	部位	法 法	部材および文様	調 整 (内容)	土 土	色 調		備 考	出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面			
7	漆	口縁	—	の巻紙	捲紙状の調整 (縦方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	黒褐色 7.5YR 4/1	巻	J-2
8	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成と 横文、横向し1本の押延と2本並文	ナデ及び捲紙 状の調整	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 5YR 6/4	にじみ・褐色 5YR 6/3	巻	J-2
9	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成 と、非巻紙による縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・黄褐色 5YR 5/4	黒褐色 5YR 4/1	巻	J-2
10	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 5/2	巻	J-2
11	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	ナデ及び捲紙 状の調整	白色底物 黒化箔片	有	黒褐色 5YR 3/1	黒褐色 5YR 5/2	巻	J-2
12	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成 と、非巻紙による縦線構成	捲紙状の調整	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/2	巻	J-2
13	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成 と、非巻紙による縦線構成	ナデ	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	巻	J-2
14	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	ナデ	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 10YR 5/2	黒褐色 7.5YR 6/2	巻	J-2
15	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	不明	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 7/4	黒褐色 7.5YR 4/1	巻	J-2
16	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (縦方向)	白色底物 黒化箔片	無	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 5/2	巻	J-2
17	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 7/4	にじみ・褐色 7.5YR 7/4	巻	J-2
18	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	ナデ及び捲紙 状の調整	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	黒褐色 7.5YR 6/1	巻	J-2
19	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	ナデ及び捲紙 状の調整	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	黒褐色 10YR 6/1	巻	J-2
20	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	黒褐色 7.5YR 4/1	にじみ・褐色 1.5YR 5/3	巻	J-2
21	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 4/1	巻	J-2
22	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	黒褐色 7.5YR 5/1	褐色 7.5YR 4/4	巻	J-2
23	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	ナデ	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・黄褐色 5YR 5/4	にじみ・黄褐色 5YR 5/3	巻	J-2
24	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	ナデ	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 5/1	巻	J-2
25	漆	胴縁	—	縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (縦方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 7/4	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	巻	J-2
26	漆	胴縁	—	非巻紙文 (原形不明)	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・黄褐色 5YR 5/4	黒褐色 5YR 4/2	巻	J-2
27	漆	胴縁	—	非巻紙文 (原形不明)	ナデ	白色底物 黒化箔片	有	褐色 5YR 4/1	黒褐色 5YR 5/2	巻	J-2
28	漆	胴縁	—	非巻紙文 (原形不明)	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	巻	J-2
29	漆	胴縁	—	非巻紙文 (内容不明)	不明	白色底物 黒化箔片	有	黒褐色 10YR 5/2	黒褐色 10YR 5/2	巻	J-2
30	漆	胴縁	—	正反の合 コンパスト	ナデ	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 4/1	巻	J-2
31	漆	胴縁	—	非巻紙文 (原形不明)	捲紙状の調整	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	黒褐色 7.5YR 3/1	巻	J-2
32	漆	口縁	(25.0) (26.7) (28.7)	平底 平底 平底	ナデ、ヨコ方 向のナデ	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	巻	J-2
33	漆	口縁	(20.0) (25.5)	平底 縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	有	にじみ・黄褐色 5YR 5/4	黒褐色 10YR 4/1	巻	J-2
34	漆	口縁	(20.0) (25.5)	平底 縦文し、Rしによる縦線構成	捲紙状の調整 (横方向)	白色底物 黒化箔片	無	褐色 7.5YR 7/6	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	巻	J-12
35	漆	胴縁	—	縦文 マゼンペ土器	ナデ (横方向)	石質 黒化箔片	無	黒褐色 10YR 4/1	黒褐色 10YR 3/1	巻	J-2



第24图 J-2号住居址出土遗物 (1:2, 1:4)

第15表 J-2号住居址 出土遺物一覧表〈石器〉

神宮番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	河原番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
36	石 鏃	玉 髓	2.4	1.7	0.3	1.0	No201	49	ビエス エスキュー	黒曜石	2.3	2.1	1.0	4.6	No38
37	#	硬質頁岩	2.0	1.5	0.4	0.8	No125	50	#	#	2.5	2.1	0.7	2.9	No198
38	#	チャート	2.0	1.3	0.3	0.7	No89	51	#	#	2.6	2.2	0.9	4.9	No157
39	#	黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.7	No146	52	#	#	3.6	1.8	0.8	3.3	
40	#	#	1.3	1.5	0.3	0.3	No79	53	#	チャート	2.6	1.8	1.3	4.7	No11
41	#	#	2.0	1.0	0.5	0.6		54	#	#	3.2	2.2	1.1	7.4	
42	石 鏃	燧石	1.8	1.7	0.5	1.4	No148	55	#	ガラス質 安山岩	4.5	3.3	1.4	16.8	
43	#	#	1.4	2.0	0.5	1.4	No98	56	敲 石	安山岩	12.0	5.0	2.9	267.8	No191
44	#	硬質頁岩	2.2	1.5	0.6	1.8	No57	57	#	#	13.6	6.5	5.9	714.3	
45	石 匙	チャート	4.4	2.8	0.6	6.0	No163	58	磨 石	#	8.4	7.7	4.4	380.9	No212
46	#	硬質頁岩	4.1	5.7	1.9	15.7	No54	59	#	#	9.8	8.8	3.7	427.4	
47	#	ガラス質 安山岩	3.2	5.2	1.0	—	No166	60	#	#	9.8	7.6	3.9	413.7	No214
48	ビエス エスキュー	黒曜石	2.3	1.9	0.5	2.1	No36	61	#	#	12.1	7.9	4.3	523.6	No192

単位はcm, g

## (3) J-3号住居址

## 住居址 第25図

本址は、い-3グリッドに位置する。D-3・26・36に破壊され、J-6号住居址を破壊するその規模は東西5.38m南北4.31mで、平面形状は隅丸長方形を呈する。床面積は21.41㎡を測る。長軸方向はN-8°-Eを指す。

壁体は堅固で、残存高10~28cmを測る。壁溝は検出されなかった。

床面は、おおむね平坦であるがやや脆弱である。

炉は住居のおおむね中央に設けられる。径32×37cmの楕円形の掘り込みの南北両側に角柱状の石を平行に配した「石囲炉」の一種で底面に2個の小ピットを持つ。火床面は余り焼け込んだ底跡は認められなかった。

ピットは2個が検出された。住居中央南寄りの東西線上に2個が整然と並んでおり、支柱穴に当たる可能性もある。大きさはやや不揃いでP<sub>1</sub>は径30cmの円形で深さ25cm、P<sub>2</sub>は径33cmの楕円形で深さ28cmを測る。

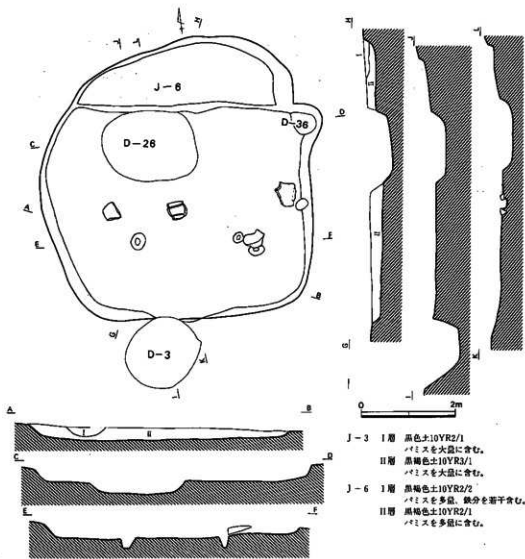
覆土はほぼ黒色土(第II層)のみの単層である。



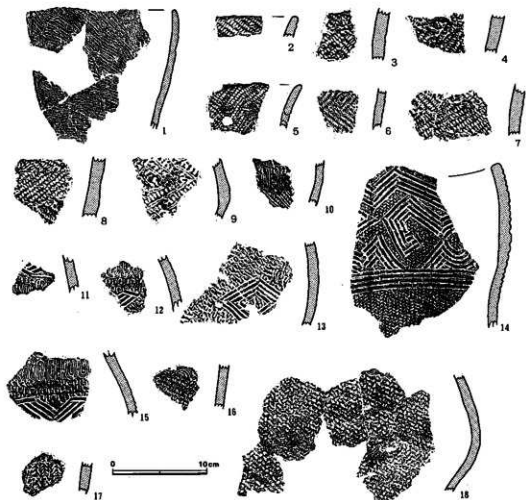
遺物 第26・27図

本住居址からは縄文土器・石器が出土したが、他の住居址に比べ量は少ない。

1は平縁で、無節縄文を施文する。また、破片下端にはへら状工具で描いた細い格子目文が見られる。2～8は単節縄文を施す土器で、2以外は羽状を構成する。9・10は正反合で、10はその上にタテ長のコンパス文を施している。11～13・15はループ文を地文とし、半截竹管状工具で幾何学的文様が描かれる。11・12・15は支点が変わるコンパス文を合わせて施文する。14は波状口縁の土器で組紐地文上に半截竹管状工具で幾何学的文様が描かれる。16は前々段半燃と思われる縄で、支点変えのコンパス文が見られる。17は東の縄文、18は組紐である。



第25図 J-3号住居址、J-6号住居址実測図

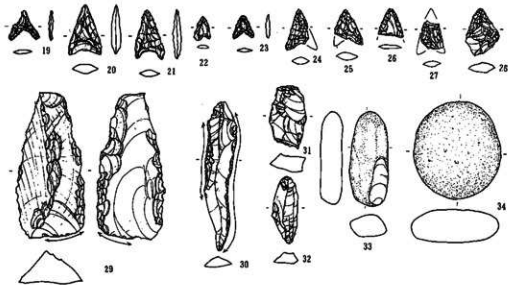


第26図 J-3号住居址出土遺物(1:4)

第16表 J-3号住居址 出土遺物一覽表 (縄文土器)

発掘 番号	器種	部位	出所	図形および文様	陶器 (内面)	粘土	色		焼成	出土 位置	備考	
							外	内				
1	漆器	口縁部	-	平縁 縄文 R 下縁にへう状工具 による格子目文	クコナア 平縁仕上げ	白色底物 黒化部分	青	にじい・黄褐色 10YR 5/3	にじい・黄褐色 10YR 4/3	青	J-3 1区1層	
2	漆器	口縁	-	平縁 縄文 L 目	クコナア 平縁仕上げ	白色底物 黒化部分	青	にじい・黄褐色 10YR 5/2	にじい・黄褐色 10YR 4/4	青	J-3 断面口層	
3	漆器	口縁	-	平縁 縄文 L 目 縄文 L R・R L による羽状構成	クコナア 凹 凸を若干持つ	白色底物 黒化部分	青	にじい・黄褐色 10YR 5/4	褐色 10YR 3/2	青	J-3 目区	
4	漆器	胴部	-	縄文 L R・R L による羽状構成	クコナア 平縁仕上げ	白色底物 黒化部分	青	褐色 10YR 4/4	にじい・黄褐色 10YR 5/4	青	J-3 目区口層	
5	漆器	胴部	-	縄文 L R・R L による羽状構成	クコナア 平縁仕上げ	白色底物 黒化部分	青	にじい・黄褐色 10YR 5/4	にじい・黄褐色 10YR 4/4	青	J-3 断面口層	
6	漆器	胴部	-	縄文 L R・R L による羽状構成	クコナア 凹 凸を若干持つ	白色底物 黒化部分	青	明褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/4	青	J-3 目区	

標本番号	器種	部位	法量	製法および文様	製法 (内面)	胎土	織肌	色調		焼成	出土位置	備考
								外面	内面			
7	器種	胴部	-	縄文式R・Rしによる羽状線画	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 10YR 5/4	にじみ質褐色 10YR 5/3	昔	J-3 1区1層	
8	器種	胴部	-	縄文式R・Rしによる羽状線画 平滑な仕上げ	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 10YR 6/4	にじみ質褐色 10YR 5/3	昔	J-3 1区1層	
9	器種	胴部	-	正反の合	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 10YR 5/3	にじみ質褐色 10YR 6/3	昔	J-3 1区1層	
10	器種	胴部	-	正反の合 焦点が異なる2ヶ所の コンパス文	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	褐色 7.5YR 6/5	褐色 7.5YR 4/3	昔	J-3 1区1層	
11	器種	胴部	-	ループ文上に半鋸竹管状工具による 幾何学的文様を描く。磨砕工具 で、焦点が異なる複数のコンパス 文を施す。	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/1	昔	J-3 1区1層	11・12と同一個体 か?
12	器種	胴部	-	多数ループ文上に半鋸竹管状工具 で幾何学的文様を描く。 磨砕工具で、焦点が異なる複数の コンパス文を施す。	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	褐色 7.5YR 6/5	にじみ質褐色 10YR 5/3	昔	J-3 1区1層	11・12と同一個体 か?
13	器種	胴部	-	多数ループ文上に半鋸竹管状工具 で幾何学的文様を描く	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 10YR 5/4	褐色 10YR 4/4	昔	J-3 1区1層	11・12と同一個体 か?
14	器種	胴部	-	連続ループ文上に半鋸竹管で幾何学的 文様を描く	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 10YR 4/3	褐色 7.5YR 5/4	昔	J-3 1区1層	
15	器種	胴部	-	磨砕工具で、焦点が異なる複数の コンパス文を施す。 多数ループ文上に半鋸竹管状工具 で幾何学的文様を描く	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 10YR 6/4	にじみ質褐色 10YR 5/3	昔	J-3 1区1層	
16	器種	胴部	-	磨砕工具による互 点重なるコンパス 文	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	褐色 7.5YR 4/4	にじみ質褐色 7.5YR 5/4	昔	J-3 1区1層	
17	器種	胴部	-	葉の縄文	ナデ 切込 を若干残す	白色胎物 黒化切片	有	にじみ質褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/4	昔	J-3 1区1層	
18	器種	胴部	-	縞線	ヨコナデ 平滑な仕上げ	白色胎物 黒化切片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじみ質 褐色 7.5YR 4/4	昔	J-3 1区1層	



第27図 J-3号住居址出土遺物(1:20, 1:4)

第17表 J-3号住居址 出土遺物一覧表〈石器〉

押出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
19	石 鏃	チャート	1.6	1.6	0.2	0.3	I区I層	27	石 鏃	黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.6	I区II層	
20	"	"	2.6	1.7	0.5	1.7	II区	28	石 鏃	未成品	"	2.5	1.8	0.5	1.9	I区II層
21	"	硬質頁岩	2.6	1.5	0.4	1.0	IV区	29	スクレイパー	硬質頁岩	7.6	3.6	1.6	39.3	IV区II層	
22	"	黒曜石	1.3	0.9	0.2	0.2	II区	30	R・F	黒曜石	7.8	1.7	0.6	5.3	III区II層	
23	"	"	1.2	1.2	0.2	0.2	I区II層	31	ピエスキュー	"	3.3	2.0	0.8	5.4	I区II層	
24	"	"	2.2	1.2	0.4	0.6	IV区I層	32	"	硬質頁岩	3.5	1.4	0.5	3.2	III区II層	
25	"	"	1.8	1.5	0.4	0.6	I区II層	33	敲石	粘板岩	9.8	4.1	2.3	136.4	III区	
26	"	"	1.5	1.3	0.2	0.4	I区I層	34	磨石	安山岩	10.2	9.2	3.5	415.1	No.1	

R・F=加工痕のある剥片。単位はcm, g

石器は、石鏃(19-27)、石鏃未成品(28)、スクレイパー(29)、加工痕のある剥片(30)、ピエスキュー(31-32)、敲石(33)、磨石(34)が出土している。

#### 時 期

以上の出土土器の様相から本址は縄文時代前期中葉に帰属すると考えられる。

### (4) J-4号住居址

#### 遺 構 第28図

本址はい-3グリッドにおいて検出された。D-31号土坑と重複関係を持つが新旧関係は不明である。

東西3.50m南北3.40mの隅丸方形プランを呈し、床面積は11.15㎡を測る。長軸方向はN-6°-Eを指す。

壁高は23~47cmを測り、壁体は堅固である。壁溝は検出されなかった。

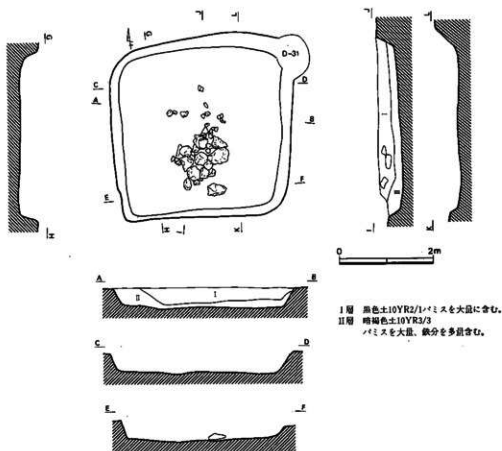
床は堅固で平坦な面を成す。

炉、ピットは検出されなかった。

覆土は、2層に分層された。I層はバミスを多量に含む黒色土、II層はバミス・鉄分を含む暗褐色土である。また、第I層中には多量の礫が集中分布していた。

#### 遺 物 第29・30図

1・2は肥厚口縁を呈する平縁の土器で、肥厚部に楕円状連続刺突文と条線を組み合わせて文様を構成する。胴部は単節縄文を施文している。3~20は縄文を施す土器で、無節(3)、単節(4~13)、正反の合(14~16)、組紐(17)、束の縄文(18~20)が見られる。17は組紐上に支点が上下に移動するタテ長のコンパス文が施される。



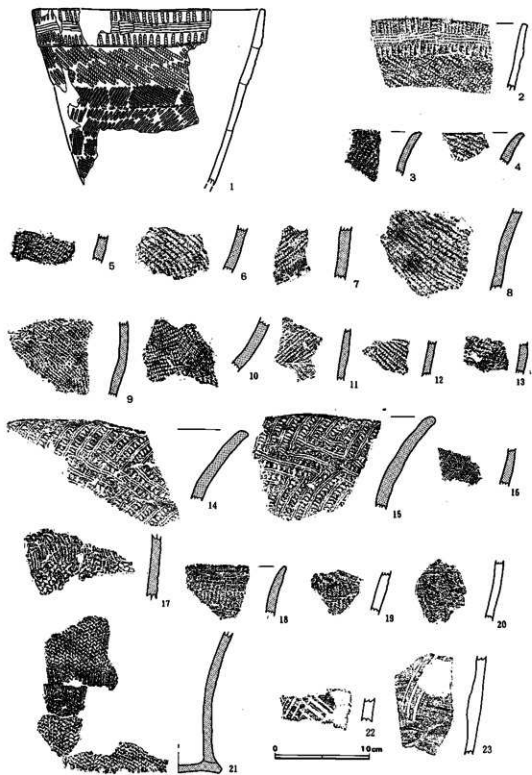
第28図 J-4号住居址実測図

21は胴下半～底部で、組紐が施される。また、半截竹管状工具によるコンパス文が合わせて見られる。22・23は無繊維の土器で衝歯状工具により格子目状の文様が施される。

石器は、石鏃(24・25)、石鏃未完成品(26)、石匙(28)、コンタイプドゥスクレイパー(29)・スクレイパー(30)・ピエスエスキュー(32)、微小剥離痕のある剥片(31)、剥片を素材とした石核(33)が出土している。

#### 時期

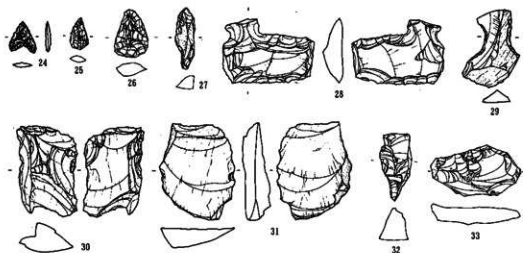
以上の出土土器の特長から本址は縄文時代前期中葉に帰属する住居と考えられる。



第29图 J-4号住居址出土遗物 (1:4)

第18表 J-4号住居址 出土遺物一覽表 <縄文土器>

調査 番号	器種	部位	数量	形状および文様	調査 (内面)	胎土	色 調		産地	出土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
1	器種	口縁部	-	平縁 口縁部底厚 口縁部に滑石状工具による連続的突文、赤褐色顔料に施文なし、Rなし	ココナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	無			香	1と同一個体	
2	器種	口縁部	-	平縁 口縁部底厚 口縁部に滑石状工具による連続的突文、赤褐色顔料に施文なし、Rなし	ココナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	無	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	灰褐色 10YR 5/2	香	J-4・2 J-4 1区1層	1と同一個体
3	器種	口縁部	-	平縁 施文なし	ココナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	香	J-4 1区1層	
4	器種	口縁部	-	平縁 施文なし	ココナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	香	J-4 1区1層	
5	器種	胴部	-	施文なし	ランダムなナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	香	J-4 1区1層	
6	器種	胴部	-	施文なし	ランダムなナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	香	J-4 1区1層	
7	器種	胴部	-	施文なし	ココナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	灰褐色 7.5YR 4/2	香	J-4 1区1層	
8	器種	胴部	-	施文なし	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	灰褐色 10YR 5/1	香	J-4 1区1層	
9	器種	胴部	-	施文なし	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 10YR 5/2	香	J-4 1区1層	
10	器種	胴部	-	施文なし	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	香	J-4 1区1層	
11	器種	胴部	-	施文なし・Rなしによる羽状縁状	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	灰褐色 10YR 5/1	香	J-4 1区1層	
12	器種	胴部	-	施文なし・Rなしによる羽状縁状	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	香	J-4 1区1層	
13	器種	胴部	-	施文なし・Rなしによる羽状縁状	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	香	J-4 1区1層	
14	器種	口縁部	-	施文なし・Rなしによる正反の凸 Rなし・R	ランダムなナテ 光沢あり	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	香	J-4・9 J-4 1区1層	15と同一個体
15	器種	口縁部	-	施文なし・Rなしによる正反の凸 Rなし・R	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	明黄褐色 10YR 6/5	香	J-4・5	14と同一個体
16	器種	胴部	-		ココナテ平縁土器	白色胎物 滑石	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	香	J-4 1区1層	
17	器種	胴部	-	縁部 支点が上下に離れるコンパス文	ココナテ 光沢あり	白色胎物 黒化部分	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	灰褐色 10YR 5/2	香	J-4 1区1層 1区1層	
18	器種	口縁部	-	平縁 口縁部下に施文部 施文なし	ココナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	有	褐色 10YR 4/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	香	J-4 1区1層	
19	器種	胴部	-	施文なし	ココナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	無	明褐色 7.5YR 5/5	灰褐色 7.5YR 4/2	香	J-4 1区1層	
20	器種	胴部	-	施文なし	ナテ 凹凸を備へず	白色胎物 黒化部分	無	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 3/1	香	J-4 1区1層	
21	器種	胴部	-	上げ底、 最縁部文の残、コンパス文	ココナテ平縁土器	白色胎物 黒化部分	有	明褐色 7.5YR 5/5	灰褐色 7.5YR 3/1	香	J-4 1区1層	
22	器種	胴部	-	磨石状工具の地千目状化粧	ココナテ 凹凸を備へず	石質(多) 滑石質黒化部分	無	暗褐色 10YR 5/3	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	香	J-4 1区1層	22・23は同一個体
23	器種	胴部	-	磨石状工具の地千目状化粧	ココナテ 凹凸を備へず	石質(多) 滑石質黒化部分	無	暗褐色 10YR 5/1	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	香	J-4 1区1層	



第30図 J-4号住居址出土遺物(1:2, 1:4)

第19表 J-4号住居址 出土遺物一覽表〈石器〉

神器番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神器番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
24	石 鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.2	0.4	I区I層	29	スクレイパー	黒曜石	4.0	3.0	0.6	8.6	内溝刀 山区II層
25	"	"	1.6	0.9	0.3	0.4	IV区I層	30	"	ガラス質 火山岩	4.8	3.2	1.9	24.2	I区I層
26	石 鏃 未成器	"	2.5	1.8	0.6	2.5	III区I層	31	M・F	"	5.1	4.0	1.3	25.4	I区II層
27	石 鏃	"	3.2	1.0	0.7	2.2	I区II層	32	どよみ 5.5キース	黒曜石	3.5	1.6	1.6	7.5	I区II層
28	石 鏃	ガラス質 火山岩	3.4	4.8	1.0	17.8	I区II層	33	石 槌	"	2.7	4.7	0.8	11.6	I区I層

M・F=微小刺傷痕を有する剥片

単位はcm, g

## (5) J-5号住居址

### 住居址 第19図

本址は、え-5グリッドに位置し、D-92号土坑と重複関係を持つ。

その規模は東西4.85m南北6.23mで、平面形状は隅丸長方形を呈し、床面積は28.56㎡を測る。長軸方向はほぼN-29°-Eを指す。

壁体は割合堅固で、壁残高5～35cmを測り、西側ほど壁の削平が著しい。壁溝は北壁下西に一か所の断絶が認められるが東壁北側から北・西壁下までめぐっている。南壁下には掘削されていない。

床面は若干の凹凸が認められるものの、おおむね平坦である。硬度はやや脆弱である。

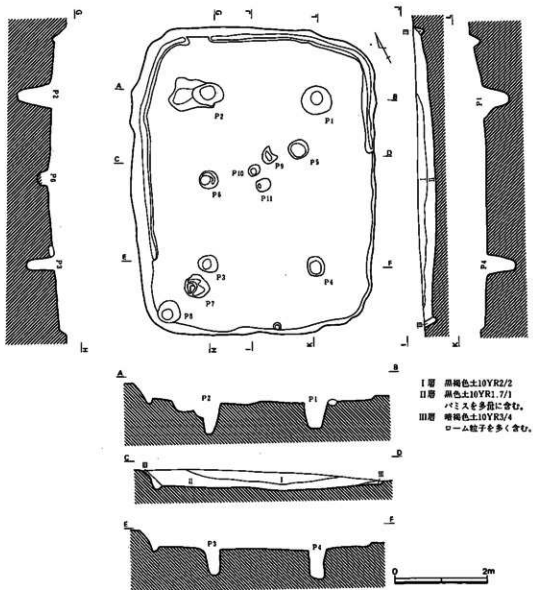
炉は検出されなかった。

ビットは11個が検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は主柱穴と考えられ、壁内四隅に整然と長方形配置

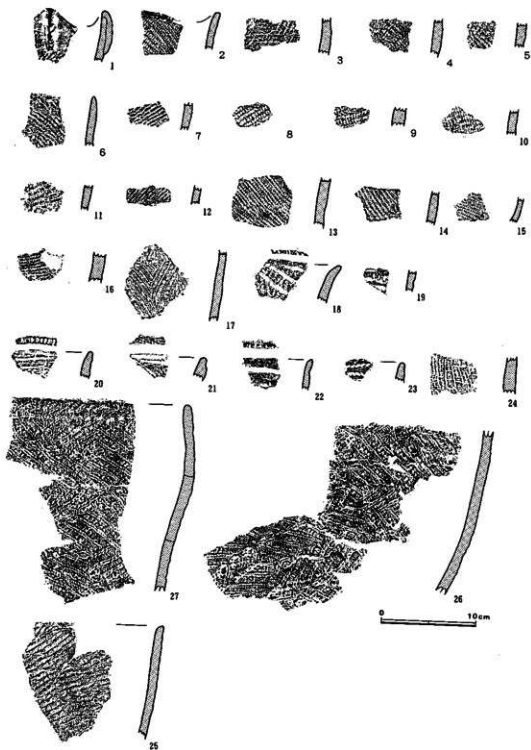


される。P<sub>1</sub>から径67・61・37・38cmと形態・大きさ共にバラツキが大きい。P<sub>9</sub>～P<sub>11</sub>については補助柱的な役割が想定できよう。住居中央部に不規則に集合するP<sub>9</sub>～P<sub>11</sub>については役割がわからない。

覆土は3層からなる。I層は住居中央にレンズ状に堆積する黒褐色土、II層は第2次堆積土に当たる黒色土、第III層は壁の崩落によって生じたと考えられるローム主体の暗褐色土である。



第31図 J-5号住居址実測図



第32图 J-5号住居址出土遗物(1:4)

第20表 J-5号住居址 出土遺物一覧表 (縄文土器)

件別 番号	器 種	器 位	出 處	器形および文様	装 査 (内形)	物 土	色 調		編 織	出 土 位置	備 考
							外 側	内 側			
1	底 鉢	口縁	—	4 半位浅底口縁 直縁部から縁部 以下 縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 6/4	灰褐色 7.5YR 5/2	昔	J-5 田区1層
2	底 鉢	口縁	—	平縁 縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	昔	J-5 田区1層
3	底 鉢	胴部	—	縄文しR・Rしによる羽状縁状	縁部状の調査 (縦方向)	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 6/4	にじみ-黄褐色 10YR 6/3	昔	J-5 IV区1層
4	底 鉢	胴部	—	縄文しR・Rしによる羽状縁状	不明	白色磁物 黒化粘片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-5 田区1層
5	底 鉢	胴部	—	縄文しR・Rしによる羽状縁状	縁部状の調査 (縦方向)	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	昔	J-5 田区1層
6	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	にじみ-褐色 7.5YR 6/4	昔	J-5 田区1層
7	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	褐色 7.5YR 6/6	黄褐色 2.5YR 4/1	昔	J-5 I区1層
8	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	昔	J-5 田区1層
9	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	褐色 7.5YR 6/6	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	昔	J-5 田区1層
10	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	暗灰褐色 2.5YR 4/2	昔	J-5 IV区1層
11	底 鉢	胴部	—	縄文しR	縁部状の調査 (縦方向)	白色磁物 黒化粘片	有	明褐色 7.5YR 5/6	灰褐色 10YR 4/2	昔	J-5 田区1層
12	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-5 IV区1層
13	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-黄褐色 7.5YR 5/3	にじみ-黄褐色 10YR 4/4	昔	J-5 田区1層
14	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 6/4	黄褐色 2.5YR 4/1	昔	J-5 I区1層
15	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-5 田区1層
16	底 鉢	胴部	—	縄文しR	ナデ	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-明褐色 5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-5 I区1層
17	底 鉢	胴部	—	器底文しと上の了半縁入	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	明褐色 7.5YR 5/6	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	昔	J-5 田区
18	底 鉢	口縁	—	平縁 縄文しR上に斜行波縁 口唇部に認め	ナデ及び縁部 状の調査	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 6/6	昔	J-5 田区1層
19	底 鉢		—		不明	白色磁物 黒化粘片	有			昔	J-5
20	底 鉢	口縁	—	平縁 口唇部に認め 縄文しR上に斜行波縁	縁部状の調査 (縦方向)	白色磁物 黒化粘片	有	明褐色 7.5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-5 I区1層
21	底 鉢	口縁	—	平縁 口唇部に認め 縄文しR上に波縁	縁部状の調査 (縦方向)	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-黄褐色 10YR 4/2	灰褐色 10YR 4/2	昔	J-5 IV区1層
22	底 鉢	口縁	—	平縁 口唇部に認め 太い底縁	コフナデ	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-明褐色 5YR 5/3	明褐色 5YR 5/6	昔	J-5 IV区1層
23	底 鉢	口縁	—	平縁 縄文しR上の縁部直縁 黒化粘	ナデ	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-明褐色 5YR 5/4	明褐色 5YR 5/6	昔	J-5 田区1層
24	底 鉢	胴部	—	縄文しR上の縁部	ナデ	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-黄褐色 10YR 5/4	灰褐色 2.5YR 3/1	昔	J-5 IV区1層
25	底 鉢	口縁	—	無文縄文しR	ナデ方向ナデ	白色磁物 黒化粘片	有	にじみ-黄褐色 7.5YR 5/4	にじみ-黄褐色 10YR 6/3	昔	J-5 I区1層

器種 番号	器 種	部位	数量	器形および文様	陶質 (内面)	粘土	編織	色 調		焼成	出土 位置	備 考
								外 面	内 面			
26	罎	口縁	-	正反の合	ナメ方向縞縞 状の網縷	白色灰物 風化破片	有	にじい 褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	曹	J-5 11区1層 11区1層	27.2同一個体
27	罎	口縁	-	正反の合	ナメ方向縞縞 状の網縷	白色灰物 風化破片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじい 褐色 7.5YR 5/3		J-5 11区1層 11区1層	26.2同一個体

### 遺 物 第32・33図

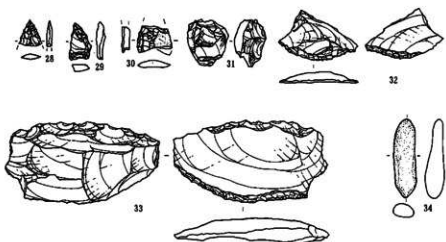
1は4単位波状口縁である。波頂部はやや内湾気味に立ち上がり、頂部より断面三角形の隆帯を垂下させている。隆帯上には施文が行われていない。隆帯より下は単節縄文が施文される。2は平縁であり、口縁部から単節縄文が施文される。3～5は羽状構成をとる。6は平縁で単節縄文を施す。他の破片と異なり、繊維の混入がごく僅かである。7～16は単節縄文を施す土器。羽状構成の一部であることも考えられる。17は燃糸LとRを用いて縦方向の菱形構成をとる。18は口唇部がやや尖り気味に外反する口縁破片である。器面に単節縄文を施文後、植物の茎のような工具を用い、口縁から斜方向に沈線を施している。また、口唇部には刻みが施される。19も単節縄文施文後、18と同様の工具を用いて沈線を描き、沈線間に刻みを施している。20はやや外反気味の口縁部であり、小波状をなすと思われる。単節縄文を施した後、先端の丸い棒状工具を用い、横位に沈線を施す。口唇部には器面の縄文と同一原体を用い押圧を行っている。21は平縁の口縁部破片で、器面に単節縄文を施文後、20と同様な工具を用い口縁直下に横位、斜位の沈線を施している。口唇部には器面に施される縄文と同一原体による回転施文が成されている。22は平縁の口唇部破片で、口唇部が外反する。口唇部には刻みが施され、口縁下にはやや太く丸みを帯びた工具により、横位に幅広の沈線が施される。23は平縁の口縁部破片で、口縁下に縄文L RとR Lの押圧が成される。24には縦走る縄文が施される。

25は無節縄文、26・27は同一個体で正反の合が施される。

石器は、石鏃(28～30)、スクレイパー(32・33)、ピエスエスキュー(31)、敲石(34)が出土している。

### 時 期

上記の出土土器は相当の時間幅を持つが、25～27をもって本址は縄文時代前期中葉に位置付け事ができよう。



第33図 J-5号住居址出土遺物(1:2, 1:4)

第21表 J-5号住居址 出土遺物一覽表<石器>

押図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
28	石 鏃	ガラス質 安山岩	1.4	1.2	0.3	0.4		32	スラレ イバー	ガラス質 安山岩	2.7	4.2	0.5	4.2	III区II層
29	#	黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.8		33	#	頁岩	4.3	8.1	1.2	45.3	I区II層
30	#	#	1.4	1.8	0.4	1.0	II区II層	34	燧石	安山岩	8.1	2.3	1.9	47.3	IV区II層
31	ビュス ユスクリュー	#	2.5	2.2	1.6	7.5	I区II層								

単位はcm, g

## (6) J-6号住居址

### 住居址 第25図

本址は、い-3グリッドに位置する。J-3号住居址に大半を破壊される。

したがって、その規模も長辺4.10m以上と推測するしかない。

壁体は堅固であるが、立ち上がりはなだらかである。壁高さは25cm前後を測る。壁溝は掘削されていない。

底面はおおむね平坦であるが、脆弱である。

炉・ピットは検出されなかった

覆土は、2層からなり、いずれも黒褐色土(第I層)、黒色土(第II層)である。

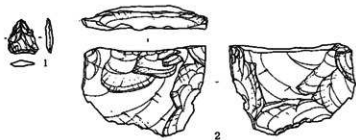
### 遺物 第34図

土器は遺構の大半が破壊されていることも手伝い、遺物は繊維を含む風化の著しい細片が、数点検出された程度である。

石器は、石鏃(1)と剥片素材の石核(2)が出土している。

時期

出土遺物が微量で詳細な時期決定は難しいが、縄文時代前期中葉に帰属するJ-4号竪穴状遺構に破壊されることから、それ以前に掘削された竪穴である。



第34図 J-6号住居址出土遺物(1:2, 1:4)

第22表 J-6号住居址 出土遺物一覧表<石器>

神図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	底径	備考	神図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	底径	備考
1	石 鏃	ガラス質 安山岩	1.8	1.6	0.3	0.8		2	石 椀	ガラス質 安山岩	4.7	6.5	1.2	41.6	

単位はcm, g

(7) J-7号住居址

住居址 第35図

本址はう-6グリッドにおいて検出された。北壁においてD-99号土坑と重複関係を持ち、破壊される。

平面形は、東西4.45m南北5.80mの隅丸長方形を呈する。床面積は25.89㎡を測り、長軸の方位はN-5°-Wを指す。

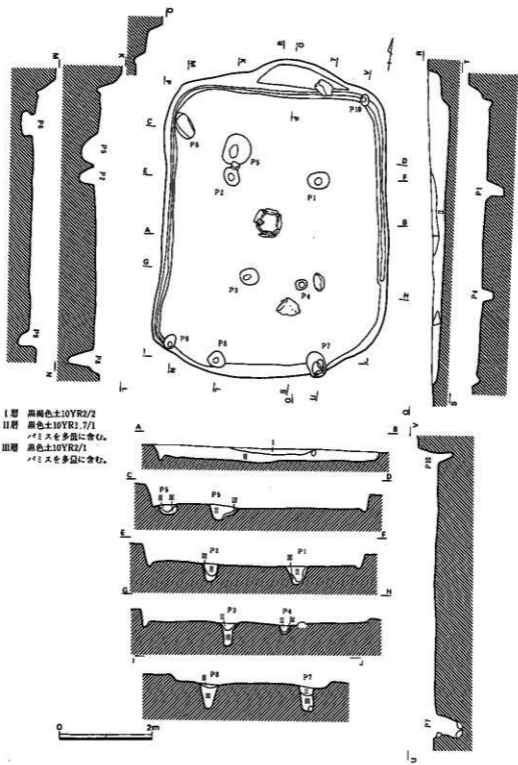
床面はおおむね平坦であるが、やや脆弱である。

壁は垂直に近く立ち上がり、堅固である。残存壁高は5-41cmを測り南ほど壁の削平が著しい。壁溝は東・北・西壁下をきれいにめぐっている。

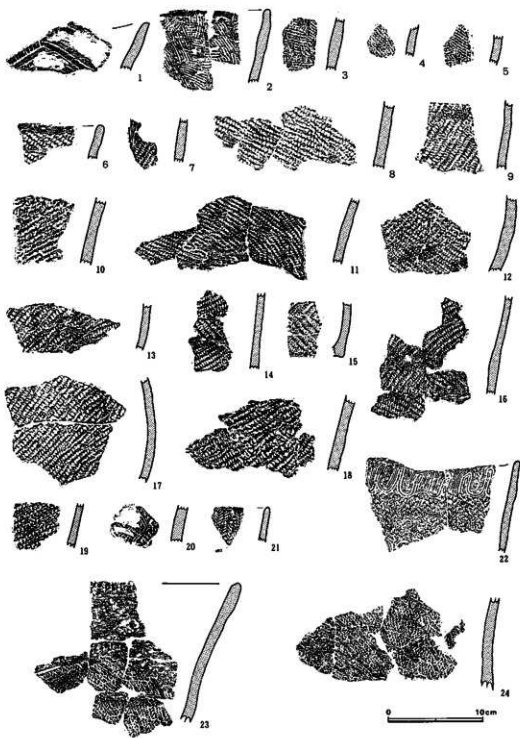
炉は住居内のほぼ中央に設けられる。扁平な安山岩で五角形に囲った石囲炉で濃密な灰・焼土の堆積、また、地山の焼け込みは観察されなかった。

ピットは総数10個が検出された。主柱穴に当たると考えられるものは4本あり、住居四隅にやや形の崩れた長方形配置される。平面形状はいずれもおおむね円形を呈し、径はP<sub>1</sub>から45・34・39・26cmを測る。P<sub>2</sub>の北側に接するP<sub>5</sub>は径64cm、深さ33cmを測る。北西コーナーのP<sub>6</sub>は長径52cmの楕円形で深さ32cm、南西コーナーのP<sub>9</sub>は径22cmの円形で深さ22cm、北東コーナーのP<sub>10</sub>は径19cm、深さ30cmを測る。南壁下に並ぶP<sub>8</sub>・P<sub>7</sub>は径36・38cm、深さ50・58cmを測る。

覆土は2層に分層され、自然堆積の状況を示す。I層は住居中央にレンズ状に堆積する黒褐色土層、第II層は黒色土層である。



第35図 J-7号住居址実測図

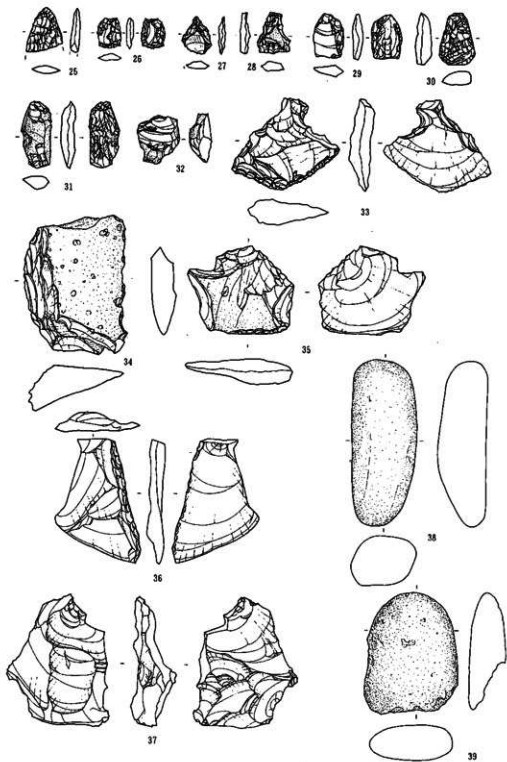


第36图 J-7号住居址出土遗物(1:4)



第23表 J-7号住居址 出土遺物一覧表 <縄文土器>

序 号	種 類	形 状	法 量	形状および文様	装 飾 (内面)	土 質	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
1	煎 餅	口輪	-	4単位並列口輪 赤彩文で三角または菱形を織く	ナデ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 7/2	灰質褐色 10YR 5/2	香 J-7 II区	
2	煎 餅	口輪	-	平輪 縄文L	コナ又はナデ 方向のナデ凸 点残す	白色磁物 黒化磁片	有 褐色 10YR 3/4	紅彩 5YR 5/4	香 J-7 II区	3-5と同一個体
3	煎 餅	胴部	-	平輪 縄文L	コナ又はナデ 方向のナデ凸 点残す	白色磁物 黒化磁片	有 褐色 7.5YR 4/3	紅彩 5YR 5/3	香 J-7 II区	2, 4, 5と同一 個体
4	煎 餅	胴部	-	平輪 縄文L	コナ又はナデ 方向のナデ凸 点残す	白色磁物 黒化磁片	有 赤褐色 7.5YR 3/1	紅彩 5YR 5/3	香 J-7 I区	2, 3, 5と同一 個体
5	煎 餅	胴部	-	平輪 縄文L	コナ又はナデ 方向のナデ凸 点残す	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 5YR 5/4	紅彩 5YR 5/4	香 J-7 II区	2-4と同一個体
6	煎 餅	口輪	-	平輪 縄文R.L	コナデ 平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/3	灰質褐色 10YR 4/2	香 J-7 II区	
7	煎 餅	胴部	-	縄文L.R 半輪付付工具による縦紋残	コナデ 凹心若干残す	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 7.5YR 5/4	灰質褐色 10YR 5/2	香 J-7 II区	
8	煎 餅	胴部	-	縄文R.L	コナデ 平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/3	暗所褐色 2.5YR 4/2	香 J-7 I区	
9	煎 餅	胴部	-	縄文L.R	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 3/4	紅彩 10YR 5/4	香 J-7 I区	
10	煎 餅	胴部	-	縄文L.R	コナ又はナデ 方向のナデ凸 点残す	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/4	紅彩 10YR 4/3	香 J-7 I区	
11	煎 餅	胴部	-	縄文R.L	ナデ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 7/6	紅彩 10YR 6/3	香 J-7 I区	
12	煎 餅	胴部	-	縄文L.R・R.Lによる縦紋残	ナデ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/4	紅彩 10YR 6/3	香 J-7 II区	
13	煎 餅	胴部	-	縄文L.R	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 5/3	灰質褐色 10YR 5/2	香 J-7 I区	
14	煎 餅	胴部	-	縄文R.L	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/4	褐色 10YR 3/1	香 J-7 I区	
15	煎 餅	胴部	-	縄文L.R・R.Lによる縦紋残 上げ縦紋	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/4	褐色 10YR 3/1	香 J-7 I区	
16	煎 餅	胴部	-	縄文L.R・R.Lによる縦紋残 上げ縦紋	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/4	褐色 10YR 3/1	香 J-7 I区	
17	煎 餅	胴部	-	縄文L.R	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 4/3	紅彩 10YR 6/4	香 J-7 I区	
18	煎 餅	胴部	-	縄文L.R	ナデ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 5/6	紅彩 10YR 6/3	香 J-7 II区	
19	煎 餅	胴部	-	縄文L.R.L	ナデ 若干の 凹心を残す	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 6/3	紅彩 10YR 6/3	香 J-7 II区	
20	煎 餅	胴部	-	正反の合	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 6/3	紅彩 10YR 5/2	香 J-7 II区	
21	煎 餅	口輪	-	平輪 直の縄文	ナデ 若干の 凹心を残す	白色磁物 黒化磁片	有 褐色 2.5YR 3/2	赤褐色 2.5YR 3/2	香 J-7 I区	
22	煎 餅	胴部	-	縦紋口輪 凹心が上下に変化する ナデ直のコンパズ文 縞	コナ方向のナ デ平輪を仕上げ	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 5/3	褐色 7.5YR 3/4	香 J-7 I区	
23	煎 餅	口輪	-	平輪 並行する連続的直文で口輪 部文様帯を区画 文様帯内は縦向 位の連続的直文	コナナデ?	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 6/3	灰質褐色 10YR 5/2	香 J-7 II区	24と同一個体
24	煎 餅	胴部	-	縄文R.L	コナナデ?	白色磁物 黒化磁片	有 紅彩 10YR 6/3	灰質褐色 10YR 5/2	香 J-7 II区	23と同一個体



第37图 J-7号住居址出土遺物(1:2, 1:4)

遺物 第36・37図

1は波状口縁を呈しており、爪形文で菱形あるいは三角形の文様を構成する。2～22は縄文を施文する土器で、無節（2～5、同一個体）、単節（6～18）、複節（19）、正反の合（20）、束（21）、組紐（22）が見られる。14～16は同一個体と思われ、上・下で羽状を構成する。22には支点が移動するタテ長のコンパス文が合わせて施文される。23は連続刺突文で上下を区画し、口縁部文様帯を形成する繊維を含む土器で口縁部文様帯には連続刺突文が鋸歯状に施される。胴部は単節縄文が施文される。24は胴部で単節縄文が施される。

石器は、石鏃（25）、石鏃未成品（26～30）、石匙（33）、スクレイパー（35・36）、微小剥離痕のある剥片（34）、ピエスエスキュー（31・32）、剥片素材の石核（37）、敲石と磨石の双方の機能を有するもの（38）、磨石（39）が出土している。

時期

以上の出土土器の特長から本址は縄文時代前期中葉に帰属する住居と考えられる。

第24表 J-7号住居址 出土遺物一覧表〈石器〉

押器番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押器番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
25	石鏃	チャート	2.4	1.9	0.4	1.9	II区II層	33	石匙	ガラス質 安山岩	4.7	5.6	1.3	21.4	I区II層
26	石鏃未成品	黒曜石	1.6	1.2	0.4	0.7	III区II層	34	M・F	*	7.2	5.5	1.9	75.1	I区II層
27	#	#	2.0	1.6	0.4	0.7	IV区I層	35	スクレイパー	ホルン フェルス	4.6	5.6	1.3	29.9	I区II層
28	#	#	2.2	1.7	0.5	1.4	III区II層	36	#	安山岩	6.5	4.5	0.8	—	IV区II層
29	#	#	2.3	1.6	0.5	2.1	III区II層	37	石核	硬質頁岩	6.9	5.5	2.0	50.3	IV区II層
30	#	#	2.7	1.8	0.7	4.3	II区II層	38	敲・磨石	安山岩	16.4	6.8	5.2	1014.3	同層 P2
31	ピエスエスキュー	#	3.5	1.6	0.7	4.2	炉	39	磨石	#	12.8	10.6	3.8	521.0	No1
32	#	#	2.5	2.2	1.1	4.7	IV区II層								

M・F = 微小剥離痕を有する剥片 単位はcm, g

(8) J-8号住居址

住居址 第38図

本址は、うー6グリッドに位置する。他遺構との重複関係は持たない。

傾斜面に構築されるため、特に南東部の床・壁の流出が著しく、旧状を止めていない。したがって規模・平面形状は長辺5.00m以内の隅丸方形であったと推測できる程度である。長軸方向はN-25°-Wあたりを指す。

壁体は地山の砂層を利用するため脆弱である。壁残高は10cm前後を測る。壁溝は往時はほぼ全

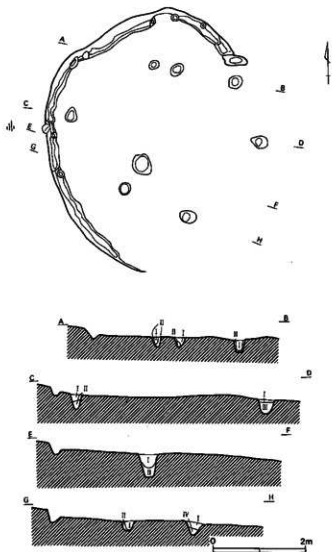
周っていたようである。溝内には東柱の痕跡と思える小ピットが点在している。

床は残存する部分については堅固で概ね平坦な面を成す。

炉は検出されなかった。

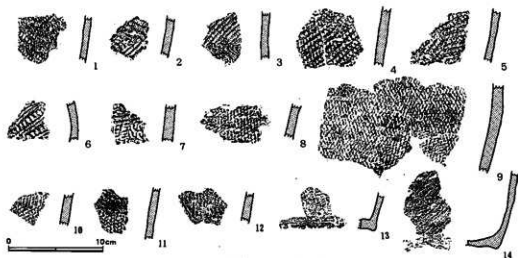
床面上からはピットが8個検出された。住居内壁寄りに不規則に散在する傾向にあり、いずれも柱穴とは断定できない。

覆土は、黒色土の単層である。



- I層 黒色土10YR2/1 パミスをよく含む。
- II層 暗褐色土10YR3/3 ロームを均一に多量に含む。
- III層 暗褐色土10YR3/3 II層をベースに、小礫が大量に加わる。
- IV層 黒色土10YR2/1 ローム粒子をブロック状に大量に含む。

第38図 J-8号住居址実測図



第39図 J-8号住居址出土遺物(1:4)

第25表 J-8号住居址 出土遺物一覽表 (縄文土器)

発掘 層号	器種	形状	図説	裝飾および文様	器型 (内図)	胎土	色 別		構成	出土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
1	漆 鉢	胴部	-	縄文L・R・Lによる羽状線成	ナデ 凹凸を若干残す	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 5/2	昔	J-8 IV区	購入と思われる
2	漆 鉢	胴部	-	縄文L・R・Lによる羽状線成	ナデ平地に仕上げ	白色灰物 風化碎片	有	物産褐色 5YR 5/6	に20%赤褐色 5YR 5/4	昔	J-8 横出層	購入と思われる
3	漆 鉢	胴部	-	縄文L・R・Lによる羽状線成	ナデ凹凸を残す	白色灰物 風化碎片	有	に20%黄褐色 10YR 5/4	灰褐色 10YR 4/1	昔	J-8 H区	
4	漆 鉢	胴部	-	縄文L・R・L	ナデ凹凸を残す	白色灰物 風化碎片	有	に20%褐色 7.5YR 5/4	高褐色 10YR 3/1	昔	J-8 H区	5と同一器体
5	漆 鉢	胴部	-	縄文L・R・L	ナデ凹凸を残す	白色灰物 風化碎片	有	に20%褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-8 H区	4と同一器体
6	漆 鉢	胴部	-	正反の合し	ココ方向のナデ平地の凹凸残す	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 5/2	昔	J-8	
7	漆 鉢	胴部	-	ループ文	ココ方向のナデ縦線状の調整	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 5/2	昔	J-8 横出層	
8	漆 鉢	胴部	-	結核	ココナ方向のナデ平地に仕上げ	白色灰物 風化碎片	有	に20%褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-8 H区	9と同一器体
9	漆 鉢	胴部	-	結核	ココ方向のナデ平地に仕上げ	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 5/2	昔	J-8 I	8と同一器体
10	漆 鉢	胴部	-	縄文L	ココ方向のナデ平地に仕上げ	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 10YR 3/1	昔	J-8 I区	
11	漆 鉢	胴部	-	結核		白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 10YR 3/1	昔	J-8	
12	漆 鉢	胴部	-	直の縄文	ココ方向のナデ平地の凹凸あり	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	昔	J-8	
13	漆 鉢	胴部	-	縄文		白色灰物 風化碎片	有	に20%褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-8	
14	漆 鉢	胴部	-	縄文L		白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	昔	J-8	

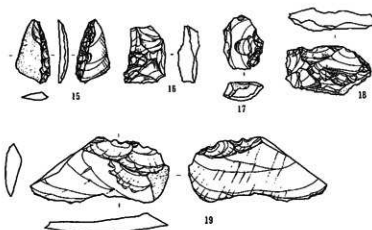
遺物 第39・40図

1～3は単節縄文を施しており、羽状を構成する。4・5は同一個体と思われる、複節縄文を施文する。この他、正反合(6)、多段ループ文(7)、組紐(8～11)、束の縄文(12)が見られる。10にはコンパス文が合わせて施されている。13・14は底部でいずれも若干上げ底気味を呈している。

石器は、石鏃未成品(15)、スクレイパー(19)、ピエスエスキュー(16・17)、剥片素材の石核(18)が出土している。

時期

以上の出土遺物より本址を縄文時代前期中葉に位置付ける。



第40図 J-8号住居址出土遺物(1:2)

第26表 J-8号住居址 出土遺物一覧表<石器>

押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
15	石鏃未成品	黒曜石	3.3	1.8	0.4	2.2	II区	18	石核	黒曜石	2.6	4.5	1.2	11.5	II区
16	ピエスエスキュー	#	3.0	2.2	1.0	6.2	II区	19	スクレイパー	ガラス質安山岩	3.5	7.3	0.8	22.7	検出面
17	#	#	2.8	2.1	1.0	5.7	II区								

単位はcm, g

(9) J-9号住居址

住居址 第41図

本址はうー4グリッドにおいて検出された。K-4号古墳と重複関係を持ち、北東部を破壊される。また、本址は南にテラスを持つため、一応竪穴住居2軒(J-9・24)の重複例として報告しておくが、土層の断面観察では、両者の時間的關係は把握できなかった。

J-9号住居址は東西4.00m南北4.18m隅丸方形を呈する。床面積は推定で15.01㎡を測る。長軸の方位はN-21°-Eを指す。

床面は地山をそのまま利用し、おおむね平坦で堅固に構築される。

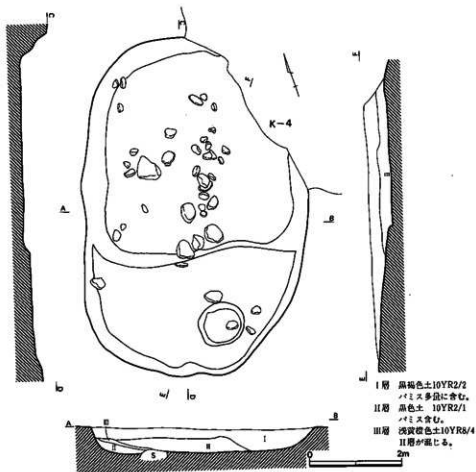
壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、残存壁高50~60cmを測る。壁溝はもたない。

覆土は3層に分層された。最上層のI層は黒褐色土、II層黒色土、III層はローム主体の黄褐色土である。

#### 遺物 第42~45図

本住居址からは多量の土器と少量の石器が出土した。

1・2は肥厚気味の口唇部を持つ波状口縁の土器で、波頂部下に円形突起貼付される。肥厚部には、粗い筒歯状工具で連続刺突がなされている。胎土、整形時の状況から同一個体と思われる。



第41図 J-9・24号住居址実測図

由って4単位波状口縁であると推測される。3～9は単節縄文を施文する。4は口唇部に三角形の突起が見られる。8・9は羽状を構成している。10～14は正反の合で、12・13は合わせてコンパス文を施文する。12は支点が上・下に移動するもの、13は支点が交互に変わるコンパス文で、それぞれ歯状工具、半截竹管状工具を用いている。14は附加条の縄文で輪繩の撚りと逆方向に縄が附加される。15・16は口縁部でいずれも多段ループ文が施される。22～25は、組紐または多段ループ文を地文とし半截竹管状工具で幾何学的文様を描く。26～39は組紐を施文している。

半截竹管状工具による縦位沈線を施すもの(26)、コンパス文を施すもの(27～31)等が見られる。40～50は束の縄文を施文する土器である。40は口唇部に三頭状突起を貼付し、その下部へ円形突起を施している。48は、束の縄文上に連続刺突文を施文する。51・52は無文・無織維のオセソベ土器である。

53は粘板岩の扶杖耳飾で上下を欠く。54は蛇紋岩の扶杖耳飾の破片である。石器は、石鏃(55～62)、石鏃未成品(63～70)、石錐(71)、石匙(72・73)、スクレイパー(74～76)、ビエスキュー(77～79)、敲石(80)、磨石(81・82)が出土している。

#### 時期

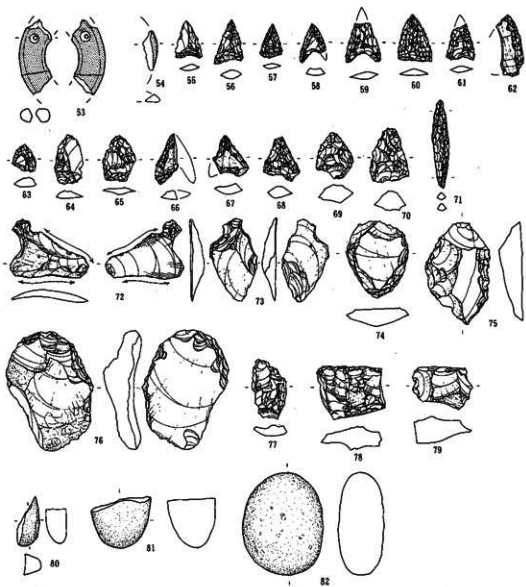
以上の出土土器をもって、本址は縄文時代前期中葉に帰属すると考えられる。

第27表 J-9号住居址 出土遺物一覽表〈石器〉

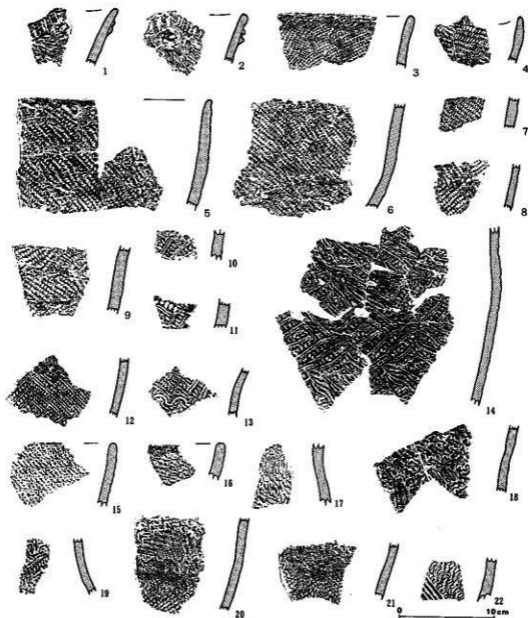
発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
53	耳飾	粘板岩	4.0	1.4	0.7	6.9	IV区1層	68	石鏃未成品	黒曜石	2.3	1.9	0.6	1.6	IV区1層
54	耳飾	蛇紋岩	2.1	0.8	0.4	0.6	IV区II層	69	石鏃	黒曜石	2.4	2.0	0.9	3.7	III区1層
55	石鏃	ガラス質安山岩	2.0	1.4	0.3	0.6		70	石鏃	黒曜石	2.8	2.1	1.0	4.1	II区1層
56	石鏃	硬質頁岩	2.4	1.5	0.4	1.0	III区1層	71	石錐	黒曜石	4.6	0.9	0.4	1.9	II区II層
57	石匙	黒曜石	1.8	1.1	0.2	0.5	IV区1層	72	石匙	黒曜石	3.1	4.2	0.4	5.3	I区I・II層
58	石匙	黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.6	IV区II層	73	石匙	ガラス質安山岩	4.4	2.5	0.7	5.4	II区II層
59	スクレイパー	黒曜石	2.1	1.8	0.4	0.9	IV区I層	74	スクレイパー	黒曜石	4.1	3.2	0.9	13.6	IV区1層
60	スクレイパー	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.0	IV区1層	75	頁岩	頁岩	5.4	3.4	1.2	22.3	II区II層
61	硬質頁岩	硬質頁岩	1.9	1.5	0.3	0.8	IV区1層	76	硬質頁岩	硬質頁岩	6.2	4.6	1.7	34.5	III区1層
62	ビエスキュー	黒曜石	3.2	1.5	0.3	1.3	IV区1層	77	ビエスキュー	黒曜石	3.1	1.8	0.6	3.4	I区I・II層
63	石鏃未成品	黒曜石	1.4	1.2	0.5	0.8		78	石鏃	黒曜石	2.8	3.6	1.2	12.3	IV区1層
64	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.4	1.4	II区II層	79	石鏃	硬質頁岩	2.2	3.2	1.4	12.4	II区II層
65	敲石	安山岩	2.4	1.8	0.3	1.4	IV区1層	80	敲石	安山岩	5.2	2.4	2.2	25.4	IV区1層
66	磨石	安山岩	2.6	1.3	0.4	1.4	IV区1層	81	磨石	安山岩	5.4	6.2	5.0	188.1	IV区1層
67	磨石	安山岩	2.1	1.9	0.5	1.6	IV区1層	82	磨石	安山岩	10.8	8.6	4.8	614.9	

単位はcm、g





第42图 J-9号住居址出土遺物 (1:2, 1:4)

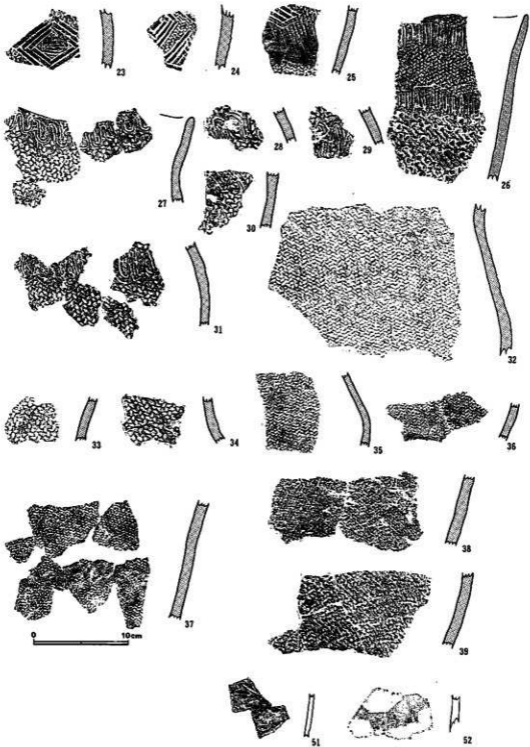


第43図 J-9号住居址出土遺物<1> (1:4)

第28表 J-9号住居址 出土遺物一覽表 <縄文土器>

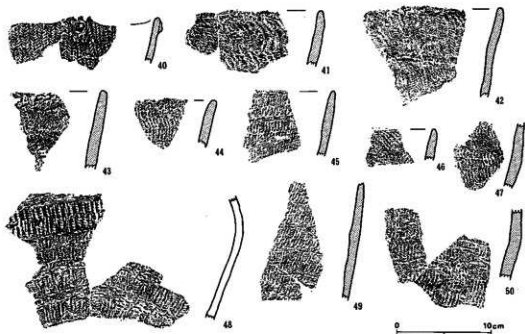
発掘 番号	器名	部位	技法	形状および文様	調査 (内訳)	出土 層	色調		構成	出土 位置	備考	
							外面	内面				
1	鉢	口縁	---	環状口縁 口縁部肥厚 肥厚部に 粗い菱状工具による放射状文 様を施すに似る突起 (注: 断面不 明)	タコ方向のナ ズヤ-感、四 凸を有す	白色藍胎 黒化部分	有	黒褐色 SYR 3/3	黒褐色 SYR 3/2	中	J-9 MIVE区	2と同一器体か?
				縄文瓦								

押印番号	種別	部位	法	法名	押形および文様	押型 (内容)	胎土	色		焼成	出光	備考	
								外面	内面				
2	図	口縁	-	-	縁部口縁の唇部肥厚 厚唇部に 乱い磨伏工具による連続的突文 痕跡部下に突起状痕  縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ヨコ方向のナ デ字を横す	白色磁物 黒化磁片	有	黒褐色 10YR 2/2	黒褐色 5YR 3/1	昔	J-9 IV区	1と同一個体か? 7 4季位の縁部口縁 と異なる
3	図	口縁	-	-	平縁 縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ヨコ方向のナ デ字を横す	白色磁物 黒化磁片	有	に20~黄褐色 10YR 6/4	灰質褐色 10YR 4/2	昔	J-9 III区	内内輪車付台 (器の縁部)
4	図	口縁	-	-	平縁 口唇部に三方向の突起が 付く 縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	黒褐色 7.5YR 3/1	に20~褐色 7.5YR 5/3	昔	J-9 III区	
5	図	口縁	-	-	平縁 縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ナデ字部を横 す	白色磁物 黒化磁片	有	に20~赤褐色 5YR 4/4	黒褐色 10YR 3/2	昔	J-9 IV区	
6	図	胴部	-	-	縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	に20~褐色 5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/4	昔	J-9 II区	
7	図	胴部	-	-	縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	黒褐色 10YR 3/1	灰質褐色 10YR 5/2	昔	J-9 IV区	
8	図	胴部	-	-	縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ ・ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ による突起構成	ナデ 突起を 若干横す	白色磁物 黒化磁片	有	に20~褐色 7.5YR 5/4	に20~褐色 7.5YR 6/6	昔	J-9 II区	
9	図	胴部	-	-	縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ ・ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ による突起構成	ヨコ方向のナ デ字部を横す	白色磁物 黒化磁片	有	灰質褐色 10YR 5/2	に20~黄褐色 10YR 6/3	昔	J-9 IV区	
10	図	胴部	-	-	正戻の合 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\phi?$	ヨコ方向のナ デ字部を若干 横す	白色磁物 黒化磁片	有	褐色 5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 5/2	昔	J-9 IV区	
11	図	胴部	-	-	正戻の合 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ (器の不鮮明)	ヨコ方向のナ デ字部を横す	白色磁物 黒化磁片	有	に20~黄褐色 10YR 6/4	に20~黄褐色 10YR 7/3	昔	J-9 IV区	
12	図	胴部	-	-	正戻の合 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ 支点が上下に移動するナデ長のコ ンパス文	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	に20~褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-9 III区	
13	図	胴部	-	-	正戻の合 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ 支点左のコンパス文	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	灰質褐色 10YR 5/2	灰質褐色 10YR 5/2	昔	J-9 III区	
14	図	胴部	-	-	附加色の縦文		白色磁物 黒化磁片		に20~黄褐色 10YR 6/4	黒褐色 10YR 3/1	昔	J-9 III区	
15	図	口縁	-	-	平縁 多段ループ文	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	灰質褐色 10YR 5/2	暗灰褐色 2.5YR 4/2	昔	J-9 IV区	
16	図	口縁	-	-	平縁 多段ループ文	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	に20~黄褐色 10YR 6/4	に20~黄褐色 10YR 6/4	昔	J-9 III区	
17	図	胴部	-	-	短段 多段ループ文 支点が上・ 下に移動するナデ長のコンパス文	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 5YR 5/6	昔	J-9 IV区	
18	図	胴部	-	-	多段ループ文 縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	灰質褐色 10YR 4/2	に20~褐色 7.5YR 5/3	昔	J-9 IV区	
19	図	胴部	-	-	支点が上・下に移動するナデ長の コンパス文 多段ループ文	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	に20~黄褐色 10YR 6/4	灰質褐色 10YR 4/2	昔	J-9 III区	2と同一個体か?
20	図	胴部	-	-	多段ループ文 短段 縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	灰質褐色 10YR 6/2	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-9 IV区	2と同一個体か?
21	図	胴部	-	-	縦文 $\begin{matrix} L \\   \\ R \\   \\ L \end{matrix}$ 短段	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	に20~黄褐色 10YR 6/6	黒褐色 10YR 2/2	昔	J-9 III区	
22	図	口縁	-	-	多段ループ文 手輪付磨伏工具による磨伏的的文 様	ヨコ方向のナ デ字部に往上 上げる	白色磁物 黒化磁片	有	に20~褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-9 I区	



第44图 J-9号住居址出土遗物<2>(1:4)

練度 番号	部 種	種 別	法 定	名称および文様	調 色 (内容)	材 土	調 色	色 調		構成	市 土 証 記	備 考
								外 部	内 部			
23	障 紙	口障	-	ルーア文 手ぬぐい替換工具による幾何学的文 様	ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片	有	黒褐色 2.5Y 3/2	黒褐色 7.5YR 4/2	昔	J-9 IV区	
24	障 紙	口障	-	縞織 手ぬぐい替換工具による幾何学的文 様	ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片	有	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	昔	J-9 III区	
25	障 紙	口障	-	多色ルーア文 縞織 手ぬぐい替換工具による幾何学的文 様	ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片	有	褐色 7.5YR 4/4	黒褐色 7.5YR 4/2	昔	J-9 III区	
26	障 紙	口障	-	縞織口障 縞織 手ぬぐい替換工具による幾何学的文 様	ヨコ方向のナ デ若干調整後 焼す	白色紙物 風化岩片	有	灰褐色 10YR 5/2	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	昔	J-9	
27	障 紙	口障	-	縞織口障 口障下に支点上上下 に移動するナデ長のコンパス文 様	ヨコ方向のナ デ若干調整後 焼す	白色紙物 風化岩片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	昔	J-9 IV区	28~31と同一調色 か? 27の照像付定
28	障 紙	口障	-	支点上・下に移動するナデ長の 縦いコンパス文 縞織	ヨコ方向のナ デ若干調整後 焼す	白色紙物 風化岩片	有	黒褐色 2.5Y 3/1	暗灰褐色 2.5Y 4/2	昔	J-9 I区	支点上・下に移 動するナデ長の 縦いコンパス文
29	障 紙	口障	-	支点上・下に移動するナデ長の 縦いコンパス文 縞織	ヨコ方向のナ デ若干調整後 焼す	白色紙物 風化岩片 小石	有	黒褐色 2.5Y 3/1	暗灰褐色 2.5Y 4/2	昔	J-9 I区	
30	障 紙	口障	-	縞織 支点上・下に移動するナデ長の 縦いコンパス文	ヨコ方向のナ デ若干調整後 焼す	白色紙物 風化岩片	有	褐色 7.5YR 4/3	灰褐色 10YR 4/2	昔	J-9 I区	
31	障 紙	口障	-	縞織 支点上・下に移動するナデ長の 縦いコンパス文	ヨコ方向のナ デ若干調整後 焼す	白色紙物 風化岩片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	暗灰褐色 2.5Y 4/2	昔	J-9 I区 IV区	
32	障 紙	口障	-	縞織 ヨコ方向のナ デ若干方向 のナデ	白色紙物 風化岩片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	昔	J-9 II区		
33	障 紙	口障	-	縞織 平地に仕上げ るヨコ方向の ナデ調整後 焼す	白色紙物 風化岩片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	昔	J-9 II区		
34	障 紙	口障	-	縞織 ヨコ方向のナ デ調整後 焼す	白色紙物 風化岩片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	昔	J-9 IV区		
35	障 紙	口障	-	縞織 ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片	有	黒褐色 5YR 3/1	褐色 10YR 4/4	昔	J-9 IV区	36と同一調色か?	
36	障 紙	口障	-	縞織 ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片 小石	有	黒褐色 10YR 2/2	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	昔	J-9 IV区	35と同一調色か?	
37	障 紙	口障	-	縞織 ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	灰褐色 10YR 4/2	昔	J-9 I区 II区 IV区		
38	障 紙	口障	-	縞織 ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片	有	黄褐色 10YR 5/6	黒褐色 2.5Y 3/2	昔	J-9 II区		
39	障 紙	口障	-	縞織 ヨコ方向のナ デ平地に仕上 げる	白色紙物 風化岩片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	昔	J-9 II区 IV区		
51	障 紙	口障	-	無文 オセンチ土器	ヨコ方向のナ デ焼成後 焼す	灰褐色 石灰 風化岩片	無	黄褐色 10YR 3/1	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	昔	J-9	
52	障 紙	口障	-	無文 オセンチ土器	ヨコ方向のナ デ焼成後 焼す	灰褐色 石灰 風化岩片	無	黄褐色 10YR 5/1	暗褐色 10YR 5/1	昔	J-9 IV区	



第45図 J-9号住居址出土遺物<3>(1:4)

発掘 番号	器種	部位	注目	形状および文様	器型 (内型)	胎土	色 調		焼成	出 土 位 置	備 考	
							外 面	内 面				
40	器 鉢	口縁	-	平縁 口縁部に三層状の突起を施す突起下に内形の輪付文裏の縄文	コソ方向のナ テ型に仕上げ	白色灰物 風化破片 小石	有	暗褐色 7.5YR 4/3	暗褐色 10YR 3/3	香	J-9 田区	
41	器 鉢	口縁	-	平縁 裏の縄文	コソ方向のナ テ型を若干 残す	白色灰物 風化破片	有	暗褐色 10YR 3/3	灰赤褐色 10YR 4/2	香	J-9 IV区	
42	器 鉢	口縁	-	平縁 裏の縄文	コソ方向のナ テ型を若干 残す	白色灰物 風化破片	有	褐色 7.5YR 4/3	暗褐色 2.5Y 3/1	香	J-9 田区	
43	器 鉢	口縁	-	平縁 口縁部下及び胴部(破片下 端)に縄状工具による連続的突 文裏の縄文	コソ方向のナ テ型を若干 残す	白色灰物 風化破片	有	高褐色 2.5Y 3/1	暗赤褐色 5YR 3/3	香	J-9 田区	
44	器 鉢	口縁	-	平縁 裏の縄文	コソ方向のナ テ型を若干 残す	白色灰物 風化破片	有	暗褐色 5YR 2/2	暗赤褐色 5YR 3/3	香	J-9 IV区	
45	器 鉢	口縁	-	平縁 裏の縄文	コソ方向のナ テ型を若干 残す	白色灰物 風化破片 小石	有	暗赤褐色 5YR 3/2	暗赤褐色 5YR 3/2	香	J-9 IV区	
46	器 鉢	口縁	-	平縁 裏の縄文	コソ方向のナ テ型を若干 残す	白色灰物 風化破片	有	暗褐色 10YR 2/2	褐色 7.5YR 4/3	香	J-9 IV区	
47	器 鉢	胴部	-	裏の縄文	コソ方向のナ テ製状工具? による	白色灰物 風化破片	有	暗褐色 7.5YR 5/6	にじみ黄褐色 10YR 5/4	香	J-9 IV区	50と同一體か?
48	器 鉢	胴部	-	裏の縄文	コソ方向のナ テ製状工具? による部分着 出凸を残す	白色灰物 風化破片	有	暗赤褐色 5YR 5/6	高褐色 10YR 3/1	香	J-9 田区	
49	器 鉢	口縁	-	裏の縄文	コソ方向のナ テ型凸を若干 残す	白色灰物 風化破片 小石	有	暗赤褐色 5YR 3/3	暗赤褐色 5YR 3/2	香	J-9 田区	
50	器 鉢	胴部	-	裏の縄文	コソ方向のナ テ製状工具? による凸凸を 残す	白色灰物 風化破片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじみ黄褐色 10YR 5/3	香	J-9 田区	47と同一體か?

(10) J-10号住居址

住居址 第46図

本址はあ-4グリッドにおいて検出された。K-3号古墳と重複関係を持ち、西壁の中央から床面の一部を破壊されている。

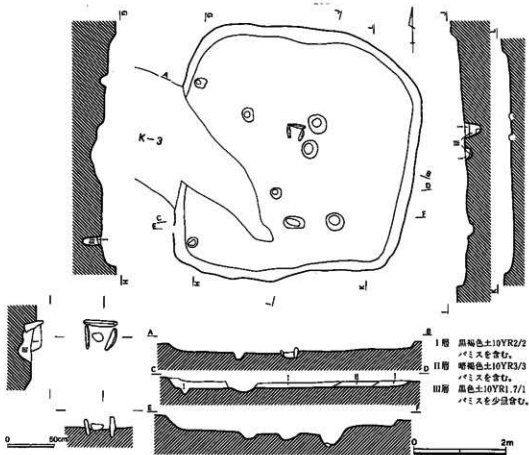
平面形は、東西4.76m南北4.78mの隅丸方形を呈する。床面積は21.13㎡を測り、長軸の方位はN-5°-Eを指す。

床面はおおむね平坦であるが砂層上のこともあり、やや脆弱である。

壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、残存壁高10~32cmを測る。壁溝はもたない。

ピットは総数8個検出されたが、極めて不規則な配置でいずれが支柱穴であるかは、判断できない。

炉は住居中央のやや北側に設けられる。扁平な石3枚を「コ」字状に囲うように床面に突き刺



第46図 J-10号住居址実測図

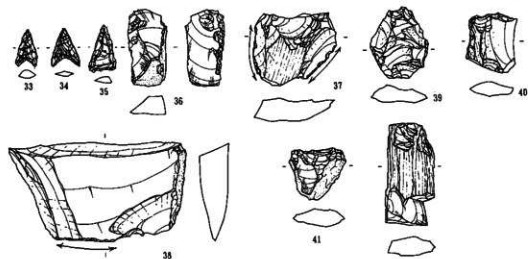
した、所謂「石囲炉」で焼土・灰の堆積、地山の焼け込み顕著でない。

覆土は2層に分層された。I層はきめの粗い黒褐色土、II層は砂質の暗褐色土である。

### 遺物 第47・48図

1~4は平縁の口縁部であり、1のように異なる原体による菱形構成をとるもの、2・3のように羽状構成をとるものがある。5は異原体による菱形構成をとり、下半部に無文帯をつくる。6~8は燃糸文が施される。6のように菱形構成をとるものもある。9は附加条を施すもの、10~19は単節縄文を施すものである。10・11・13のように羽状構成をとるものもある。20は無節縄文を施すもの、21は表面に条痕調整を施している。22は縦走気味の縄文を施した後、やや太めの隆帯を貼付し、隆帯下に2条の小波状沈線を施している。23は無文。24は器面に組紐を施す注口部、25は組紐、26・27は正反の合が施されている。29は燃糸文L2本による羽状構成である。31・32は櫛歯状工具による沈線施文後、列点状刺突が施されるものである。

石器は、石鏃(33~35)、スクレイパー(36)、微小剝離痕のある剥片(37~38)、ピエスエスキュー(39~41)、石核(42)が出土している。



第47図 J-10号住居址出土遺物 (1:2, 1:4) 42

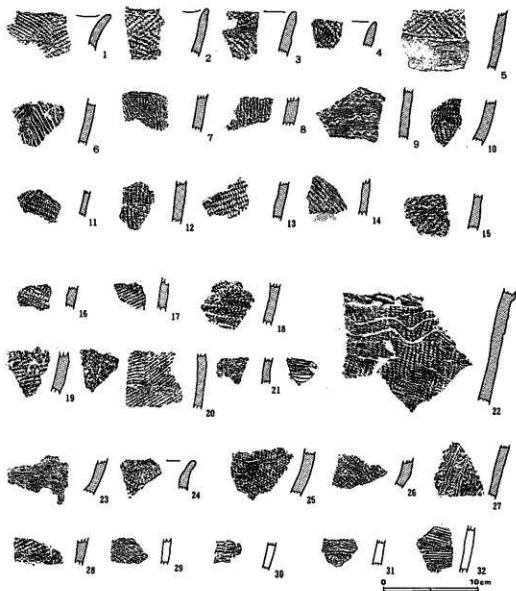
第29表 J-10号住居址 出土遺物一覽表<石器>

神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
33	石鏃	黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.5	II区III層	38	M・F	ガラス片 安山岩	5.3	9.4	1.5	89.9	P7
34	"	"	2.0	1.5	0.2	0.5	III区I層	39	"	ピエスエスキュー	3.7	3.1	0.9	9.9	IV区I層
35	"	"	2.5	1.4	0.3	1.2	IV区I層	40	"	硬質頁岩	3.2	2.7	0.8	7.5	IV区I層
36	スクレイパー	"	4.1	2.6	0.9	8.5	IV区I層	41	"	黒曜石	2.7	3.5	0.9	7.5	I区I層
37	M・F	凝灰岩	3.8	4.4	1.2	13.1	II区I層	42	石核	"	5.4	2.6	1.0	20.0	I区II層

M・F=微小剝離痕を有する剥片

単位はcm, g





第48図 J-10号住居址出土遺物(1:4)

第30表 J-10号住居址 出土遺物一覧表 <縄文土器>

発掘 番号	器種	部位	法	形状および文様	調査 (西沢)	出土	検出	色		焼成	出土 位置	備考
								外	内			
1	杯	口縁	-	平縁 縄文L・R・R.Lの羽状線状	ナデ及び磨版 後の調整	白色灰物 黒化部分	有	灰黄褐色 10YR 6/3	灰黄褐色 10YR 5/2	特	J-10 IV区	
2	杯	口縁	-	平縁 縄文L・R・R.Lの羽状線状	ナデ	白色灰物 黒化部分	有	黒褐色 10YR 5/1	黒褐色 10YR 4/1	特	J-10 IV区	
3	杯	口縁	-	平縁 口唇部縄文R.L 縄文R.L	ナデ	白色灰物 黒化部分	有	黒褐色 10YR 5/1	黒褐色 10YR 5/1	特	J-10 IV区	

押印 番号	品 種	材 質	法 法	形状および文様	調 査 (内容)	材 土	色 調		備考	出 上 型 型	備 考	
							外 面	内 面				
4	紙 類	印刷	-	平綴 英文R.L	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	青	J-10 IIE	
5	紙 類	印刷	-	英文R.Lの方向部による形状構成	ナゲ 物積状 成る	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	褐色色 10YR 4/1	青	J-10 IIV	
6	紙 類	印刷	-	欧文文片	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	青	J-10 IIE	
7	紙 類	印刷	-	欧文文片	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	物積状 5YR 5/4	高褐色 10YR 3/1	青	J-10 IIV	
8	紙 類	印刷	-	欧文文片	前部は直のた めか凹凸あり	白色紙物 風化紙片	青	褐色色 10YR 4/1	高褐色 10YR 3/1	青	J-10 IIE	
9	紙 類	印刷	-	英文R.Lに欧文R.Lの2本を付加 した付加条 縦線組	縦線状の調整 (横方向)	白色紙物 風化紙片	青?	にじみ・非褐色 5YR 5/3	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	青	J-10 IIE	(押ノ木?)
10	紙 類	印刷	-	英文R.Lの方向部による形状構成	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	褐色色 10YR 4/1	物積状 5YR 5/6	青	J-10 IIV	
11	紙 類	印刷	-	英文R.Lの方向部による形状構成	不明	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	灰質褐色 10YR 4/2	青	J-10 IIV	
12	紙 類	印刷	-	英文R.L	不明	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	灰質褐色 10YR 5/2	青	J-10 IIE	
13	紙 類	印刷	-	英文R.L	不明	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・非褐色 5YR 5/4	高褐色 5YR 3/1	青	J-10 IIE	
14	紙 類	印刷	-	英文R.L	縦線状の調整	白色紙物 風化紙片	青	灰質褐色 10YR 5/2	褐色色 10YR 4/1	青	J-10 IIE	
15	紙 類	印刷	-	英文R.L	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	灰質褐色 10YR 4/2	青	J-10 IIV	
16	紙 類	印刷	-	英文R.L	不明	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	青	J-10 IIE	
17	紙 類	印刷	-	英文R.L?	ナゲ及び物積 状の調整	白色紙物 風化紙片	青	高褐色 10YR 3/1	にじみ・黄褐色 10YR 6/2	青	J-10 IIE	
18	紙 類	印刷	-		ナゲ及び物積 状の調整	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・非褐色 5YR 5/4	褐色色 10YR 4/1	青	J-10 IIE	
19	紙 類	印刷	-	英文R.L	ナゲ及び物積 状の調整	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	褐色色 10YR 4/1	青	J-10 IIE	
20	紙 類	印刷	-	英文R.L	ナゲ	白色紙物 風化紙片	無	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	褐色色 7.5YR 3/1	青	J-10 IIE	黒付奇
21	紙 類	印刷	-	英文?	高褐色調整	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	褐色色 5YR 5/1	青	J-10 IIE	
22	紙 類	印刷	-	英文L.Rと欧文L.R 並列に英文 L.Rのある縦線調整を付		白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	青	J-10 No.1	
23	紙 類	印刷	-	英文	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・褐色 7.5YR 7/4	青	J-10 IIV	
24	紙 類	印刷	-	縦線	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	にじみ・黄褐色 10YR 6/2	青	J-10 IIE	黒山目
25	紙 類	印刷	-	縦線	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	灰白色 10YR 8/2	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	青	J-10 IIE	黒山目
26	紙 類	印刷	-	L.R・R.Lによる正反の合	ナゲ	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	高褐色 10YR 4/2	青	J-10 IIE	黒山目
27	紙 類	印刷	-	R.L・L.Rによる正反の合?	ナゲ及び物積 状の調整	白色紙物 風化紙片	青	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	高褐色 7.5YR 3/1	青	J-10 IIE	黒付奇
28	紙 類	印刷	-	英文L.R	ナゲ及び物積 状の調整	白色紙物 風化紙片	青	灰質褐色 10YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	青	J-10 IIE	
29	紙 類	印刷	-	欧文文片2本による形状構成	ナゲ	白色紙物 風化紙片	無	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	にじみ・褐色 7.5YR 5/2	青	J-10 IIE	押ノ木
30	紙 類	印刷	-	凸形調整	ナゲ	白色紙物 風化紙片	無	褐色色 7.5YR 4/1	褐色色 7.5YR 4/1	青	J-10 IIE	
31	紙 類	印刷	-	製書加工品による凸形 英文L.R 一工具による凸点調整	ナゲ	白色紙物 風化紙片	無	褐色色 7.5YR 4/2	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	青	J-10 IIE	押ノ木
32	紙 類	印刷	-	製書加工品による凸形 英文L.R 2本の凸点	ナゲ	白色紙物 風化紙片	無	褐色色 7.5YR 4/2	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	青	J-10 IIE	

## 時 期

本址は上記の資料をもって、縄文時代前期中葉に位置付ける事ができよう。

## (11) J-11号住居址

### 住居址 第49図

本址はい-3グリッドにおいて検出された。K-3号古墳と重複し、東部を破壊される。

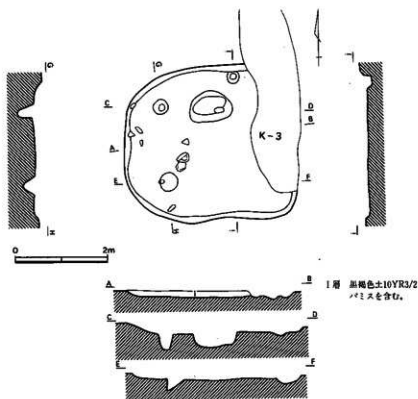
プランは東西3.46m南北2.90mで隅丸長方形を呈する。床面積は推定で9.83㎡を測り長軸方向はN-90°を指す。

壁の立ち上がりはかなり緩い傾斜で、残存壁高5~22cmを測る。壁溝は検出されなかった。

床面は地山をそのまま利用し、おおむね平坦であるが、踏み締められている。

炉は検出されなかった。

ビットは4個が検出された。西壁下に並ぶP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は主柱穴かも知れない。K-3号古墳に破壊されている東壁下に対になるビットが並んでいたことも考えられる。北壁下のP<sub>4</sub>は東柱であろう



第49図 J-11号住居址実測図

か90×65cmの楕円形を呈するP<sub>3</sub>については機能がわからない。

覆土は黒褐色土（第I層）のみである。

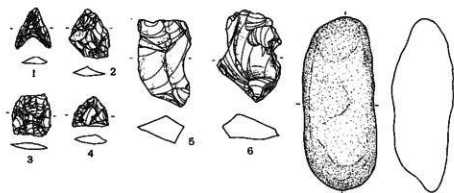
### 遺物 第50図

土器の出土量は極めて微量で、細破片が5点出土したのみである。いずれも器面の風化が著しいため図化はしなかったが、繊維を多量に含む単節縄文施文の土器、繊維を微量含む無文土器などがある。

石器は、石鏃（1）、石鏃未成品（2～4）、微小剥離痕のある剥片（5）、ピエスエスキュー（6）、敲石（7）が出土している。

### 時期

本址は、時期判定に有効な土器資料に欠けるが、遺跡内の位置、重複関係、遺構の構築状況など諸属性から縄文時代前期中葉以前に帰属するものと考えておきたい。



第50図 J-11号住居址出土遺物（1：2，1：4）

第31表 J-11号住居址 出土遺物一覧表〈石器〉

標記番号	部 種	材 質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考	標記番号	部 種	材 質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
1	石 鏃	黒曜石	2.1	1.9	0.4	0.7	NE区	5	M・F	硬質頁岩	4.5	2.8	1.2	15.5	NE区
2	石 鏃 未成品	＃	2.6	2.1	0.5	2.1	NE区	6	ピエス エスキュー	黒曜石	4.8	3.4	1.2	16.9	NE区
3	＃	＃	2.2	2.0	0.3	1.6	NE区	7	敲 石	安山岩	18.2	8.0	6.4	1275.8	No.2
4	＃	＃	1.6	1.9	0.5	1.1	NE区								

M・F=微小剥離痕を有する剥片

単位はcm, g

## (12) J-12号住居址

住居址 第51図

本址はいー7グリッドに位置する。南西部がわずかにK-3号古墳と重複関係し、破壊されている。

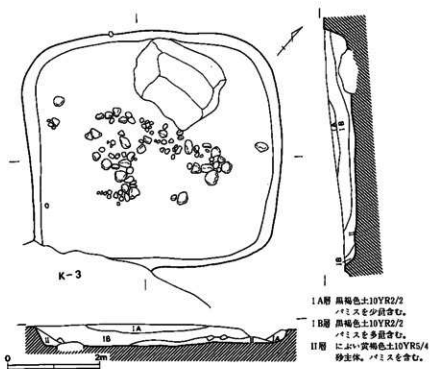
その規模は東西4.95m南北4.67mで、平面形状は隅丸方形を呈する。床面積は21.5㎡を測るが、北壁下には偶然地面に埋もれていたため、取り除けなかったと考えられる巨石が居座っており、これの占める面積を除くと19㎡である。長軸方向はN-42°-Wを指す。

壁体は堅固で、壁面も平滑である。残存壁高20-40cmを測る。壁溝は検出されなかった。

床面は地山をそのまま利用し、平坦で堅固に構築されている。

炉及びピットは検出されなかった。

覆土は2層に分層された。第I層は黒褐色土、第II層は砂粒主体のにおい黄褐色土である。



第51図 J-12号住居址実測図

## 遺物 第52～55図

土器は多量の縄文土器の細片と石器が出土した。

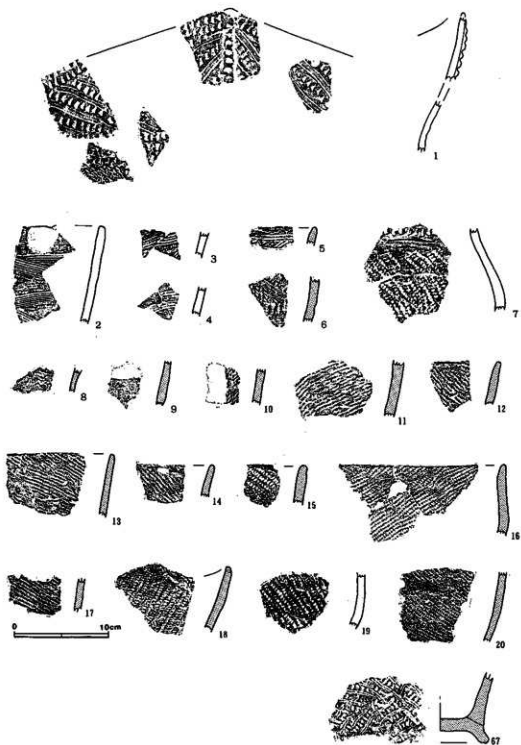
1は4単位の波状口縁土器である。口縁部は肥厚口縁となり、2段の櫛歯状連続刺突文を施す。肥厚部下へは、櫛歯状連続刺突文と条線を文様を構成する。また、波頂部から隆帯を垂下させ、櫛歯状連続刺突を施している。2～4は同一個体と思われる。肥厚口縁上に2段の櫛歯状連続刺突を施し、その下位へ同一原体による条線を刺突で文様を構成する。5は縄文施文後、櫛歯状工具で沈線を描く。6は地文に束の縄文が見られ、櫛歯状工具による条線・連続刺突文が施される。7は頸部に連続刺突文が巡る。胴部の縄文はRLである。

8～11は無節縄文の土器で、8・9はRを、10・11はLを施している。12～34は単節縄文を施文する。12～16・18・34は口縁部で、平縁の他18の様に波状を呈するものがある。また34には、片口の注口が付く。28～32は羽状構成をとるもので、28は結束された原体でなされる。32には、ループ文が見られる。35は縄文LLが施される。36～40はループ文で文様を構成する土器で、36には片口の注口が付く。38・39は波状口縁を呈しており、口縁部に沿った数段のループ文の下位に、ループ文で鋸歯状の文様を構成する。44は口縁部で、櫛歯状工具によるコンパス文を頸部に施し、文様帯を形成する。口縁部文様帯は地文のループ文が施され、半截竹管による、菱形または鋸歯状のモチーフが描かれる。46・47は附加条の縄文と思われるが、軸繩の圧痕が不明瞭である。53は正反の合が施される。54～58は組紐が施文されるが、54～56は、その上半截竹管で渦巻きまたは幾何学的文様を描いている。57・58には、コンパス文が見られる。59～66は、束の縄文が施文される。このうち61・62・66は、同一個体であろう。

石器は、石鏃(67～73)、石匙(74・75)、スクレイパー(76)、剥片(77)、ピエスエスキーユ(78～83)、磨石(84・85)が出土している。

## 時期

以上の出土土器をもって、本址は縄文時代前期中葉に位置付けることができよう。

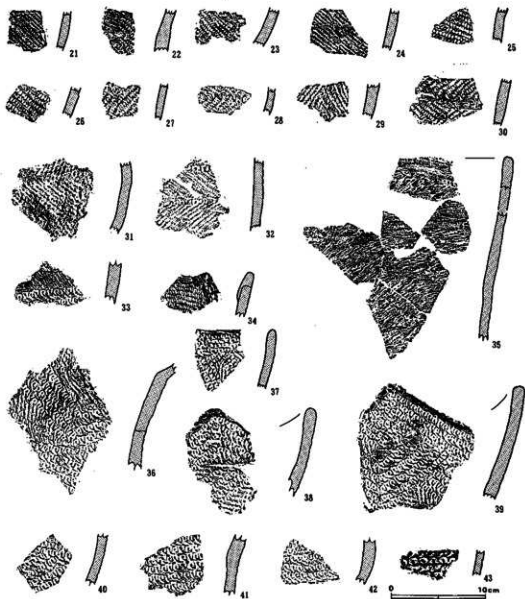


第52圖 J-12号住居址出土遺物 (1) (1:4)

第32表 J-12号住居址 出土遺物一覽表 (縄文土器)

調査 番号	器 種	部位	位置	発見および文 相	調査 内容 (内蔵)	土 質	色 調		焼 成	出 土 位 置	備 考	
							外 面	内 面				
1	鉢鉢	口縁	-	底状口縁 口唇部肥厚 唇縁状工 具による連続刻文 糸縷で文 相を施す 裏面より連続刻文を施 した蓋下縁等を施す	ナゲ か? 器底状縁部不 詳明	白色磁物 風化磁片	無	褐色 7.5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 6/4	香	J-12 IV区	
2	鉢鉢	口縁	-	平縁 口唇部肥厚 唇縁状工 具による連続刻文 糸縷 刻文で文 相を施す	ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色磁物 風化磁片	無	褐色 7.5YR 4/3	にぶい褐色 7.5YR 5/4	香	J-12 I区	3, 4と同一類 体か?
3	鉢鉢	口縁	-	唇縁状工具による糸縷 刻文	ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色磁物 風化磁片	無	にぶい褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 6/6	香	J-12 I区	2, 4と同一類 体か?
4	鉢鉢	口縁	-	唇縁状工具による糸縷 刻文	ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色磁物 風化磁片	無	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/4	香	J-12 I区	2, 3と同一類 体か? J-10と適合
5	鉢鉢	口縁	-	縄文 (器底不明) 縄文後、磨鉢工 具によるヨコ、ナメノの糸縷	ヨコ方向の ナゲ 蓋下の 凹凸を施す	白色磁物 風化磁片	有	褐色色 10YR 4/1	にぶい褐色 5YR 5/4	香	J-12 IV区	
6	鉢鉢	口縁	-	底の縄文刻文後、唇縁状工具によ る連続刻文 糸縷をヨコ・ナメ ノに施す	ヨコ方向の ナゲ	白色磁物 風化磁片	有	黒褐色 10YR 3/1	にぶい黄褐色 10YR 5/4	香	J-12 III区	
7	鉢鉢	胴部 一割 上中	-	唇縁状工具による連続刻文 縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ 器底の状 態よく不詳明	白色磁物 風化磁片	無	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/3	香	J-12 III区	19と同一類体か?
8	鉢鉢	胴部	-	縄文R	ヨコ方向のナ ゲ 凹凸を若干 施す	白色磁物 風化磁片	有	褐色色 10YR 3/2	点褐色 2.5Y 3/1	香	J-12 I区	
9	鉢鉢	胴部	-	縄文R	ナゲ方向のナ ゲ 手摺に仕上 げる	白色磁物 風化磁片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/4	褐色色 10YR 4/1	香	J-12 III区	
10	鉢鉢	胴部	-	縄文L	ヨコ方向のナ ゲ 手摺に仕上 げる	白色磁物 風化磁片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/4	黒褐色 10YR 3/1	香	J-12 III区	
11	鉢鉢	胴部	-	縄文L	ヨコ方向のナ ゲ 若干の凹凸 を施す	白色磁物 風化磁片	有	明黄褐色 10YR 6/6	にぶい黄褐色 10YR 4/3	香	J-12 III区	
12	鉢鉢	口縁	-	平縁 縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ 凹凸を施す	白色磁物 風化磁片	有	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 6/4	香	J-12 IV区	
13	鉢鉢	口縁	-	平縁 縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ	白色磁物 風化磁片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/4	にぶい黄褐色 10YR 5/4	香	J-12 III区	
14	鉢鉢	口縁	-	平縁 縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ 若干の凹凸 を施す	白色磁物 風化磁片	有	黒褐色 10YR 3/1	にぶい褐色 7.5YR 5/4	香	J-12 IV区	
15	鉢鉢	口縁	-	平縁 縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ 凹凸を施す	白色磁物 風化磁片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/4	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-12 IV区	
16	鉢鉢	口縁	-	平縁 縄文Rし・L	ヨコ方向のナ ゲ 手摺に仕上 げる	白色磁物 風化磁片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/4	香	J-12 IV区	
17	鉢鉢	胴部	-	縄文Rし		白色磁物 風化磁片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/3	にぶい黄褐色 10YR 6/4	香	J-12 III区	
18	鉢鉢	口縁	-	底状口縁 縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ 若干の凹凸 を施す	白色磁物 風化磁片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-12 IV区	
19	鉢鉢	胴部	-	縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ 凹凸を若干 施す	白色磁物 風化磁片	無	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/3	香	J-12 IV区	7と同一類体か?
20	鉢鉢	胴部	-	縄文Rし	ヨコ方向のナ ゲ 凹凸を若干 施す	白色磁物 風化磁片	有	灰黄褐色 10YR 5/2	にぶい黄褐色 10YR 5/3	香	J-12 IV区	

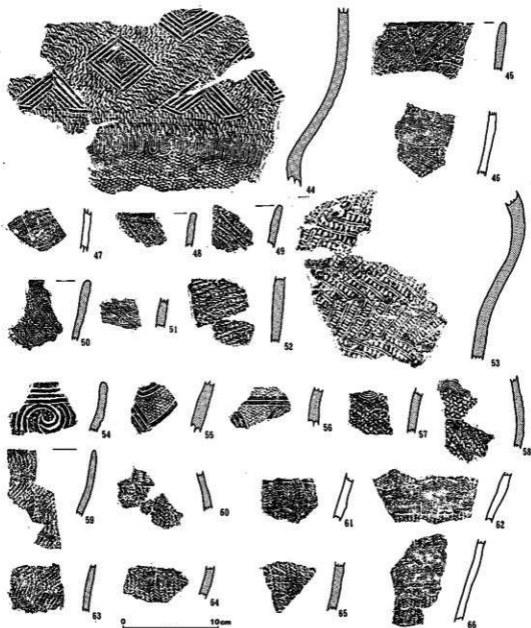




第53図 J-12号住居址出土遺物<2>(1:4)

押図 番号	器種	部位	法 註	形状および文様	調 装 (内面)	基 土	色 調		製法	出 土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
21	煎鉢	胴部	— — —	縦文R.L.	ヨコ又はナギ 方向のナギ	白色灰物 風化痕片	有	にぶい黄褐色 10YR 6/3	にぶい黄褐色 10YR 6/3	特	J-12 Ⅲ区	
22	煎鉢	胴部	— — —	縦文R.L.	ナギ方向のナ ギ字様に仕上 げら	白色灰物 風化痕片	有	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 6/4	特	J-12 Ⅳ区	
23	煎鉢	胴部	— — —	縦文R.L.	ナギ方向のナ ギ字様に仕上 げら	白色灰物 風化痕片	有	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/4	特	J-12 Ⅲ区	

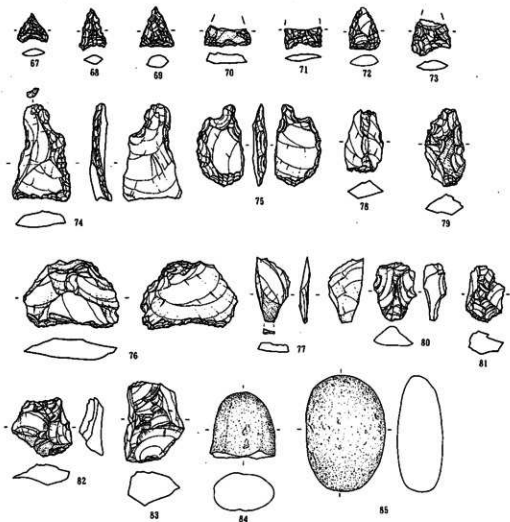
種別 番号	部 種	部位	注 記	形状および文様	装 飾 (内装)	材 土	色 質		完成	出 止 位置	備 考	
							外 面	内 面				
24	部 種	部 位	-	縦文R.L	ココ方向のナ ゲ四凸を若干 残す	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	昔	J-12	
25	部 種	部 位	-	縦文R.L	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-12	
26	部 種	部 位	-	縦文R.L	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	黄褐色 10YR 3/1	昔	J-12 IV区	
27	部 種	部 位	-	縦文L.R	ナゲ 四凸を残す	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 6/6	黒褐色 2.5Y 3/1	昔	J-12 II区	
28	部 種	部 位	-	縦文R.L・L.Rの組合せによる羽状 縁成	ココ方向のナ ゲ四凸を若干 残す	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	黄褐色 10YR 3/1	昔	J-12 IV区	
29	部 種	部 位	-	縦文L.R・R.Lによる羽状縁成	ココ方向のナ ゲ羽状縁を残 す	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	昔	J-12 IV区	
30	部 種	部 位	-	縦文L.R・R.Lによる羽状縁成	ナゲ	白色紙物 風化紙片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	にじみ・褐色 10YR 5/4	昔	J-12 II区	
31	部 種	部 位	-	縦文L.R・R.Lによる羽状縁成	ナゲ方向のナ ゲ四凸を若干 残す	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじみ・黄褐色 5YR 4/3	昔	J-12 IV区	
32	部 種	部 位	-	縦文L.R・R.Lによる羽状縁成 扉縁の上端にループ文	ココ方向のナ ゲ四凸を若干 残す	白色紙物 風化紙片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	灰黄褐色 10YR 5/2	昔	J-12 I・IIIV区	
33	部 種	部 位	-	縦文L.L (上部にループ文) 裏の短いループ文を並べる	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	昔	J-12 IV区	
34	部 種	口 輪	-	平縁 片口口が付く 縦文R.L	ココ方向のナ ゲ羽状縁を残 す	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	灰黄褐色 10YR 6/2	昔	J-12 IV区	
35	部 種	口 輪	-	平縁又は短い小波状を残す 縦文L.L	ナゲ 四凸を残す	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/3	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-12 I区	
36	部 種	口 輪	-	巻縁の多段ループ文で水平・三角 形を構成する 片口の片口が付く	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	昔	J-12 7	
37	部 種	口 輪	-	平縁 多段ループ文	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	昔	J-12 IV区	縁飾孔 有
38	部 種	口 輪	-	巻縁口輪 多段ループ文で水平・ 三角形を構成する	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片 小石	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	昔	J-12 8	
39	部 種	口 輪	-	2つに割れた波状縁を若干波状口 輪か? 多段ループ文で巻縁状又 は三角形を構成する	ココ又はナゲ 方向のナゲ字 様に仕上げる	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	昔	J-12 2	縁飾孔 有
40	部 種	部 位	-	多段ループ文 手動竹管状工具に よる表行波縁	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	昔	J-12 II区	
41	部 種	部 位	-	多段ループ文	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	灰褐色 2.5Y 7/3	暗灰褐色 2.5Y 4/2	昔	J-12 IV区	
42	部 種	部 位	-	多段ループ文	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	昔	J-12 I区	
43	部 種	口 輪	-	多段ループ文	ココ方向のナ ゲ字様に仕上 げる	白色紙物 風化紙片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	昔	J-12 I区	



第54図 J-12号住居址出土遺物<3>(1:4)

発掘番号	器種	部位	注目	図形および文様	陶質 (内蔵)	胎土	色調		構成	出土 位置	備考
							外面	内面			
44	钵体	口縁	-	多層ループ文、半筒竹管状工具による平行波線で網目状文、菱形文を隔く斑点が上・下に移動する夕字風のコンパス文、網目		白色灰物 風化石灰片	褐色 30YR 4/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	赤	J-12 6	
45	钵体	口縁	-	斜知糸の縄文	コッ方向のナデ 調整痕を残す	白色灰物 風化石灰片 小石	褐色 10YR 4/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	赤	J-12 IV区	J-10と聯合
46	钵体	胴体	-	斜知糸の縄文	ナデ 若干和土を挟す	白色灰物 風化石灰片	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	褐色 10YR 4/4	赤	J-12 I区域	J-10と聯合

種別 番号	種別	部位	出 産	原形および文様	製 法 (内訳)	胎 土	色 調		焼成	出 土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
47	浮線	胴部	—	附加糸の縄文	ナゲ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-12 I区	
48	浮線	口縁	—		ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 4/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-12 III区	49と同一個体
49	浮線	口縁	—	附加糸の縄文	ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	にじみ暗褐色 5YR 4/2	にじみ暗褐色 5YR 4/4	昔	J-12 II区	48と同一個体
50	浮線	口縁	—	附加糸の縄文	ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	灰褐色 7.5YR 4/2	高褐色 10YR 2/2	昔	J-12 I区	51と同一個体
51	浮線	胴部	—	附加糸の縄文	ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	にじみ黄褐色 10YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	J-12 IV区	50と同一個体
52	浮線	胴部	—	附加糸の縄文	ヨコ方向の ナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	暗褐色 2.5Y 3/2	昔	J-12	
53	浮線	胴部	—	正反の糸 	ヨコナゲ方向 のナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	にじみ黄褐色 10YR 5/3	にじみ黄褐色 10YR 6/3	昔	J-12 3	J-9と褐色
54	浮線	口縁	—	器縁上に半線竹管状工具で平行定 線 溝を施す	ヨコ方向の ナゲ 平磨に 仕上げる	白色底物 黒化部分 小石	有	灰褐色 10YR 6/2	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	J-12 IV区	
55	浮線	口縁	—	器縁上に半線竹管状工具で幾何学 的文様を施す	ヨコ方向の ナゲ 平磨に 仕上げる	白色底物 黒化部分	有	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-12 I区	
56	浮線	口縁	—	器縁上に半線竹管状工具で平行定 線 幾何学的文様を施す	ヨコ方向の ナゲ 平磨に 仕上げる	白色底物 黒化部分	有	にじみ黄褐色 10YR 5/3	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-12 II区	
57	浮線	胴部	—	器縁 定点定長のコンパス文	ヨコ方向のナ ゲ平磨に仕上 げる	白色底物 黒化部分	有	黄褐色 10YR 6/5	にじみ黄褐色 10YR 6/4	昔	J-12 IV区	
58	浮線	胴部	—	器縁 コンパス文	ヨコ方向のナ ゲ平磨に仕上 げる	白色底物 黒化部分	有	にじみ黄褐色 10YR 5/3	灰黄褐色 10YR 6/2	昔	J-12 IIV区	
59	浮線	口縁	—	糸の縄文	ナゲ・ヨコ方 向のナゲ凹凸 を若干施す	白色底物 黒化部分	有	暗灰褐色 2.5Y 4/2	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-12 IV区	
60	浮線	胴部	—	糸の縄文 線状工具による連続斜線文	ナゲ・ヨコ方 向のナゲ 凹 凸を若干施す	白色底物 黒化部分	有	暗褐色 10YR 3/1	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-12 III区	
61	浮線	胴部	—	糸の縄文	ヨコ方向のナ ゲ凹凸を施す ヨコ方向の	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-12 IV区	62, 66と同一個 体か?
62	浮線	胴部	—	糸の縄文	ナゲ 凹凸を施す ヨコ方向の	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-12 IIIIV区	61, 66と同一個 体か?
63	浮線	胴部	—	糸の縄文	ナゲ 凹凸を施す ヨコ方向の	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 4/4	にじみ黄褐色 10YR 5/3	昔	J-12 II区	
64	浮線	胴部	—	糸の縄文	ナゲ 凹凸を施す ヨコ方向の	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 4/4	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	J-12 I区	
65	浮線	胴部	—	糸の縄文	ナゲ 凹凸を施す ヨコ方向の	白色底物 黒化部分	有	暗褐色 10YR 3/3	灰黄褐色 10YR 5/2	昔	J-12 IV区	
66	浮線	胴部	—	糸の縄文	ナゲ 凹凸を施す	白色底物 黒化部分	有	暗褐色 7.5YR 5/5	暗褐色 7.5YR 4/2	昔	J-12 IV区	61, 62と同一個 体か?



第55図 J-12号住居址出土遺物(1:2, 1:4)

第33表 J-12号住居址 出土遺物一覽表〈石器〉

詳細番号	器種	材料	長さ	幅	厚さ	重量	備考	詳細番号	器種	材料	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
67	石	燧	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.5	IV区1層	77	削片	硬質頁岩	3.4	1.8	0.4	3.1	IV区1層
68	"	"	"	2.1	1.5	0.5	0.8	IV区II層	78	"	ビエヌ エスケーユ ガラス質 安山岩	3.3	2.1	0.8	5.6	II区1層
69	"	"	"	2.1	1.8	0.6	1.8	II区1層	79	"	チャート	4.1	2.2	1.0	7.7	III区1層
70	"	"	"	1.1	2.4	0.5	1.5	IV区1b層	80	"	黒曜石	3.1	2.3	1.2	5.4	IV区1層
71	"	"	"	1.1	2.0	0.4	0.7	III区1層	81	"	"	3.0	2.0	1.2	5.8	III区II層
72	"	"	硬質頁岩	2.2	1.6	0.5	2.0	III区1層	82	"	"	3.1	3.2	1.2	7.9	III区1b層
73	"	"	チャート	1.9	2.0	0.5	1.7	III区1層	83	"	"	4.2	3.2	1.3	19.5	IV区1b層
74	石	匙	頁岩	5.2	3.0	0.8	12.9	I区II層	84	磨石	安山岩	7.0	6.8	4.0	253.2	
75	"	"	ガラス質 安山岩	4.3	2.5	0.7	—		85	"	"	12.2	8.2	4.8	692.3	
76	スクレイパー	"	"	3.6	5.0	1.0	20.1	III区1b層								

単位12cm, g

### (13) J-13号住居址

#### 住居址 第56図

本址はいー6グリッドにおいて検出された。K-4号古墳と重複関係を持ち、東半分を破壊される。

東西3.96m南北5.03mの隅丸長方形プランを呈し、床面積は推定で18.25㎡を測る。長軸方向はN-30°-Wを指す。

残存壁高は30cm前後を測る。壁溝は検出されなかった。

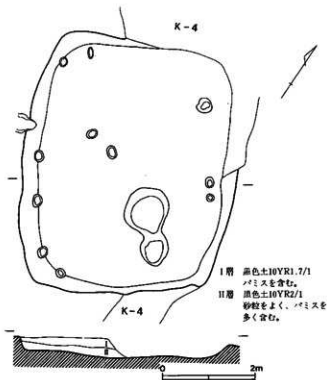
床はおおむね平坦であるが、砂層上に構築されることもあり、やや脆弱である。

炉は検出されなかった。

ピットは13個が検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>9</sub>は壁直下に掘削された柱穴で、特に西壁下にきれいに並んでいる。東壁下も同様な状況が想定されるが、古墳の周溝によって破壊されるため、残っている柱穴が少ないようだ。このほか、氈葺状に接するP<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>は合計長155cm、幅93・62cmを測る。覆土は、2層に分層された。

#### 遺物 第57~59図

1~4は、口縁部文様帯を持つ土器である。1~3は同一個体でやや肥厚気味の口唇部に三角形の突起が貼付される。肥厚部には爪形文が刺突され、胴部は羽状構成となる。胴部の縄文は段毎に節の大きさが異なる。4は内湾気味の肥厚口縁を呈する土器で、肥厚部に3段の爪形文が刺突される。5~14・25は単節縄文を施文する土器で、6・

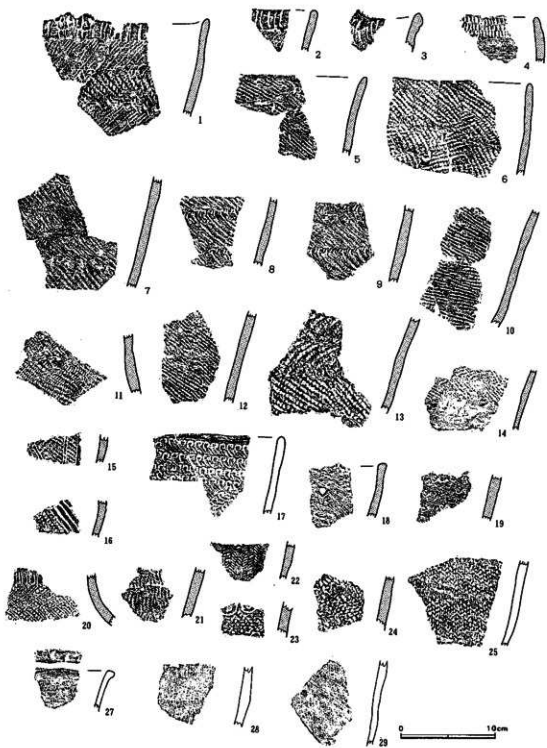


第56図 J-13号住居址実測図



第57図

J-13号住居址出土遺物(1:4)



第58图 J-13号住居址出土遗物(1:4)

13・14のように羽状を構成するものが見られる。8・9は末端部をループ処理し、足の長いループ文を施している。15・16は単節縄文を地文とし、半截竹管状工具で幾何学的文様を描く。17は足の短いループ文が重ねられた多段ループ文である。18・19は附加条の縄文と思われ、18は格子目状を呈している。20は正反の合を施文し、その上に支点が上・下に移動するコンパス文が施文される。21・22は束の縄文、23～25は組紐である。23には支点変えのコンパス文が施される。26は無節縄文が施される口縁の大型破片、27～29はオセンベ土器で口縁部の29には格子目状の沈線が施される。

石器は、石鎌 (31～32)、石匙 (33)、石錐 (34)、スクレイパー (35)、打製石斧 (36)、ピエスエスキュー (37～40)、微小剥離底のある剥片 (41～43)・石核 (44) が出土している。

### 時期

以上の出土土器の特長から本址は縄文時代前期中葉に帰属する住居と考えられる。

第34表 J-13号住居址 出土遺物一覽表 <縄文土器>

検出 番号	器 種	部位	取 出 位 置	形状および文様	陶 質 (内質)	胎 土	色 調		焼 成	出 土 位 置	備 考	
							外 面	内 面				
1	器 種	口 縁	-	平縁 口縁部が若干肥厚 山形の突起が2個付く 縄文なし・上縁にも羽状線文	ヨコ方向のナ デ 凸凸を著 す	白色胎物 風化破片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/4	灰青色 10YR 5/2	昔	J-13 IV区	2, 3と同一体
2	器 種	口 縁	-	平縁 口縁部が若干肥厚 点状文を施す 縄文なし	ヨコ方向のナ デ 凸凸を著 す	白色胎物 風化破片	有	にぶい黄褐色 7.5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	昔	J-13	1, 3, 2と同一体
3	器 種	口 縁	-	平縁 口縁部が若干肥厚 山形の突起が付く 点状文を施す	ヨコ方向のナ デ 凸凸を著 す	白色胎物 風化破片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/4	にぶい黄褐色 10YR 6/4	昔	J-13	1, 2, 3と同一体
4	器 種	口 縁	-	平縁 器身外縁の口縁部が内凹 する磨蝕痕工具による連続線文	ヨコ方向のナ デ 平滑に仕 上げる	白色胎物 風化破片	有	黒褐色 10YR 2/3	黒褐色 10YR 2/3	昔	J-13	
5	器 種	口 縁	-	平縁 縄文なし	ヨコ方向のナ デ 凸凸を著 す	白色胎物 風化破片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/4	灰青色 10YR 6/2	昔	J-13 IV区	J-5と結合
6	器 種	口 縁	-	平縁 縄文なし 部分的に斜線を構成 する	ヨコ・タテ方 向のナデ 凸 凸を著す	白色胎物 風化破片	有	黒褐色 10YR 2/1	灰青色 10YR 4/2	昔	J-13 IV区	
7	器 種	胴 部	-	縄文なし	ヨコ方向のナ デ 磨蝕痕 凸凸を著す	白色胎物 風化破片	有	にぶい黄褐色 10YR 5/3	黒褐色 10YR 2/2	昔	J-13 IV区	
8	器 種	胴 部	-	縄文なし 上縁にループ文が付く	ヨコ方向のナ デ 凸凸を著 す	白色胎物 風化破片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/3	黒褐色 2.5Y 3/1	昔	J-13 P 1	9と同一体
9	器 種	胴 部	-	縄文なし 上縁にループ文が付く	ヨコ方向のナ デ 凸凸を著 す	白色胎物 風化破片	有	灰青色 10YR 6/2	にぶい黄褐色 10YR 5/3	昔	J-13 P 1	8と同一体
10	器 種	胴 部	-	縄文なし	ヨコ方向のナ デ 凸凸を著 す	白色胎物 風化破片	有	にぶい黄褐色 10YR 4/3	にぶい黄褐色 10YR 4/3	昔	J-13	
11	器 種	胴 部	-	縄文なし	ナデ 凸凸を著す	白色胎物 風化破片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	灰褐色 5YR 4/2	昔	J-13	
12	器 種	胴 部	-	縄文なし	ヨコ方向のナ デ 平滑に仕 上げる	白色胎物 風化破片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/4	灰青色 10YR 5/2	昔	J-13	

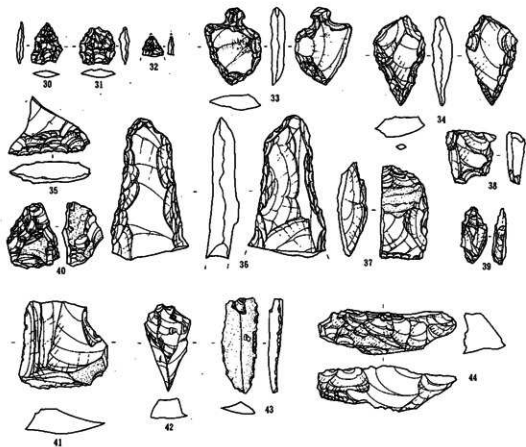


神図番号	器種	部位	技法	装飾および文様	陶業(内装)	新土	編織	色		組成	出土位置	備考
								外面	内面			
13	磁鉢	胴部	---	縄文L・R・Rによる羽状模様のナブ	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	骨	J-13	
14	磁鉢	胴部	---	縄文L・R・Rによる羽状模様のナブ	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	黒褐色 10YR 3/1	骨	J-13 IV区	
15	磁鉢	胴部	---	縄文L・R・Rを施した後、手動竹管状工具による幾何学的文様を施す	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	骨	J-13	
16	磁鉢	胴部	---	縄文L・R・Rを施した後、手動竹管状工具で斜位の平行線を施す	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	にじみ・黄褐色 10YR 5/2	骨	J-13	
17	磁鉢	口縁	---	早期 多段ループ文	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	無	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	骨	J-13	短峰孔 有
18	磁鉢	口縁	---	早期 山形波の突起が2個付くと思われる 附魚鱗の縄文	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	骨	J-13	短峰孔
19	磁鉢	胴部	---		ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	骨	J-13	
20	磁鉢	胴部	---	多段竹管状工具による幾何学的文様のなか L L L R R R L R L R L R L R L R L	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	骨	J-13	
21	磁鉢	胴部	---	室の縄文	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	明赤褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	骨	J-13	川底
22	磁鉢	胴部	---	室の縄文	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・赤褐色 5YR 5/4	にじみ・赤褐色 5YR 4/3	骨	J-13	
23	磁鉢	胴部	---	結結 室の底土のコンパスト	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/2	骨	J-13	
24	磁鉢	胴部	---	結結	ヨコ方向のナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	骨	J-13	
25	磁鉢	胴部	---	結結 ナブ? 紋様が薄い	ナブ? 紋様が薄い	白色磁物 黒化磁片	無	にじみ・赤褐色 5YR 5/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	骨	J-13	
26	磁鉢	ロー	---	無装飾文しとRによる羽状模様のナブ	ナブの中心を貫す	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	骨	J-13	
27	磁鉢	口縁	---	縄文 オセンベ土器	帯状の突起(数方向)	石灰質 黒化磁片	無	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	骨	J-13	
28	磁鉢	胴部	---	縄文 オセンベ土器	帯状の突起(数方向)	石灰質 黒化磁片	無	にじみ・褐色 7.5YR 6/2	黒褐色 7.5YR 6/1	骨	J-13	
29	磁鉢	ロー	---	物干台状の突起 オセンベ土器	帯状の突起(数方向)	石灰質 黒化磁片	無	黒褐色 7.5YR 4/1	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	骨	J-13	

第35表 J-13号住居址 出土遺物一覧表〈石器〉

神図番号	器種	材料	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神図番号	器種	材料	長さ	幅	厚さ	重量	備考
30	石	黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.9	IV区床底	38	ビュスエスキュー	ガラス質安山岩	2.8	2.6	1.0	5.7	田区I層
31	#	#	2.0	1.9	0.5	1.5	IV区床底	39	#	#	2.9	1.3	0.7	2.4	W区I層
32	#	#	1.1	1.1	0.3	0.2	踏踏	40	#	黒曜石	3.4	2.8	2.1	15.6	フク土
33	石	洗鉄石英	4.0	2.9	0.7	6.5	田区II層	41	M・F	洗鉄岩	4.6	4.7	1.3	21.4	田区II層
34	石	硬質頁岩	4.6	2.7	1.0	11.7		42	#	黒曜石	4.6	2.5	1.0	8.4	IV区床底
35	スクレイパー	ガラス質安山岩	3.0	4.2	1.1	11.5	IV区床底	43	#	#	5.0	2.0	0.7	5.3	田区II層
36	打製石斧	#	7.3	4.1	1.5	44.8	フク土	44	石	硬質頁岩	2.4	7.3	2.1	33.9	
37	ビュスエスキュー	#	4.8	2.5	1.6	24.5	E区I層								

M・F=微小刺痕を有する剥片 単位はcm. g



第59図 J-13号住居址出土遺物 (1:2, 1:4)

#### (14) J-14号住居址

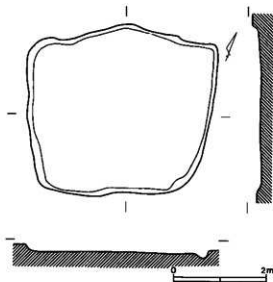
住居址 第60図

本址は、う-4グリッドに位置する。  
他遺構との重複関係は持たない。

その規模は東西3.91m南北3.53mで、  
平面形状は台形を呈し、床面積は11.2㎡  
を測る。長軸方向はN-70°-Eを指す。

壁体は脆弱で、壁残高14cm前後を測る。  
壁溝は検出されなかった。

底面はおおむね平坦であるが脆弱である。  
炉はピットは検出されなかった。



第60図 J-13号住居址実測図

## 遺物

出土量は極めて微量で、土器の細破片が数点出土したのみである。いずれも器面の風化が著しいため図化はしなかったが、繊維を多量に含む単節縄文施文の土器などがある。

## 時期

本址は、時期判定に有効な土器資料に欠けるが、遺跡内の位置、遺構の構築状況など諸属性から縄文時代前期中葉以前に帰属するものと考えておきたい。

## (15) J-15号住居址

### 住居址 第61図

本址は、う-5グリッドに位置する。D-163号土坑に北東を、D-164号土坑に南壁の一部をそれぞれ破壊されている。

規模は東西4.05m南北3.55mで、平面形状は楕円形を呈する。床面積は11.92㎡を測る。長軸方向はN-74°-Wを指す。

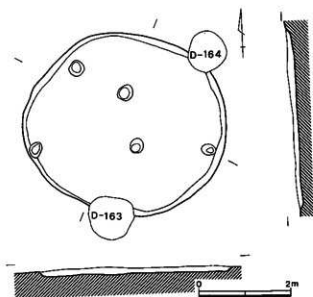
壁は床面からゆるく立ち上がり、壁残高は6cm前後と浅い。壁溝は掘削されていない。

床は平坦な面を成すが、やや脆弱である。

炉は検出されなかった。

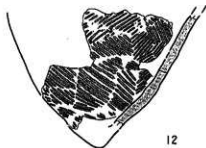
ピットは5個が検出された。極めて不規則な配置状況である。

覆土は黒褐色土単層である。



1層 黒褐色土10YR2/3 砂粒少量とバミスを含む。

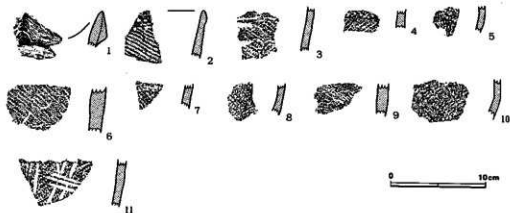
第61図 J-15号住居址実測図



第62図 J-15号住居址出土遺物 (1:4)

遺物 第62～64図

1は4単位波状口縁で、且つ肥厚口縁である。肥厚部上には沈線が横位に施される。2も肥厚口縁であり、肥厚部に円形利突が成される。3～8は単節繩文が施され、3・4のように異なる原体による羽状、菱形構成のものもある。9は撚糸文が施文される。11は単節繩文施文後、やや幅広の沈線で格子目を構成している。12は器面全体に異原体単節繩文による菱形構成が成される土器である。



第63図 J-15号住居址出土遺物(1:4)

第36表 J-15号住居址 出土遺物一覧表 (縄文土器)

器種番号	器種	部位	形状および文様	原産地 (内注)	胎土	調製	色 調		構成	出土位置	備 考
							外 面	内 面			
1	钵体	口縁	4単位波状口縁 肥厚部より隆起部 裏下 肥厚口縁 (断面三角形)	ナデ	白色胎物 風化碧片	有	黒褐色 10YR 3/2	にじみ質焼 10YR 5/3	有	J-15 I区	
2	钵体	口縁	口縁部肥厚 肥厚部に楕円形利突 肥厚部以下縄文R.L	ナデ及び楕円 状の調製	白色胎物 風化碧片	有	灰青焼 10YR 4/2	にじみ質焼 10YR 6/3	有	J-15 II区	
3	钵体	胴部	縄文L.R・R.Lによる菱形構成	ナデ及び楕円 状の調製	白色胎物 風化碧片	有	灰青焼 10YR 4/2	にじみ質焼 10YR 6/3	有	J-15 I区	
4	钵体	胴部	縄文L.R・R.Lによる羽状構成?	ナデ	白色胎物 風化碧片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	黒灰色 10YR 4/1	有	J-15 III区	
5	钵体	胴部	縄文R.L?	ナデ	白色胎物 風化碧片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	黒灰色 5YR 4/1	有	J-15 IV区	
6	钵体	胴部	縄文R.L	不明	白色胎物 風化碧片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ質焼 10YR 6/3	有	J-15 IV区	
7	钵体	胴部	縄文R.L	ナデ及び楕円 状の調製	白色胎物 風化碧片	有	灰青焼 10YR 5/2	黒灰色 10YR 4/1	有	J-15 III区	
8	钵体	胴部	縄文L.R	ナデ及び楕円 状の調製	白色胎物 風化碧片	有	にじみ黄褐色 10YR 6/2	黒灰色 10YR 5/1	有	J-15 IV区	
9	钵体	胴部	撚糸文	楕円状の調製	白色胎物 風化碧片	有	明赤褐色 5YR 5/6	黒灰色 10YR 4/1	有	J-15 III区	
10	钵体	胴部	原形不明	不明	白色胎物 風化碧片	有	黒褐色 10YR 4/2	黒褐色 10YR 4/2	有	J-15 I区	
11	钵体	胴部	縄文R.L施文後、沈線による格子 目構成	ナデ	白色胎物 風化碧片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	赤褐色 10YR 4/2	有	J-15 III区	
12	钵体	胴部	縄文L.R・R.Lによる菱形構成	楕円状の調製 (狭方向)	白色胎物 風化碧片	有	にじみ黄褐色 10YR 6/3	灰青褐色 10YR 6/2	有	J-15 I区	

石器は、石鏃(13・14)、ピエスエスキュー(15)が出土している。

時期

以上の遺物をもって本址を縄文時代前期初頭に位置付ける。



第64図 J-15号住居址出土遺物(1:2)

第37表 J-15号住居址 出土遺物一覧表<石器>

13	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.6	IV区1層	15	ピエスエスキュー	鉄石英	1.8	2.1	0.8	3.3	IV区1層
14	#	硬質黒岩	2.0	1.6	0.6	1.1	II区1層								

単位はcm, g

(16) J-16号住居址

住居址 第65図

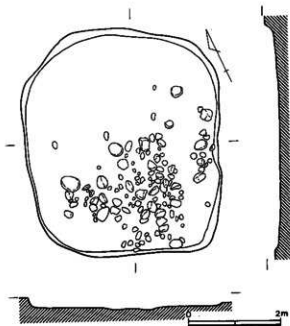
本址はい-3グリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係は持たないが、風倒木痕が絡んでいる。

平面形は、東西3.98m南北4.52mの隅丸長方形を呈する。床面積は16.44㎡を測り、長軸の方位はN-35°-Eを指す。

礫が大量に散乱する底面は、おおむね平坦であるがやや脆弱である。

壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、残存壁高7-22cmを測る。壁溝はもたない。

炉・ピットは検出されなかった。

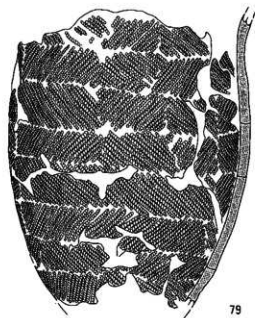


1層 黒色土10YR1.7/1  
パピスを若干含む。

第65図 J-16号住居址実測図

遺物 第66～70図

1・3～13は口縁部破片である。いずれも器面全体に異原体による羽状構成をとる。2は口唇部が屈曲する。表裏に同一原体による縄文が施される。14～34は胴部破片で、異原体による羽状構成が成される。35～59には単節縄文が施される。その多くは羽状構成の一部であろう。60は無節縄文が施される胴部破片である。61～78は器面が荒れており、詳細な点は不明である。79は頸部が屈曲する土器である。器面全体に縄文L・R Lによる羽状構成が成される。80は無文のオセンベ土器である。



第66図 J-16号住居址出土遺物(1:4)

石器は、石鏃(81～86)、石鏃未成品(87～89)、石錐(90)、スクレイパー(91～94)、微小剝離痕のある剥片(95)、ピエスキュー(96～99)、剥片素材の石核(100～102)、石皿(103)が出土している。

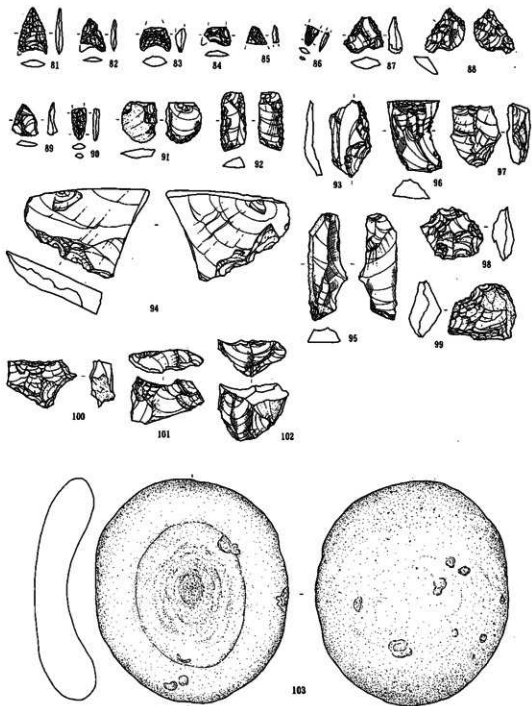
時期 以上の遺物をもって本址を縄文時代前期中葉に位置付ける。

第38表 J-16号住居址 出土遺物一覧表<石器>

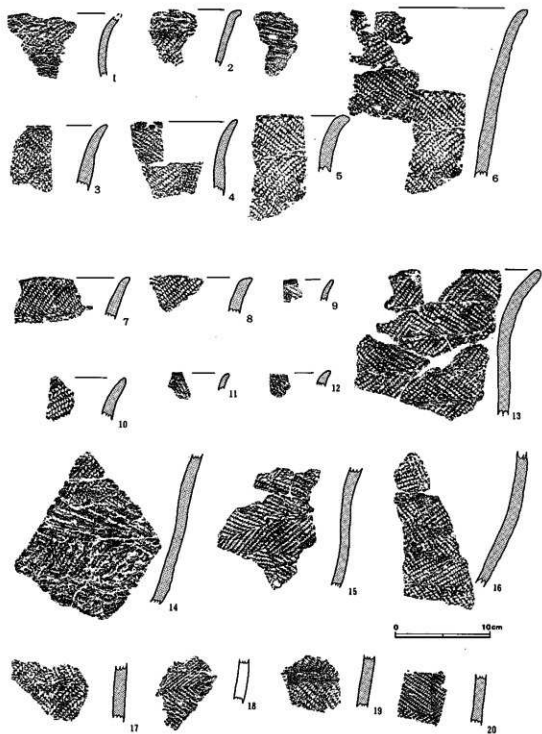
神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
81	石鏃	チャート	2.4	1.5	0.3	1.0	I区	93	スクレイパー	黒曜石	4.1	2.2	0.5	4.4	I区
82	"	黒曜石	1.7	1.3	0.3	0.3	II区	94	"	ガラス質安山岩	4.6	6.5	1.2	37.4	I区
83	"	"	1.2	1.6	0.5	0.9	II区	95	M・F	黒曜石	5.6	2.0	0.7	8.9	III区
84	"	"	1.0	1.4	0.3	0.3	I区	96	ピエスキュー	"	3.8	2.9	0.9	9.7	III区
85	"	"	1.0	1.1	0.3	0.2	II区	97	"	ガラス質安山岩	3.2	2.7	1.2	11.1	II区
86	"	"	1.0	0.7	0.2	0.1	I区	98	"	チャート	2.7	3.3	1.1	7.4	III区
87	石鏃未成品	"	1.9	2.1	0.7	1.9	III区	99	"	"	3.0	3.5	1.5	14.4	II区
88	"	"	2.3	2.1	0.5	1.8	I区	100	石核	"	2.5	3.7	1.2	10.4	I区
89	"	"	1.7	1.4	0.5	0.7	II区	101	"	硬質頁岩	2.5	3.8	1.1	9.1	I区
90	石鏃	ガラス質安山岩	1.7	0.8	0.3	0.5	No 2	102	"	黒曜石	3.1	3.7	1.9	14.7	IV区
91	スクレイパー	黒曜石	2.1	1.8	0.4	2.1	III区	103	石皿	安山岩	31.2	35.6	8.4	12100.0	
92	"	"	3.1	1.2	0.5	2.5	II区								

M・F=微小剝離痕を有する剥片

単位はcm, g



第67图 J-16号住居址出土遗物 (1:2, 1:4)

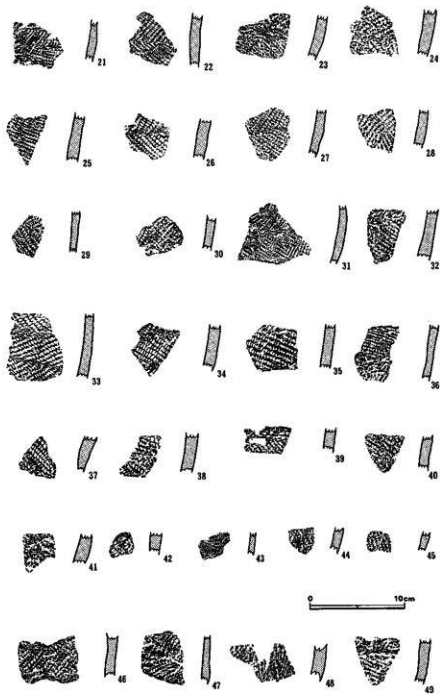


第68图 J-16号住居址出土遗物(1:4)



第39表 J-16号住居址 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	器種	形状	出 産	形状および文様	調 型 (内面)	胎 土	色 調		焼成	出 土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
1	弥生	口縁	-	平縁 縄文L	ナデ及び指紋 状の調整	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	香	J-16 I区	
2	弥生	口縁	-	平縁口縁? 外縁 縄文L 内縁 縄文L	ナデ及び指紋 状の調整	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	香	J-16 II区	
3	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R・Rしによる羽状縁成	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	香	J-16 II区	
4	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R・Rしによる羽状縁成	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	黄褐色 10YR 3/2	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-16 III区	
5	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	黄褐色 7.5YR 7/4	褐色 10YR 4/3	香	J-16	
6	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	香	J-16 II区	
7	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R・Rしによる羽状縁成	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	香	J-16 IV区	
8	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R	ナデ及び指紋 状の調整	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	香	J-16	
9	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ及び指紋 状の調整	白色胎物 風化碎片	有	褐色 10YR 4/1	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-16 II区	
10	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R	ナデ及び指紋 状の調整	白色胎物 風化碎片	有	黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 7/4	香	J-16 II区	
11	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-16 II区	
12	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R?	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-16 III区	
13	弥生	口縁	-	平縁 縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	褐色 10YR 4/1	褐色 10YR 4/1	香	J-16	
14	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	不明	白色胎物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	香	J-16 II区	
15	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-16 II区	
16	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	褐色 7.5YR 6/6	香	J-16 II区	
17	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	にじみ・黄褐色 10YR 3/1	香	J-16 II区	
18	弥生	胴縁	-	縄文L Rの方向 縄文L Rの方向	ナデ	白色胎物 器身	無	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	灰褐色 10YR 5/2	香	J-16 II区	徳山近辺見6丸 全い、 東海系土器
19	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	褐色 10YR 4/1	香	J-16 IV区	
20	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 5YR 5/3	褐色 5YR 5/1	香	J-16	
21	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ及び指紋 状の調整	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	灰黄褐色 10YR 6/2	香	J-16 II区	
22	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	香	J-16 I区	
23	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	ナデ	白色胎物 風化碎片	有	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-16 II区	
24	弥生	胴縁	-	縄文L R・Rしによる 縄文L R・Rしによる	不明	白色胎物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-16	
25	弥生	胴縁	-	縄文L Rの方向 縄文L Rの方向	不明	白色胎物 風化碎片	有	黄褐色 10YR 3/1	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	香	J-16	



第69图 J-16号住居址出土遗物(1:4)

標記番号	群 種	標 記	注 意	彫形および文様	調 色 (内面)	土 質	色 調		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
26	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 6/3	褐色 7.5YR 6/6	特	J-16 田区
27	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	褐色 5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 5/2	特	J-16 田区
28	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成	不明	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 7/4	灰褐色 7.5YR 4/1	特	J-16 田区
29	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 7/4	灰褐色 7.5YR 5/1	特	J-16 田区
30	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 6/4	に200-黄褐色 10YR 7/4	特	J-16 田区
31	図録	調色	--	純文しR・Rしの前扉部7種による羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	褐褐色 7.5YR 5/1	特	J-16 田区
32	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成?	ナテ及び焼成 痕の調整	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	に200-褐色 7.5YR 5/3	特	J-16 田区
33	図録	調色	--	純文しRの方向性による羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	褐褐色 7.5YR 5/1	特	J-16 IV区
34	図録	調色	--	純文しR・Rしの方角性による羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	に200-黄褐色 7.5YR 6/3	特	J-16 田区
35	図録	調色	--	純文しR	ナテ?	白色磁物 黒化磁片	有	浅黄褐色 7.5YR 8/4	浅黄褐色 7.5YR 8/4	特	J-16 田区
36	図録	調色	--	純文しR	ナテ及び焼成 痕の調整	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 6/3	に200-黄褐色 10YR 7/4	特	J-16 田区
37	図録	調色	--	純文しR	ナテ及び焼成 痕の調整	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 6/4	に200-黄褐色 10YR 5/3	特	J-16 田区
38	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成	ナテ及び焼成 痕の調整	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 7/4	に200-褐色 7.5YR 6/3	特	J-16 IV区
39	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成?	ナテ及び焼成 痕の調整	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	褐褐色 7.5YR 6/2	特	J-16 田区
40	図録	調色	--	純文しR	不明	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	灰褐色 7.5YR 5/2	特	J-16 田区
41	図録	調色	--	純文しR?	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	褐褐色 7.5YR 5/1	特	J-16 田区
42	図録	調色	--	純文しR	不明	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 6/4	に200-黄褐色 7.5YR 6/2	特	J-16
43	図録	調色	--	純文しR	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	特	J-16 田区
44	図録	調色	--	純文しR	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 5/3	褐褐色 10YR 4/1	特	J-16 田区
45	図録	調色	--	純文しR	不明	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 7/4	に200-黄褐色 10YR 7/4	特	J-16 IV区
46	図録	調色	--	純文しRに純文しRを付加した付加色	焼成痕の調整 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	有	に200-褐色 7.5YR 7/4	灰褐色 7.5YR 5/2	特	J-16 IV区
47	図録	調色	--	純文しR・Rしによる羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 6/3	灰黄褐色 7.5YR 5/2	特	J-16 IV区
48	図録	調色	--	純文しR?	焼成痕の調整 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 6/4	に200-黄褐色 10YR 6/4	特	J-16
49	図録	調色	--	純文しR・しRによる羽状焼成	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	褐色 7.5YR 7/6	灰褐色 7.5YR 5/2	特	J-16 田区
50	図録	調色	--	純文しR	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	に200-黄褐色 10YR 7/3	褐褐色 10YR 4/1	特	J-16 IV区
51	図録	調色	--	純文しR	ナテ	白色磁物 黒化磁片	有	灰黄褐色 10YR 5/2	に200-黄褐色 10YR 6/3	特	J-16 田区
52	図録	調色	--	純文しR	不明	白色磁物 黒化磁片	有	灰黄褐色 10YR 6/2	褐褐色 10YR 4/1	特	J-16 田区



第70图 J-16号住居址出土遺物(1:4)

種別 番号	品名	部位	法名	標記および文様	開巻 (内面)	染土	織法	色調		織成	土 取 量	備考
								外 面	内 面			
53	浴衣	袷	-	縦文L R	類似状の図柄 (廻方向)	白色系染 風化羽片	疋	灰青褐色 10YR 6/2	緑褐色 10YR 4/1	替	J-16 I区	
54	浴衣	袷	-	縦文L R	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	灰青褐色 10YR 5/2	灰青褐色 10YR 6/2	替	J-16 I区	
55	浴衣	袷	-	縦文L R	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 7/4	灰青褐色 10YR 5/2	替	J-16 II区	
56	浴衣	袷	-	縦文L R	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 7/4	灰青褐色 10YR 5/2	替	J-16 IV区	
57	浴衣	袷	-	縦文L R?	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	灰青褐色 10YR 4/2	にじみ黄褐色 10YR 5/3	替	J-16 I区	
58	浴衣	袷	-	縦文L R	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	にじみ藍色 7.5YR 7/4	にじみ褐色 7.5YR 5/3	替	J-16 I区	
59	浴衣	袷	-	縦文L L	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	にじみ藍色 7.5YR 7/4	灰褐色 7.5YR 4/2	替	J-16	
60	浴衣	袷	-	縦文R	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	灰青褐色 10YR 4/2	にじみ褐色 7.5YR 6/3	替	J-16 I区	
61	浴衣	袷	-	縦文R?	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 5/2	替	J-16	
62	浴衣	袷	-	横本文L	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	にじみ褐色 7.5YR 6/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	替	J-16 II区	
63	浴衣	袷	-	横本文L	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	にじみ褐色 7.5YR 5/4	緑褐色 10YR 4/1	替	J-16 IV区	
64	浴衣	袷	-	横文	類似状の図柄 (廻方向)	白色系染 風化羽片	無	にじみ褐色 7.5YR 6/4	緑褐色 7.5YR 5/3	替	J-16 I区	
65	浴衣	袷	-	横文(オヤンベ土器)	ナデ	白色系染 風化羽片	無	にじみ黄褐色 10YR 6/3	黄褐色 10YR 3/1	替	J-16 IV区	
66	浴衣	袷	-	縦文L R?	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	灰青褐色 10YR 5/2	にじみ黄褐色 10YR 7/4	替	J-16 II区	
67	浴衣	袷	-	半田縦文	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 6/4	灰青褐色 10YR 6/2	替	J-16 II区	
68	浴衣	袷	-	縦文L R?	不明	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 6/3	にじみ黄褐色 10YR 6/3	替	J-16 III区	
69	浴衣	袷	-	縦文L R?	不明	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/3	替	J-16 II区	
70	浴衣	袷- 裏	-	不明	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 6/4	灰青褐色 10YR 4/2	替	J-16 IV区	
71	浴衣	袷	-	縦文L R・Rしによる類似構成?	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	J-16 No.2	
72	浴衣	袷	-	縦文L Rし?	不明	白色系染 風化羽片	疋	にじみ褐色 7.5YR 6/4	緑褐色 7.5YR 4/1	替	J-16 II区	
73	浴衣	袷	-	不明	不明	白色系染 風化羽片	疋	褐色 7.5YR 6/6	緑褐色 7.5YR 4/1	替	J-16	
74	浴衣	袷	-	不明	ナデ	白色系染 風化羽片	無	にじみ褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 5/3	替	J-16 IV区	
75	浴衣	袷	-	不明(半田縦文?)	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	J-16 IV区	
76	浴衣	袷	-	不明	不明	白色系染 羽布	疋	にじみ黄褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	J-16	
77	浴衣	袷- 裏	-	縦文L R?	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	緑褐色 10YR 5/3	緑褐色 10YR 5/3	替	J-16 II区	
78	浴衣	袷- 裏	-	不明(半田縦文)	ナデ及び類似 状の図柄	白色系染 風化羽片	疋	にじみ黄褐色 10YR 7/4	緑褐色 10YR 5/3	替	J-16 I区	
79	浴衣	袷	-	縦文L R・Rしによる類似構成	ナデ	白色系染 風化羽片	疋	にじみ褐色 7.5YR 7/4	褐色 7.5YR 6/6	替	J-16 2区	
80	浴衣	袷	-	横文 オヤンベ土器	ナデ 凸凸を 残す	石灰 亞 風化羽片	無	にじみ黄褐色 10YR 6/3	にじみ黄褐色 10YR 7/3	替	J-16 IV区	

## (17) J-17号住居址

### 住居址 第71図

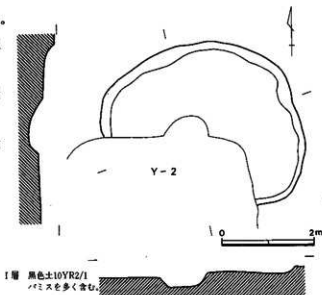
本址は、い-3グリッドに位置する。  
Y-2号住居址・D-36号土坑と重複  
関係を持ち、これに破壊される。

その規模は東西4.25mで、平面形状  
は楕円形を呈すると考えられる。

壁体は地山の砂層を利用するため脆  
弱である。壁残高は12cm前後を測る。  
壁溝は検出されなかった。

底面はおおむね平坦な面を成すが、  
脆弱である。

炉・ピットは検出されなかった。



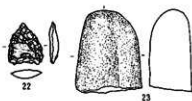
第71図 J-17号住居址実測図

### 遺物 第72・73図

1は口縁部破片である。先端がやや細く、尖り気  
味に外反する口縁下に横位隆帯が1条貼付される。  
隆帯上には刻みが成される。器面全体に縄文LR・  
RLによる菱形構成が成される。2・3も同一個体  
と思われる。

4~10は胴部破片であり、単節縄文が施される。  
11~19は同一個体である。11~13には単節縄文が浅  
く施され、以下は無文となる。21は尖底土器の底部  
である。器面全体に単節縄文が施される。

石器は、石鏃(22)と磨石(23)が出土している。



第72図 J-17号住居址出土遺物(1:2)

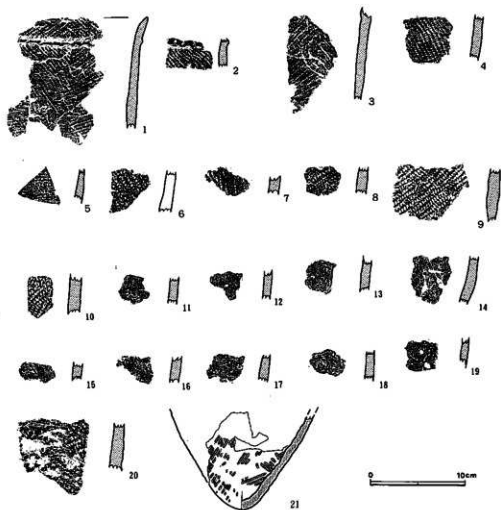
### 時期

以上の遺物をもって本址を縄文時代前期初頭に位置付ける。

第40表 J-17号住居址 出土遺物一覧表<石器>

神道番号	器	産材	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神道番号	器	産材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
22	石	黒燐石	2.2	1.9	0.4	1.6	II区	23	磨石	安山岩	8.7	6.8	4.7	449.8	土坑内

単位はcm、g



第73図 J-17号住居址出土遺物(1:4)

第41表 J-17号住居址 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘番号	器種	部位	状況	形状および文様	調査 (内図)	土質	色		焼成	出土 位置	備考
							外面	内面			
1	埴輪	口縁	-	縦状口縁。口縁直下に縄文L・R・R Lによる羽状連続文様。横位指掌を貼付。腹壁上は斜み。胴部縄文L・R・R Lの縦方向条状構成	ナデ	白色灰物 黒化砂片	青 10YR 3/2	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	香	J-17 II区	
2	埴輪	胴部	-	Iと同一器体	ナデ	白色灰物 黒化砂片	青 10YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	香	J-17 I区	
3	埴輪	胴部	-	Iと同一器体。縄文L・R・R Lによる縦方向条状構成	ナデ	白色灰物 黒化砂片	青 10YR 4/2	灰黄褐色 10YR 5/2	香	J-17 II区	
4	埴輪	胴部	-	縄文L	不明	白色灰物 黒化砂片	青 10YR 4/4	にじみ・黄褐色 10YR 7/3	香	J-17 II区	
5	埴輪	胴部	-	縄文L	ナデ及び黒化砂の混在	白色灰物 黒化砂片	青 10YR 4/2	灰黄褐色 10YR 4/2	香	J-17 II区	

拝見番号	形 状	部 位	出 産	図形および文様	製 法 (内面)	土 質	編 織	色 調		焼 成	土 質	備 考
								外 面	内 面			
6	線跡	線跡	-	縄文R.L.	ナデ	白色底物 風化岩片	無	にじみ-黄褐色 10YR 6/3	褐色 7.5YR 4/3	骨	J-17 I区	
7	線跡	線跡	-	縄文R.L.	ナデ及び線跡 状の調跡	白色底物 風化岩片	有	褐色 7.5YR 7/6	黄褐色 7.5YR 6/1	骨	J-17 I区	
8	線跡	線跡	-	縄文L.R.	ナデ及び線跡 状の調跡	白色底物 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR 4/1	褐色 7.5YR 6/6	骨	J-17 II区	
9	線跡	線跡	-	縄文L.R.	ナデ及び線跡 状の調跡	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
10	線跡	線跡	-	縄文L.R.	ナデ及び線跡 状の調跡	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 5/2	骨	J-17 II区	
11	線跡	線跡	-	縄文R.L. (11-13同-線跡)	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 I区	
12	線跡	線跡	-	縄文R.L.	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
13	線跡	線跡	-	縄文R.L.	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
14	線跡	線跡	-	縄文	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
15	線跡	線跡	-	縄文	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
16	線跡	線跡	-	縄文	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
17	線跡	線跡	-	縄文	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
18	線跡	線跡	-	縄文	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
19	線跡	線跡	-	縄文	ナデ	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 4/2	骨	J-17 II区	
20	線跡	線跡	-	縄文L.R.・R.L.?による線状構成 ?	ナデ及び線跡 状の調跡	白色底物 風化岩片	有	にじみ-褐色 7.5YR 7/4	黄褐色 7.5YR 3/1	骨	J-17 II区	
21	線跡	線跡	-	縄文L.R.・R.L.?による線状構成 ?	不明	白色底物 風化岩片	有	黄褐色 7.5YR 5/6	黄褐色 7.5YR 5/2	骨	J-17 II区	

## (18) J-18号住居址

住居址 第74図

本址はう-5グリッドにおいて検出された。K-5号古墳の周溝と重複関係を持ち、破壊される。

その規模は推定で南北4.65mを測り、長方形か方形を呈すると考えられる。

底面はおおむね平坦であるが脆弱である。

壁はゆるく立ち、残存高さ10cm前後を測る。壁溝はもたない。炉・ピットは検出されなかった。

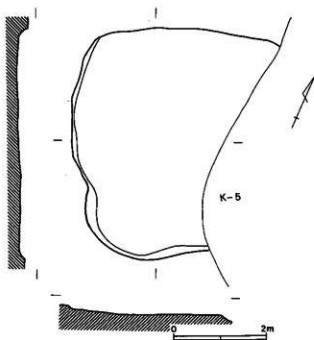


## 遺物

出土量は極めて微量で、土器の細破片が数点出土したのみである。いずれも器面の風化が著しいため図化はしなかったが、繊維を多量に含む単節縄文施文の土器などがある。

## 時期

本址は、時期判定に有効な土器資料に欠けるが、遺跡内の位置、他遺構との重複関係、遺構の構築状況など諸属性から縄文時代前期中葉以前に帰属するものと考えておきたい。



第74図 J-18号住居址実測図

## (19) J-19号住居址

### 住居址 第75図

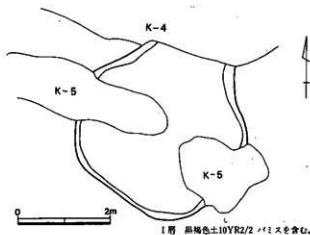
本址はう-4グリッドにおいて検出された。K-2・5号古墳の周溝と重複関係を持ち、破壊される。

その規模は推定で東西3.34m南北3.62mで、やや崩れた楕円形を呈すると考えられる。

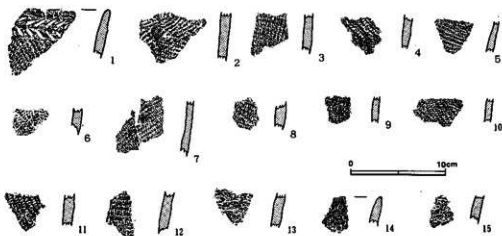
底面はおおむね平坦であるが脆弱である。

壁はゆるく立ち、残存高10cm前後を測る。壁溝はもたない。

炉・ピットは検出されなかった。



第75図 J-19号住居址実測図



第76図 J-19号住居址出土遺物(1:4)

第42表 J-19号住居址 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘番号	器名	部位	出処	形状および文様	製法 (内面)	胎土	色調		焼成	出土位置	備考
							外面	内面			
1	漆鉢	口縁	--	口唇直下に2条の縦線をも斜行條状の刻線に添み 帯帯以下縄文R.L	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	帯	J-19
2	漆鉢	胴部	--	縄文R.Lの方向面による縦方向の刻線構成	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色色 7.5YR 5/1	帯	J-19
3	漆鉢	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる刻線構成	ナデ	白色灰物 風化灰片	有	灰褐色 7.5YR 5/2	灰褐色 7.5YR 5/2	帯	J-19
4	漆鉢	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる刻線構成	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	にじみ褐色 5YR 5/4	褐色色 7.5YR 4/1	帯	J-19
5	漆鉢	胴部	--	縄文R.L	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/1	にじみ黄褐色 10YR 7/4	帯	J-19
6	漆鉢	胴部	--	縄文R.L	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	褐色色 7.5YR 4/1	帯	J-19
7	漆鉢	胴部	--	縄文R.L	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	褐色色 7.5YR 4/1	にじみ褐色 7.5YR 5/3	帯	J-19
8	漆鉢	胴部	--	縄文R.L	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	黄褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	帯	J-19
9	漆鉢	胴部	--	縄文R.L	ナデ	白色灰物 風化灰片	有	赤褐色 7.5YR 3/1	にじみ褐色 7.5YR 6/4	帯	J-19
10	漆鉢	胴部	--	縄文R.L	不明	白色灰物 風化灰片	有	褐色色 7.5YR 4/1	にじみ褐色 7.5YR 5/4	帯	J-19
11	漆鉢	胴部	--	縄文L.R	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	にじみ褐色 10YR 7/3	褐色色 10YR 4/1	帯	J-19
12	漆鉢	胴部	--	縄文L.R	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	褐色色 7.5YR 6/5	にじみ黄褐色 10YR 7/3	帯	J-19
13	漆鉢	胴部	--	縄文?	不明	白色灰物 風化灰片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	褐色色 7.5YR 4/1	帯	J-19
14	漆鉢	胴部	--	縄文	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/3	にじみ褐色 7.5YR 5/3	帯	J-19
15	漆鉢	胴部	--	縄文	ナデ及び撚紙状の刻線	白色灰物 風化灰片	有	褐色色 7.5YR 6/6	にじみ褐色 7.5YR 5/3	帯	J-19

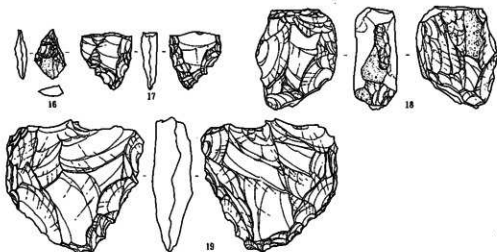
遺物 第76・77図

1は口縁部破片である。口唇部直下に低い隆帯を貼付し、隆帯上には矢羽状の刻みをいれている。隆帯より上は無文部となり、隆帯より下には、単節縄文が施文される。2は縄文RLの方向差による羽状縄文と考えられる。3・4は異原体による羽状構成をとるもの。5～12は単節縄文の施される胴部片である。13～15は無文土器と思われる。

石器は、石鏃未成品(16)、スクレイパー(17)、ピエスエスキュー(18)と両面加工石器(19)が出土している。

時期

以上の遺物をもって本址を縄文時代前期初頭に位置付ける。



第77図 J-19号住居址出土遺物(1:2)

第43表 J-19号住居址 出土遺物一覽表〈石器〉

神器番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神器番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	石鏃未成品	黒曜石	2.6	1.6	0.6	1.8		18	ピエスエスキュー	ガラス質安山岩	5.3	4.2	2.2	65.6	
17	スクレイパー	ガラス質安山岩	3.0	2.7	0.8	6.0		19	両面加工石器	*	7.0	7.3	2.0	99.9	

単位はcm, g

(20) J-20号住居址 (D-38号土坑)

遺構 第78図

本址はあ-4グリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係は持たないが、南西隅を自然流路に破壊される。

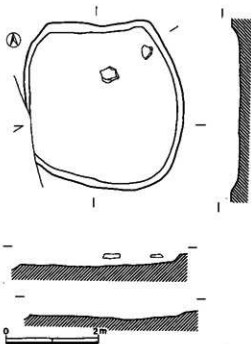
その規模は推定で東西3.35m南北3.44mで、やや崩れた隅丸方形を呈する。床面積は8.85㎡を測り、長軸方向は真北を指す。

底面はおおむね平坦であるが砂層上にあるため脆弱である。

壁はゆるく立ち、残存高15cm前後を測る。

壁溝はもたない。

炉・ピットは検出されなかった。



1層 黒色土10YR2/1 砂粒を若干含む。

第78図 J-20号住居址 (D-38号土坑) 実測図

遺物 第79・80図

縄文土器と石器が出土した。

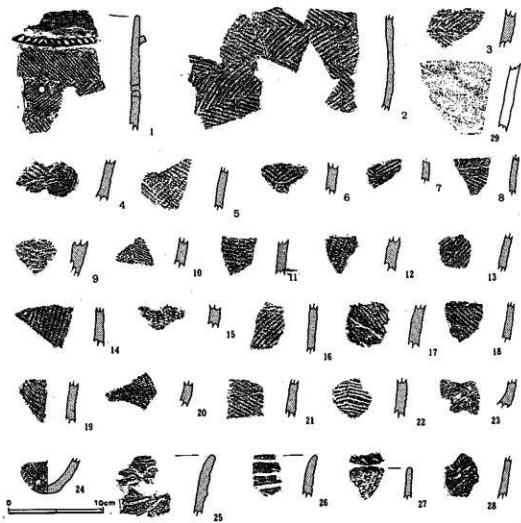
縄文土器はすべて破片である。1は口縁部片で、口唇部直下に断面が四角い明瞭な隆帯を貼付し、隆帯以下には、異原体による羽状

構成をとる。5~7・9・10は菱形構成と考えられる。8は原体の末端処理した縄を用いた羽状構成である。11~20は単節縄文を施すものである。21は結節縄文を施すもの。22・23は燃糸文を施すもの。25は単節縄文を施文後、植物の茎状の工具を用いて、連続して円弧状のモチーフを作出する土器。26は棒状工具によって横位の沈線を施すもの。27は口唇部に刻みを持つ土器。表面には不明瞭な縄?のような圧痕が見られる。28は無文のオセンベ土器である。

石器は、石鏃 (30~38)、石鏃未成品 (36・39)、石錐 (40)、石匙 (41)、スクレイパー (42)、ピエスエスキュー (43~45) が出土している。

時期

以上の出土土器をもって、本址を縄文時代前期初頭に位置付ける。

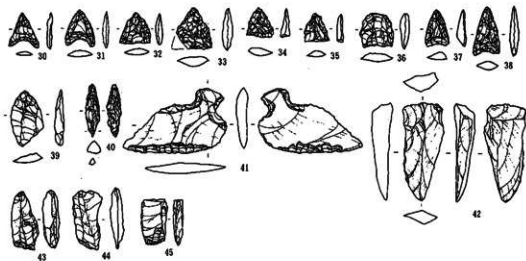


第79図 J-20号住居址出土遺物 (1:4)

第44表 J-20号住居址 (D-38号土坑) 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘番号	器種	部位	形状	彫刻および文様	陶質 (内装)	加工	色		焼成	出土位置	備考
							外装	内装			
1	漆器	口縁	-	口縁部無文下に刻みをもつ帯状 縄文L・R・直しによる彫刻構成	ヨコナテ	白色胎物 風化破片	青 黒褐色 10YR 2/2	黒褐色 10YR 2/2	青	D-38 I区IV区	輪郭孔あり
2	漆器	胴部	-	縄文L・R・直しの縦方向彫刻構成	ヨコナテ	白色胎物 風化破片	青 にじみ・褐色 7.5YR 6/2	灰黄褐色 10YR 5/2	青	D-38 IV区	
3	漆器	胴部	-	縄文L・R・直しによる彫刻構成	ナギ及び腐食 状の胎物	白色胎物 風化破片	青 黒褐色 10YR 3/2	灰黄褐色 7.5YR 6/4	青	D-38 II区	
4	漆器	胴部	-	縄文L・R・直しによる彫刻構成	ナギ及び腐食 状の胎物	白色胎物 風化破片	青 にじみ・褐色 7.5YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	青	D-38 IV区	
5	漆器	胴部	-	縄文L・R・直しによる彫刻構成	ナギ及び腐食 状の胎物	白色胎物 風化破片	青 黒褐色 10YR 3/2	暗褐色 7.5YR 3/4	青	D-38 IV区	
6	漆器	胴部	-	縄文L・R・直しによる彫刻構成	不明	白色胎物 風化破片	青 にじみ・褐色 5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	青	D-38 II区	

種別 番号	種別	部位	性状	原形および文様	調 色 (内面)	新 土	織 紋	色 調		完成	出土 位置	備 考
								外 面	内 面			
7	漆器	胴部	-	縄文しし・Rしによる羽状模様	ナテ	白色底物 黒化部分	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	褐色 10YR 2/1	骨	D-38 I区	
8	漆器	胴部	-	縄文しし・Rしによる羽状模様	ナテ及び胴部 状の調製	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 3/3	暗褐色 7.5YR 3/4	骨	D-38 II区	
9	漆器	胴部	-	縄文しし・Rしによる羽状模様	不明	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	暗褐色 7.5YR 3/3	骨	D-38 IV区	
10	漆器	胴部	-	縄文しし・Rしによる羽状模様	ナテ及び胴部 状の調製	白色底物 黒化部分	有	黄褐色 10YR 4/2	褐色 10YR 2/1	骨	D-38 IV区	
11	漆器	胴部	-	縄文しし	不明	白色底物 黒化部分	有	暗褐色 10YR 2/2	褐色 7.5YR 4/4	骨	D-38 IV区	
12	漆器	胴部	-	縄文しし	樽底状の調製 (胴内)	白色底物 黒化部分	有	にじみ赤褐色 2.5YR 5/4	赤褐色 10YR 3/1	骨	D-38 I区	
13	漆器	胴部	-	縄文しし	不明	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/3	暗褐色 10YR 3/3	骨	D-38 II区	
14	漆器	胴部	-	縄文しし	ナテ	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 4/3	褐色 7.5YR 4/3	骨	D-38 I区	
15	漆器	胴部	-	縄文しし	ナテ及び胴部 状の調製	白色底物 黒化部分	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/3	骨	D-38 I区	
16	漆器	胴部	-	縄文しし	不明	白色底物 黒化部分	有	暗赤褐色 5YR 3/2	にじみ黄褐色 10YR 5/4	骨	D-38 III区	
17	漆器	胴部	-	縄文しし	不明	白色底物 黒化部分	有	にじみ暗褐色 10YR 4/4	黄褐色 7.5YR 3/1	骨	D-38 IV区	
18	漆器	胴部	-	縄文しし	樽底状の調製 (胴内)	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 5/4	骨	D-38 I区	
19	漆器	胴部	-	縄文しし	ナテ及び胴部 状の調製	白色底物 黒化部分	有	暗褐色 10YR 3/2	にじみ黄褐色 10YR 5/2	骨	D-38 IV区	
20	漆器	胴部	-	縄文しし	ナテ及び胴部 状の調製	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	黄褐色 10YR 2/3	骨	D-38 I区	
21	漆器	胴部	-	縄文しし	ナテ及び胴部 状の調製	白色底物 黒化部分	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ赤褐色 5YR 4/3	骨	D-38 II区	
22	漆器	胴部	-	縄文しし	不明	白色底物 黒化部分	有	にじみ暗褐色 10YR 4/4	明褐色 10YR 3/3	骨	D-38 IV区	
23	漆器	胴部	-	縄文しし?	ナテ	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 6/6	にじみ黄褐色 10YR 6/4	骨	D-38 III区	
24	漆器	胴部	-	不明	ナテ	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 4/4	赤褐色 5YR 4/6	骨	D-38 7ヶ土	
25	漆器	口縁	-	縄文しし上に花線	フコナテ	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 6/3	骨	D-38	
26	漆器	口縁	-	手動竹管状工具による浅線3条	ナテ及び胴部 状の調製	白色底物 黒化部分	有	黄褐色 10YR 3/2	暗褐色 10YR 3/2	骨	D-38 I区	
27	漆器	口縁	-	口縁部に黒い 漆線が凸入り	ナテ	白色底物 黒化部分	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	骨	D-38 II区	
28	漆器	胴部	-	縄文	ナテ	白色底物 黒化部分	有	暗赤褐色 2.5Y 5/6	暗赤褐色 5YR 5/6	骨	D-38 I区	
29	漆器	胴部	-	縄文 オモンベ土器	ナテ 凹凸土 残片	石灰 質物 黒化部分	無	にじみ黄褐色 10YR 6/3	黄褐色 10YR 4/2	骨	D-38 II区	



第80図 J-20号住居址出土遺物(1:2)

第45表 J-20号住居址 出土遺物一覽表<石器>

押部番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押部番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
30	石 鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.2	0.4	I区	38	石 鏃	硬質頁岩	2.5	1.4	0.5	1.3	II区
31	"	"	1.9	1.6	0.3	0.8	II区	39	石 鏃	黒曜石	2.9	1.7	0.5	2.0	II区
32	"	"	1.6	1.6	0.3	0.8	I区	40	石 鏃	黒曜石	2.8	0.7	0.6	1.3	II区
33	"	"	2.2	1.9	0.5	1.6	III区	41	石 鏃	——	3.4	5.4	0.5	——	IV区
34	"	"	1.6	1.4	0.5	0.6		42	スクレーパー	ガラス質 安山岩	5.1	2.2	1.0	9.1	IV区
35	"	"	1.5	1.3	0.3	0.5	III区	43	ピエース	チャート	3.1	1.4	0.8	3.5	III区
36	石 鏃	黒曜石	1.8	1.8	0.5	1.6	II区	44	"	"	3.1	1.6	0.6	2.7	I区
37	石 鏃	硬質頁岩	1.9	1.2	0.4	0.8	III区	45	"	"	2.4	1.4	0.5	2.2	IV区

単位はcm, g

## (21) J-21号住居址 (D-112号土坑)

### 住居址 第81図

本址は1-4グリッドにおいて検出された。K-3号古墳の周溝と重複関係を持ち、東側を破壊される。

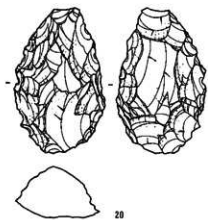
その規模は南北3.50mで、東西はそれよりもやや長く、全体の形は楕円形を呈すると考えるのが妥当だろう。

底面はやや起伏が多く、脆弱である。

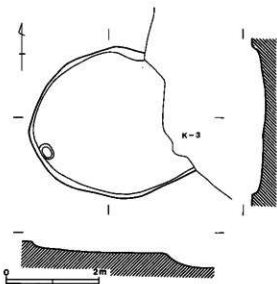
壁はゆるく立ち、残存高さ15cm前後を測る。壁溝はもたない。

炉は検出されなかった。

ピットは西壁下から一箇検出された。

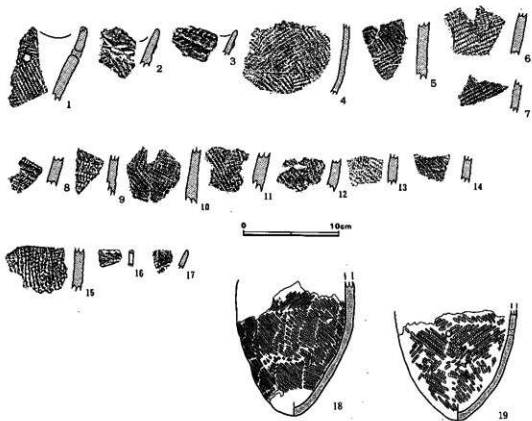


第82図 J-21号住居址出土遺物 (1:4)



I層 黒褐色土10YR2/2 パミス含む。

第81図 J-21号住居址 (D-112号土坑) 実測図



第83図 J-21号住居址出土遺物 (1:4)



第46表 J-21号住居址 出土遺物一覧表〈石器〉

押印番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
29	小砂石群	ガラス製 安山岩	7.6	5.4	2.6	91.7	

単位はcm, g

第47表 J-21号住居址 (D-112号土坑) 出土遺物一覧表〈縄文土器〉

押印番号	器種	部位	位置	形状および文様	調査 (内訳)	胎土	色		焼成	出土 位置	備考	
							外 蓋	内 蓋				
1	弥生	口縁	-	4単位並列口縁 口縁部に2条の 刻みをもつ隆帯 以下縄文R・L Lの羽状縁成	帯底状の調査 (縦方向)	白色胎物 風化岩片	有	明赤褐色 30YR 7/4	明赤褐色 10YR 7/4	有	D-112 1	焼跡あり
2	弥生	口縁	-	4単位並列口縁 口縁部に1条の 刻みをもつ隆帯 以下縄文R・L Lの羽状縁成	ナデ及び帯底 状の調査	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 10YR 7/3	にじみ赤褐色 10YR 7/4	有	D-112	
3	弥生	口縁	-	4単位並列口縁 口縁部に刻み 口縁部にも1条の刻みをもつ隆帯	帯底状の調査 (縦方向)	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 7.5YR 5/4	にじみ赤褐色 7.5YR 6/4	有	D-112 S区	
4	弥生	胴部	-	縄文LR・R・Lによる変形縁成	ナデ及び帯底 状の調査	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 2.5Y 4/4	黒褐色 5YR 2/1	有	D-112 1	
5	弥生	胴部	-	縄文LR・R・Lによる変形縁成	不明	白色胎物 風化岩片	有	明赤褐色 5YR 5/6	黒褐色 5YR 4/1	有	D-112 S区	
6	弥生	胴部	-	縄文LR・R・Lによる羽状縁成	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 7.5YR 5/3	にじみ赤褐色 7.5YR 7/3	有	D-112 S区	
7	弥生	胴部	-	縄文LR・R・Lによる羽状縁成	帯底状の調査 (縦方向)	白色胎物 風化岩片	有	黒褐色 10YR 3/1	新褐色 7.5YR 4/2	有	D-112 S区	
8	弥生	胴部	-	縄文LR	不明	白色胎物 風化岩片	有	褐色 5YR 6/6	黒褐色 10YR 5/2	有	D-112 S区	
9	弥生	胴部	-	縄文LR	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 7.5YR 6/4	にじみ赤褐色 7.5YR 7/4	有	D-112	
10	弥生	胴部	-	縄文R・L	ナデ及び帯底 状の調査	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/3	灰赤褐色 10YR 5/2	有	D-112 S区	
11	弥生	胴部	-	縄文R・L	不明	白色胎物 風化岩片	有	褐色 5YR 6/6	黒褐色 7.5YR 4/1	有	D-112 S区	
12	弥生	胴部	-	縄文R・L	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 4/2	有	D-112	
13	弥生	胴部	-	縄文R・L	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 7.5YR 6/4	にじみ赤褐色 7.5YR 6/3	有	D-112 S区	
14	弥生	胴部	-	縄文R・L	帯底状の調査 (縦方向)	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 7.5YR 7/4	褐色 7.5YR 7/6	有	D-112 S区	
15	弥生	胴部	-	縄文R・Lの縮小	帯底状の調査 (縦方向)	白色胎物 風化岩片	有	明赤褐色 2.5Y 5/6	暗赤褐色 1.5Y 3/1	有	D-112	
16	弥生	胴部	-	縄文 オヤンベ土器	ナデ	石灰質胎物 風化岩片	無	灰褐色 7.5YR 4/2	黒褐色 7.5YR 4/1	有	D-112	
17	弥生	胴部	-	縄文 オヤンベ土器	帯底状の調査 (縦方向)	石灰質胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 10YR 7/4	灰赤褐色 10YR 4/2	有	D-112	
18	弥生	胴部	-	灰泥 縄文LR・R・Lによる羽状縁成	帯底状の調査 (縦方向)	白色胎物 風化岩片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/3	黒褐色 5YR 4/2	有	D-112 1	
19	弥生	胴部	-	灰泥 縄文LR・R・Lによる変形縁成	帯底状の調査 (縦方向)	白色胎物 風化岩片	有	赤褐色 5YR 4/6	黒褐色 5YR 3/1	有	D-112	焼跡あり

遺物 第82・83図

1～3は口縁部片である。1は口縁部に不明瞭な低い隆帯を2条貼付し、隆帯上に刻みを施すもの。2も不明瞭な低い隆帯を1条貼付し、隆帯上に刻みを施すもの。1・2ともに隆帯以下には単節縄文が施される。3は口縁部に1条不明瞭な隆帯を貼付した後、刻みを施し、口唇部も同様な刻みが施されている。4・5は異原体による菱形構成が成されるもの。6・7は羽状になるもの。8～15は単節縄文が施されるものである。中でも15は縦走気味に施されている。16・17は東海系のオセンベ土器と思われる。18・19はともに尖底土器の底部で、18は異原体による羽状構成、19は異原体による菱形構成をとる。

石器は、断面D字形の小形石斧？(20)とも考えられるものが出土している。

時期

以上の出土遺物をもって、本址は縄文時代前期初頭に帰属すると考えられる。

(22) J-22号住居址 (D-94号土坑)

遺構 第84図

本址はあ-6グリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係は持たないが、自然流路に西側の一部を破壊される。

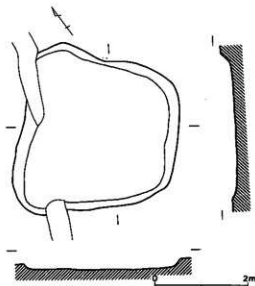
その規模は推定で東西3.30m南北3.09mで、台形を呈する。床面積は8.09㎡を測る。底面はおおむね平坦であるが脆弱である。壁はゆるく立ち、残存高18cm前後を測る。壁溝はもたない。

炉・ピットは検出されなかった。

遺物 第85図

土器の出土量は極めて微量で、細破片が数点出土したのみである。いずれも器面の風化が著しいため図化はしなかったが、纖維を多量に含む単節縄文施文の土器などがある。

石器は、石鏃(1・2)、石鏃未成品



第84図 J-22号住居址 (D-94号土坑) 実測図



第85図 J-22号住居址出土遺物(1:2, 1:4)

第48表 J-22号住居址 出土遺物一覽表(石器)

神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石 礮	ガラス質 安山岩	2.0	1.4	0.4	0.8	I区	5	ピエスエスキュー	チャート	2.2	1.9	1.2	5.4	II区
2	#	チャート	2.2	1.4	0.4	0.9	II区	6	#	黒曜石	3.1	1.9	1.6	8.9	II区
3	石 末 成 品	#	2.4	2.2	0.9	3.7	I区	7	スクレイパー	ガラス質 安山岩	3.3	4.3	1.2	17.1	II区
4	ピエスエスキュー	#	2.1	2.0	0.9	3.7	II区	8	礮 石	安山岩	6.7	3.9	2.3	85.4	I区

単位はcm, g

(3)、ピエスエスキュー(4-6)、スクレイパー(7)、礮石(8)が出土している。

#### 時期

本址は、時期判定に有効な土器資料に欠けるが、遺跡内の位置、遺構の構築状況など諸属性から縄文時代前期中葉以前に帰属するものと考えておきたい。

### (23) J-23号住居址 (D-159号土坑)

#### 住居址 第86図

本址はえ-4グリッドにおいて検出された。J-13号住居址、D-158号土坑と重複関係を持つ。J-13号住居址には破壊されるが、D-158との新旧関係は定かではなく、住居の床下土坑であったかも知れない。

その規模は南北5.90mで、隅丸方形か長方形を呈すると考えられる。長軸方向はN-30°-W付近を指すようだ。底面はおおむね平坦であるが脆弱である。壁はゆるく立ち、残存高15cm前後を測る。壁溝はもたない。

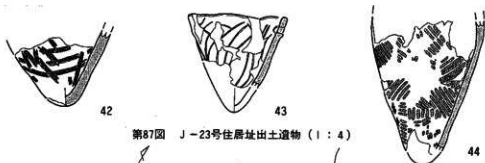
炉は検出されなかった。

ピットは総数で7個検出された。非常に不規則な配置であるため、柱穴かどうか疑わしい。

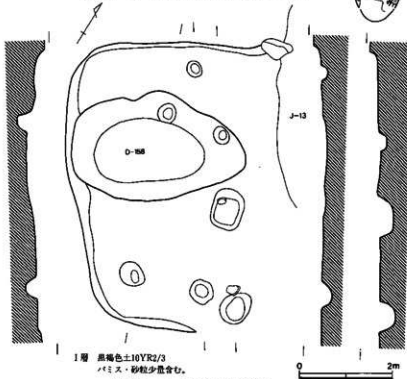
遺物 第87~90図

多量の土器片と少量の石器が出土した。

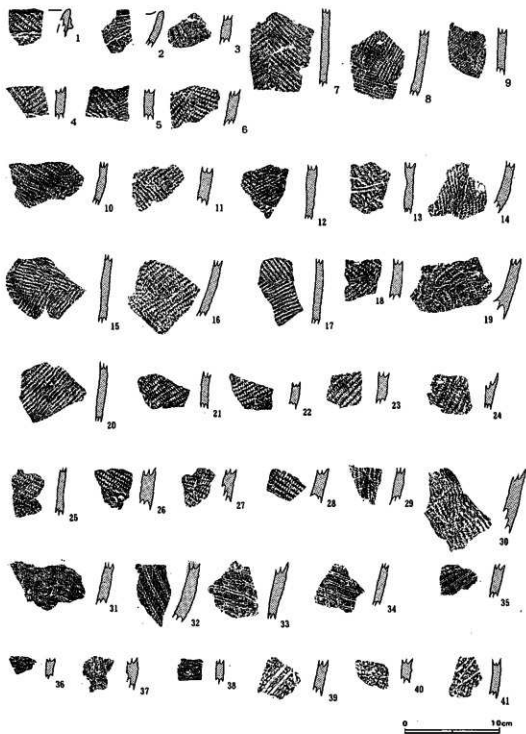
1・2・45~48は、口縁部片である。1は、口唇直下に断面三角形の隆帯が貼付され、隆帯上には単節縄文が施されている。2は沈線が斜方向に施されている。45は波状口縁の波頂部から不明瞭な隆帯を垂下させ、やはり不明瞭な水平隆帯と結束させた不明瞭な逆T字隆帯をもつ土器である。隆帯によって区画された文様帯には、同一原体の方向差によって縦方向の羽状構成を施し、隆帯以下には異原体による羽状構成をとっている。46は口縁部に不明瞭な隆帯を貼付し、口唇部直下を横にナデることによって隆帯を強調している。隆帯上には単節縄文が施される。47は口唇部を肥厚臭味にし、口唇以下には単節縄文を施している。7~10・54・55は異原体を用い羽状を構成している。20~30・56~58は単節縄文が施される。35は燃糸R・L・R 3本による燃糸文が



第87図 J-23号住居址出土遺物 (1:4)



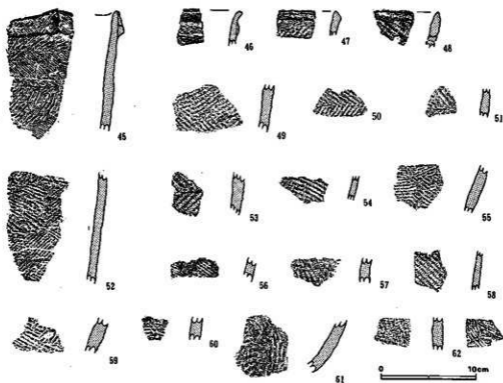
第86図 J-23号住居址実測図



第88图 J-23号住居址出土遗物 (1:4)

発掘番号	器種	部位	数量	取付および文様	調査 (内訳)	土質	色調		焼成	出土 位置	備考	
							外 面	内 面				
1	深鉢	口縁	—	子線? 口縁下縁に輪帯 縄文L・Rによる凹凸構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	褐色 7.5YR 7/6	にじみ褐色 7.5YR 5/3	昔	J-23 II区1層	磨擦孔あり?
2	深鉢	口縁	—	波状口縁? 縄文L・Rによる凹凸	ナデ	白色灰物 風化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/3	高褐色 7.5YR 3/1	昔	J-23 II区1層	
3	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる凹凸調整 構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	高褐色 7.5YR 3/1	昔	J-23 I区1層	
4	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	にじみ褐色 7.5YR 6/4	昔	J-23 1層	
5	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	にじみ褐色 7.5YR 6/4	昔	J-23 1層	
6	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	褐色 5YR 6/6	高褐色 5YR 3/1	昔	J-23 1層	
7	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	淡黄褐色 10YR 8/4	にじみ褐色 7.5YR 5/3	昔	J-23 1層	
8	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	ナデ及び磨痕 状の調整	白色灰物 風化磁片	有	褐色 5YR 6/6	高褐色 5YR 2/1	昔	J-23 1層	
9	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 7/4	暗褐色 7.5YR 4/1	昔	J-23 1層	
10	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	楕圓状の調整	白色灰物 風化磁片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	高褐色 7.5YR 3/1	昔	J-23 1層	
11	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	不明	白色灰物 風化磁片	有	にじみ黄褐色 10YR 7/4	にじみ褐色 7.5YR 6/3	昔	J-23	
12	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	ナデ及び磨痕 状の調整	白色灰物 風化磁片	有	褐色 5YR 6/6	淡黄褐色 10YR 5/2	昔	J-23 1層	
13	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	不明	白色灰物 風化磁片	有	暗褐色 7.5YR 3/4	にじみ褐色 7.5YR 6/4	昔	J-23 1層	
14	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	ナデ	白色灰物 風化磁片	有	褐色 5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-23 II区1層	
15	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる変形構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	にじみ黄褐色 10YR 7/4	にじみ黄褐色 10YR 6/3	昔	J-23 1層	
16	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる凹凸構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	褐色 5YR 6/6	高褐色 5YR 2/1	昔	J-23 1層	
17	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる凹凸構成	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	褐色 5YR 6/6	淡黄褐色 10YR 4/2	昔	J-23 II区1層	
18	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる凹凸構成	ナデ及び磨痕 状の調整	白色灰物 風化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/3	暗褐色 7.5YR 4/1	昔	J-23 1層	
19	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Rしによる凹凸構成	楕圓状の調整	白色灰物 風化磁片	有	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	昔	J-23 1層	
20	深鉢	胴部	—	縄文L・R	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	にじみ黄褐色 10YR 7/4	にじみ黄褐色 10YR 6/3	昔	J-23 1層	
21	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ	白色灰物 風化磁片	有	にじみ黄褐色 10YR 7/3	にじみ黄褐色 10YR 7/4	昔	J-23 1層	
22	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ	白色灰物 風化磁片	有	褐色 7.5YR 7/6	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	J-23 1層	
23	深鉢	胴部	—	縄文L・R	楕圓状の調整 (縦方向)	白色灰物 風化磁片	有	暗褐色 7.5YR 3/3	高褐色 10YR 3/1	昔	J-23 1層	
24	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ	白色灰物 風化磁片	有	淡黄褐色 10YR 8/4	にじみ黄褐色 10YR 6/3	昔	J-23 1層	
25	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ及び磨痕 状の調整	白色灰物 風化磁片	有	高褐色 10YR 3/1	高褐色 10YR 3/1	昔	J-23 1層	

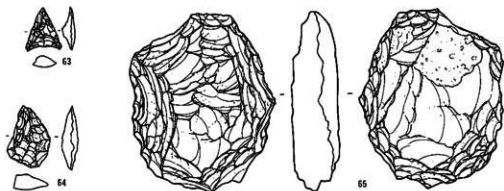
押印番号	紙種	部位	位置	押形および文様	刷型 (内面)	計 数	色 調		構成	出 土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
26	紙 種	刷部	--	梵文R.L.	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	灰黄褐色 7.5YR 6/6	4L20+黄褐色 10YR 7/3	併	J-23 II区1層	京畿道藤守土跡
27	紙 種	刷部	--	梵文R.L.	不明	白色紙物 風化箔片	有	明褐色 5YR 5/6	褐色 7.5YR 4/3	併	J-23 I層	京畿道藤守土跡
28	紙 種	刷部	--	梵文R.L.	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 6/4	4L20+黄褐色 10YR 6/4	併	J-23 I層	
29	紙 種	刷部	--	梵文R.L.	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	明褐色 7.5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	併	J-23 I層	藤原孔A?
30	紙 種	刷部	--	梵文R.L.	不明	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 7/4	4L20+褐色 7.5YR 5/3	併	J-23 I層	
31	紙 種	刷部	--	梵文LとR横え	線痕状の刷痕 (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	明褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 3/1	併	J-23 I層	
32	紙 種	刷部	--	梵文LとR横え	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	褐色 5YR 6/6	灰黄褐色 10YR 4/2	併	J-23 II区1層	
33	紙 種	刷部	--	梵文Lの2本横え	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	明褐色 5YR 5/6	灰褐色 5YR 3/1	併	J-23 II層	
34	紙 種	刷部	--	梵文LとR横え	線痕状の刷痕 (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	明褐色 5YR 3/3	4L20+褐色 7.5YR 5/3	併	J-23 I層	
35	紙 種	刷部	--	梵文LとR横え	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	併	J-23 I層	
36	紙 種	刷部	--	梵文	糸痕	白色紙物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	併	J-23 I層	
37	紙 種	刷部	--	梵文	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	併	J-23 I層	
38	紙 種	刷部	--	梵文	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	4L20+褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	併	J-23 I層	
39	紙 種	刷部	--	梵文L.R.上に成層	糸痕	白色紙物 風化箔片	有	4L20+褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/3	併	J-23 I層	
40	紙 種	刷部	--	お七曲がった梵文L.R.(横糸痕が ?)	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 5/3	灰黄褐色 10YR 4/2	併	J-23	
41	紙 種	刷部	--	梵文L.R.上に成層	不明	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 4/2	併	J-23 I層	
42	紙 種	刷部	--	梵文LとR横え	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	4L20+褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/1	併	J-23 I層	55と同一刷部
43	紙 種	ロー 刷部	--	ヘラ状工具によるラセン状の成層	ナデ	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 5/4	4L20+黄褐色 10YR 5/4	併	J-23	口縁部に穿孔
44	紙 種	刷部	--	梵文L.R.・R.L.による印状構成	線痕状の刷痕 (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 6/3	灰褐色 10YR 3/1	併	J-23	
45	紙 種	口縁	--	口縁の口 口縁下不明層を遮る字 輪帯 梵文L.R.・R.L.による印状構成	ナデ (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	4L20+褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 4/2	併	J-23	
46	紙 種	口縁	--	口縁下に輪帯 口唇を押し出し輪 帯状にする 口唇に垂直線文押印 梵文L.R.	ナデ (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	4L20+黄褐色 10YR 4/3	4L20+褐色 7.5YR 6/4	併	J-23	
47	紙 種	口縁	--	口唇部厚肉縁 梵文L.R.	ナデ (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	明褐色 7.5YR 7/2	灰黄褐色 7.5YR 8/6	併	J-23	
48	紙 種	口縁	--	写録? 梵文L.R.	ナデ (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	灰褐色 7.5YR 3/1	4L20+赤褐色 5YR 5/4	併	J-23	
49	紙 種	刷部	--	梵文L.R.・L.R.による印状構成	白色紙物 風化箔片						J-23	
50	紙 種	刷部	--	梵文L.R.・L.R.による印状構成	線痕状の刷痕 (横方向)	白色紙物 風化箔片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	4L20+黄褐色 10YR 7/3	併	J-23	



第89図 J-23号住居址出土遺物<3>(1:4)

神岡 番号	器種	部位	法	器形および文様	図 解 (内面)	胎 土	色 調		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
51	底 鉢	胴部	-	縄文L・R・RLによる羽状構成	押成状の胴部 (縦方向)	白色底物 風化粘片	有	にじみ褐色 5YR 7/4	黒褐色 5YR 3/1	香	J-23
52	底 鉢	胴部	-	縄文L・R・RLによる羽状構成	押成状の胴部 (縦方向)	白色底物 風化粘片	有	黒褐色 5YR 4/1	暗褐色 5YR 7/2	香	J-23
53	底 鉢	胴部	-	縄文L・R・RLによる羽状構成	押成状の胴部 (縦方向)	白色底物 風化粘片	有	灰褐色 7.5YR 5/2	黒褐色 7.5YR 4/1	香	J-23
54	底 鉢	胴部	-	縄文L・R・RLによる菱形構成	押成状の胴部 (縦方向)	白色底物 風化粘片	有	にじみ褐色 7.5YR 7/4	にじみ黄褐色 10YR 7/3	香	J-23
55	底 鉢	胴部	-	縄文L・R・RLによる菱形構成	不明	白色底物 風化粘片	有	褐色 7.5YR 7/8	黒褐色 5YR 4/2	香	J-23
56	底 鉢	胴部	-	縄文RL	押成状の胴部 (縦方向)	白色底物 風化粘片	有	黒褐色 10YR 3/1	にじみ褐色 7.5YR 6/4	香	J-23
57	底 鉢	胴部	-	縄文RL	不明	白色底物 風化粘片	有	明褐色 2.5YR 5/6	黒褐色 7.5YR 3/1	香	J-23
58	底 鉢	胴部	-	縄文RL	押成状の胴部	白色底物 風化粘片	有	にじみ黄褐色 10YR 7/3	洗剤褐色 10YR 8/4	香	J-23
59	底 鉢	胴部	-	縄文LとRにより菱形構成	不明	白色底物 風化粘片	有	明褐色 5YR 6/6	黒褐色 7.5YR 3/1	香	J-23
60	底 鉢	胴部	-	縄文?	不明	白色底物 風化粘片	有	にじみ褐色 5YR 7/4	黒褐色 10YR 4/1	香	J-23
61	底 鉢	胴部	-	縄文RL	ナシ	白色底物 風化粘片	有	にじみ褐色 7.5YR 7/4	黒褐色 10YR 3/1	香	J-23
62	底 鉢	胴部	-	縄文RL	鼻部	白色底物 風化粘片	有	洗剤褐色 10YR 8/4	にじみ黄褐色 10YR 7/3	香	J-23





第90図 J-23号住居址出土遺物(1:2, 1:4)

第50表 J-23号住居址 出土遺物一覧表<石器>

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
63	石 鏃	硬質頁岩	2.3	1.9	0.7	1.4	1区1層	65	楕円形石	ガラス質 灰岩	9.4	7.7	2.5	197.6	1区1層
64	石 鏃 未成品	#	3.2	2.2	0.8	5.0	1区1層								

単位はcm, g

施され、32・34・35は撚糸R・Lが施されている。33は撚糸R 2本を用いている。59は撚糸により菱形が構成されている。36~38は無文土器である。39・41は単節縄文を施した後、先端がささくれた工具により、沈線が施されている。62は表面に単節縄文が施文され、裏には条痕調整がなされている。42は35と同一個体と思われる尖底部である。43は小型の尖底深鉢形土器で、器面に先端の鋭いへら状の工具により、ラセン状に沈線が施されている。44は異原体により羽状を構成する尖底深鉢形土器である。

石器は、石鏃(63)、石鏃未成品(64)、楕円形石斧?(65)がある。

#### 時期

以上の出土遺物をもって、本址は縄文時代前期初頭に帰属すると考えられる。

### (24) J-24号住居址

#### 住居址 第41図

先に述べたようにJ-9号住居址との新旧関係が不鮮明な遺構である。独立した遺構ならば直径4m程度の円形住居が推定される。床面は地山をそのまま利用し、おおむね平坦だが北へゆるく傾斜する。床面上からはピットが一個検出された。壁もゆるく立ちあがり、壁体は堅固である。竪穴覆土はJ-9号住居址と同様黒褐色土単層である。

#### 遺物と時期

確実な共伴遺物に恵まれないが、J-9号住居址との関係から縄文時代前期中葉前後であろう。

## (25) 土 坑

### 第91～113図

本遺跡では総数185基の多数の土坑(穴)が検出された。このうち、遺物が良好な状態で出土し、時期が明確に特定できる土坑は少ない。ほとんどは極めて微量な遺物しか出土していないのである。ただし、遺跡全体からの出土土器は縄文時代前期、古墳時代前期・後期、近現代のいずれかであり、塚田遺跡から検出された土坑群はこのいずれかの時期に帰属すると考えられる。この中で最も困難なのが縄文前期と古墳時代の識別である。覆土の状況からも判断は極めて難しい。しかし、塚田遺跡全体の遺構遺物の検出量は相対的に縄文時代が他の時代を凌駕している状況を考えると、検出された次頁から掲載される土坑の多くは縄文時代の所産である蓋然性が高いものと判断できる。以下これらについて若干の考察を加える。

なお、調査段階で便宜的に土坑と判断した縄文時代のD-38・94・112・159号土坑に関しては、整理段階での検討の結果、住居であった可能性も捨て切れないため、「第2節 縄文時代前期の竪穴住居址」で事実記載した。

### 形と大きさ

平面形は円形・楕円形を基本としており、方形・長方形はほとんど見られない。また、規模は長軸長あるいは径が250cmを越える大型のものが7基(D-39・78・79・83・95・179・180号土坑)、2mを越えるものが5基(D-7・13・20・24・32号土坑)、ほかは150cm内外のものが圧倒的に多い。250cmを越える大型の土坑に共通することは掘り込みが浅いこと、底面が比較的フラットであることの2点で、前述の竪穴住居址と同列に考えるべきであったかもしれない。他の土坑については底面が丸みをおびるもの、フラットなもの双方が認められる。

### 分 布

縄文前期初頭・中葉の竪穴住居址は台地周縁部を取り囲むように分布するのに対し、土坑は住居群をつないだ輪の内側に集中する傾向が見られる。ただし、J-10・11・14の存する台地北東部では、住居より外側に接して土坑群のまとまりがある。このことから、土坑群が縄文住居とより密接な関係をもっていると考えられる。

### フラスコ状土坑

側壁が中位で突出し、断面形が所謂フラスコ状を呈する土坑は、D-55・57・121・124・130・154土坑の6基が存在する。D-121・124・130号土坑は北側、D-55・57・154号土坑は南側の土

坑群中にまとまっている。仮にフラスコ状土坑が貯蔵庫であるならば、集落内における食物保管施設の領域が確保されていたことになる。

#### 機能

性格については特定できるものも少ない。焼骨粉が出土し、板状の石を敷きつめたD-100号土坑は敷石の上に人と考えられる焼骨片が出土しているため墓址と考えられるが、時期は不明確である。仮に縄文時代前期初頭に位置付けられるならば、該期では初めての墓址の発見例になるという。ただし、K-1号古墳に接近していることを考えると古墳時代の墓であった可能性も捨て切れない。この点については、おおかたのご教示を仰ぎたい。

また、遺跡内には同様な土坑や他に人骨が出土した例はない。したがって他の多くの土坑は墓であったとは考えがたい。

#### 完形土器が埋納されていた土坑

完形土器が埋納されていた早期のD-15号土坑や前期初頭のD-30・118号土坑についても性格は特定できない。仮に前述のフラスコ状の土坑の性格を貯蔵用と限定するならばそれらに近接する異形態の土坑群もフラスコ状土坑と同様あるいは類似する施設であったのかもしれないが、あくまで推測の域をでない。

#### 集石

礫が散在する土坑は多数あるが、ぎっしりと詰め込まれたような密集状況を呈する土坑はD-129とD-134の2基であった。これらは遺跡北東部の近接した位置にある点で興味深い。

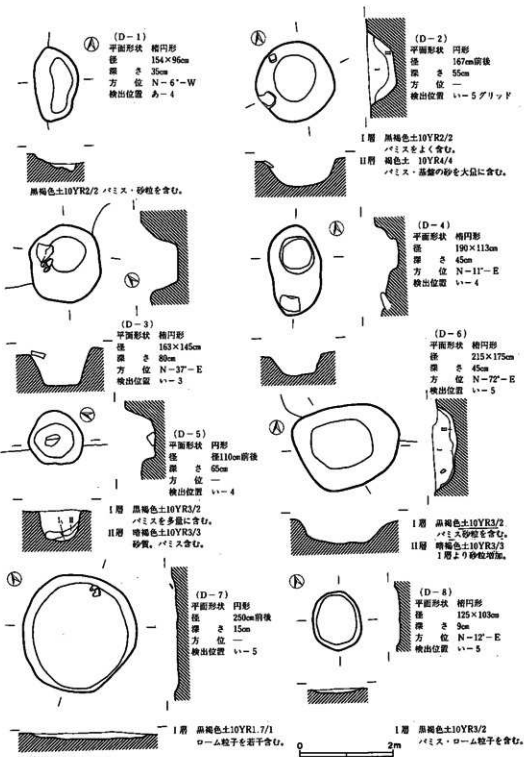
また、下弥堂遺跡D-4号土坑のように焼土や炭化材、焼け石など燃焼行為を示すような遺物は出土していない。

#### 時期

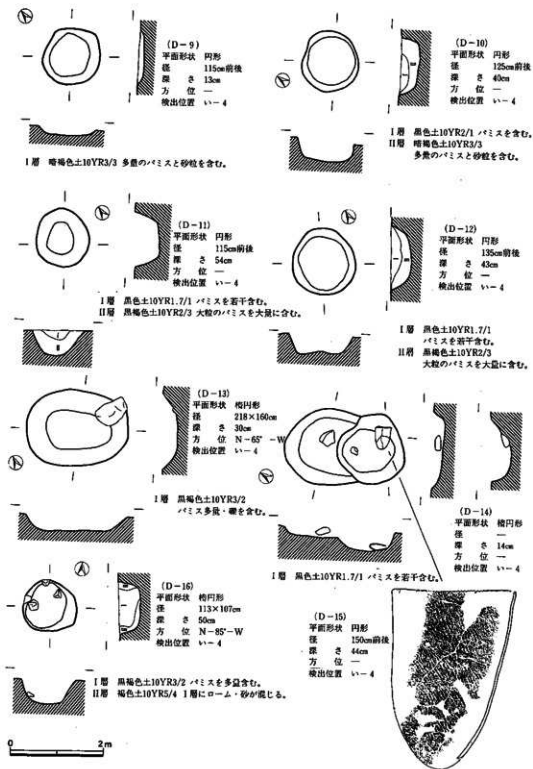
前述したように時期が特定できる土坑は少ないが、土器の完存個体あるいは大型破片をはじめ多量の土器片が出土した土坑について時期別に抽出し、次ページの表にまとめてみた。土坑内出土の土器総体を見ると、前期の中でも尖底土器群を中心とする前期初頭の土器片の量が圧倒的に多く、関山・神ノ木式などの前期中葉の土器は微量である。このような土器片の量的比率から、塚田遺跡検出の土坑は時期判定できるものが少ないとはいえ、その多くは縄文時代前期初頭に帰属するもの可能性が高いことを指摘しておく。

土坑の所産期

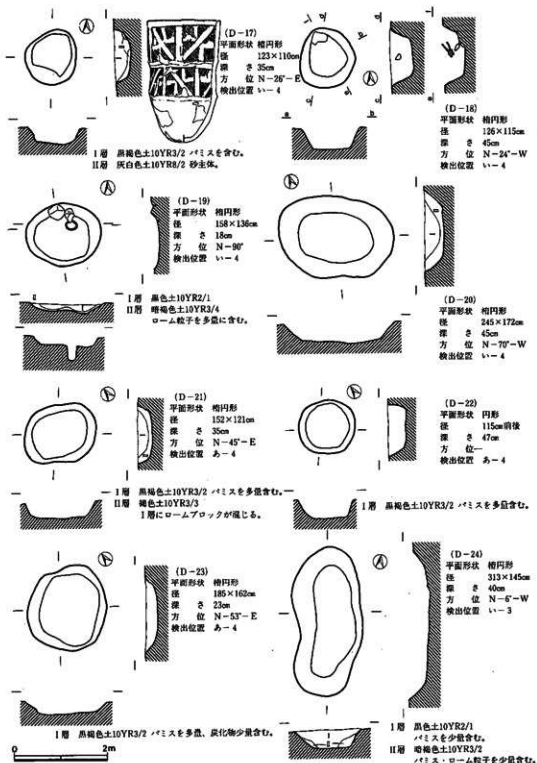
時 期	土 坑 番 号
縄文時代早期と考 えられる土坑	D-15, 17, 111, 143
縄文時代前期初頭 と考えられる土坑	D-2, 7, 18, 20, 30, 33, 34, 35, 39, 51, 55, 57, 90, 91, 114, 118, 121, 122, 124, 130, 138, 154, 158, 184
古墳時代後期と考 えられる土坑	D-52, 108
近現代と考えられ る土坑	D-165, 166, 167, 168
時期の不明確な土 坑	D-1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 19, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 31, 32, 36, 37, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 53, 54, 56, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 109, 110, 113, 115, 116, 117, 119, 120, 123, 125, 126, 127, 128, 129, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 139, 140, 141, 142, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 155, 156, 157, 160, 161, 162, 163, 164, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 185



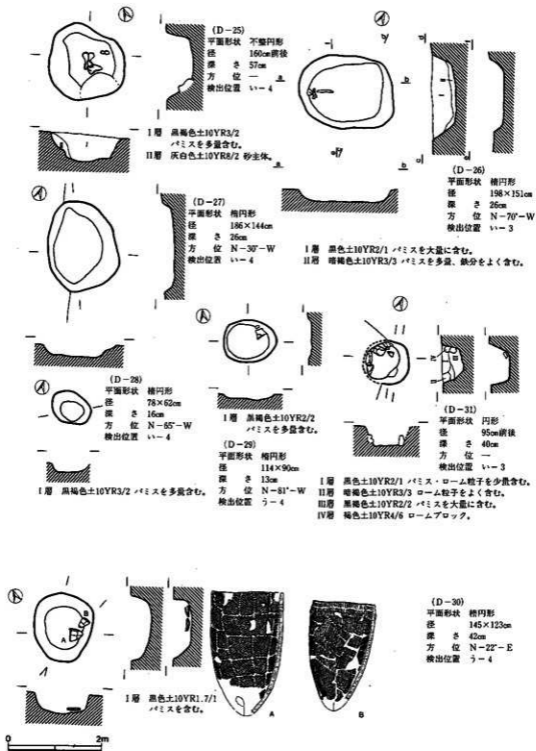
第91図 D-1～8号土坑実測図



第92図 D-9～16号土坑実測図

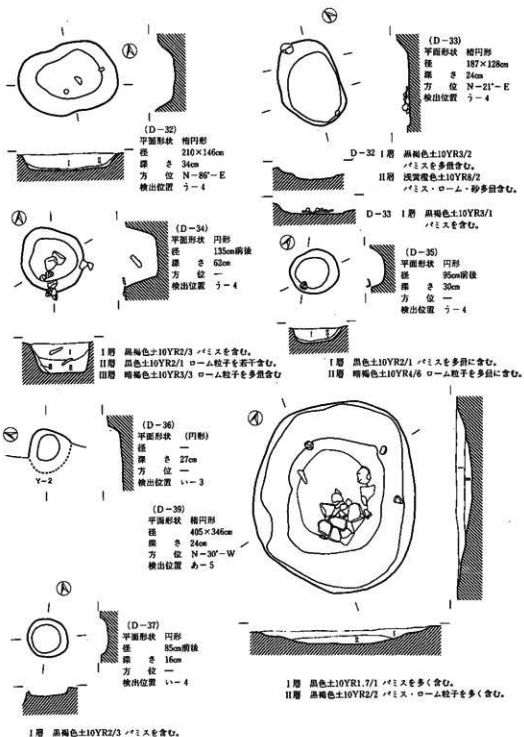


第93図 D-17~24号土坑実測図

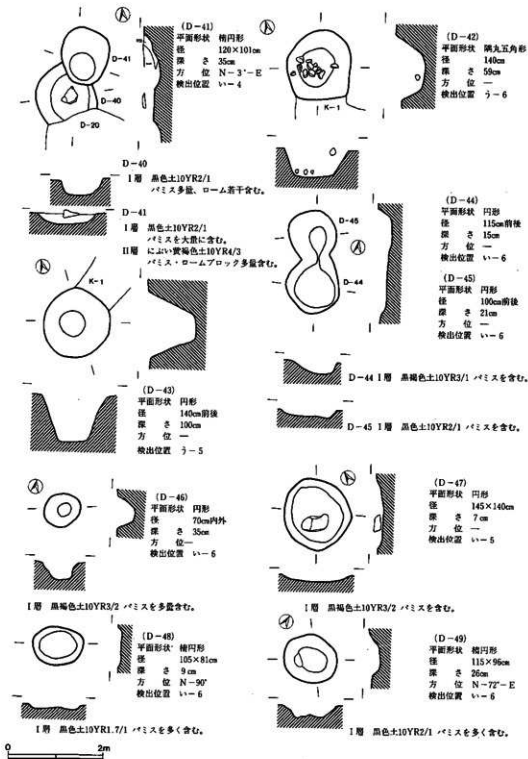


第94図 D-25～31号土坑実測図

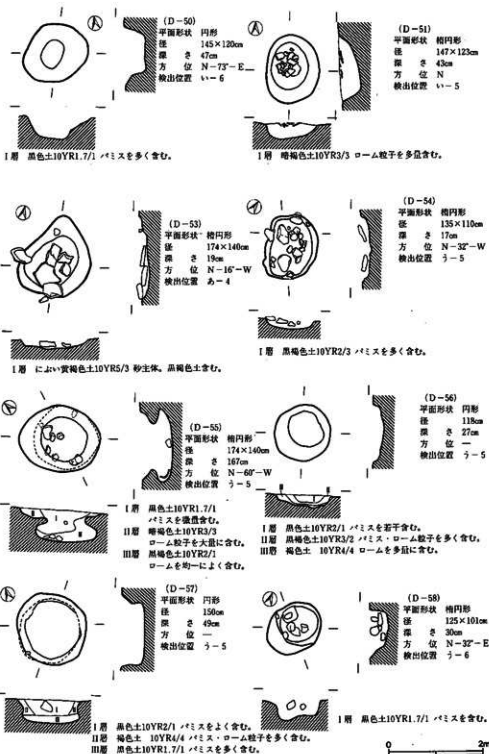




第95図 D-32~37・39号土坑実測図



第96図 D-40~49号土坑実測図



第97図 D-50・51・53~58号土坑実測図



(D-59)  
平面形状 円形  
径 112cm前後  
深さ 39cm  
方位 —  
検出位置 う-6

I層 黒色土10YR1.7/1 パミスを多く含む。  
II層 黒色土10YR2/1 パミスを多く含む。

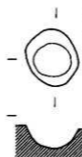


(D-60)  
平面形状 楕円形  
径 131×116cm  
深さ 54cm  
方位 N-13°-W  
検出位置 う-6

I層 黒色土10YR2/1  
パミスを微量含む。  
II層 黒色土10YR2/2  
パミス・ローム粒子を多く含む。  
III層 黒い黄褐色土10YR4/3  
パミスを多く含む。



(D-61)  
平面形状 楕円形  
径 118×104cm  
深さ 42cm  
方位 N-90°  
検出位置 う-6



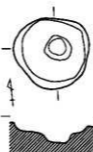
(D-62)  
平面形状 楕円形  
径 124×106cm  
深さ 43cm  
方位 N-23°-W  
検出位置 う-6

I層 黒色土10YR2/1 パミスを多量含む。



(D-63)  
平面形状 円形  
径 102cm前後  
深さ 21cm  
方位 —  
検出位置 う-6

I層 黒褐色土10YR2/2 ローム粒子を多く含む。



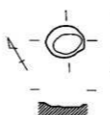
(D-64)  
平面形状 円形  
径 150cm前後  
深さ 42cm  
方位 —  
検出位置 う-7

I層 黒褐色土10YR3/2 パミス多、砂粒含む。  
II層 黒い黄褐色土10YR7/3 ローム主。



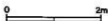
(D-65)  
平面形状 楕円形  
径 120×108cm  
深さ 90cm  
方位 N-80°-E  
検出位置 う-6

I層 黒褐色土10YR2/3 パミス、砂粒含む。



(D-66)  
平面形状 楕円形  
径 80×65cm  
深さ 5cm  
方位 N-60°-W  
検出位置 う-7

I層 黒褐色土10YR2/3 パミス含む。



第98図 D-59~66号土坑実測図



(D-67)  
 平面形状 円形  
 径 128cm前後  
 深さ 60cm  
 方位 —  
 検出位置 うー6



I層 黒色土10YR1.7/1 パミス多量含む。  
 II層 黒褐色土10YR2/2 ロームパミス若干含む。  
 III層 黒色土10YR4/3 ローム上、パミス若干含む。  
 IV層 暗褐色土10YR3/3 二次堆積ローム。



(D-68)  
 平面形状 円形  
 径 80cm前後  
 深さ 39cm  
 方位 —  
 検出位置 うー7



I層 黒褐色土10YR2/2 パミス少量含む。



(D-69)  
 平面形状 円形  
 径 65cm前後  
 深さ 25cm  
 方位 —  
 検出位置 うー7



I層 黒褐色土10YR2/3 パミス、砂粒含む。



(D-70)  
 平面形状 円形  
 径 75cm  
 深さ 20cm  
 方位 —  
 検出位置 うー7



I層 暗褐色土10YR3/3 パミス、砂粒多量含む。



(D-71)  
 平面形状 円形  
 径 110cm前後  
 深さ 24cm  
 方位 —  
 検出位置 いー6



I層 黒褐色土10YR2/3 パミス多量含む。



(D-72)  
 平面形状 円形  
 径 107cm  
 深さ 13cm  
 方位 —  
 検出位置 いー6



I層 黒褐色土10YR2/3 パミス多量含む。



(D-73)  
 平面形状 楕円形  
 径 97×80cm  
 深さ 18cm  
 方位 N-33°-E  
 検出位置 いー6



I層 黒褐色土10YR2/3 パミス多量含む。



(D-74)  
 平面形状 楕円形  
 径 150×108cm  
 深さ 42cm  
 方位 N-81°-E  
 検出位置 いー6



I層 黒褐色土10YR2/2 パミス多量、ローム粒子若干含む。  
 II層 暗褐色土10YR3/3 ローム、砂粒多量含む。

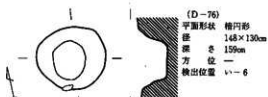


第99図 D-67~74号土坑実測図



(D-75)

平面形状 円形  
径 115cm前後  
深さ 70cm  
方位 —  
検出位置 い-6



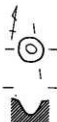
(D-76)

平面形状 楕円形  
径 148×130cm  
深さ 159cm  
方位 —  
検出位置 い-6



(D-77)

平面形状 円形  
径 50cm  
深さ 30cm  
方位 —  
検出位置 い-7



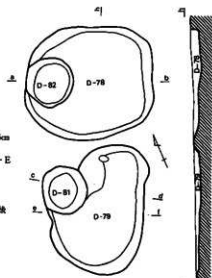
I層 暗褐色土10YR3/3 パズリス多量含む。

(D-78)  
平面形状 縦長方形  
径 267×234cm  
深さ 21cm  
方位 N-65°-W  
検出位置 い-6

(D-81)  
平面形状 円形  
径 98cm前後  
深さ 15cm  
方位 —  
検出位置 い-6

(D-79)  
平面形状 楕円形  
径 278×195cm  
深さ 12cm  
方位 N-42°-E  
検出位置 い-6

(D-82)  
平面形状 円形  
径 102cm前後  
深さ 26cm  
方位 —  
検出位置 い-6

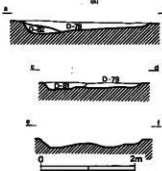


D-78 I層 暗褐色土10YR2/3 パズリス多量、砂粒含む。

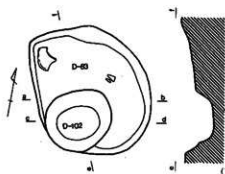
D-79 I層 暗褐色土10YR2/2 パズリス多量含む。

D-81 I層 暗褐色土10YR3/3 パズリス、砂粒多量含む。

D-82 I層 暗褐色土10YR2/3 パズリス、砂粒多量含む。

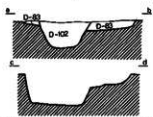


第100図 D-75~79・81・82号土坑実測図



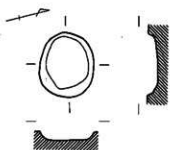
D-83 I層 黒色土10YR2/1 ノミス含む。

D-102 I層 黒色土10YR1.7/1 ノミス多量含む。



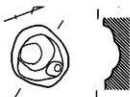
(D-83)  
 平面形状 楕円形  
 径 309×250cm  
 深さ 16cm  
 方位 N-60°-W  
 検出位置 い-6

(D-102)  
 平面形状 円形  
 径 140cm前後  
 深さ 55cm  
 方位 —  
 検出位置 い-6



(D-84)  
 平面形状 楕円形  
 径 137×117cm  
 深さ 18cm  
 方位 N-75°-W  
 検出位置 い-6

I層 黒色土10YR2/1 ノミス含む。

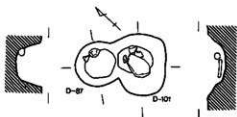


(D-85)  
 平面形状 楕円形  
 径 130×118cm  
 深さ 33cm  
 方位 N-66°-E  
 検出位置 い-5



(D-86)  
 平面形状 楕円形  
 径 126×105cm  
 深さ 20cm  
 方位 N-83°-E  
 検出位置 い-5

I層 黒色土10YR2/1 ノミス含む。



(D-87)  
 平面形状 円形  
 径 95cm前後  
 深さ 60cm  
 方位 —  
 検出位置 い-5

(D-101)  
 平面形状 楕円形  
 径 —  
 深さ 27cm  
 方位 —  
 検出位置 い-5

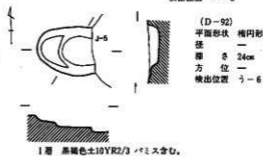
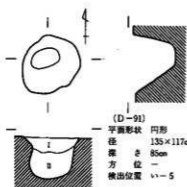
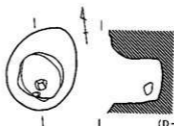
D-87 I層 黒色土10YR2/1 ノミス多量含む。



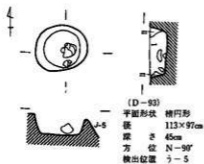
(D-88)  
 平面形状 円形  
 径 118cm前後  
 深さ 51cm  
 方位 —  
 検出位置 い-5

148頁 第106図

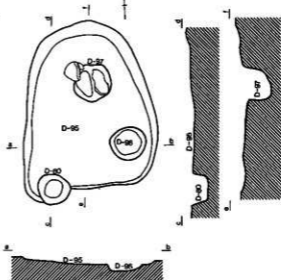
第101図 D-83~88・101・102号土坑実測図



I層 黒褐色土10YR2/2 パミス多量、砂粒少量含む。  
 II層 黒褐色土10YR2/2 と砂粒の混合。



D-93 I層 黒褐色土10YR2/3 パミス多量含む。  
 II層 により黄褐色土10YR6/4 砂粒主。



D-96 I層 灰黄褐色土10YR4/2  
 ローム、褐色土融合。

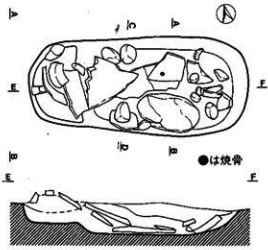
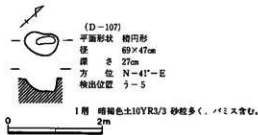
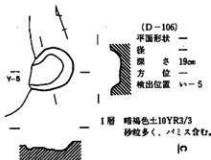
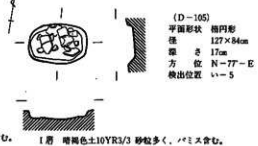
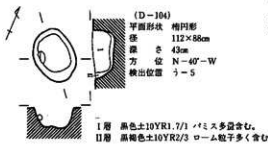
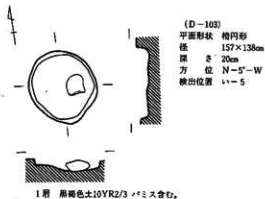
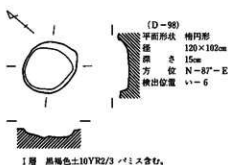
D-97 I層 黒褐色土10YR2/2  
 パミス、炭化物含む。

(D-80)	(D-95)	(D-96)	(D-97)
平面形状 円形	平面形状 楕円形	平面形状 円形	平面形状 円形
径 60cm前後	径 350×275cm	径 70cm前後	径 80cm前後
深さ 37cm	深さ 17cm	深さ 14cm	深さ 62cm
方位 —	方位 N	方位 —	方位 —
検出位置 い-5	検出位置 い-5	検出位置 い-5	検出位置 い-5

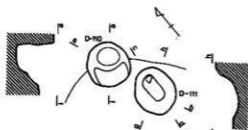


第102図 D-80・89~93・95~97号土坑実測図





第103図 D-98・100・103~107号土坑実測図

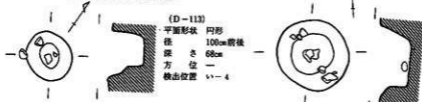


(D-110)	(D-111)
平面形状 楕円形	平面形状 楕円形
径 90cm前後	径 98×85cm
深さ 80cm	深さ 52cm
方位 一	方位 N-9°-E
検出位置 う-5	検出位置 う-5



D-110 I層 黒褐色土10YR2/3 砂粒少量、パミス含む。

D-111 I層 暗褐色土10YR3/3 パミス少量、砂粒含む。



(D-113)  
平面形状 円形  
径 100cm前後  
深さ 68cm  
方位 一  
検出位置 い-4



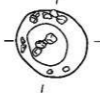
I層 黒褐色土10YR2/2 砂粒少量、パミス含む。



(D-114)  
平面形状 楕円形  
径 155×141cm  
深さ 68cm  
方位 N-45°-W  
検出位置 う-4



I層 黒褐色土10YR2/2 砂粒少量、パミス多量含む。  
II層 褐色土10YR4/4 I層にローム粒多量混入。



(D-115)  
平面形状 楕円形  
径 154×137cm  
深さ 67cm  
方位 N-45°-W  
検出位置 い-3



(D-116)  
平面形状 不整形  
径 130cm前後  
深さ 47cm  
方位 一  
検出位置 う-3



I層 黒褐色土10YR2/2 砂粒少量、パミス多量含む。  
II層 褐色土10YR4/4 I層にローム粒多量混入。



I層 黒褐色土10YR2/2 パミス含む。



(D-117)  
平面形状 円形  
径 115cm前後  
深さ 一  
方位 一  
検出位置 う-3

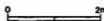


(D-118)  
平面形状 円形  
径 120cm前後  
深さ 73cm  
方位 一  
検出位置 う-4

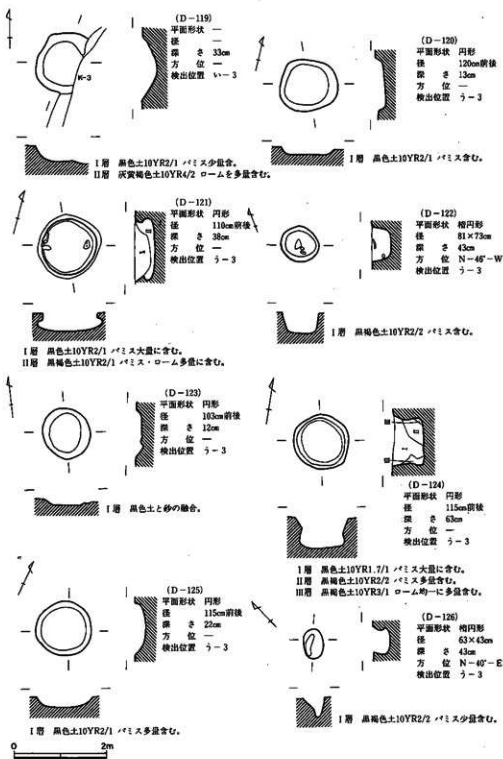
I層 黒褐色土10YR2/2 パミス少量含む。



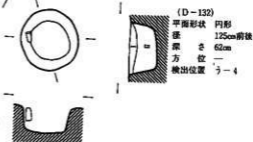
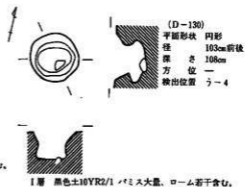
I層 黒褐色土10YR2/1 パミス含む。  
II層 黒褐色土10YR2/2 パミス含む。



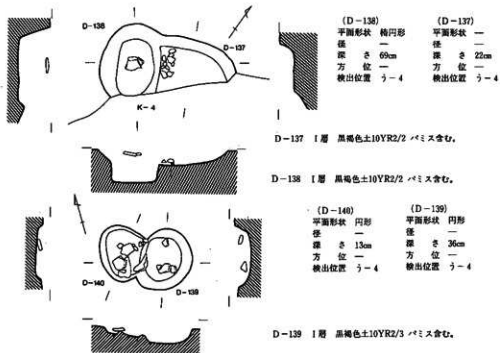
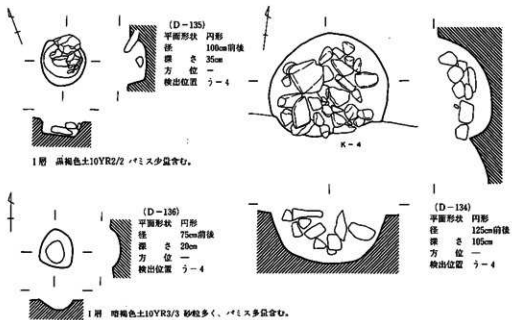
第104図 D-110・111・113~118号土坑実測図



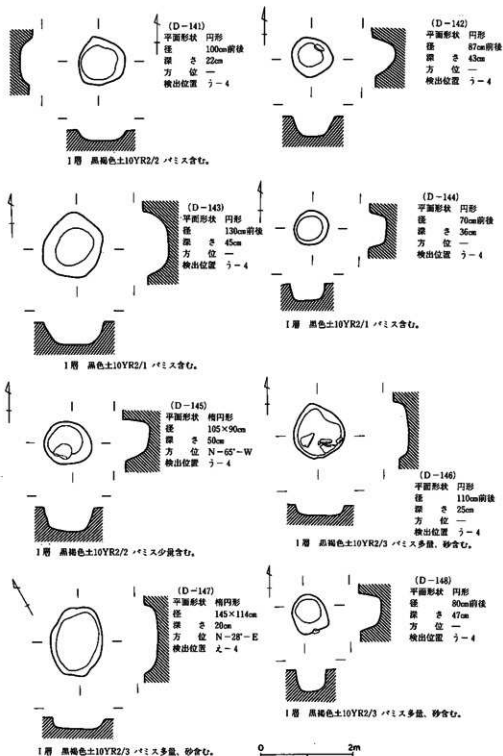
第105図 D-119～126号土坑実測図



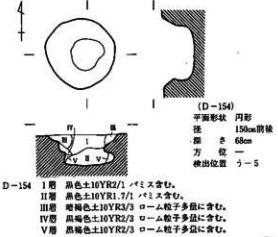
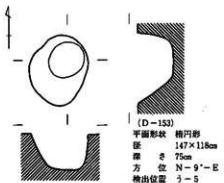
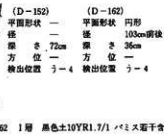
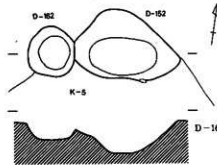
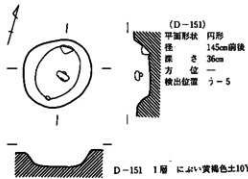
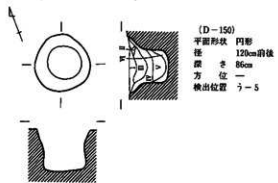
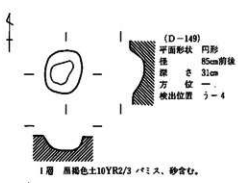
第106図 D-127~133号土坑実測図



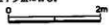
第107図 D-134~140号土坑実測図

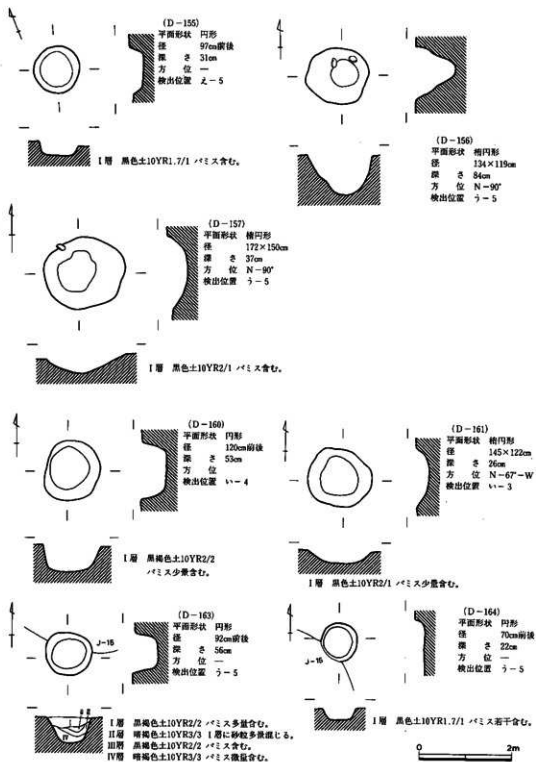


第108図 D-141~148号土坑実測図



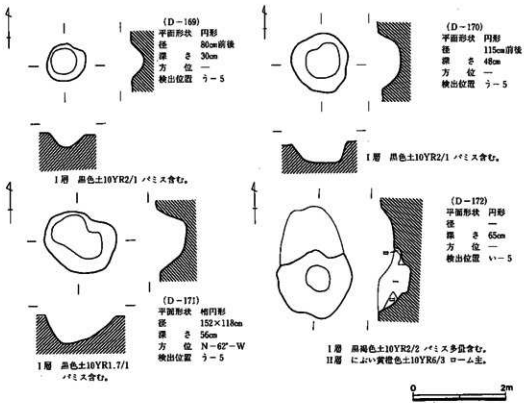
第109図 D-149~154・162号土坑実測図



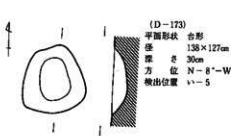


第110図 D-155~157・160~164号土坑実測図

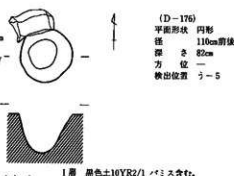
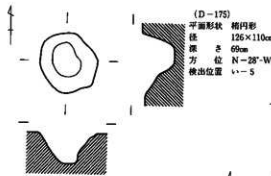




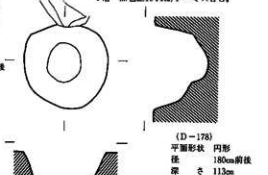
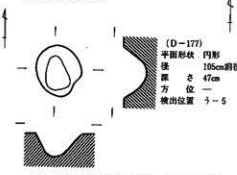
第111図 D-169～172号土坑実測図



1層 土10YR5/4 ローム、砂粒含む。

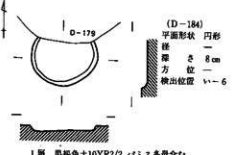


1層 黒色土10YR2/1 パミス含む。



1層 黒褐色土10YR2/3 パミス、ローム粒子含む。

1層 黒色土10YR2/1 パミス含む。

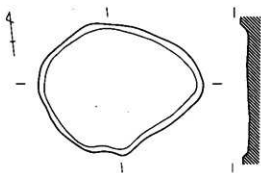


1層 黒褐色土10YR2/2 パミス多量含む。

1層 黒褐色土10YR2/3 パミス、砂粒含む。

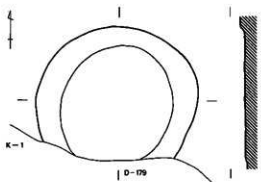


第112図 D-173~178・184・185号土坑実測図



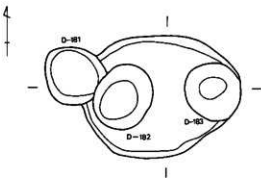
(D-179)  
 平面形状 略円形  
 径 349×277cm  
 深さ 15cm  
 方位 N-82°-W  
 検出位置 う-6

1層 黒色土10YR2/1 パミス多量含む。



(D-180)  
 平面形状 円形  
 径 345cm前後  
 深さ 11cm  
 方位 —  
 検出位置 い-6

1層 黒色土10YR2/1 パミス多量含む。

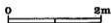


(D-181)	(D-182)	(D-183)
平面形状 略円形	平面形状 円形	平面形状 円形
径 —	径 130cm前後	径 120cm前後
深さ —	深さ 83cm	深さ 78cm
方位 —	方位 —	方位 —
検出位置 い-6	検出位置 い-6	検出位置 う-6

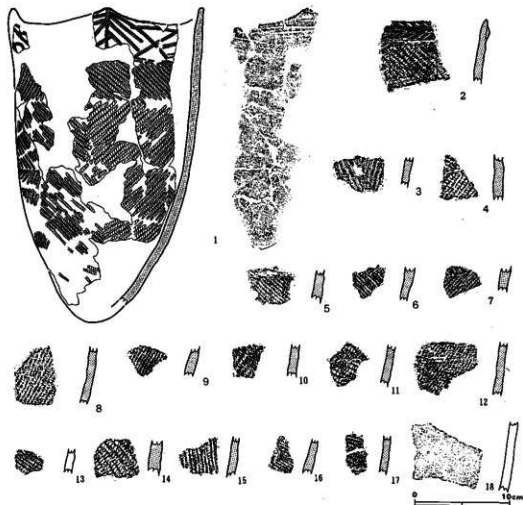
D-181 1層 黒褐色土10YR2/3 パミス含む。

D-182 1層 黒色土10YR2/1 パミス含む。

D-183 1層 黒色土10YR2/1 多量パミス含む。



第113図 D-179～183号土坑実測図



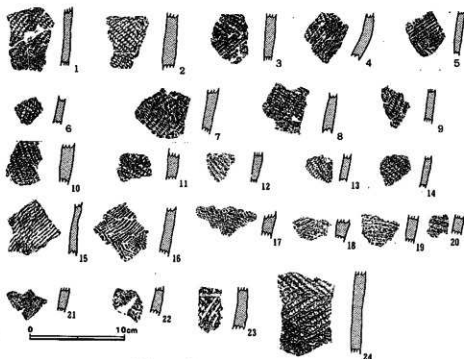
第114図 D-2号土坑出土遺物(1:4)

押型文土器

第51表 D-2号土坑 出土遺物一覽表 <縄文土器>

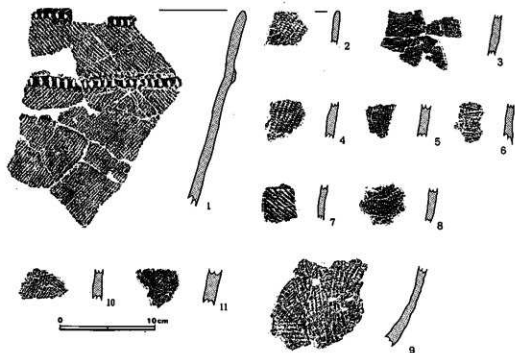
発掘 番号	器種	部位	寸法	器形および文様	陶器 [内面]	胎土	陶練	色		構成	出土 位置	備考
								外面	内面			
1	鉢	口縁	20.9 (注3)	4単位成文口縁 口縁部断片文し と京2本層との断面互換による櫛 子形状のモチーフ 口縁部早期縄 文し京・京しによる羽状構成	赤褐色 風化断片	有	明黄褐色 10YR 6/6	明黄褐色 10YR 7/5	赤	D-2 1		
2	鉢	口縁	-	口縁直下に不明瞭な矢羽状の部入 を伴った帯 縄文し	ココナテ 白色断片 風化断片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	灰黄褐色 10YR 6/2	黄	D-2 断面		
3	鉢	胴部	-	縄文し京・京しによる縦方向の羽 状構成	ナテ 白色断片 風化断片	有	褐色 7.5YR 7/5	灰黄褐色 10YR 4/2	赤	D-2 1		
4	鉢	胴部	-	縄文し京・京しによる羽状構成	ナテ 白色断片 風化断片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/3	にじみ赤褐 5YR 5/4	黄	D-2 付添		
5	鉢	胴部	-	縄文し京・京しによる羽状構成	不明 白色断片 風化断片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ赤褐 2.5YR 4/3	赤	D-2 1		

発掘番号	器種	部位	状況	撮影および文様	窯 場 (内記)	胎 土	組織	色 調		焼成	出土 位置	備 考
								外 面	内 面			
6	鉢	胴部	-	縄文L・Rしによる斜紋織成	ナデ	白色灰物 黒化砂片	有	12.20+赤褐色 5YR 5/4	暗赤褐色 5YR 3/3	昔	D-2	
7	鉢	胴部	-	縄文L・Rしによる斜紋織成	縄紋状の窪隆 (斜方向)	白色灰物 黒化砂片	有	12.20+赤褐色 5YR 5/4	12.20+赤褐色 5YR 5/4	昔	D-2	付底
8	鉢	胴部	-	縄文L・R	ナデ	赤褐色 黒化砂片	有	12.20+褐色 5YR 5/4	褐色 5YR 6/6	昔	D-2	1
9	鉢	胴部	-	縄文L・R	ナデ	白色灰物 黒化砂片	有	12.20+赤褐色 5YR 5/4	灰褐色 5YR 4/2	昔	D-2	周面
10	鉢	胴部	-	縄文L・R	ナデ	白色灰物 黒化砂片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	淡黄褐色 10YR 8/4	昔	D-2	周面
11	鉢	胴部	-	縄文L・R	縄紋状の窪隆 (斜方向)	白色灰物 黒化砂片	有	褐色 2.5YR 6/6	12.20+赤褐色 5YR 4/3	昔	D-2	
12	鉢	胴部	-	縄文L・R	不明	白色灰物 黒化砂片	有	灰褐色 5YR 5/2	12.20+褐色 7.5YR 6/3	昔	D-2	1
13	鉢	胴部	-	縄文L・R	ナデ	白色灰物 黒化砂片	有	暗赤褐色 5YR 3/3	12.20+赤褐色 5YR 5/4	昔	D-2	周面
14	鉢	胴部	-	縄文L・R	ナデ	白色灰物 黒化砂片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	黒褐色 7.5YR 3/1	昔	D-2	周面
15	鉢	胴部	-	縄文L・Rが暗赤褐色	ナデ	白色灰物 黒化砂片	有	12.20+褐色 7.5YR 5/4	12.20+黄褐色 10YR 7/4	昔	D-2	周面
16	鉢	胴部	-	縄文L・R	ナデ	白色灰物 黒化砂片	有	12.20+褐色 5YR 6/5	灰褐色 5YR 5/2	昔	D-2	
17	鉢	胴部	-	不明	不明	白色灰物 黒化砂片	有	褐色 2.5YR 6/6	12.20+褐色 7.5YR 5/3	昔	D-2	周面
18	鉢	胴部	-	縄文 オモンベ土器	ナデ	赤褐色 黒化砂片	有	灰褐色 10YR 5/2	12.20+褐色 7.5YR 5/4	昔	D-2	周面



第115図 D-5号土坑出土遺物(1:4)

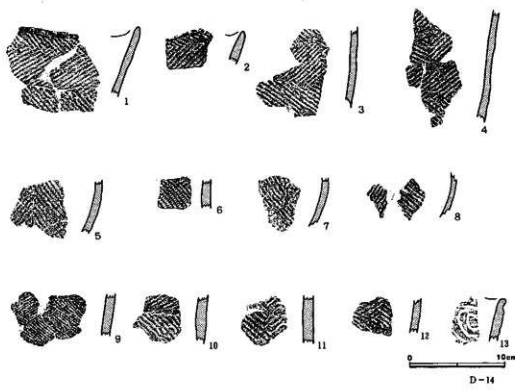
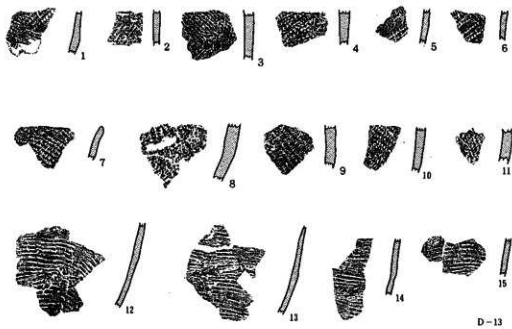
押型番号	器種	部位	注	形状および文様	器型 (内図)	胎土	組織	色		焼成	出土 位置	備考
								外面	内面			
1	鉢	胴部	--	縄文しR・Rしによる羽状模成	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	特	D-5	埋納孔あり
2	鉢	胴部	--	縄文しR・Rしによる羽状模成	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	にじみ-黄褐色 10YR 7/2	特	D-5	
3	鉢	胴部	--	縄文しR・Rしによる羽状模成	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-褐色 7.5YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	特	D-5	7ヶ土
4	鉢	胴部	--	縄文しR・Rしによる羽状模成	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 5/2	特	D-5	
5	鉢	胴部	--	縄文しR・Rしによる羽状模成	ナデ	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 7/6	褐色色 10YR 6/1	特	D-5	IV区日層
6	鉢	胴部	--	縄文Rしの方角逆による変形模成	ナデ	白色底物 黒化部分	有	にじみ-赤褐色 5YR 5/4	にじみ-赤褐色 5YR 5/3	特	D-5	
7	鉢	胴部	--	縄文しR	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 5/2	特	D-5	
8	鉢	胴部	--	縄文しR	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色色 10YR 4/1	特	D-5	
9	鉢	胴部	--	縄文しR	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-黄褐色 10YR 6/2	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	特	D-5	
10	鉢	胴部	--	縄文Rし	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-褐色 7.5YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	特	D-5	
11	鉢	胴部	--	縄文Rし	ナデ	白色底物 黒化部分	有	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 4/2	特	D-5	
12	鉢	胴部	--	縄文Rし	ナデ	白色底物 黒化部分	有	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	にじみ-黄褐色 10YR 6/2	特	D-5	7ヶ土
13	鉢	胴部	--	縄文Rし	不明	白色底物 黒化部分	有	褐色 10YR 4/1	灰黄褐色 10YR 5/2	特	D-5	
14	鉢	胴部	--	縄文Rし	撚成状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	褐色色 10YR 4/1	特	D-5	
15	鉢	胴部	--	無筋縄文し	撚成状の調整 (数方向)	白色底物 黒化部分	有	にじみ-褐色 7.5YR 6/4	にじみ-褐色 7.5YR 6/3	特	D-5	
16	鉢	胴部	--	無筋縄文しとRによる羽状模成	撚成状の調整 (数方向)	白色底物 黒化部分	有	明褐色 7.5YR 5/6	黒褐色 10YR 3/1	特	D-5	
17	鉢	胴部	--	無筋文土	撚成状の調整 (数方向)	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 4/3	褐色色 10YR 4/1	特	D-5	7ヶ土
18	鉢	胴部	--	無筋文土	不明	白色底物 黒化部分	有	灰黄褐色 10YR 5/2	にじみ-黄褐色 10YR 7/4	特	D-5	
19	鉢	胴部	--	無筋文土	撚成状の調整 (数方向)	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 6/6	灰黄褐色 10YR 4/2	特	D-5	
20	鉢	胴部	--	無筋文土 2本揃え	不明	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 6/6	にじみ-黄褐色 10YR 5/2	特	D-5	
21	鉢	胴部	--	無筋	ナデ	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 7/6	にじみ-黄褐色 10YR 4/2	特	D-5	
22	鉢	胴部	--	無筋	ナデ	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 5/6	にじみ-黄褐色 10YR 7/4	特	D-5	
23	鉢	胴部	--	縄文Rしの上に上縁	撚成状の調整	白色底物 黒化部分	有	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	にじみ-黄褐色 10YR 7/4	特	D-5	7ヶ土
24	鉢	胴部	--	縄文しR・Rしによる羽状模成 山式土器	ナデ及び撚成 状の調整	白色底物 黒化部分	有	明赤褐色 5YR 5/6	明赤褐色 5YR 5/6	特	D-5	



第116図 D-7号土坑出土遺物(1:4)

押型土器 第53表 D-7号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

押型番号	器種	部位	法	足	器形および文様	器型 (内面)	土質	織理	色		構成	出土 位置	図	考
									外面	内面				
1	器種	口縁	-	-	平縁 口縁部下部に刻み 縄文しR・Rしによる羽状織成	口縁部縦・斜 部縦方向のナ テ	白色灰物 黒化切片	右	灰青褐色 10YR 6/6	明黄褐色 10YR 7/5	骨	D-7 1		
2	器種	口縁	-	-	縄文しR	ヨコナテ	白色灰物 黒化切片	右	灰青褐色 10YR 4/2	褐色 7.5YR 5/6	骨	D-7		
3	器種	胴部	-	-	縄文しR	不明	白色灰物 黒化切片	左	黒褐色 10YR 3/2	にじみ・黄褐 10YR 4/2	骨	D-7		
4	器種	胴部	-	-	縄文しR	不明	白色灰物 黒化切片	右	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 4/3	骨	D-7		
5	器種	胴部	-	-	縄文しR	ナテ	白色灰物 黒化切片	右	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	骨	D-7		
6	器種	胴部	-	-	縄文しL	不明	白色灰物 黒化切片	右	灰青褐色 10YR 4/2	褐色 7.5YR 6/6	骨	D-7		
7	器種	胴部	-	-	縄文しL	ナテ	白色灰物 黒化切片	右	黄褐色 10YR 8/6	褐色 7.5YR 7/6	骨	D-7		
8	器種	胴部	-	-	縄文しL	不明	白色灰物 黒化切片	右	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/4	骨	D-7		
9	器種	底部	-	-	縄文しR	羽状の刻痕 (横方向)	白色灰物 黒化切片	右	褐色 5YR 6/6	黒褐色 5YR 3/1	骨	D-7 1		
10	器種	胴部	-	-	縄文文	不明	白色灰物 黒化切片	右	にじみ・黄褐色 10YR 8/4	灰青褐色 10YR 5/2	骨	D-7		
11	器種	胴部	-	-	縄文	ナテ	白色灰物 黒化切片	右	褐色 5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 3/1	骨	D-7		



第117圖 D-13·14号土坑出土遺物 (1:4)



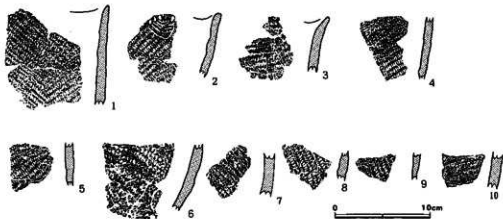
第54表 D-13号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

探出 番号	器 種	部位	状 態	器形および文様	装 飾 (内面)	胎 土	色 調		焼 成	出 土 層	備 考
							外 面	内 面			
1	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rによる羽状線文	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	褐色色 7.5YR 3/3	黒褐色 10YR 2/2	香	D-13
2	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rによる羽状線文	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	黒褐色 10YR 3/1	香	D-13
3	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rによる羽状線文	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ褐色 5YR 5/4	黒褐色 10YR 2/2	香	D-13
4	深 鉢	胴部	-	縄文L・R	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	香	D-13 IV区
5	深 鉢	胴部	-	縄文L・R	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	赤褐色 7.5YR 3/1	黒褐色 10YR 3/2	香	D-13 II区
6	深 鉢	胴部	-	縄文L・R	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	赤褐色 10YR 2/2	黒褐色 10YR 3/2	香	D-13
7	深 鉢	胴部	-	縄文L・L	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/3	にじみ黄褐色 10YR 7/3	香	D-13
8	深 鉢	胴部	-	縄文L・L	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 3/1	香	D-13
9	深 鉢	胴部	-	縄文L・L	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ黄褐色 10YR 5/3	褐色 7.5YR 6/6	香	D-13 I区
10	深 鉢	胴部	-	縄文L・L	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	黒褐色 7.5YR 5/2	香	D-13
11	深 鉢	胴部	-	縄文L・L	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	香	D-13
12	深 鉢	胴部	-	縄文L・Lとの2本揃え 12~15周一体	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	にじみ褐色 7.5YR 6/4	香	D-13
13	深 鉢	胴部	-	縄文L・Lとの2本揃え	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	香	D-13
14	深 鉢	胴部	-	縄文L・Lとの2本揃え	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	香	D-13
15	深 鉢	胴部	-	縄文L・Lとの2本揃え	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	香	D-13

第55表 D-14号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

探出 番号	器 種	部位	状 態	器形および文様	装 飾 (内面)	胎 土	色 調		焼 成	出 土 層	備 考
							外 面	内 面			
1	深 鉢	口縁	-	帯板口縁 縄文L・Rによる羽状線文	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじみ褐色 7.5YR 5/3	香	D-14
2	深 鉢	口縁	-	帯板口縁 縄文L・Rによる羽状線文	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	赤褐色 7.5YR 4/2	灰黄褐色 10YR 5/2	香	D-14
3	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rの方向面による羽状線文	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	赤褐色 10YR 3/2	灰黄褐色 10YR 4/2	香	D-14
4	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rの方向面による羽状線文	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	香	D-14
5	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rの方向面による羽状線文	帯板状の凹線 (横方向)	白色胎物 黒化磁片	有	赤褐色 10YR 3/2	にじみ褐色 7.5YR 5/3	香	D-14
6	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rの方向面による羽状線文	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ黄褐色 10YR 4/3	にじみ黄褐色 10YR 6/4	香	D-14
7	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rの方向面による羽状線文	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ赤褐色 10YR 6/5	黒褐色 10YR 3/2	香	D-14
8	深 鉢	胴部	-	縄文L・Rの方向面による羽状線文	ナデ及び帯板 状の凹線	白色胎物 黒化磁片	有	にじみ黄褐色 10YR 4/3	黒褐色 10YR 3/1	香	D-14

発掘番号	器種	形状	用途	図形および文様	開裂 (内面)	胎土	色調		焼成	出土位置	備考	
							外面	内面				
9	磁鉢	—	—	縄文しR・R.Lによる羽状構成	縦裂の開裂 (数方向)	白色灰物 風化碎片	有	暗褐色 10YR 3/3	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	昔	D-14	
10	磁鉢	—	—	縄文しR・R.Lによる羽状構成	不明	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 4/3	褐色 7.5YR 4/3	昔	D-14	
11	磁鉢	—	—	縄文しR・R.Lによる羽状構成	ナギ及び器底 状の開裂	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	昔	D-14	
12	磁鉢	—	—	縄文しR・R.Lによる羽状構成	ナギ及び器底 状の開裂	白色灰物 風化碎片	有	灰褐色 10YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	昔	D-14	
13	磁鉢	口縁	—	波帯多岐の波帯	ナギ	白色灰物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	昔	D-14	



第118図 D-16号土坑出土遺物(1:4)

第56表 D-16号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘番号	器種	形状	用途	図形および文様	開裂 (内面)	胎土	色調		焼成	出土位置	備考	
							外面	内面				
1	磁鉢	口縁	—	波状口縁? 口唇部に波帯 縄文しR・R.Lによる波状構成	不明	白色灰物 風化碎片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	暗褐色 10YR 3/3	昔	D-16	
2	磁鉢	口縁	—	波状口縁? 口唇部に波帯 器?に4本の波状波帯 縄文しR・R.Lによる波状構成	不明	白色灰物 風化碎片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	D-16	
3	磁鉢	口縁	—	波状口縁? 口唇部に波帯 縄文しR.L上に縦線状波帯	不明	白色灰物 風化碎片	有	暗褐色 10YR 2/2	灰褐色 10YR 4/2	昔	D-16	
4	磁鉢	胴部	—	縄文しR・R.Lによる波状構成	不明	白色灰物 風化碎片	有	明赤褐色 5YR 5/6	灰褐色 10YR 4/2	昔	D-16	
5	磁鉢	胴部	—	縄文しR	不明	白色灰物 風化碎片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	D-16	
6	磁鉢	胴部	—	縄文しR.L	不明	白色灰物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	D-16	
7	磁鉢	胴部	—	縄文しR.L	不明	白色灰物 風化碎片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 10YR 4/2	昔	D-16	
8	磁鉢	胴部	—	縄文しR.L	不明	白色灰物 風化碎片	有	にじみ・赤褐色 5YR 5/4	灰褐色 10YR 4/2	昔	D-16	
9	磁鉢	胴部	—	縄文しR.L	不明	白色灰物 風化碎片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	暗褐色 7.5YR 4/1	昔	D-16	
10	磁鉢	胴部	—	無文	不明	白色灰物 風化碎片	有	暗褐色 5YR 3/2	灰褐色 5YR 4/2	昔	D-16 面区	



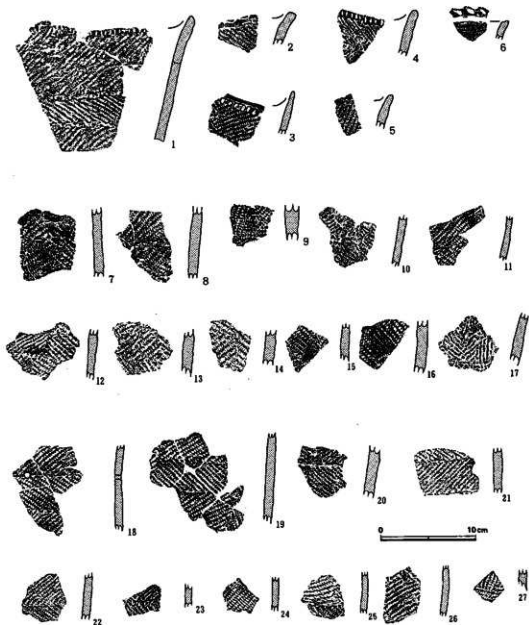
第119图 D-18号土坑出土遗物(1:4)

第57表 D-18号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検番号	器種	部位	出 発	器形および文様	調 査 (内 容)	新 土	編 織	色 調		構成	出 土 数 量	備 考
								外 面	内 面			
1	甌	口縁	--	平縁 縄文しR・Rしによる雲形構成 1-4は同一個体	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 6/4	暗灰黄色 2.5YR 4/2	赤	D-18 1	
2	甌	口縁	--	平縁 縄文しR・Rしによる雲形構成	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 4/2	赤	D-18 1	
3	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 5/2	にじみ黄褐色 10YR 5/2	赤	D-18 1	
4	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 5/4	にじみ黄褐色 10YR 5/2	赤	D-18 1	
5	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 5/4	にじみ黄褐色 10YR 5/2	赤	D-18 1	
6	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 4/2	赤	D-18 7ヶ土	
7	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	不明	白色底物 黒化部分	右	褐色 7.5YR 6/6	にじみ黄褐色 10YR 6/4	赤	D-18 1	
8	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	褐色 7.5YR 6/6	黒褐色 2.5YR 3/1	赤	D-18 7ヶ土	
9	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成 器体の表面処理が見られる	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	暗灰黄色 2.5YR 4/2	灰黄褐色 10YR 4/2	赤	D-18	
10	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	不明	白色底物 黒化部分	右	黄褐色 10YR 5/6	にじみ黄褐色 10YR 5/2	赤	D-18 1	
11	甌	胴部	--	縄文しR・Rしによる雲形構成	不明	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 4/2	にじみ黄褐色 10YR 5/2	赤	D-18	
12	甌	胴部	--	縄文しR	ナデ及び飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	褐色 7.5YR 6/6	灰黄褐色 10YR 4/2	赤	D-18 7ヶ土	
13	甌	胴部	--	縄文しR	不明	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 4/2	赤	D-18	
14	甌	胴部	--	縄文しR	不明	白色底物 黒化部分	右	褐色 7.5YR 6/6	にじみ黄褐色 10YR 5/2	赤	D-18	
15	甌	胴部	--	縄文しR	不明	白色底物 黒化部分	右	暗灰黄色 2.5YR 4/2	灰黄褐色 10YR 4/2	赤	D-18	
16	甌	胴部	--	器体不明	不明	白色底物 黒化部分	右	褐色 7.5YR 6/6	にじみ黄褐色 10YR 6/4	赤	D-18 1	

第58表 D-20号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検番号	器種	部位	出 発	器形および文様	調 査 (内 容)	新 土	編 織	色 調		構成	出 土 数 量	備 考
								外 面	内 面			
1	甌	口縁	--	4単位長さ口縁 □器部にのみ 縄文しR・Rしによる雲形構成 他の部分で連続処理	横筋状の調査 (横方向)	白色底物 黒化部分	右	褐色 7.5YR 4/3	黒褐色 10YR 3/2	赤	D-20	
2	甌	口縁	--	4単位長さ口縁 器体輪郭上に1 条の縦筋状 以下縄文しR	横筋状の調査 (横方向)	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 5/4	暗灰黄色 10YR 6/6	赤	D-20	
3	甌	口縁	--	4単位長さ口縁 器体輪郭に竹管状の 連続処理 以下縄文しR	ナデおよび 飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 7.5YR 4/2	赤	D-20	
4	甌	口縁	--	4単位長さ口縁 □器部にのみ 以下縄文しR	ナデおよび 飾状の調査	白色底物 黒化部分	右	灰黄褐色 10YR 4/2	にじみ黄褐色 10YR 5/2	赤	D-20	
5	甌	口縁	--	4単位長さ口縁? 縄文しR	ナデ	白色底物 黒化部分	右	にじみ黄褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	赤	D-20	



第120図 D-20号土坑出土遺物(1:4)

器種 番号	器種	部位	出處	形状および文様	調査 (内容)	胎土	色調		構成	出土 位置	備考
							外 形	内 面			
6	鉢鉢	口縁	-	平縁? □形状に類み - 斜文	ナデ	白色磁胎 黒化磁片	青 にぶい黄褐色 5YR 4/3	にぶい赤褐色 5YR 5/4	青	D-20	
7	鉢鉢	胴部	-	斜文L・R・Sの方向による - 雲形縞	押痕状の筒縁	白色磁胎 黒化磁片	青 7.5YR 6/6	灰黄褐色 10YR 4/2	青	D-20	
8	鉢鉢	胴部	-	斜文L・R・Sの方向による - 雲形縞	平明	白色磁胎 黒化磁片	青 7.5YR 4/2	にぶい黄褐色 10YR 5/3	青	D-20	
9	鉢鉢	胴部	-	斜文L・R・Sの方向による - 雲形縞	ナデ及び押痕 状の筒縁	白色磁胎 黒化磁片	青 10YR 4/2	にぶい黄褐色 10YR 4/2	青	D-20	

図号	部名	部位	注	図名	図例 (内容)	材	止	色		構成	出土 位置	備考
								外	内			
10	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	扉板状の側面 (横方向)	白色紙物 風化紙片	有	明褐色色 5YR 5/6	にがい質褐色 10YR 5/3	骨	D-20	
11	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	扉板状の側面 (横方向)	白色紙物 風化紙片	有	にがい質褐色 10YR 5/3	灰褐色色 10YR 4/2	骨	D-20	
12	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	不明	白色紙物 風化紙片	有	にがい褐色 7.5YR 5/4	にがい質褐色 10YR 4/3	骨	D-20	
13	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/5	黒褐色 7.5YR 3/1	骨	D-20	
14	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	ナゲ	白色紙物 風化紙片	有	にがい赤褐色 5YR 5/4	黒褐色 10YR 2/2	骨	D-20	
15	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	不明	白色紙物 風化紙片	有	にがい質褐色 10YR 5/4	にがい質 10YR 5/3	骨	D-20	
16	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	扉板状の側面	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/4	灰褐色 7.5YR 4/2	骨	D-20	
17	扉	扉	--	縦文し裏の方向面による装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/4	黒褐色 10YR 3/1	骨	D-20	
18	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	灰褐色色 10YR 4/2	にがい質 10YR 6/4	骨	D-20	
19	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	不明	白色紙物 風化紙片	有	にがい褐色 7.5YR 5/4	にがい褐色 7.5YR 5/4	骨	D-20	
20	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	明褐色 7.5YR 5/6	褐色 7.5YR 4/3	骨	D-20	
21	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	扉板状の側面 (横方向)	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/3	褐色 7.5YR 4/3	骨	D-20	
22	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/3	暗褐色 7.5YR 3/4	骨	D-20	
23	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	にがい質褐色 10YR 5/3	にがい質 10YR 6/4	骨	D-20	
24	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	扉板状の側面 (横方向)	白色紙物 風化紙片	有	にがい褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/3	骨	D-20	
25	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	灰褐色色 10YR 5/2	灰褐色 7.5YR 4/2	骨	D-20	
26	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	にがい質褐色 10YR 5/3	灰褐色 7.5YR 3/2	骨	D-20	
27	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	にがい質褐色 10YR 7/4	にがい褐色 7.5YR 5/3	骨	D-20	
28	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成 他の例で本図参照	扉板状の側面 (斜方向)	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/3	黒褐色 7.5YR 4/2	骨	D-20	
29	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成 他の例で本図参照	扉板状の側面 (斜方向)	白色紙物 風化紙片	有	黒褐色 10YR 3/1	黒褐色 10YR 2/2	骨	D-20	
30	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	にがい質褐色 10YR 7/4	にがい質 10YR 5/3	骨	D-20	
31	扉	扉	--	縦文し裏・表しによる装形構成 他の例で本図参照	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	明褐色 7.5YR 5/6	褐色 10YR 2/2	骨	D-20	
32	扉	扉	--	縦文し裏の縦位施文	不明	白色紙物 風化紙片	有	にがい褐色 7.5YR 5/4	明質褐色 2.5YR 4/2	骨	D-20	
33	扉	扉	--	縦文し裏の縦位施文	ナゲ及び扉板 状の側面	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/4	灰褐色色 10YR 4/2	骨	D-20	
34	扉	扉	--	縦文し裏	不明	白色紙物 風化紙片	有	赤褐色 10YR 3/2	灰褐色色 10YR 4/2	骨	D-20	
35	扉	扉	--	縦文し裏	ナゲ	白色紙物 風化紙片	有	褐色 7.5YR 4/3	灰褐色 7.5YR 4/2	骨	D-20	
36	扉	扉	--	縦文し裏	不明	白色紙物 風化紙片	有	黒褐色 10YR 3/2	にがい質 10YR 5/3	骨	D-20	



第121图 D-20号土坑出土遗物(1:4)

原簿 番号	部 類	部 法	注 意	標記および文様	製 造 (内容)	品 土	織 績	色 調		織成	糸 土 位 置	備 考
								外 面	内 面			
37	織物	織物	--	縦文しし	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 4/4	灰褐色 7.5YR 4/2	帯	D-20	
38	織物	織物	--	縦文しし	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	灰褐色 7.5YR 4/2	帯	D-20	
39	織物	織物	--	縦文しし	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	帯	D-20	
40	織物	織物	--	縦文しし 4)と同一様体	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 4/6	黒褐色 7.5YR 3/1	帯	D-20	
41	織物	織物	--	縦文しし 4)と同一様体	不明	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 4/6	黒褐色 7.5YR 4/2	帯	D-20	
42	織物	織物	--	縦文しし	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 7/6	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	帯	D-20	
43	織物	織物	--	縦文しし	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 4/4	灰褐色 10YR 6/2	帯	D-20	
44	織物	織物	--	縦文しし	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	黄褐色 10YR 4/3	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	帯	D-20	
45	織物	織物	--	縦文しし	不明	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 4/5	黄褐色 10YR 6/6	帯	D-20	
46	織物	織物	--	縦文しし	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	明褐色 7.5YR 5/6	黄褐色 10YR 4/2	帯	D-20	
47	織物	織物	--	縦文しし	縞縞状の調製 (斜方向)	白色系物 風化箔片	有	黒褐色 10YR 3/1	褐色 7.5YR 4/3	帯	D-20	
48	織物	織物	--	無文	不明	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	帯	D-20	
49	織物	織物	--	無文	不明	白色系物 風化箔片	有	にじみ・黄褐色 5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	帯	D-20	
50	織物	織物	--	無文	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	明褐色 5YR 5/6	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	帯	D-20	
51	織物	織物	--	無文	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	明褐色 7.5YR 5/6	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	帯	D-20	
52	織物	織物	--	無文調文しと糸による製形織成	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	褐色 7.5YR 4/3	明褐色 7.5YR 4/2	帯	D-20	
53	織物	織物	--	無文	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	明褐色 7.5YR 5/6	黄褐色 10YR 4/2	帯	D-20	
54	織物	織物	--	無文	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	明褐色 7.5YR 5/6	黄褐色 10YR 4/2	帯	D-20	
55	織物	織物	--	無文	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	黒褐色 2.5Y 3/2	帯	D-20	
56	織物	織物	--	無文	ナゲ及び縞縞 状の調製	白色系物 風化箔片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	黄褐色 10YR 5/2	帯	D-20	
57	織物	織物	--	無文 オセシベ土部	ナゲ	石灰・雲母 風化箔片	無	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	帯	D-20	
58	織物	織物	--	無文 オセシベ土部	ナゲ	石灰・雲母 (斜方向) 風化箔片	無	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	帯	D-20	58・59は同一様体
59	織物	織物	--	無文 オセシベ土部	ナゲ	石灰・雲母 (斜方向) 風化箔片	無	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	帯	D-20	
60	織物	織物	--	無文 オセシベ土部	縞縞状の調製 (斜方向)	石灰・雲母 (多)風化箔片	無	灰褐色 10YR 4/1	黒褐色 10YR 3/1	帯	D-20	

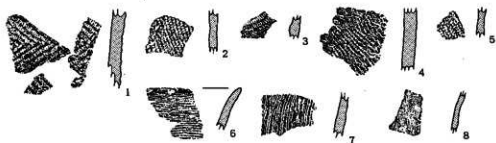




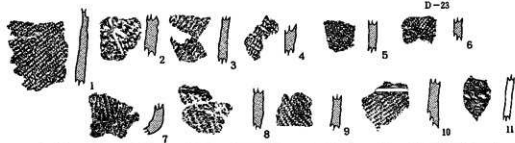
D-21



D-22



D-23



D-25



第122图 D-21·22·23·25号土坑出土遗物(1:4)

第59表 D-21号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

発掘番号	器種	部位	位置	発祥および文様	調査 (内容)	胎土	編織	色調		焼成	出土位置	備考
								外 面	内 面			
1	钵体	胴部	-	縄文L・R・Rしによる羽状縁威	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	褐色 7.5YR 6/6	黒褐色 2.5Y 3/2	普通	D-21	
2	钵体	胴部	-	縄文L・Rしによる羽状縁威	不明	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 7.5YR 5/6	褐色 7.5YR 4/4	普通	D-21	
3	钵体	胴部	-	縄文L・Rしによる羽状縁威	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	黒褐色 10YR 3/1	普通	D-21	
4	钵体	胴部	-	縄文L・R	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	にじみ黄褐色 10YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	普通	D-21	
5	钵体	胴部	-	縄文L・R	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	普通	D-21	
6	钵体	胴部	-	縄文L・R	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	普通	D-21	
7	钵体	胴部	-	縄文Rし	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	普通	D-21	
8	钵体	胴部	-	縄文Rし	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ黄褐色 10YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	普通	D-21	
9	钵体	胴部	-	縄文Rし(縦筋文)	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	明黄褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	普通	D-21	
10	钵体	胴部	-	縄文Rし?	不明	白色胎物 風化岩片	有	明黄褐色 10YR 6/6	黒褐色 10YR 3/1	普通	D-21	
11	钵体	胴部	-	縄文Rし?	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	明褐色 7.5YR 5/6	普通	D-21	
12	钵体	胴部	-	無文 縁威状の陶器	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 7.5YR 5/6	褐色 10YR 4/6	普通	D-21	

第60表 D-22号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

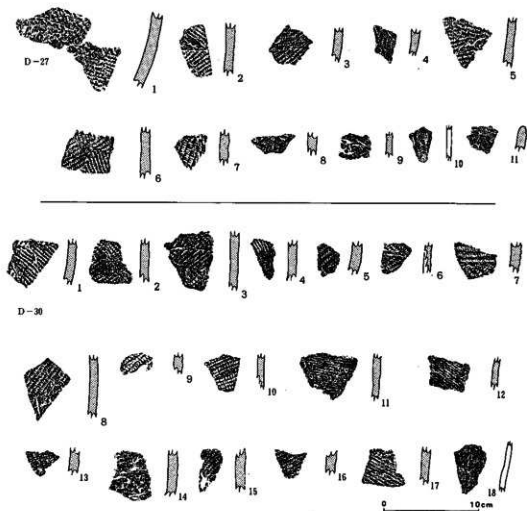
発掘番号	器種	部位	位置	発祥および文様	調査 (内容)	胎土	編織	色調		焼成	出土位置	備考
								外 面	内 面			
1	钵体	胴部	-	縄文L・Rしによる羽状縁威	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	黒褐色 10YR 2/3	褐色 7.5YR 4/4	普通	D-22	
2	钵体	胴部	-	縄文L・R	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	明褐色 10YR 3/2	にじみ黄褐色 10YR 4/2	普通	D-22	
3	钵体	胴部	-	縄文L・R	不明	白色胎物 風化岩片	有	にじみ黄褐色 10YR 4/3	にじみ黄褐色 10YR 5/4	普通	D-22	
4	钵体	胴部	-	縄文Rし	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	にじみ黄褐色 10YR 4/3	黒褐色 10YR 3/1	普通	D-22	
5	钵体	胴部	-	縄文Rし	ナゲ	白色胎物 風化岩片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	普通	D-22	
6	钵体	胴部	-	無文文片	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ黄褐色 10YR 5/4	普通	D-22	
7	钵体	胴部	-	無文文片	ナゲ及び押成 状の陶器	白色胎物 風化岩片	有	褐色 7.5YR 5/6	にじみ黄褐色 10YR 5/4	普通	D-22	
8	钵体	胴部	-	無文 オモンベ全型	縁威状の陶器 (随方向)	石英・雲母 (多)風化岩片	有	にじみ黄褐色 10YR 5/4	褐色 10YR 4/4	普通	D-22	

第61表 D-23号土坑 出土遺物一覧表 &lt;縄文土器&gt;

発掘 番号	器種	部位	注目	形状および文様	調査 (内容)	土質	編織	色 調		焼成	出土 位置	備 考
								外 面	内 面			
1	鉢形	胴部	-	縄文L R	不明	白色灰物 風化切片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	普通	D-23	
2	鉢形	胴部	-	縄文L R	ナデ及び磨痕 状の観察	白色灰物 風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	普通	D-23	
3	鉢形	胴部	-	縄文L R	不明	白色灰物 風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	普通	D-23	
4	鉢形	胴部	-	縄文L R	ナデ及び磨痕 状の観察	白色灰物 風化切片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	灰黄褐色 10YR 4/2	普通	D-23	
5	鉢形	胴部	-	縄文L R	磨痕状の観察	白色灰物 風化切片	有	明褐色 7.5YR 5/6	明赤褐色 5YR 5/6	普通	D-23	
6	鉢形	胴部	-	縄文L R	ナデ及び磨痕 状の観察	白色灰物 風化切片	有	褐色 7.5YR 4/3	黄褐色 10YR 2/3	普通	D-23	
7	鉢形	底面	-	縄文L R	不明	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 2.5Y 7/4	にじみ・黄褐色 2.5Y 6/3	普通	D-23	
8	鉢形	胴部	-	縄文L L	磨痕状の観察 (横方向)	白色灰物 風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	普通	D-23	
9	鉢形	胴部	-	縄文L L	不明	白色灰物 風化切片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	黄褐色 10YR 2/2	普通	D-23	
10	鉢形	胴部	-	縄文R Lと平行沈線	ナデ及び磨痕 状の観察	白色灰物 風化切片	有	明赤褐色 5YR 5/6	明赤褐色 5YR 5/6	普通	D-23	
11	鉢形	胴部	-	L状文の連続列状 石山式	ナデ 磨痕観察等も	白色灰物 風化切片	有	黄褐色 7.5YR 3/1	にじみ・赤褐色 5YR 5/4	普通	D-23	

第62表 D-25号土坑 出土遺物一覧表 &lt;縄文土器&gt;

発掘 番号	器種	部位	注目	形状および文様	調査 (内容)	土質	編織	色 調		焼成	出土 位置	備 考
								外 面	内 面			
1	鉢形	胴部	-	縄文L R・R Lによる磨痕構成	磨痕状の観察 (横方向)	白色灰物 風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	暗赤褐色 2.5Y 4/2	普通	D-25	
2	鉢形	胴部	-	縄文L R・R Lによる磨痕構成	ナデ及び磨痕 状の観察	白色灰物 風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	暗赤褐色 2.5Y 4/2	普通	D-25	
3	鉢形	口縁	-	縄文L R	不明	白色灰物 風化切片	有	褐色 10YR 4/6	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	普通	D-25	
4	鉢形	口縁	-	縄文L L	不明	白色灰物 風化切片	有	明赤褐色 10YR 6/6	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	普通	D-25	
5	鉢形	胴部	-	縄文R Lの磨痕文	ナデ	白色灰物 風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	黄褐色 2.5Y 3/1	普通	D-25	
6	鉢形	胴部	-	縄文R Lによる磨痕子構成	不明	白色灰物 風化切片	有	暗褐色 7.5YR 3/4	褐色 7.5YR 4/3	普通	D-25	
7	鉢形	胴部	-	縄文	ナデ及び 磨痕	白色灰物 風化切片	有	赤褐色 5YR 4/6	褐色 10YR 2/1	普通	D-25	
8	鉢形	胴部	-	縄文	磨痕	白色灰物 風化切片	有	にじみ・赤褐色 5YR 5/4	黄褐色 5YR 4/1	普通	D-25	



第123図 D-27・30号土坑出土遺物(1:4)

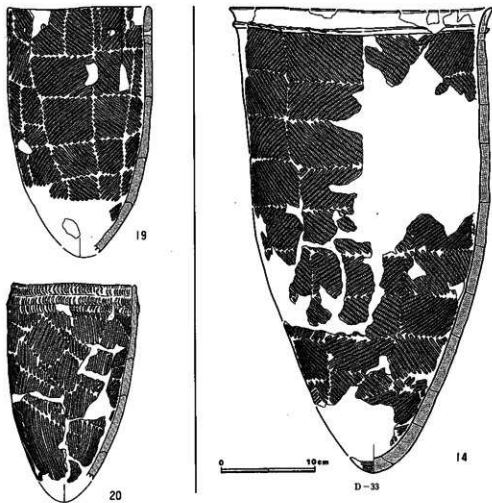
第63表 D-27号土坑 出土遺物一覽表 <編文土器>

群別 番号	群名	形状	用途	面刺および文様	器型 (内面)	胎土	色 調		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1	群名	群名	-	縦文し京・文しによる羽状構成	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	暗褐色 7.5YR 5/6	黒褐色 10YR 3/1	香	D-27
2	群名	群名	-	縦文し京・文しによる羽状構成	ナデ及び指痕 状の残存	白色胎物 黒化磁片	有	暗灰黄褐色 2.5Y 4/2	暗灰黄褐色 2.5Y 4/2	香	D-27
3	群名	群名	-	縦文し京・文しによる羽状構成	ナデ	白色胎物 黒化磁片	有	黒褐色 10YR 3/2	に濃い黄褐色 10YR 5/4	香	D-27 11E
4	群名	群名	-	縦文し京・文しによる羽状構成	ナデ及び指痕 状の残存	白色胎物 黒化磁片	有	褐色 7.5YR 4/3	褐色 7.5YR 4/3	香	D-27
5	群名	群名	-	縦文し京・文しによる羽状構成	ナデ及び指痕 状の残存	白色胎物 黒化磁片	有	暗赤褐色 5YR 5/6	に濃い黄褐色 10YR 5/3	香	D-27
6	群名	群名	-	縦文し京・文しによる羽状構成	ナデ及び指痕 状の残存	白色胎物 黒化磁片	有	に濃い黄褐色 10YR 5/4	に濃い黄褐色 10YR 7/3	香	D-27

標本 番号	器種	部位	数量	形状および文様	調査 (内容)	出土 層	色 調		施 装	出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面			
7	漆器	胴部	--	縄文L.R	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	暗灰褐色 2.5Y 7/4	暗灰褐色 2.5Y 4/2	香	D-27
8	漆器	胴部	--	縄文L.L	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 10YR 5/4	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	香	D-27
9	漆器	胴部	--	縄文	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	暗褐色 7.5YR 5/6	暗褐色 10YR 3/2	香	D-27
10	漆器	胴部	--	縄文	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	香	D-27
11	漆器	胴部	--	縄文	ナブ	白色灰物 黒化粘片	有	にじみ-黄褐色 10YR 4/3	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	香	D-27

第64表 D-30号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

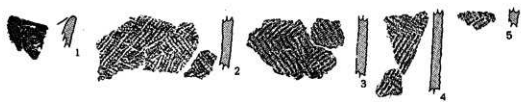
標本 番号	器種	部位	数量	形状および文様	調査 (内容)	出土 層	色 調		施 装	出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面			
1	漆器	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる羽状模成	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	暗灰褐色 10YR 6/6	暗褐色 7.5YR 5/6	香	D-30
2	漆器	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる羽状模成	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	にじみ-暗褐色 10YR 6/4	にじみ-黄褐色 10YR 4/3	香	D-30
3	漆器	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる羽状模成	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	暗色 7.5YR 6/6	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	香	D-30
4	漆器	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる羽状模成	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	にじみ-黄褐色 10YR 4/3	褐色 10YR 4/6	香	D-30 II区
5	漆器	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる羽状模成		白色灰物 黒化粘片	有	暗色 7.5YR 6/6	暗灰褐色 2.5YR 4/2	香	D-30
6	漆器	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる羽状模成	不明	白色灰物 黒化粘片	有	灰褐色 10YR 4/2	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	香	D-30
7	漆器	胴部	--	縄文L.R・R.Lによる羽状模成	ナブ	白色灰物 黒化粘片	有	暗褐色 10YR 2/2	灰褐色 10YR 4/2	香	D-30
8	漆器	胴部	--	縄文L.R	羽状模の附属 (腹方向)	白色灰物 黒化粘片	有	灰褐色 10YR 4/2	にじみ-黄褐色 10YR 5/3	香	D-30
9	漆器	胴部	--	縄文L.R	不明	白色灰物 黒化粘片	有	にじみ-暗褐色 5YR 5/4	にじみ-褐色 7.5YR 6/3	香	D-30
10	漆器	胴部	--	縄文R.L	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	褐色 7.5YR 4/4	にじみ-黄褐色 10YR 4/3	香	D-30
11	漆器	胴部	--	無彫縄文R	羽状模の附属 (腹方向)	白色灰物 黒化粘片	有	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	暗色 7.5YR 6/6	香	D-30
12	漆器	胴部	ε	無彫縄文R	ナブ	白色灰物 黒化粘片	有	灰褐色 10YR 4/2	暗褐色 10YR 2/2	香	D-30
13	漆器	胴部	--	縄文R.L	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	明褐色 5YR 5/6	暗色 7.5YR 6/6	香	D-30
14	漆器	胴部	--	形状不明	ナブ	白色灰物 黒化粘片	有	暗褐色 7.5YR 6/6	暗褐色 10YR 3/2	香	D-30
15	漆器	胴部	--	形状不明	羽状模の附属 (腹方向)	白色灰物 黒化粘片	有	暗褐色 10YR 3/3	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	香	D-30
16	漆器	胴部	--	形状不明	不明	白色灰物 黒化粘片	有	暗色 7.5YR 4/3	にじみ-黄褐色 10YR 6/4	香	D-30
17	漆器	胴部	--	形状不明	ナブ及び漆灰 状の附属	白色灰物 黒化粘片	有	暗褐色 10YR 3/2	にじみ-褐色 7.5YR 5/3	香	D-30
18	漆器	胴部	--	オモンベ土器	腹方向の羽状 模の附属	石灰 器母(多) 黒化粘片	無	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	にじみ-黄褐色 10YR 4/3	香	D-30 HC



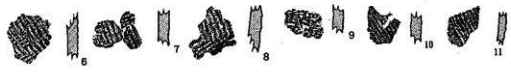
第124図 D-30・33号土坑出土遺物 (1:4)

第65表 D-30・33号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	器種	部位	長さ	形状および文様	土質 (内面)	土質	色		土質 状態	出土 層	
							外面	内面			
19	陶器	底部	15.0 25.9	平縁 縄文し京・Rしによる器状構成	ナデ	白色底物 黒化部分	有	にぶい褐色 7.5YR 6/4	褐色 7.5YR 5/1	骨 D-30 1	埋蔵品あり
20	陶器	底部	12.8 22.9	平縁 口縁下に1条の輪帯のぐら し、その間に底形の刻みを3回重 複する。口唇部に同様の刻み 縄文直しの斜方向縄文	ナデ (横方向)	白色底物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 4/1	褐色 7.5YR 6/6	骨 D-30 2	
12	陶器	底部	27.7 48.3	平縁 口縁部下1条の輪帯 縄文し直・Rしによる器状構成	ナデ (横方向)	白色底物 黒化部分	有	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 6/7	骨 D-33 3	



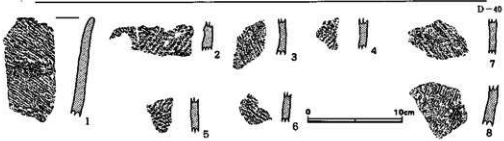
D-32



D-33



D-35



D-40

第125图 D-32·33·35·40号土坑出土遗物(1:4)

第66表 D-32号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

発掘 番号	部 位	品 目	形状および文様	調査 (河面)	材 土	色 調		土 質	土 位 層	備 考	
						外 面	内 面				
1	器鉢	口縁 -	透状口縁? 無文	横方向のナデ	白色磁物 風化碎片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい黄褐色 10YR 6/4	普	D-32	
2	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの雲形構成	縦横方向の 磨痕	白色磁物 風化碎片	有	にぶい褐色 7.5YE 5/4	帯褐色 7.5YR 3/4	普	D-32	
3	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの雲形構成	ナデ及び磨痕 状の磨痕	白色磁物 風化碎片	有	明褐色 7.5YR 5/6	黒色 10YR 2/1	普	D-32 1	
4	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの雲形構成	ナデ	白色磁物 風化碎片	有	赤褐色 10YR 2/2	黒褐色 10YR 3/1	普	D-32	
5	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの雲形構成	ナデ	白色磁物 風化碎片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/4	黒褐色 7.5YR 3/1	普	D-32	
6	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの羽状構成	ナデ及び磨痕 状の磨痕	白色磁物 風化碎片	有	にぶい褐色 10YR 4/3	黒褐色 10YR 2/2	普	D-32	
7	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの羽状構成	ナデ及び磨痕 状の磨痕	白色磁物 風化碎片	有	褐色 10YR 4/4	赤褐色 10YR 2/2	普	D-32	
8	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの羽状構成	ナデ及び磨痕 状の磨痕	白色磁物 風化碎片	有	明赤褐色 5YR 3/6	赤褐色 7.5YR 3/1	普	D-32	
9	器鉢	胴部 -	縄文L.R・R.Lの羽状構成	不明	白色磁物 風化碎片	有	明褐色 10YR 3/3	にぶい黄褐色 10YR 5/4	普	D-32	
10	器鉢	胴部 -	縄文R.L	不明	白色磁物 風化碎片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	普	D-32	
11	器鉢	胴部 -	縄文R.L	磨痕状の磨痕 (縦方向)	白色磁物 風化碎片	有	灰黄褐色 10YR 5/2	にぶい黄褐色 10YR 4/3	普	D-32	



第67表 D-33・35号土坑 出土遺物一覽表 &lt;縄文土器&gt;

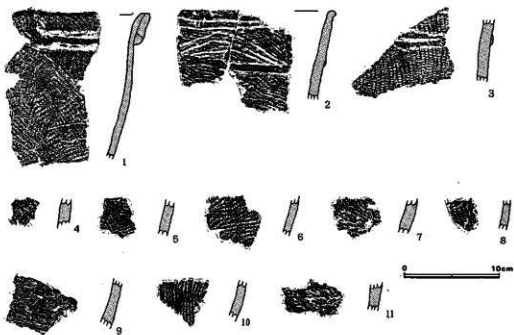
発掘番号	種類	部位	法 量	形状および文様	調査 (内訳)	土 質	色 調		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1	深鉢	口縁	-	4条放射状口縁 他の縁による半 輪形模 縄文L R・R Lによる羽 状線文	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	D-33
2	深鉢	胴部	-	縄文L R・R Lによる羽状線文	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 5YR 6/6	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	昔	D-33
3	深鉢	胴部	-	縄文L R・R Lによる羽状線文	不明	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	昔	D-33
4	深鉢	胴部	-	縄文L R・R Lによる羽状線文	磨成状の調整 (縦方向)	白色灰物 炭化磁片	有	赤褐色 7.5YR 2/2	C.20・褐色 7.5YR 5/4	昔	D-33
5	深鉢	胴部	-	縄文R L	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	にじみ・赤褐色 5YR 4/4	赤褐色 5YR 3/1	昔	D-33
6	深鉢	胴部	-	縄文L R	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	赤褐色 7.5YR 3/1	昔	D-33
7	深鉢	胴部	-	縄文L R	ナズ	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 2/1	昔	D-33
8	深鉢	胴部	-	縄文R L	ナズ	白色灰物 炭化磁片	有	明赤褐色 5YR 5/6	赤褐色 5YR 2/1	昔	D-33
9	深鉢	胴部	-	無文	ナズ	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 4/3	昔	D-33
10	深鉢	胴部	-	無文	磨成状の調整 (縦方向)	白色灰物 炭化磁片	有	明赤褐色 5YR 5/6	赤褐色 5YR 3/1	昔	D-33
11	深鉢	胴部	-	無文	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	C.20・褐色 7.5YR 5/2	昔	D-33
12	深鉢	胴部	-	獅子目状の紋様	ナズ	白色灰物 炭化磁片	有	灰黄褐色 10YR 5/2	灰褐色 10YR 4/6	昔	D-33
13	深鉢	底面	-	縄文L R・R Lによる放射線文	ナズ	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	C.20・褐色 7.5YR 5/2	昔	D-35

第68表 D-40号土坑 出土遺物一覽表 &lt;縄文土器&gt;

発掘番号	種類	部位	法 量	形状および文様	調査 (内訳)	土 質	色 調		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1	深鉢	胴部	-	半輪? 縄文R L 色の境で無文模	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 5YR 6/6	にじみ・褐色 7.5YR 6/2	昔	D-40
2	深鉢	胴部	-	縄文L R・R Lによる羽状線文	不明	白色灰物 炭化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 6/2	昔	D-40
3	深鉢	胴部	-	縄文L R・R Lによる羽状線文	ナズ	白色灰物 炭化磁片	有	赤褐色 2.5YR 4/6	赤褐色 5YR 2/2	昔	D-40
4	深鉢	胴部	-	縄文R L	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	明赤褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	昔	D-40 1 IV区
5	深鉢	胴部	-	縄文R L	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	にじみ・赤褐色 5YR 4/4	明赤褐色 5YR 3/3	昔	D-40
6	深鉢	胴部	-	縄文R L	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	赤褐色 7.5YR 2/2	赤褐色 7.5YR 3/4	昔	D-40
7	深鉢	胴部	-	無文R Lの2本輪と	ナズ	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 7.5YR 6/6	赤褐色 10YR 2/3	昔	D-40
8	深鉢	胴部	-	無文R L	ナズ及び磨成 状の調整	白色灰物 炭化磁片	有	褐色 7.5YR 7/6	にじみ・褐色 7.5YR 7/4	昔	D-40



第126图 D-34号土坑出土遗物 (1:4)



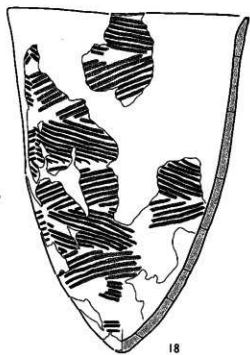
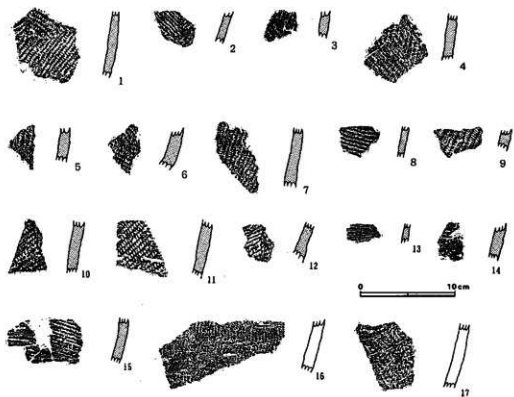
第127图 D-39号土坑出土遗物 (1:4)

第69表 D-34号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

検出 番号	器種	部位	注目	形状および文様	器種 (内面)	胎土	色 調		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1	弥生	口縁 ～ 胴部	-	4単位装設口縁 口縁部下に刻み をもつ輪帯 以下縄文LR・Rし による変形輪帯 胎帯下幅広く 波帯の組み合おせ斜行波線と、胎帯部 下に波状の波線	ヨコナデ	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	D-34 1
2	弥生	胴部	-	縄文LR・Rしによる羽状輪帯	不明	白色磁物 黒化磁片	有	黒褐色 10YR 2/2	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	D-34 1
3	弥生	胴部	-	縄文LR・Rしによる羽状輪帯	不明	白色磁物 黒化磁片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	灰黄褐色 10YR 5/2	昔	D-34 4
4	弥生	胴部	-	半段竹管状工具による斜行文と透 輪帯文	ナデ	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	昔	D-34

第70表 D-39号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

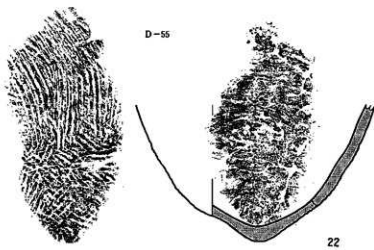
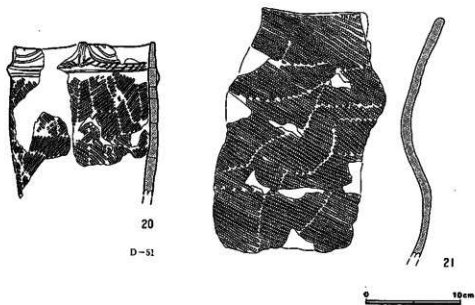
検出 番号	器種	部位	注目	形状および文様	器種 (内面)	胎土	色 調		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1	弥生	口縁	-	4単位装設口縁 波帯部から胎帯 帯下し、口縁部下に透する胎帯 と透輪帯文LR・Rしによる羽状 輪帯	口縁部縦、胴 部縦方向のナ デ	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	黄褐色 7.5YR 4/2	昔	D-39 3
2	弥生	口縁	-	波状口縁? 口唇部と口縁部下に 2条の胎帯 波帯部からも胎帯 下胎帯帯は2条の斜行波線と3条 の波状胎帯 縄文Rし	縦方向のナデ	白色磁物 黒化磁片	有	明褐色 7.5YR 5/6	褐色 10YR 4/6	昔	D-39 3
3	弥生	胴部	-	口縁下に胎帯 胎帯上に1条の透 輪帯 縄文Rしの透文	不明	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	黒褐色 2.5YR 3/2	昔	D-39
4	弥生	胴部	-	縄文LR・Rしの羽状輪帯	不明	白色磁物 黒化磁片	有	明黄褐色 10YR 6/6	明黄褐色 10YR 6/6	昔	D-39
5	弥生	胴部	-	縄文LR・Rしの羽状輪帯	ナデ及び胎帯 透の透輪	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	昔	D-39
6	弥生	胴部	-	縄文LR・Rしの羽状輪帯	透輪帯の透輪 (縦方向)	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 5YR 4/3	にじみ・赤褐 5YR 4/3	昔	D-39
7	弥生	胴部	-	半段縄文	透輪帯の透輪 (縦方向)	白色磁物 黒化磁片	有	明褐色 7.5YR 5/6	黒褐色 7.5YR 3/1	昔	D-39
8	弥生	胴部	-	縄文LR	ナデ	白色磁物 黒化磁片	有	灰黄褐色 10YR 4/2	灰黄褐色 10YR 4/2	D-39	3
9	弥生	胴部	-	透本文しとRの2条帯と	縦帯方向のナ デ	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	D-39
10	弥生	胴部	-	透本文し	ナデ	白色磁物 黒化磁片	有	明褐色 7.5YR 5/6	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	D-39	3
11	弥生	胴部	-	透本文R	不明	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 4/3	にじみ・黄褐 10YR 4/4	昔	D-39



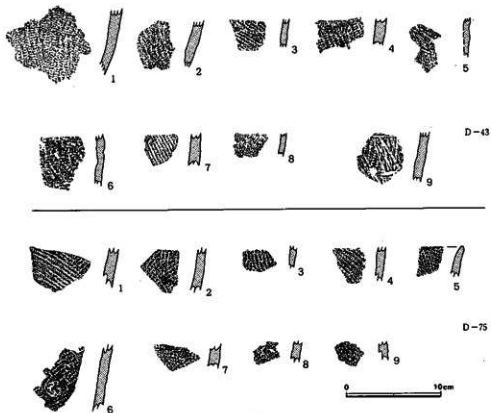
第128图 D-51号土坑出土遗物 (1:4)

第71表 D-51・55号土坑 出土遺物一覽表 (縄文土器)

標本番号	器種	形状	法量	形状および文様	図案(内面)	粘土	色調		焼成	出土位置	備考
							外面	内面			
1	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Lによる雲形縞	ナデ及び彫刻状の縞	白色粘物風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 5/4 明褐色 7.5YR 5/6	特	D-51	
2	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Lによる雲形縞	ナデ及び彫刻状の縞	白色粘物風化切片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4 灰褐色 7.5YR 4/2	特	D-51	
3	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Lによる雲形縞	不明	白色粘物風化切片	有	褐色 7.5YR 6/6 灰褐色 7.5YR 4/2	特	D-51	
4	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Lによる縦長の雲形縞	縞状の縞(縦方向)	白色粘物風化切片	有	明褐色 7.5YR 5/6 高褐色 10YR 3/1	特	D-51	5と同一体
5	深鉢	胴部	—	縄文L・R・Lによる縦長の雲形縞	縞状の縞(縦方向)	白色粘物風化切片	有	明褐色 7.5YR 5/6 高褐色 10YR 3/1	特	D-51	4と同一体
6	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ	白色粘物風化切片	有	褐色 7.5YR 4/4 高褐色 7.5YR 3/1	特	D-51	
7	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ	白色粘物風化切片	有	褐色 7.5YR 4/3 灰褐色 7.5YR 4/2	特	D-51	
8	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ及び彫刻状の縞	白色粘物風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4 にじみ・黄褐色 10YR 7/4	特	D-51	
9	深鉢	胴部	—	縄文L・R	不明	白色粘物風化切片	有	褐色 7.5YR 6/6 高褐色 7.5YR 3/1	特	D-51	
10	深鉢	胴部	—	縄文L・R	縞状の縞(縦方向)	白色粘物風化切片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4 にじみ・褐色 7.5YR 3/2	特	D-51	
11	深鉢	胴部	—	縄文L・R	縞状の縞(縦方向)	白色粘物風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4 にじみ・黄褐色 10YR 6/3	特	D-51	
12	深鉢	胴部	—	縄文L・R	ナデ	白色粘物風化切片	有	にじみ・赤褐色 5YR 5/3 高褐色 5YR 3/1	特	D-51	
13	深鉢	胴部	—	黒赤文とRの2半部入	ナデ	白色粘物風化切片	有	明赤褐色 5YR 5/6 高褐色 10YR 3/1	特	D-51	
14	深鉢	胴部	—	全体不明	ナデ	白色粘物風化切片	有	黄褐色 10YR 5/6 褐色 7.5YR 6/6	特	D-51	
15	深鉢	胴部	—	全体不明	ナデ及び彫刻状の縞	白色粘物風化切片	有	にじみ・黄褐色 7.5YR 5/3 にじみ・褐色 7.5YR 5/4	特	D-51	
16	深鉢	胴部	—	常の縄文	ナデ及び彫刻状の縞	白色粘物風化切片	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4 にじみ・褐色 7.5YR 5/3	特	D-51	
17	深鉢	胴部	—	常の縄文	ナデ及び彫刻状の縞	白色粘物風化切片	有	明赤褐色 5YR 3/6 高褐色 7.5YR 3/1	特	D-51	
18	深鉢	口縁部	(25.4) 36.9	平縁で口縁部直立 両唇尖直 黒赤文とRの2半部入による羽状縞	ナデ (方角ワンダム)	白色粘物風化切片	有	にじみ・赤褐色 5YR 5/4 にじみ・赤褐色 5YR 5/4	特	D-51 No1	
19	深鉢	口縁部	10.9 (19.2)	平縁 やや下膨らみの内唇形 縄文L・Rの縦位縞	ナデ	白色粘物風化切片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4 にじみ・黄褐色 10YR 7/4	特	D-51 No1	
20	深鉢	口縁部	14.8 (16.3)	4半位波状口縁 黒赤文と口縁部下に赤みを帯びた縁 口縁部に黒色の波状2条 縄文L・R・Lによる羽状縞	口縁部・黄褐色方角ナデ	白色粘物風化切片	有	にじみ・褐色 5YR 6/4 にじみ・褐色 5YR 6/4	特	D-51 No1	
21	深鉢	口縁部	—	平縁 口縁部はくぼく外見 彫刻縞も。全型に縄文L・R	ヨコナデ	白色粘物風化切片	有	にじみ・黄褐色 10YR 6/4 にじみ・褐色 5YR 6/4	特	D-51	
22	深鉢	口縁部	—	乳唇状尖直 無彫刻文	縞状の縞(縦方向)	白色粘物風化切片	有	にじみ・褐色 5YR 6/6 黄褐色 5YR 4/1	特	D-55 No1	



第129图 D-51·55号土坑出土遗物 (1:4)



第130図 D-43・75号土坑出土遺物(1:4)

第72表 D-43号土坑 出土遺物一覽表 <縄文土器>

図録番号	器種	部位	法名	形状および文様	調査 (内容)	胎土	編織	色		焼成	出土位置	備考
								外	内			
1	钵体	胴部	-	縄文R上の縄文	扇状の剥離 (横方向)	白色灰物 黒化部分	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	灰褐色 10YR 4/7	普通	D-43	
2	钵体	胴部	-	縄文R上の縄文	不明	白色灰物 黒化部分	有	明赤褐色 5YR 5/6	黒褐色 5YR 2/1	普通	D-43	
3	钵体	胴部	-	縄文R上	不明	白色灰物 黒化部分	有	褐色 7.5YR 6/6	明赤褐色 5YR 5/6	普通	D-43	
4	钵体	胴部	-	縄文R上	不明	白色灰物 黒化部分	有	明赤褐色 5YR 5/6	黒褐色 5YR 2/1	普通	D-43	
5	钵体	胴部	-	縄文R上	不明	白色灰物 黒化部分	有	暗赤褐色 5YR 2/3	黒褐色 5YR 3/1	普通	D-43	
6	钵体	胴部	-	縄文R上	不明	白色灰物 黒化部分	有	暗赤褐色 5YR 3/4	黒褐色 5YR 3/1	普通	D-43	
7	钵体	胴部	-	縄文R上	ナデ及び擦痕 状の剥離	白色灰物 黒化部分	有	にじみ黄褐色 10YR 7/4	灰褐色 7.5YR 4/2	普通	D-43	
8	钵体	胴部	-	縄文R上	不明	白色灰物 黒化部分	有	明赤褐色 5YR 5/6	褐色 7.5YR 4/3	普通	D-43	
9	钵体	胴部	-	縄文R上に扇状の剥離	扇状の剥離 (横方向)	白色灰物 黒化部分	有	にじみ黄褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	普通	D-43	

第73表 D-75号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘番号	器種	部位	出 土 位置	形状および文様	調査 (内面)	胎 土	色 調		焼成	土 位 置	備 考	
							色 調					
							外 面	内 面				
1	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり・R.Lによる羽状模成	不明	白色灰物 風化破片	有	にじり・褐色 7.5YR 5/4	にじり・褐色 7.5YR 5/3	特	D-75	
2	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり・R.Lによる羽状模成	ナデ及び羽状模成の調査	白色灰物 風化破片	有	明赤褐色 5YR 5/6	暗赤褐色 5YR 3/2	特	D-75	
3	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり・R.Lによる羽状模成	不明	白色灰物 風化破片	有	明赤褐色 5YR 5/6	明赤褐色 5YR 5/6		D-75	
4	甕 鉢	胴部	—	縄文R.L	不明	白色灰物 風化破片	有	にじり・褐色 7.5YR 6/4	にじり・褐色 7.5YR 5/3	特	D-75	
5	甕 鉢	口縁	—	縄文文系	不明	白色灰物 風化破片	有	にじり・黄褐色 10YR 6/3	灰褐色 10YR 4/2	特	D-75	
6	甕 鉢	胴部	—	形状不明	不明	白色灰物 風化破片	有	にじり・黄褐色 10YR 6/4	にじり・褐色 7.5YR 5/4	特	D-75	
7	甕 鉢	胴部	—	形状不明	ナデ	白色灰物 風化破片	有	赤褐色 2.5YR 4/8	褐色 7.5YR 7/6	特	D-75	
8	甕 鉢	胴部	—	形状不明	不明	白色灰物 風化破片	有	にじり・黄褐色 10YR 6/3	明赤褐色 10YR 6/6	特	D-75	
9	甕 鉢	胴部	—	形状不明	不明	白色灰物 風化破片	有	赤褐色 5YR 4/6	にじり・黄褐色 5YR 4/3	特	D-75	

第74表 D-90号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘番号	器種	部位	出 土 位置	形状および文様	調査 (内面)	胎 土	色 調		焼成	土 位 置	備 考	
							色 調					
							外 面	内 面				
1	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり・R.Lによる羽状模成	ナデ及び羽状模成の調査	白色灰物 風化破片	有	明赤褐色 5YR 5/6	暗褐色 5YR 3/1	特	D-90	
2	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり・R.Lによる羽状模成	ナデ及び羽状模成の調査	白色灰物 風化破片	有	にじり・褐色 7.5YR 5/4	にじり・黄褐色 10YR 6/3	特	D-90	
3	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり・R.Lによる羽状模成	ナデ	白色灰物 風化破片	有	にじり・赤褐色 5YR 5/4	明赤褐色 5YR 5/6	特	D-90	
4	甕 鉢	胴部	—	縄文R.L	ナデ	白色灰物 風化破片	有	にじり・褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	特	D-90	
5	甕 鉢	胴部	—	縄文R.L	縁部模成の調査 (横方向)	白色灰物 風化破片	有	褐色 7.5YR 6/6	にじり・黄褐色 7.5YR 5/3	特	D-90	
6	甕 鉢	胴部	—	縄文しじりとR.Lとの組合	不明	白色灰物 風化破片	有	褐色 7.5YR 7/6	灰褐色 7.5YR 5/2	特	D-90	

第75表 D-100号土坑 出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘番号	器種	部位	出 土 位置	形状および文様	調査 (内面)	胎 土	色 調		焼成	土 位 置	備 考	
							色 調					
							外 面	内 面				
1	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり・R.Lによる羽状模成の上には無文赤褐色?	縁部赤褐色?	白色灰物 風化破片	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 10YR 4/2	特	D-100	
2	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり	ナデ及び羽状模成の調査	白色灰物 風化破片	有	暗赤褐色 5YR 3/6	暗褐色 10YR 3/1	特	D-100	
3	甕 鉢	胴部	—	縄文R.L	不明	白色灰物 風化破片	有	褐色 7.5YR 7/6	にじり・黄褐色 10YR 7/4	特	D-100	
4	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり	ナデ	白色灰物 風化破片	有	にじり・褐色 7.5YR 5/4	白色 7.5YR 2/1	特	D-100	
5	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり	縁部模成の調査 (縦方向)	白色灰物 風化破片	有	灰褐色 7.5YR 4/2	にじり・褐色 7.5YR 6/4	特	D-100	
6	甕 鉢	胴部	—	縄文しじり	縁部模成の調査 (横方向)	白色灰物 風化破片	有	にじり・黄褐色 10YR 6/3	にじり・褐色 7.5YR 7/4	特	D-100	
7	甕 鉢	胴部	—	縄文しじりとR.Lとの組合	ナデ	白色灰物 風化破片	有	にじり・赤褐色 5YR 5/4	暗褐色 10YR 3/1	特	D-100	





第131図 D-90・91・100号土坑出土遺物(1:4)

第76表 D-91号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

器物番号	器種	形状	用途	形状および文様	調査 (内容)	出土	数量	色		組成	出土 位置	備考
								外面	内面			
1	甕	胴部	-	4単位並列の縁、口唇部と口縁部に下部に2本の筋をもちつ幅窄帯状部から口唇部を境下以下縄文文様	コナナシ	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・黄褐色 10YR 7/4	10YR 6/3	曹	D-91 溝底	器種未定?
2	甕	胴部	-	縄文L・R・Rしによる羽状構成	縦方向縞状の羽飾	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・赤褐色 5YR 5/4	赤褐色 5YR 3/1	曹	D-91 溝底	
3	甕	胴部	-	縄文L・R・Rしによる羽状構成	縞状の羽飾 (斜方向)	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・赤褐色 5YR 5/4	赤褐色 5YR 3/2	曹	D-91	
4	甕	胴部	-	縄文L・R・Rしによる羽状構成	ナシ	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	灰黒褐色 10YR 4/2	曹	D-91	
5	甕	胴部	-	縄文L・R・Rしによる羽状構成	ナシ及び縞状の羽飾	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 7/4	にじみ・褐色 7.5YR 5/3	曹	D-91	
6	甕	胴部	-	縄文L・R・Rしによる羽状構成	不明	白色磁物 黒化磁片	有	にじみ・褐色 7.5YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	曹	D-91 溝底	
7	甕	口縁	-	縄文文様	不明	白色磁物 黒化磁片	有	赤褐色 2.5YR 6/6	赤色 10YR 2/1	曹	D-91 溝底	

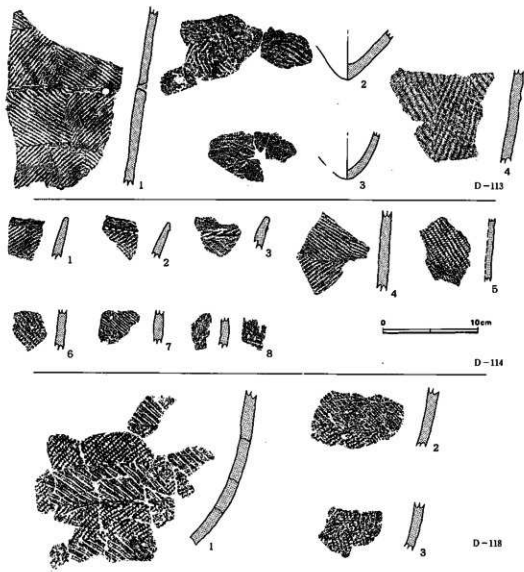


第132図 D-108号土坑出土遺物(1:4)

第77表 D-108号土坑 出土遺物一覽表 <縄文土器>

発掘 番号	器 種	部位	法 定	形状および文様	陶 質 (内面)	胎 土	編 織	色		組成	土 質 土 記 号	備 考
								外 面	内 面			
1	片 断	口縁	-	4単位単位口縁 口唇部及び胎面上に刻み 以下縦文L R・R Lによる斜線構成	厚板状の陶胎 (硬方向)	白色胎物 風化碎片	有	褐色 7.5YR 4/4	同上(裏面) 10YR 4/3	骨	D-108 1区 1層	
2	片 断	口縁	-	縦線口縁? 口唇部及び胎面上に刻み 以下縦文L R	厚板状の陶胎 (硬方向)	白色胎物 風化碎片	有	黒褐色 10YR 3/2	同上(裏面) 10YR 6/3	骨	D-108 1区	

種別 番号	種別	部位	法 量	製法および文様	図 案 (内面)	基 土	織 績	色 調		織 式	主 位 置	備 考
								外 面	内 面			
3	織 物	口縁	-	口唇部厚 - 純文L R	ナゲ及び縞成 状の調態	白色絨物 風化着片	有	褐色 7.5YR 4/3	にじみ褐色 7.5YR 5/4	替	D-108 1区 1層	
4	織 物	口縁	-	平織? 口唇部にのみ - 純文L R	ナゲ	白色絨物 風化着片	有	黒褐色 10YR 3/2	灰褐色 10YR 5/2	替	D-108 IV区 1層	
5	織 物	胴部	-	平織? 純文L R・R Lによる羽状織成	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/2	にじみ黄褐色 10YR 4/3	替	D-108 III区 1層	
6	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	ナゲ	白色絨物 風化着片	有	褐色 7.5YR 6/5	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	D-108 III区 1層	
7	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	不明	白色絨物 風化着片	有	褐色 7.5YR 6/5	にじみ黄褐色 10YR 6/3	替	D-108 II区 1層	
8	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	不明	白色絨物 風化着片	有	にじみ黄褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	D-108 1区 1層	
9	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	ナゲ及び縞成 状の調態	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/3	替	D-108 1区 1層	
10	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	黒褐色 10YR 2/2	7.5YR 4/3	替	D-108 III区 1層	
11	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	D-108 1区 1層	
12	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	褐色 7.5YR 2/1	黒褐色 10YR 3/1	替	D-108 II区 1層	
13	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	7.5YR 4/2	替	D-108 III区 1層	
14	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	ナゲ及び縞成 状の調態	白色絨物 風化着片	有	にじみ黄褐色 10YR 6/4	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	D-108 III区 1層	
15	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	褐色 10YR 3/3	替	D-108 IV区 1層	
16	織 物	胴部	-	純文L R・R Lによる羽状織成	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	褐色 10YR 4/4	替	D-108 III区 1層	
17	織 物	胴部	-	純文R L 地純文文の末端出現	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	褐色 10YR 4/4	にじみ黄褐色 10YR 5/4	替	D-108 III区 1層	
18	織 物	胴部	-	純文R L	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	赤褐色 2.5YR 4/5	にじみ褐色 7.5YR 5/4	替	D-108 II区 1層	1区同一個体
19	織 物	胴部	-	純文R L	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	赤褐色 2.5YR 4/5	7.5YR 5/6	替	D-108 1区 1層	
20	織 物	胴部	-	純文R L	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 6/6	替	D-108 III区 1層	
21	織 物	胴部	-	純文R L	不明	白色絨物 風化着片	有	黒褐色 10YR 2/2	黒褐色 10YR 2/2	替	D-108 II区 1層	
22	織 物	胴部	-	純文R L	ナゲ及び縞成 状の調態	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	にじみ褐色 7.5YR 6/4	替	D-108 1区 1層	
23	織 物	胴部	-	純文R L	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	明赤褐色 3YR 5/5	替	D-108 IV区 1層	
24	織 物	胴部	-	純文R L	ナゲ	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	替	D-108 II区 1層	
25	織 物	胴部	-	純文R L	ナゲ及び縞成 状の調態	白色絨物 風化着片	有	明赤褐色 10YR 3/3	にじみ黄褐色 10YR 6/4	替	D-108 1区 1層	
26	織 物	胴部	-	純文R L	縞成状の調態	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 6/4	明赤褐色 10YR 2/2	替	D-108 1区 1層	
27	織 物	胴部	-	純文R L	ナゲ及び縞成 状の調態	白色絨物 風化着片	有	褐色 7.5YR 6/6	3YR 6/6	替	D-108 1区 1層	
28	織 物	胴部	-	純文R Lの端先	縞成状の調態 (横方向)	白色絨物 風化着片	有	明赤褐色 5YR 5/6	黒褐色 10YR 2/2	替	D-108 III区 1層	
29	織 物	胴部	-	赤褐色	不明	白色絨物 風化着片	有	にじみ褐色 7.5YR 5/3	明赤褐色 10YR 3/3	替	D-108	瓦輪赤黒千土部
30	織 物	胴部	-	赤褐色	不明	白色絨物 風化着片	有	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/3	替	D-108	



第133图 D-113·114·118号土坑出土遗物(1:4)

第78表 D-113号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

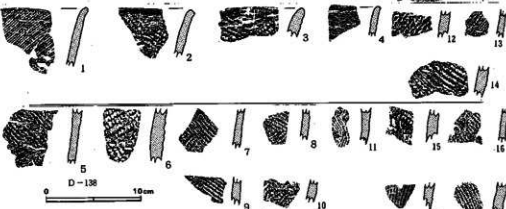
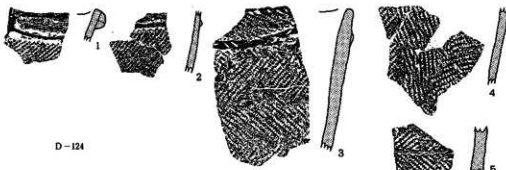
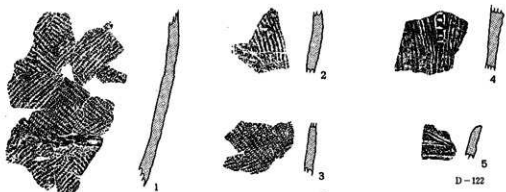
発掘番号	器種	部位	法 量	形状および文様	調 査 (内面)	胎 土	色 調		焼成	出 土 位 置	備 考	
							外 面	内 面				
1	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞	縞成状の調査 (斜方向)	白色磁物 黒化砂片	右	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	昔	D-113	縞線孔あり
2	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞	ナア及び縞成 状の調査	白色磁物 黒化砂片	右	明灰褐色 10YR 6/6	黒褐色 2.5YR 3/1	昔	D-113	
3	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞	ナア及び縞成 状の調査	白色磁物 黒化砂片	右	褐色 7.5YR 7/6	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	D-113	
4	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる縞成状縞	縞成状の調査 (斜方向)	白色磁物 黒化砂片	右	褐色 10YR 2/1	黒褐色 2.5YR 3/2	昔	D-113	

第79表 D-114号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

発掘番号	器種	部位	法 量	形状および文様	調 査 (内面)	胎 土	色 調		焼成	出 土 位 置	備 考	
							外 面	内 面				
1	甕	口縁	—	縞成口縁 以下縄文LR	ナア	白色磁物 黒化砂片	右	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	昔	D-114	
2	甕	口縁	—	縞成口縁 口唇部に縞成の縞のみ口 縁部無文帯下に斜交 以下縄文 LR・Rしによる縞成縞	ナア	白色磁物 黒化砂片	右	灰褐色 7.5YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	昔	D-114	
3	甕	口縁	—	縞成口縁?口唇部の縞帯上に入る 縄文LR	縞成状の調査 (斜方向)	白色磁物 黒化砂片	右	黒褐色 10YR 3/2	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	D-114	
4	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞	ナア及び縞成 状の調査	白色磁物 黒化砂片	右	黒褐色 10YR 3/2	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	昔	D-114	
5	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞 他の縄による束縞処理	不明	白色磁物 黒化砂片	右	明灰褐色 10YR 6/6	灰黄褐色 10YR 5/2	昔	D-114	
6	甕	胴部	—	縄文LR	ナア	白色磁物 黒化砂片	右	褐色 7.5YR 6/6	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	D-114	
7	甕	胴部	—	縄文LR	不明	白色磁物 黒化砂片	右	にじみ・黄褐色 10YR 6/3	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	昔	D-114	
8	甕	胴部	—	縄文	縞成状の調査 (斜方向)	白色磁物 黒化砂片	右	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	にじみ・黄褐色 10YR 6/4	昔	D-114	

第80表 D-118号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

発掘番号	器種	部位	法 量	形状および文様	調 査 (内面)	胎 土	色 調		焼成	出 土 位 置	備 考	
							外 面	内 面				
1	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞 1～3回一帯	ナア及び縞成 状の調査	白色磁物 黒化砂片	右	にじみ・黄褐色 10YR 5/3	灰黄褐色 10YR 4/2	昔	D-118	
2	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞	ナア及び縞成 状の調査	白色磁物 黒化砂片	右	明灰褐色 2.5YR 4/2	にじみ・黄褐色 10YR 5/4	昔	D-118	
3	甕	胴部	—	縄文LR・Rしによる雲形縞	ナア及び縞成 状の調査	白色磁物 黒化砂片	右	灰黄褐色 10YR 4/2	明灰褐色 2.5YR 4/2	昔	D-118	



第134図 D-122・124・138号土坑出土遺物(1:4)

第81表 D-122号土坑 出土遺物一覽表 <織文土器>

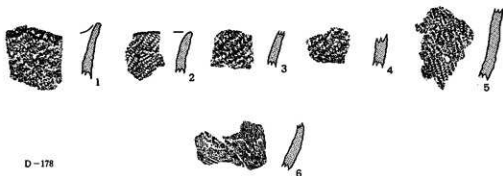
種類 番号	器 種	部位	出 土	形状および文様	製 法 (内面)	胎 土	色 調		備考	出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面			
1	磁 器	胴 部	—	縦文しR・R.Lによる変形縞織 1-3は同一個体	縞織状の調製 (縦方向)	白色底物 黒化部分	青 7.5YR 6/6	灰青褐色 10YR 4/2	青	D-122	
2	磁 器	胴 部	—	縦文しR・R.Lによる変形縞織	縞織状の調製 (縦方向)	白色底物 黒化部分	青 7.5YR 6/6	灰青褐色 10YR 5/2	青	D-122	
3	磁 器	胴 部	—	縦文しR・R.Lによる変形縞織	縞織状の調製 (縦方向)	白色底物 黒化部分	青 7.5YR 6/6	灰青褐色 10YR 5/2	青	D-122	
4	磁 器	胴 部	—	無文 瓶下部等に別入	縞織状の調製 (縦方向)	白色底物 黒化部分	青 7.5YR 6/6	灰青褐色 10YR 5/2	青	D-122	
5	磁 器	胴 部	—	無文 胴部入り	不明	白色底物 黒化部分	青 10YR 4/2	褐色 7.5YR 4/3	青	D-122	

第82表 D-124号土坑 出土遺物一覧表 &lt;縄文土器&gt;

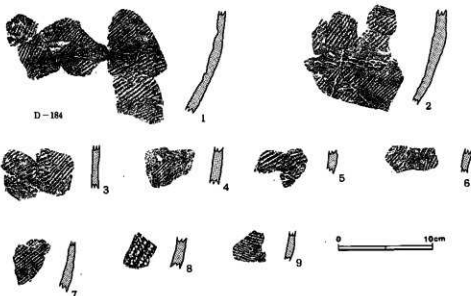
発掘 番号	器 種	部位	法 位	形状および文様	調査 (内)	土 質	色 調		焼成	土 文 理	備 考
							外 面	内 面			
1	器 鉢	口縁	-	4 単位連続口縁 口縁部下層一 層部に1条の波帯 以下縄文L.R	ナデ及び指痕 状の調査	白色磁物 黒化磁片	右	に20-黄褐色 10YR 7/4	に20-褐色 7.5YR 6/4	併	D-124
2	器 鉢	口縁	-	1 と同一形状	ナデ及び指痕 状の調査	白色磁物 黒化磁片	右	に20-褐色 7.5YR 6/4	に20-褐色 7.5YR 5/3	併	D-124
3	器 鉢	口縁	-	4 単位連続口縁 口縁部下層一 層部に1条の波帯を持つ器 口 唇部にも波帯 縄文L.Rの方向面による形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 7.5YR 4/3	に20-黄褐色 10YR 7/3	併	D-124
4	器 鉢	胴部	-	縄文L.Rの方向面による形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	灰褐色 7.5YR 4/2	灰褐色 7.5YR 4/2	併	D-124 H区
5	器 鉢	胴部	-	縄文L.R・Rによる形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	に20-黄褐色 10YR 6/4	に20-黄褐色 10YR 6/4	併	D-124

第83表 D-138号土坑 出土遺物一覧表 &lt;縄文土器&gt;

発掘 番号	器 種	部位	法 位	形状および文様	調査 (内)	土 質	色 調		焼成	土 文 理	備 考
							外 面	内 面			
1	器 鉢	口縁	-	平縁 縄文L.R	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 7.5YR 4/3	に20-褐色 5Y 5/4	併	D-138
2	器 鉢	口縁	-	平縁 縄文L.R	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	黒褐色 7.5YR 3/2	褐色 7.5YR 4/3	併	D-138
3	器 鉢	口縁	-	平縁 縄文L.R・Rによる形状構成	ナデ及び指痕 状の調査	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 5YR 6/6	褐色 7.5YR 4/3	併	D-138
4	器 鉢	口縁	-	平縁 縄文L.Rとの接合	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	明赤褐色 5YR 5/6	褐色 5YR 6/6	併	D-138 南区
5	器 鉢	胴部	-	縄文L.R・L.Rによる形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 4/3	併	D-138
6	器 鉢	胴部	-	縄文L.R・L.Rによる形状構成	ナデ及び指痕 状の調査	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 7.5YR 4/4	明赤褐色 5YR 5/6	併	D-138
7	器 鉢	胴部	-	縄文L.R・L.Rによる形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	に20-褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 4/2	併	D-138
8	器 鉢	胴部	-	縄文L.R・L.Rによる形状構成	ナデ及び指痕 状の調査	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 7.5YR 4/3	黒褐色 7.5YR 3/1	併	D-138
9	器 鉢	胴部	-	縄文L.R・L.Rによる形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	灰黄褐色 10YR 4/2	に20-黄褐色 10YR 6/3	併	D-138
10	器 鉢	胴部	-	縄文L.R・L.Rによる形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	明褐色 7.5YR 5/6	に20-黄褐色 10YR 6/4	併	D-138
11	器 鉢	胴部	-	無筋縄文による形状構成	指痕状の調査 (横方向)	白色磁物 黒化磁片	右	に20-褐色 7.5YR 5/4	褐色 7.5YR 4/3	併	D-138
12	器 鉢	胴部	-	縄文L.R	ナデ	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	併	D-138
13	器 鉢	胴部	-	縄文L.R	ナデ	白色磁物 黒化磁片	右	明赤褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/2	併	D-138
14	器 鉢	胴部	-	縄文L.R	ナデ	白色磁物 黒化磁片	右	に20-褐色 7.5YR 5/4	明褐色 7.5YR 5/6	併	D-138
15	器 鉢	胴部	-	縄文L.R	ナデ	白色磁物 黒化磁片	右	明赤褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 4/1	併	D-138
16	器 鉢	胴部	-	縄文L.R	ナデ	白色磁物 黒化磁片	右	明赤褐色 5YR 5/6	褐色 10YR 2/1	併	D-138
17	器 鉢	胴部	-	無筋縄文	不明	白色磁物 黒化磁片	右	明褐色 10YR 3/3	に20-黄褐色 10YR 5/3	併	D-138
18	器 鉢	胴部	-	無筋縄文	不明	白色磁物 黒化磁片	右	褐色 7.5YR 4/3	黒褐色 10YR 2/2	併	D-138



D-178



D-184

第135図 D-178・184号土坑出土遺物 (1:4)

第84表 D-178号土坑 出土遺物一覽表 <縄文土器>

発見 番号	器種	部位	数量	形状および文様	調査 (内圖)	出土 層位	色		出土 位置	備考	
							外面	内面			
1	鉢	口縁	-	波状口縁 口唇縁斜交 縄文L字	底面の残部 (縦方向) 附帯の残部	有	白土系 灰化面片	にじみ-茶褐色 10YR 5/4	灰質褐色 10YR 4/2	有	D-178
2	鉢	口縁	-	平縁? 縄文L字	ナズメ形残 状の残部	有	褐色 7.5YR 4/4	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	灰質褐色 7.5YR 5/4	有	D-178
3	鉢	口縁	-	縄文L字 3・4同一個体	ナズメ形残 状の残部	有	白土系 灰化面片	灰質褐色 10YR 4/2	灰質褐色 10YR 4/2	有	D-178
4	鉢	胴部	-	縄文L字	不明	有	白土系 灰化面片	地味黄色 2.5YR 4/2	黒褐色 2.5YR 3/2	-	D-178
5	鉢	胴部	-	縄文R.L.	底面の残部 (縦方向)	有	白土系 灰化面片	暗灰褐色 7.5YR 4/2	にじみ-褐色 7.5YR 5/4	有	D-178
6	鉢	胴部	-		底面の残部 (縦方向)	有	白土系 灰化面片	褐色 7.5YR 4/3	灰褐色 7.5YR 4/2	-	D-178



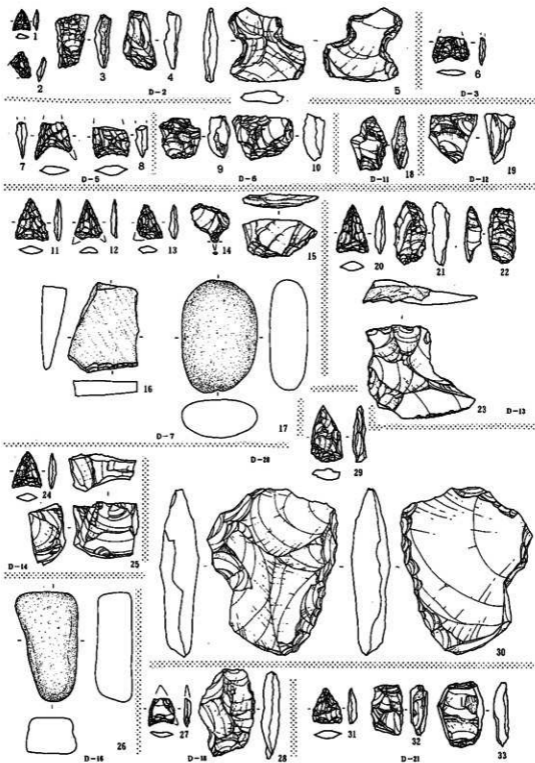
第85表 D-184号土坑 出土遺物一覧表 <縄文土器>

探出 番号	器種	部位	出土	形状および文様	調査 (内容)	土質	色 質		焼成	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1	器 鉢	胴部	—	縄文土器 底の縄文による車輪状 彫 1・2段一帯状	ナデ及び磨成 後の調製	白色灰物 黒化粘土	有	褐色 7.5YR 6/6	灰質褐色 10YR 4/2	昔	D-184
2	器 鉢	胴部	—	縄文土器 底の縄文による車輪状 彫	ナデ及び磨成 後の調製	白色灰物 黒化粘土	有	にじみ・灰褐色 10YR 5/4	にじみ・灰褐色 10YR 6/3	昔	D-184
3	器 鉢	胴部	—	縄文土器	ナデ及び磨成 後の調製	白色灰物 黒化粘土	有	にじみ・灰褐色 10YR 6/4	にじみ・灰褐色 10YR 5/3	昔	D-184
4	器 鉢	胴部	—	縄文土器	ナデ及び磨成 後の調製	白色灰物 黒化粘土	有	褐色 7.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2		D-184
5	器 鉢	胴部	—	縄文土器	ナデ及び磨成 後の調製	白色灰物 黒化粘土	有	にじみ・褐色 7.5YR 5/4	黒褐色 2.5YR 3/2	昔	D-184
6	器 鉢	胴部	—	縄文土器	ナデ及び磨成 後の調製	白色灰物 黒化粘土	有	にじみ・灰褐色 10YR 4/3	にじみ・灰褐色 10YR 6/3		D-184
7	器 鉢	胴部	—	縄文土器	ナデ	白色灰物 黒化粘土	有	褐色 7.5YR 6/6	灰質褐色 7.5YR 4/2		D-184
8	器 鉢	胴部	—	縄文土器	磨成後の調製 (磨方向)	白色灰物 黒化粘土	有	褐色 7.5YR 6/6	にじみ・灰褐色 10YR 6/4	昔	D-184
9	器 鉢	胴部	—	縄文土器	ナデ	白色灰物 黒化粘土	有	灰質褐色 10YR 4/2	にじみ・灰褐色 10YR 5/3		D-184

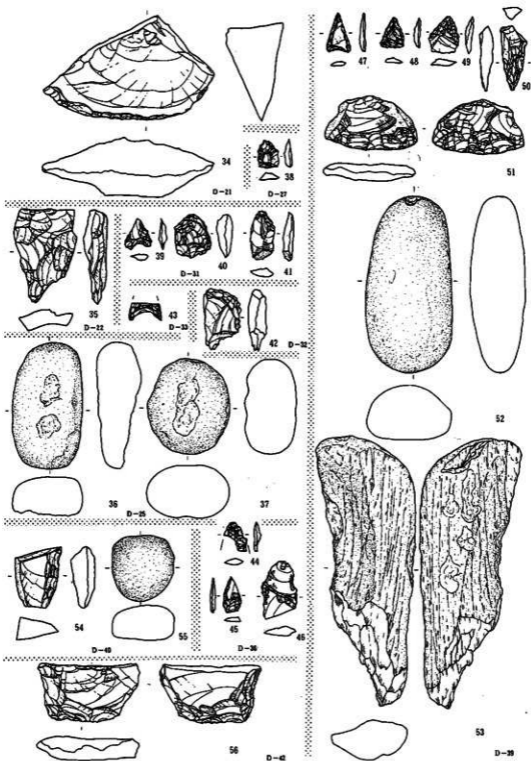
第86表 土 坑 出土遺物一覧表 <石器>

探出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	探出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石 錐	黒曜石	1.1	1.0	0.3	0.1	D-2	20	石 錐	ガラス質 安山岩	2.5	1.7	0.5	1.5	D-13
2	"	"	1.4	1.1	0.3	0.3	"	21	ビュース エスキュー	チャート	3.3	1.7	0.9	4.7	"
3	ビュース エスキュー	チャート	2.8	1.7	0.7	4.0	" フキン	22	"	硬質頁岩	2.9	1.5	0.9	3.1	"
4	"	"	3.1	1.7	0.7	3.7	" "	23	M・F	"	4.9	5.7	1.2	21.4	"
5	スクレイ パー	硬質頁岩	3.9	4.0	0.7	10.2	" "	24	石 錐	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.7	D-14
6	石 錐	黒曜石	1.4	1.9	0.3	0.8	D-3	25	石 錐	硬質頁岩	3.0	3.4	1.8	21.3	"
7	"	硬質頁岩	2.0	2.0	0.6	1.2	D-5	26	礫 石	安山岩	11.4	6.1	3.9	458.9	D-16
8	"	玉 髓	1.6	1.9	0.6	2.1	"	27	石 錐	チャート	1.5	1.4	0.4	0.7	D-18
9	ビュース エスキュー	黒曜石	2.2	2.2	1.1	5.0	D-6	28	スクレ イパー	硬質頁岩	4.6	3.0	0.9	8.9	" 燧石
10	"	"	2.3	3.2	1.1	7.2	"	29	ビュース エスキュー	"	2.9	1.6	0.6	3.2	D-20
11	石 錐	ガラス質 安山岩	2.2	1.7	0.4	1.0	D-7	30	スクレ イパー	ガラス質 安山岩	8.8	6.9	2.0	112.0	"
12	"	"	2.1	1.5	0.3	0.7	"	31	石 錐	黒曜石	1.8	1.6	0.4	1.1	D-21
13	"	"	1.8	1.4	0.5	0.8	"	32	ビュース エスキュー	玉 髓	2.1	1.7	0.9	4.8	"
14	石 錐	"	2.0	2.1	0.2	0.9	"	33	"	硬質頁岩	3.5	2.4	0.7	6.1	"
15	スクレ イパー	"	2.0	3.9	0.7	5.8	"	34	スクレ イパー	"	5.4	9.0	3.0	105.9	"
16	"	安山岩	9.4	7.2	2.3	202.9	"	35	石 錐	"	4.9	3.3	1.2	16.4	D-22
17	磨 石	"	11.6	7.7	3.8	532.4	" No 2	36	磨 石	安山岩	13.2	7.2	4.6	670.0	D-25
18	ビュース エスキュー	黒曜石	2.9	1.9	0.8	3.7	D-11	37	"	"	10.0	8.6	5.5	579.5	" No 2
19	"	"	2.6	2.6	1.6	8.3	D-12	38	石 錐	黒曜石	1.4	1.1	0.4	0.6	D-27

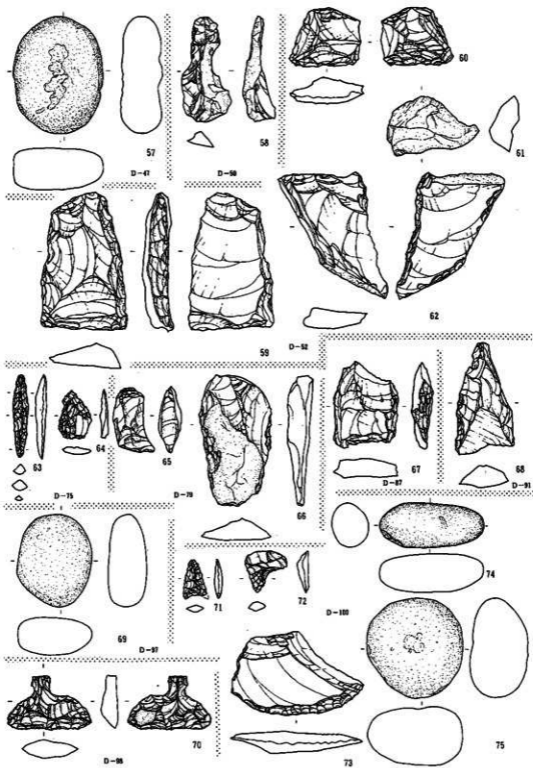
M・F = 微小剝離痕を有する剥片 単位はcm, g



第136图 土坑出土遺物〈石器I〉(1:2, 1:4)



第137図 土坑出土遺物〈石器2〉(1:2, 1:4)

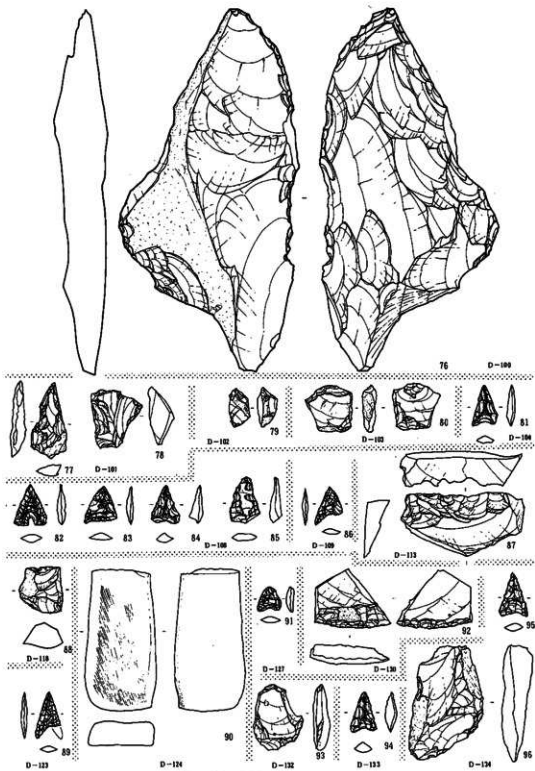


第138圖 土坑出土遺物〈石器3〉(1:2, 1:4)

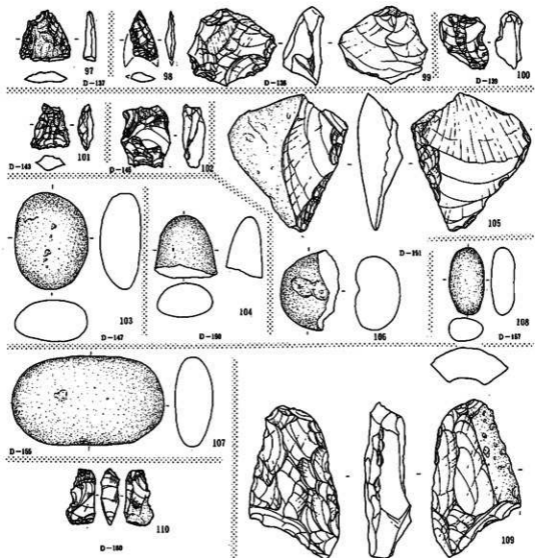
第87表 土 坑 出土遺物一覽表 &lt;石器&gt;

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
39	石 鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.5	D-31	75	磨 石	安山岩	10.4	10.0	6.1	843.6	D-100No 3
40	ビュース エスキュー	*	2.3	1.9	0.8	3.0	#	76	石 槌	ガラス質 安山岩	18.9	9.6	2.8	471.4	# No 2
41	#	*	2.5	1.3	0.5	1.6	#	77	R・F	チャート	4.1	1.9	0.8	4.9	D-101
42	#	ガラス質 安山岩	2.3	2.0	1.0	6.6	D-32	78	ビュース エスキュー	*	3.1	2.7	1.3	7.3	#
43	石 鏃	黒曜石	0.9	1.7	0.3	0.4	D-33	79	#	黒曜岩	2.1	1.1	1.0	1.8	D-102
44	#	*	1.5	1.2	0.3	0.2	D-36	80	#	チャート	2.5	2.5	1.7	4.5	D-103
45	#	*	1.9	0.9	0.2	0.3	#	81	石 鏃	ガラス質 安山岩	2.2	1.3	0.4	0.8	D-104
46	ビュース エスキュー	*	3.1	1.9	0.5	2.3	#	82	#	黒曜石	2.2	1.8	0.5	1.6	D-108区I層
47	石 鏃	ガラス質 安山岩	2.1	1.3	0.3	0.6	D-39	83	#	#	2.9	1.7	0.4	0.7	#
48	#	チャート	1.6	1.3	0.3	0.5	#	84	#	チャート	2.0	1.5	0.8	1.1	#
49	石 鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.4	1.0	#	85	石 鏃	硬質頁岩	2.4	1.6	0.6	1.7	#
50	石 鏃	ガラス質 安山岩	3.4	1.4	0.7	2.7	#	86	石 鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.3	0.5	D-109
51	スクレイ パー	黒曜石	2.8	4.9	0.9	11.7	#	87	石 槌	硬質頁岩	3.4	6.5	1.5	25.0	D-113
52	磨 石	安山岩	18.6	9.1	5.8	1444.6	#	88	M・F	黒曜石	2.5	2.3	1.4	6.9	D-118
53	石 鏃	緑泥片岩	28.6	9.7	4.1	1447.3	# No 1	89	石 鏃	*	2.4	1.4	0.3	0.6	D-123
54	スクレイ パー	安山岩	3.2	2.5	1.3	9.6	D-40	90	ストーン チップ	砂 岩	7.4	3.8	1.3	47.2	D-124
55	磨 石	*	7.0	6.5	3.7	241.4	#	91	石 鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.4	0.5	D-127
56	ビュース エスキュー	ガラス質 安山岩	3.1	5.4	1.2	27.7	D-42	92	スクレイ パー	ガラス質 安山岩	3.2	4.0	1.0	12.8	D-130
57	磨 石	安山岩	12.0	9.3	4.4	656.2	D-47	93	ビュース エスキュー	黒曜石	3.4	2.2	0.9	7.1	D-132
58	M・F	黒曜石	5.5	2.6	1.5	10.5	D-50	94	石 鏃	チャート	2.1	1.4	0.6	1.0	D-133
59	スクレイ パー	ガラス質 安山岩	7.1	4.6	1.4	52.4	D-52	95	#	黒曜石	2.4	1.5	0.4	0.9	D-134
60	ビュース エスキュー	*	3.1	3.8	1.4	15.1	#	96	スクレイ パー	ガラス質 安山岩	5.9	3.9	1.5	29.4	#
61	原 石	黒曜石	3.1	4.8	1.3	19.5	#	97	#	黒曜石	2.7	2.7	0.7	4.1	D-137
62	スクレイ パー	ガラス質 安山岩	6.6	5.8	1.2	39.7	#	98	石 鏃	*	2.6	1.5	0.5	1.1	D-138
63	石 鏃	硬質頁岩	4.3	0.8	0.6	1.7	D-75	99	スクレイ パー	硬質頁岩	4.0	4.7	2.0	26.3	#
64	石 鏃	*	2.6	1.8	0.4	1.7	#	100	ビュース エスキュー	黒曜石	2.9	2.6	1.3	7.4	D-139
65	ビュース エスキュー	*	3.4	2.2	1.2	7.3	D-79	101	石 鏃	*	2.4	2.1	0.8	3.0	D-143
66	スクレイ パー	*	6.8	3.8	1.3	30.6	#	102	ビュース エスキュー	*	3.2	2.6	1.1	8.3	D-145
67	ビュース エスキュー	ガラス質 安山岩	4.6	3.5	1.1	17.3	D-87	103	磨 石	安山岩	10.0	7.7	4.4	484.6	D-147
68	スクレイ パー	硬質頁岩	5.9	3.1	1.3	15.4	D-91	104	#	#	6.4	6.5	3.6	197.8	D-150
69	磨 石	安山岩	9.7	7.6	4.1	461.5	D-97No 1	105	スクレイ パー	ガラス質 安山岩	7.2	6.4	2.3	70.1	D-151
70	石 鏃	黒曜石	2.8	4.4	0.9	7.5	D-98	106	磨 石	安山岩	8.3	6.1	4.8	228.6	#
71	石 鏃	チャート	2.1	1.3	0.4	0.8	D-100	107	#	#	9.4	16.0	3.8	966.5	D-155
72	石 鏃	*	2.2	2.3	0.6	2.1	# I区I層	108	磨 石	*	6.9	3.6	2.4	71.1	D-157
73	スクレイ パー	頁 岩	4.4	6.9	1.1	29.9	D-100	109	小形石斧	ガラス質 安山岩	8.2	4.7	2.4	85.6	D-179
74	磨 石	安山岩	4.7	11.0	3.8	272.2	#	110	ビュース エスキュー	黒曜石	2.9	1.6	0.9	3.5	D-180

M・F=微小制離痕、R・F=加工痕を有する剥片 単位はcm、g



第139圖 土坑出土遺物〈石器4〉



第140回 土坑出土遺物〈石器5〉

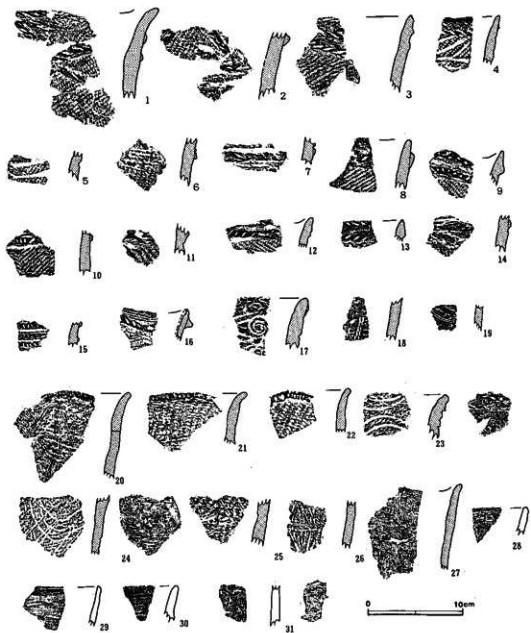


第141回 グリッド出土遺物〈縄文土器〉(1:4)

## (26) グリッド出土遺物

第141～146図

縄文時代以外の遺構、古墳時代住居や古墳群、また、遺構検出面からも相当量の縄文時代遺物  
が出土した。このうちから代表的なもの・特記されるものを抽出し掲載した。



第142図 グリッド出土遺物〈縄文土器〉(1:4)



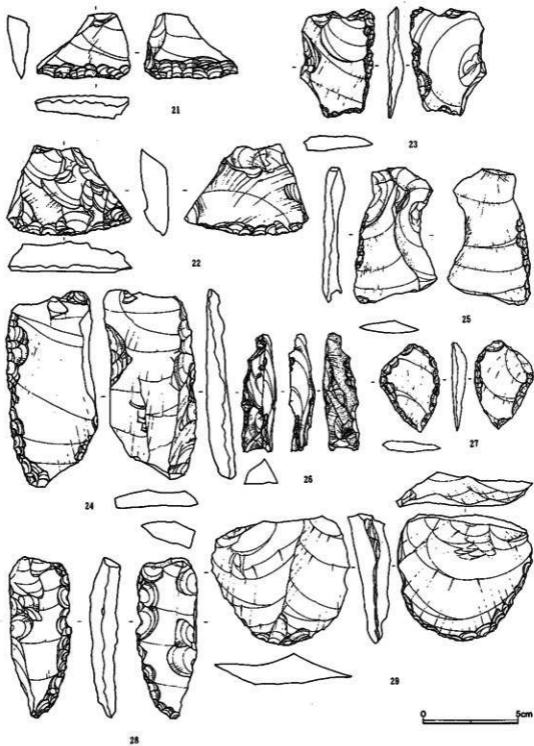
第88表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検 番号	遺物 部位	注目	遺物および文様	調査 (内容)	出土 層	色		形状	出土 位置	備考
						外面	内面			
1	口縁	-	4本位の波状口縁 口縁下に1条の筋をもつて進行線等が区画された中にもう1条の波状線等 口唇部にも筋あり 縄文LⅡ	楕圓状の胴部 (横方向)	白色灰物 風化石灰片	有	褐色色 10YR 4/1	褐色 7.5YR 6/6	香	F-11G
2	口縁	-	口縁下に1条の筋をもつて進行線等が区画された中にもう1条の波状線等 縄文LⅡ	ナデ及び楕圓状の胴部 (横方向)	白色灰物 風化石灰片	有	褐色 5YR 6/8	褐色 5YR 6/8	香	F-11G
3	口縁	-	口縁下に1条の筋をもつて進行線等 口唇部にも筋あり 縄文LⅡ	ナデ及び楕圓状の胴部 (横方向)	白色灰物 風化石灰片	有	褐色色 10YR 3/2	高褐色 7.5YR 3/1	香	J-5 H区1層
4	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 その下は竹管状工具による進行波線2条で区画された中に斜行波線 縄文LⅡ 内面に刺突	横方向の胴部 ?	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 4/3	香	D-8 G
5	口縁	-	縄文LⅡ上に波状の波線2条	不明	白色灰物 風化石灰片	有	褐色色 7.5YR 4/1	にぶい黄褐色 5YR 4/3	香	D-8 G
6	口縁	-	口縁下に太い筋等 筋等を越すように3条以上の波線 縄文LⅡ	楕圓状の胴部 (横方向)	白色灰物 風化石灰片	有	明赤褐色 5YR 5/6	明赤褐色 5YR 5/6	香	F-6 G
7	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 その直上に太い波線 筋の文様?	ナデ及び楕圓状の胴部	白色灰物 風化石灰片	有	褐色 7.5YR 4/3	褐色 10YR 4/3	香	G-10 G
8	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 縄文LⅡ	ナデ?	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい黄褐色 10YR 6/4	明赤褐色 7.5YR 7/6	香	H-11 G
9	口縁	-	口縁下に斜突をもつて線等 縄文LⅡ	ナデ及び楕圓状の胴部	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/4	香	F-11 G
10	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 縄文LⅡ・RⅡによる波線	ナデ	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい赤褐色 5YR 5/4	にぶい赤褐色 2.5YR 4/4	香	G-11 G
11	口縁	-	口縁下に線等 線等下に楕圓状工具による波状線 縄文LⅡ	ナデ及び楕圓状の胴部	白色灰物 風化石灰片	有	灰黄褐色 7.5YR 8/4	にぶい紅色 7.5YR 7/4	香	H-10 G
12	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 口唇部にも線等 縄文LⅡ	楕圓状の胴部 (横方向)	白色灰物 風化石灰片	有	灰黄褐色 7.5YR 6/2	灰黄褐色 7.5YR 4/2	香	F-12 G
13	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 口唇部にも筋等 縄文LⅡ	ナデ	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい褐色 7.5YR 6/3	にぶい黄褐色 10YR 6/3	香	H-11 G
14	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 線等上下に竹管状工具による波線 縄文LⅡ	不明	白色灰物 風化石灰片	有	褐色 5YR 6/6	明褐色 3YR 5/6	香	F-12 G
15	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 線等上下に竹管状工具による波線	ナデ	白色灰物 風化石灰片	有	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	香	F-12 G
16	口縁	-	口縁下に筋をもつて線等 線等上に筋ありとRⅡ平線との間隔短縮 下に縄文LⅡ	不明	白色灰物 風化石灰片	有	赤褐色 5YR 5/6	明赤褐色 3YR 5/6	香	HC
17	口縁	-	口縁下に筋あり支しによる波線等 波線の間隔短縮	ナデ	白色灰物 風化石灰片	有	褐色 7.5YR 7/6	褐色 7.5YR 6/6	香	F-12 G
18	口縁	-	筋あり支し平線との区隔	不明	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい赤褐色 5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/4	香	F-12 G
19	口縁	-	2本筋との間・波状線	ナデ	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい黄褐色 7.5YR 5/3	明褐色 7.5YR 5/1	香	G-11 G
20	口縁	-	平線 口唇部に縄文原体による筋あり 縄文LⅡ上に竹管状工具による波線・斜行波線	ナデ	白色灰物 風化石灰片	有	褐色 7.5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	香	G-11 G
21	口縁	-	平線 口唇部に縄文原体による筋あり 縄文LⅡ	楕圓状の胴部 (横方向)	白色灰物 風化石灰片	有	にぶい褐色 7.5YR 5/4	高褐色 10YR 2/1	香	J-5 H区1層

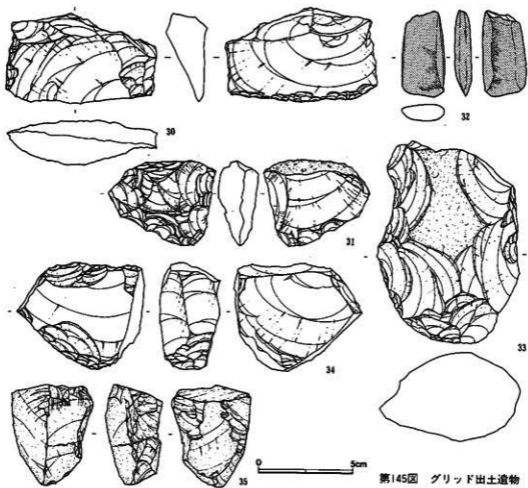




第143図 グリッド出土遺物〈石器〉



第144図 グリッド出土遺物〈石器〉

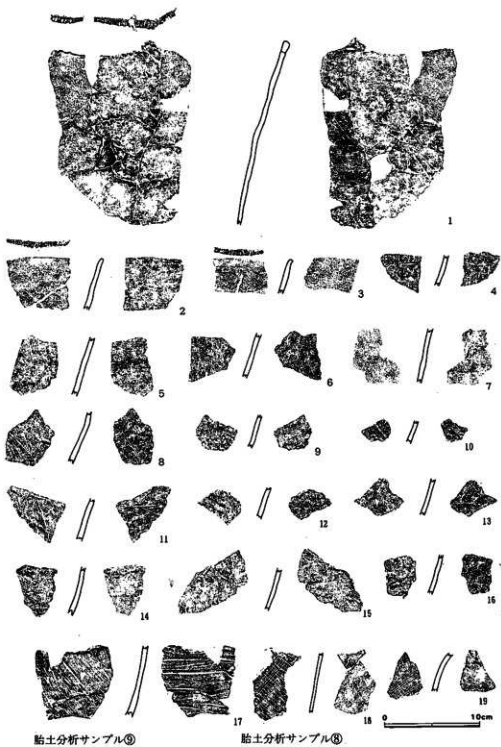


第145図 グリッド出土遺物

第90表 グリッド 出土遺物一覧表〈石器〉

押印番号	石	種	材	質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押印番号	石	種	材	質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
13	石	匙	燧石	質	5.6	5.8	0.7	22.6	E-11G	25	スクレイパー	頁	岩	質	7.1	4.4	1.0	27.4	D-9G
14	石	鏃	チャート		3.2	1.5	0.9	3.4	D-10G	26	黒曜石			質	6.7	1.9	1.3	12.7	表採
15	石			燧石	4.5	1.5	0.7	3.6	E-12G	27	ガラス	質	質	質	4.6	3.2	0.7	9.1	F-11G
16	石				2.6	0.9	0.5	1.1	F-12G	28				質	8.4	3.2	1.4	43.3	I-8G
17	石			ガラス	3.0	1.1	0.6	1.7	F-11G	29				質	6.8	7.3	1.8	71.7	D-8G
18	石				3.5	1.3	0.6	2.0	I-8G	30				質	4.7	8.0	2.2	73.8	F-7G
19	石				2.9	1.3	0.7	1.6	H-11G	31				質	4.5	5.7	1.8	45.9	D-8G
20	石				3.3	1.7	0.8	3.2	E-10G	32	小	製	石	質	4.5	2.2	0.9	14.9	F-12G
21	スクレイパー			燧石	3.4	5.0	1.1	17.2	G-15G	33	石	斧	形	質	10.7	7.5	4.6	362.4	H-10G
22	石				4.7	6.6	1.6	46.8	G-12G	34	石	槌	質	質	5.7	6.8	3.2	146.9	C-9G
23	石				5.6	4.0	0.8	17.0	G-10G	35	原	石	質	質	5.4	4.3	2.8	57.2	J-5 II区 I層
24	石				10.2	4.7	1.2	58.9	I-9G										

単位はcm, g



第146図 グリッド出土遺物（オセンベ土器）

第91表 グリッド 出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検 番号	器 種	部位	注 記	図形および文様	装 束 (内装)	土 質	色 調		焼成	出 土 位置	備 考	
							外 面	内 面				
1	甕鉢	口縁	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
2	甕鉢	口縁	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
3	甕鉢	口縁	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
4	甕鉢	口縁	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
5	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器
6	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
7	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
8	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
9	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器
10	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
11	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
12	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
13	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器
14	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
15	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
16	甕鉢	胴部	—	小波状口縁 無文	縹斑状の陶質 (東方向)	磁 器 石英 風化岩片	無	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ褐色 7.5YR 5/4	昔	I-11 G	オセンベ土器 1-164同—個体
17	甕鉢	胴部	—	糸紋	糸紋	磁 器 石英 風化岩片	無	灰黄褐色 10YR 6/2	黒褐色 10YR 4/1	昔	H-11G	オセンベ土器
18	甕鉢	胴部	—	口縁部下に黒赤文しによる渦巻き 状の装飾圧痕	ナデ	白色胎物 風化岩片	有	黒褐色 10YR 4/1	にじみ褐色 5YR 4/4	昔	D-152 Y-5	H・194同—個体 オセンベ土器
19	甕鉢	胴部	—	口縁部下に黒赤文しによる渦巻き 状の装飾圧痕	ナデ	白色胎物 風化岩片	有	黒褐色 10YR 4/1	にじみ褐色 5YR 4/4	昔	G-10G	H・194同—個体 オセンベ土器

### 3 古墳時代初頭の遺構と遺物

#### (1) H-1号住居址

##### 住居址 第147図

本址はあ-4グリッドにおいて検出された。そのプランは、重機による表土除去の時点で砂層中への黒色の落込みとして明瞭に把握された。D-1号土坑と重複関係を持ち、これを破壊する。

平面形は、東西5.09m南北5.82mの隅丸長方形を呈する。床面積は28.76㎡を測り、長軸の方位はN-7°-Wを指す。

床面は、全面に貼り床を施し、おおむね平坦で堅固に叩き締められているが、南側壁下の床は「コ」の字状に開くように5cm前後一段高くなっており、いわゆるベッド状遺構が構築されている。

壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、残存壁高20~28cmを測る。壁溝はもたない。

ピットは総数7個が検出された。主柱穴は4本あり、住居四隅に整然と長方形配置される。いずれも住居長軸方向に対して柱穴平面形の長軸が直交する楕円形を呈する。各柱穴の長軸長はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が36cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が28・23cmを測る。深さはそれぞれ39・36・36・30cmを測る。炉の北側にあるP<sub>5</sub>は所謂棟持ち柱で、平面規模は主柱穴と大差ないが深さは12cmと浅い。南壁下でベッド状遺構を切り込んで並存するP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は入口関連の対ピットとも考えられるが判然としなない。

炉は北側主柱穴間の中央に設けられる。長軸56cmの楕円形に浅く掘り込まれた地床炉で南側に一個の縁石を持つ。燃焼面は焼けた痕跡に乏しい。

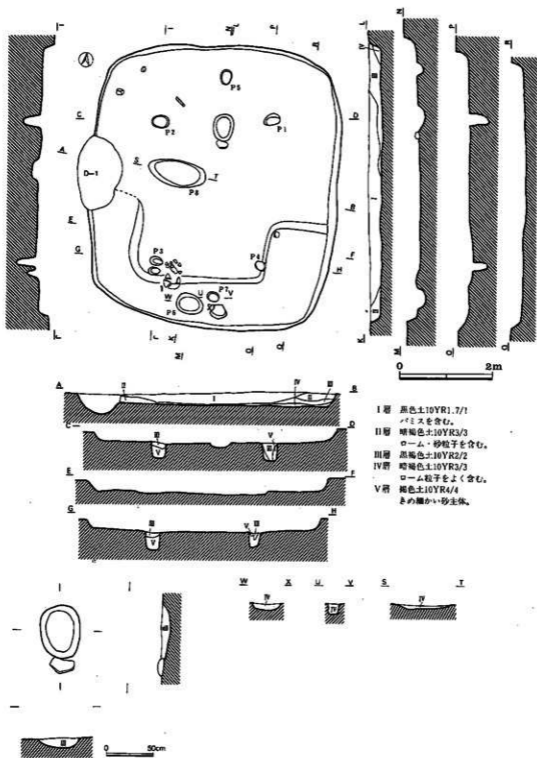
覆土は5層に分層され、自然堆積の状況を示す。I層は住居中央にレンズ状に堆積する黒色土層(10YR1.7/1)で砂粒とバミスを少量含む。II層はローム・砂粒を含む褐色土層(10YR3/3)、III層は黒褐色土(10YR2/2)、IV層はロームを多量に含む褐色土(10YR3/3)である。V層褐色土(10YR4/4)は柱の埋土で砂が主体である。

##### 遺物 第148・149図

覆土中および床面上から弥生土器・土師器、石器が出土している。器種は壺・甕・鉢・高坏があるが、鉢・高坏については細片のため、図化しなかった。図化した土器はいずれも千曲川流域の弥生時代後期の土器か土師器の特長を示し、図示したものは4点、他18点は拓影である。

壺は受口状に立ち上がるもの1・5のみである。全容を知り得ないが、1・5ともに受口状に立つ広口の口縁部から頸部を経て胴部は球状を呈すると考えられる。1には口縁部内外面に赤色





第147図 H-1号住居址実測図

第92表 H-1号住居址 出土土器観察表

器種 番号	器種	数量	形状の特徴	文様及び調整	備考
1	甕 (図)	27.5 — —	胴部は軽く磨面済。口縁部は受口状。胴部は球状を呈すると考えられる。	外蓋一胴部に少なくとも3段以上の帯描波状文と2本一単位の縦スリットを施した後 口縁部を赤色塗彩及び丁寧な縦方向ヘラミゴキ。 内蓋一口縁部を赤色塗彩及び丁寧な縦方向ヘラミゴキ。以下ナデ。	胎土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。 (10Y 7/4)
2	甕 (図)	— — —	口縁部は軽く外反し、胴部は球状に膨らむ。	外蓋一帯描波状文。 内蓋一縦方向ヘラミゴキ。	胎土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。 (10Y 7/4)
3	甕 (図)	(12.3) — —	口縁部は軽く外反し、胴部はあまり膨らまない。	外蓋一無文。ハケ調整の後、ヘラミゴキと思われるが、磨滅のため、詳細不明。 内蓋一縦方向の丁寧なヘラミゴキ。	胎土は砂粒を含み、にぶい黄色。 (5YR 6/4)
4	合付甕 (図)	— — —	口縁部は軽く外反し、胴部は球状を呈する。	外蓋一口縁部ヨコナデの後、胴部に縦方向ハケ調整後、胴部にナデ。 口唇部に削み。 内蓋一縦方向のヘラミゴキ。	胎土は磨滅され、灰黄褐色。 (10YR 6/2)

塗彩が施されるが、5は無彩・無文である。文様は1の頸部には帯描直線文を施した後、2本一単位の同工具による縦スリットが認められる。

甕も全容を知り得るものがないが、胴部は軽く膨らむか、大きく膨らむものが多いようだ。口縁部は単純口縁の2・3・8～10・18・19と貼り付け口縁の6・7がある。なお、9・10には口唇部に柵による刻みが認められる。

文様は口縁部と胴部に帯描波状文を施す2・6～18と斜走文を描く19～22、また、無文の3・18もある。頸部には簾状文を施すものが多いが施さないものもある。

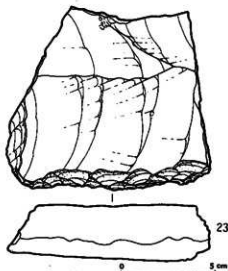
台付甕の4は単純口縁で口唇部に刻み目、頸部にハケ調整を施す。

鉢は碗状を呈する赤色塗彩された小片がある。

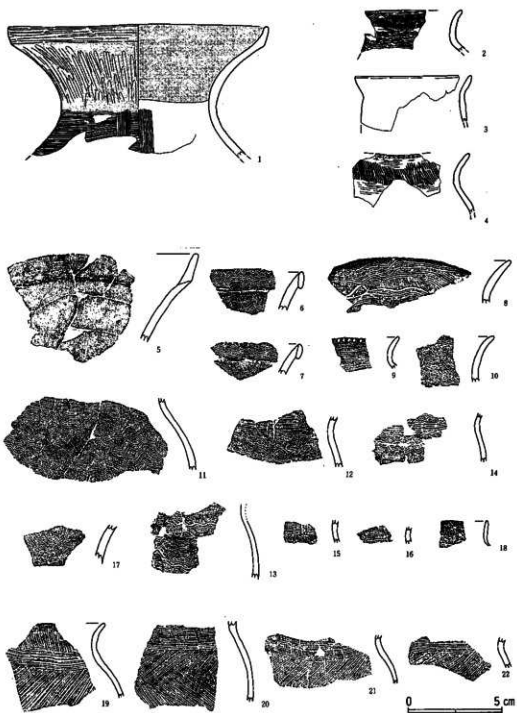
石器は打製石斧23がある。基部が欠損するが安山岩製のかかなりの大型品で「石剣」とも考えられる。

#### 時期

本址は上記の資料をもって、古墳時代初頭に位置付ける事ができよう。



第148図 H-1号住居址出土遺物(1:2)



第149图 H-1号住居址出土遗物(1:4)

## (2) H-2号住居址

### 住居址 第150図

本址はい-3グリッドにおいて検出された焼失住居である。古墳時代初頭の住居群の中では最も北側に位置する。

プランは東西3.74m南北5.15mで隅丸長方形を呈する。床面積は20.83㎡を測り長軸方向はほぼ真北を指す。

壁は全体にしっかりしている。残存高14~27cmを測る。壁溝は検出されなかった。

床面は貼床が全面に施される。一様に堅固にたたき締められており、おおむね平坦であるが、北西側には矩形の高まりが一段あり、所謂ベッド状遺構が設けられる。

炉は北側主柱穴間に設けられる。径42cmの円形を呈し、床面から20cm程掘り窪めている。内部には赤彩された高坏の坏部を取め、南側に緑石を置く所謂「土器埋設炉+緑石」の形態を取っている。使用された高坏は焼焼を受けたために変色が著しい。また、炉内覆土には炭化粒が多量に詰まっていた。

ピットは6個が検出された。主柱穴P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は竪穴住居内四隅に整然と長方形配置される。H-1号住居址と同様にいずれも住居長軸方向に対して柱穴平面形の長軸が直交する楕円形を呈する。各柱穴の長軸長はP<sub>1</sub>から順に27・21・35・34cmを測る。床面からの深さは30・47・70・58cmとまちまちである。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は南壁下に2個一対で並ぶ梯子受け状のピットと考えられ、深さはそれぞれ32・22cmを測る。また、P<sub>1</sub>からは北側壁に向かってまっすぐ伸びる間仕切り状の溝が掘削されている。

覆土は住居中央をレンズ状に覆うI II層を除き、III層は焼土、IV~VIII層は炭化粒を含み住居焼失に関連して形成された土である。特に炭化粒子が密集するVI層は床面に密着して広く分布しており、住居使用時か廃絶直後に焼失した状況を示している。また、材の形状を残す炭化材についても同様で床面に接するものが多い。

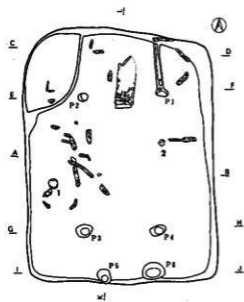
焼焼が完全に近かったためか、残りの良い炭化材は少なく、上層構造を知るにたる分布状況は示していない。

### 遺物 第151図

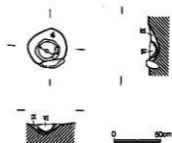
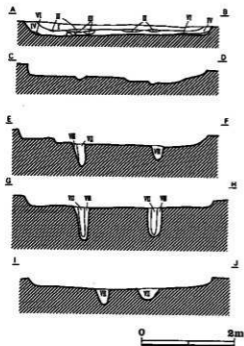
遺物量は少ない。床面上・覆土中からわずかに弥生土器・土師器、石器が出土している。

土器の器種は壺・甕・台付甕・高坏・鉢があるが、壺・鉢については小片のため、図化できなかった。図示したものは4点、拓影3点である。

壺は口縁部が強く屈曲し、球胴状を呈する3がある。口縁部から胴部にかけて帯状の赤色塗彩



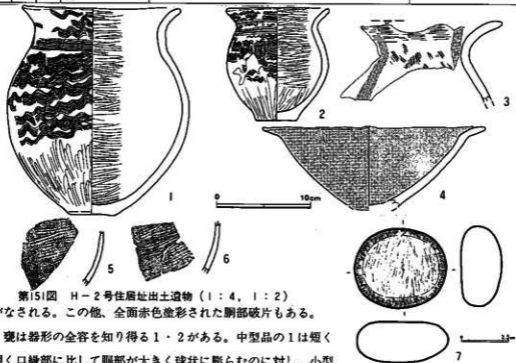
- I層 黒褐色土10YR2/3  
ローム粒子をよく含む。
- II層 黒色土10YR2/1  
ローム粒子をよく含む。
- III層 明赤褐色土5YR5/8  
焼土。
- IV層 暗褐色土10YR2/3  
焼土、炭化物少量、ローム粒子をよく含む。
- V層 黒褐色土10YR2/3  
焼土、炭化物少量、ローム粒子をよく含む。
- VI層 黒色土10YR2/1  
炭化材密集。
- VII層 黒色土10YR2/1  
柱痕。
- VIII層 褐色土10YR4/4  
ローム粒子を多量に含む。
- IX層 黒色土10YR1.7/1  
炭化粒子密集。



第150図 H-2号住居址実測図

第93表 H-2号住居址 出土土器観察表

器種 番号	器種 名	高さ	器形の特徴	文様及び調整	備考
1	甕	16.5 (測) (土)	口縁部は強く外反して短く開く。胴部は球状を呈する。	外側→口縁部から胴部に断続的な波状文(右回り)施すの後、胴部に二連上層状文、胴部下部はヘラミダキ。 内側→胴部から口縁部にかけてはヘラミダキ。	粘土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。(10YR 7/3)
2	甕	19.6 (測) (土)	口縁部は強く外反して短く開く。胴部は中位で膨らむ。	外側→口縁部から胴部に断続的な波状文(右回り)施すの後、胴部に直線文、胴部下部はヘラミダキ。 内側→胴部から口縁部にかけてはヘラミダキ。	粘土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。(10YR 7/4)
3	甕	- (測) (土)	口縁部は強く外反して大きく開く。胴部は球状を呈すると考えられる。	外側→口縁部コナダ、胴部以下ハヤ調整痕跡あり。口縁部→胴部にかけて一定の間隔において波状の赤色塗彩が施される。 内側→全縁部ハヤ調整の後、口縁部→胴部下部全方向へのヘラミダキ。	粘土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。(10YR 6/3)
4	高環	23.5 (測) (土)	胴部は内折して開く。口縁部は氣流して蹄状を呈する。	外側→胴部ハヤミダキ、赤色塗彩。 内側→胴部ハヤミダキ、赤色塗彩。	粘土は砂粒を含み、にぶい黄色。(5YR 7/4)



第151図 H-2号住居址出土遺物(1:4, 1:2)

がなされる。この他、全面赤色塗彩された胴部破片もある。

甕は器形の全容を知り得る1・2がある。中型品の1は短く開く口縁部に比して胴部が大きく球状に膨らむのに対し、小型の2は余り膨らまない。文様は1・2ともに口縁部から胴部まで帯状波状文を施した後、頸部に簾状文、直線文が施される。このほか台がつくかどうか不明の5~7もある。いずれも外面にハヤ調整が施される。

鉢は碗状を呈する小片があり、赤色塗彩されるものと無彩のもの両者がある。高環の4は碗状に開く体部から口縁部が水平に折れ、蹄状を呈するものである。脚部の小片もみられる。

石器には磨石7があり、チャート製である。

#### 時期

以上の提示資料をもって本址は古墳時代初頭に位置付けることができる。

### (3) H-3号住居址

#### 住居址 第152図

本址は、調査区では最南端に当たるⅠ-7グリッドに位置する同時期では最小の竪穴住居址である。重複関係は持たないが部分的に耕作等による破壊を受けている。

その規模は東西3.56m南北3.50mで、平面形状は隅丸方形を呈する。床面積は12.65㎡を測る。長軸方向はN-20°-Eを指す。

壁体は削平されている部分が多く、残存部で5cm内外と浅い。壁溝は東壁下の南側に認められる。

床面は貼床が全面に施されているが、やや脆弱で凹凸もある。

炉は住居中央の北側に設けられる。径37×35cmの円形を呈する地床炉で、南と東側に「L」字状に囲うように縁石が置かれている。床面からは浅く10cm程掘り窪められている。底面には焼土の地積が認められず、わずかに焼け面が認められる程度であった。

ピットは1個が検出された。支柱穴に当たるものは検出されなかった。住居南西部にあるP<sub>1</sub>は径70cmと大きく貯蔵穴とも考えられる。

覆土は黒褐色土のみの単層である。

#### 遺物 第153図

覆土中および床面上から弥生土器が少量出土している。器種は壺・蓋・甕・高環・鉢があるが、全容を知り得るものはない。図示したものは4点、拓影は2点である。

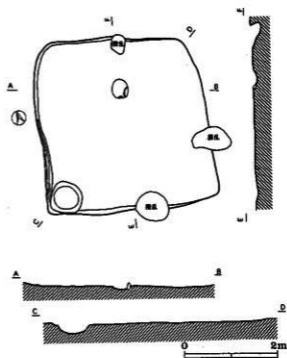
壺は無彩の胴部破片がある。

蓋の1はつまみ部の破片で中央に一孔を持つ。

甕は焼成後に底部を穿孔した2と、胴部に櫛描波状文を施した5・6がある。

高環の3は小型品で赤色塗彩される。鉢の4も同じく赤色塗彩される。

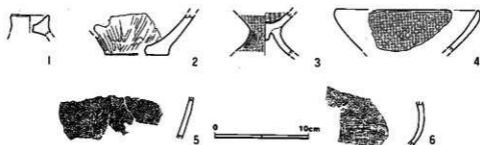
鉢は碗状を呈し、赤色塗彩される4と、無彩の小片がある。



第152図 H-3号住居址実測図

第94表 H-3号住居址 出土土器観察表

探検番号	種類	数量	形状の特徴	文様及び調色	備考
1 (出)	甕	4.0 -	つまみ部のみ、中央に縦成 の穿孔あり。	内外面ともナデ。	胎土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。 (10YR 7/4)
2 (出)	甕	- (本) -	胴部のみ、中央に縦成の 穿孔あり。	外面一縦方向へラミダシ。 内面一横方向へラミダシ。	胎土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。 (10YR 7/3)
3 (出)	高杯	- (本) -	鎌倉部のみ、ソケット式 合。	外面一縦方向へラミダシ、赤色陶質。 内面一環状に横方向へラミダシ、赤色陶質、網目ナデ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (10YR 8/3)
4 (出)	鉢	(15.8) -	口縁部は内湾して深く。	内外面縦方向へラミダシ、赤色陶質。	胎土は砂粒を含み、にぶい黄褐色。 (10YR 7/3)



第153図 H-3号住居址出土遺物

#### 時期

以上の出土土器から本住居址は古墳時代初頭に帰属すると考えられる。

### (4) H-4号住居址

#### 住居址 第154図

本址はい-6グリッドにおいて検出された焼失住居である。重複関係は持たない。

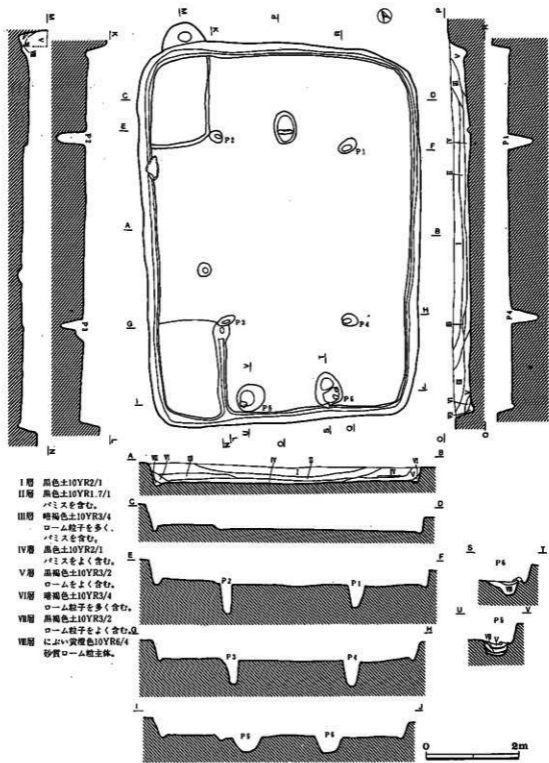
東西5.52m南北7.70mの隅丸長方形プランを呈し、床面積は45.7㎡を測る大型の竪穴住居である。長軸方向はN-22°-Eを指す。

壁高は29~43cmを測り、壁体は堅固である。壁溝は住居壁下を全周し、更に南西側のベッド状遺構の東直下にも切り込んでいる。

床は全面に貼床が施され、堅固で平坦な面を成す。北西と南西コーナーには長辺でそれぞれ1.85、2.05mの矩形を呈する平坦な高まりがあり、所謂ベッド状遺構が設けられている。

炉は北側の支柱穴間に設けられる。66×45cmの楕円形を呈する地床炉で内部の中央南よりに緑石を配置する。床面からは8cm程度浅く掘り窪め、焼土が浅く堆積する底面はおおむね平坦面を





第154図 H-4号住居実測図

なす。

ビットは6個が検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>は主柱穴で住居四隅に整然と長方形配置される。H-1・2号住居址と同様にいずれも住居長軸方向に対して柱穴平面形の長軸が直交する楕円形を呈する。長径はP<sub>1</sub>から39・30・40・36cm、深さは45・60・52・52cmを測る。南壁下中央に整然と並ぶ対ビットP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は入口関連ビットと考えられ、径は60cm内外と大きい。

覆土は、7層に分層された。プライマリーな堆積状況を示す。住居中央にレンズ状の最終堆積を示すI II層は共に純度の高い黒色土、次のIII層は暗褐色土、廃絶後の第1次堆積を示すと考えられるIV V層は黒色・黒褐色土、壁崩壊と関連すると考えられる壁下に若干堆積するVI VII層は暗褐色土である。

#### 炭化材・遺物の出土状況 第155図

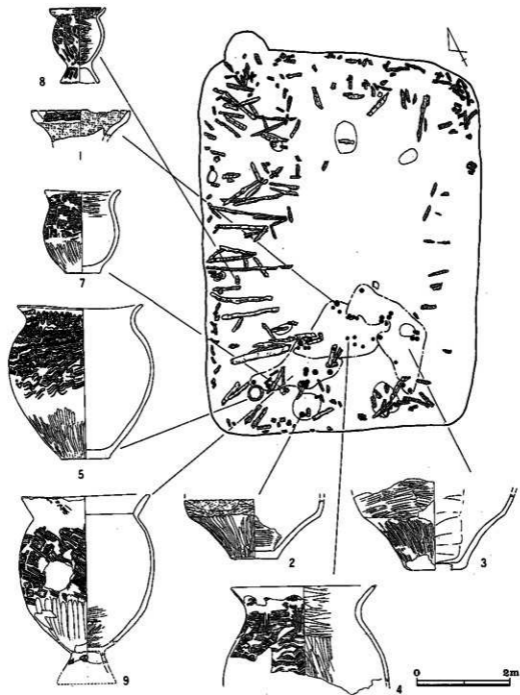
土器破片はあまり多くはないが、床面、覆土中から出土した。住居南に集中分布する傾向にある。

甕5は南のベッド状遺構上に逆さに置かれ、甕7はそのすぐ脇から炭化材に押し潰されるような状態で出土した。7については焼失の際にはかなりの熱を受けたため、器面の劣化が著しく、歪みも激しい。また、台付甕8は西壁下中央の床上から横倒しの状態で出土した。以上がほぼ完存品で、他の図化した土器は欠損品である。破片の分布も甕3・甕4・台付甕9のように小範囲内ではあるが、散在する傾向にあるものが多い。赤彩された甕2についてはすべての破片がP<sub>5</sub>内から出土した。

以上のような出土状態からみて、本住居址出土土器は廃棄時の同時性が極めて高いものと判断される。

また、本住居からは焼失の際に焼け落ちたと考えられる炭化材が床面上から多量に出土した。平面的な分布は北及び西壁下に濃く、東壁下に薄い状況を示す。東壁下についてはおおむね焼けきってしまったのであろうか。材の向きは大方が住居中央に向かって放射状に並んでおり、屋根の垂木がほぼそのまま焼け落ちたような状況を呈している。この推測が正しければ、この住居の屋根は寄棟造りであった可能性が高い。

なお、炭化材200余点を樹種同定した結果についてはバリノ・サーヴェイ株式会社の分析によってドングリが熟する樹木、コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種が住居構築材として多用されていることが明らかになった。報告結果を後頁に掲載する。



第155图 H-4号住居址炭化材・土器分布图

## 遺物 第156・157図

總体的に土器の出土量は少ないが、比較的全容を知り得る資料に恵まれている。また、先に述べたようにいずれの土器も住居焼失時に存在したものであるため、甕7に象徴されるように高い熱を受けている。

器種は壺・甕・台付甕などがある。図示したものは9点、拓影は7点である。

壺は赤色塗彩される1・2・10と無彩の3がある。1は受け口状に立ち上がる口縁部を持ち、端部に櫛描波状文が施される。これに対し、無彩で無文の小片もある。10は頸部の破片で櫛描波状文が施される。2・3は胴部中位以下の破片で下位が瘦ける。

甕は櫛描波状文が施される4・5・7・11～13と斜走文が施される6・14～16がある。形態は胴部径が口縁部径を凌駕するものが多いが、大型品の4は口縁部が長く外反するのに対し、中型品の5は短く強く外反する。また、小型品の7は口縁部の外反度がかかなり緩い。11は貼り付け口縁、14は口唇部に刻みを持つ。以上、本住居址から出土した甕については形態上のバラエティーが著しい。

台付甕は小型の8と中型の9がある。8は口縁部が受口状を呈するのに対し、9は単純口縁である。胴部はいずれもハケ調整が施され、9は下位にヘラミガキが加えられる。また、細片ではあるが、口唇部に刻みをもつものもある。

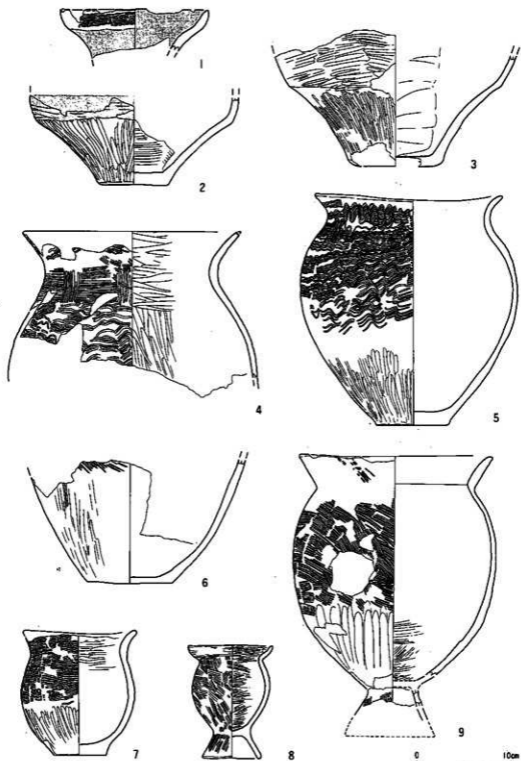
高坏は赤色塗彩され、鈿状にめぐる口縁部を持つ在地の弥生土器の系譜を引くものと、無彩で椀状の坏部を持ち、土師器の系統と考えられる大型品の破片がある。

鉢は椀状を呈し、赤色塗彩されるものがある。

石器には軽石製の凹石17がある。

## 時期

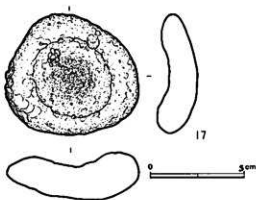
以上の出土土器のうち、千曲川流域・在地に特長な後期弥生土器「箱清水式土器」の系統下にあるのは、壺1～3と甕4～7である。一方、当地の弥生土器からは円滑に発展し得ない外来系の土器は台付甕8・9である。この両者の同時性については、先に述べた出土状態からも肯定できるものである。在地系土器と外来系土器が共存する状況は、本住居出土土器群が弥生末～古墳時代初頭に制作されたことを示している。また、型式学的な立場から見ると、本住居出土の在地土器は「箱清水式土器」の基本形からの変容が著しく、文様が消失する直前段階のものである。以上の所見をもって本住居は地域の弥生時代色を濃厚に残しながらも、古墳時代初頭に建造されたものと判断する。



第156图 H-4号住居址出土遗物

第95表 H-4号住居址 出土土器観察表

図号	器種	数量	形状の特徴	文様及び調査	備考
1	甕	(15.5)	口縁部は外反し開くが、 (取) (土) 縁部で受け口状に立ち上がる。 -	外面-口縁部より上へ部には磨滅痕状文、以下上から縦一縦方向のヘラミダキ及び彩色塗布。 内面-縦方向のヘラミダキ、彩色塗布。	胎土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5YR 7/0) 2次焼成のため灰色。
2	甕	(土)	胴部は下位で腹を持ち、直ける。 7.2	外面-腹より上の胴部は縦方向ヘラミダキ、彩色塗布。下は縦方向ヘラミダキ。 内面-ハタ調。	胎土は砂粒を含み、におい黄褐色。 (10YR 6/3)
3	甕	(土)	胴部は下位で腹を持ち、直ける。 9.4	外面-腹より上の胴部は縦方向ヘラミダキ。下は縦方向ヘラミダキ。 内面-ハタ調。	胎土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5YR 7/0)
4	甕	(22.8)	口縁部は狭く外反し、胴部 (取) (土) は半位で腹り球状を呈する。 -	外面-口縁部から胴部にかけて、磨り磨滅痕状文を施したのち、胴部には磨滅痕状文を施し、更にやや不揃いな縦ストリで区別する。 内面-全縁ハタ調塗の迹。口縁部-胴部は縦方向、胴部は縦な縦方向のヘラミダキ。	胎土は砂粒を含み、におい黄褐色。 (10YR 6/3)
5	甕	19.8	口縁部は狭く外反し、胴部 (取) (土) は半位で腹り球状を呈する。 24.3 7.5	外面-口縁部から胴部にかけて基本的に上から下へ磨滅痕状文を施す。後、胴部下位は丁寧な縦方向のヘラミダキ。 内面-縦方向のヘラミダキ。	胎土は砂粒を含み、におい黄褐色。 (10YR 7/4)
6	甕	(土)	- 8.2	外面-胴部下位に斜交文の痕跡あり。以下は縦方向のヘラミダキ。 内面-縦方向のヘラミダキ。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (7.5YR 7/0) 表面は強い2次焼成を受ける。
7	甕	11.7	口縁部は狭く短く外反し、 (取) (土) 胴部は下位で膨らむ。台部は「ハ」字状に開く。 12.8 5.5	外面-口縁部から胴部に基本的には上から下へ磨滅痕状文。以下縦方向のヘラミダキ 内面-縦方向のヘラミダキ。	胎土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5YR 7/4) 表面は強い2次焼成を受ける。
8	右付葉	8.9	短く口縁部は受け口状を呈し、胴部は短く膨らむ。 (取) (土) 台部は「ハ」字状に開く。 11.8 6.2	外面-口縁部磨ナす。胴部から台部にかけてハタ調。 内面-口縁部は縦方向のヘラミダキ。以下はハタ調。	胎土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5YR 7/4)
9	右付葉	20.3	口縁部は「く」字状に磨滅して直線的に開く。胴部は短く膨らむ。台部は「ハ」字状に開く。 (取) (土) (9.3)	外面-口縁部磨ナす。胴部は半位まで斜方向のハタ調。下位は縦方向のヘラミダキ。台部ハタ調。 内面-口縁部は磨ナす。台部はナす。	胎土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5YR 7/4) 表面磨滅が顕著しい。



第157図 H-4号住居址出土遺物

## (5) H-5号住居址

### 住居址 第158図

本址は、い-5グリッドに位置する。今回発掘された調査区中の同時代の竪穴住居群では中央に位置する。縄文時代のD-5・6・106号土坑と重複関係を持ち、これを破壊する。

その規模は東西6.95m南北9.72mで、平面形状は隅丸長方形を呈し、床面積は68.7㎡を測る。時期的には古墳時代に入っているとはいえ、今までに発掘された同種の佐久地方の弥生時代竪穴住居の中にあつて最大級を誇る。長軸方向はほぼ真北指す。

壁体は割合堅固で、壁残高21~25cmを測る。壁溝は一部に断絶が認められるが、北・東・西壁下をめぐっており、南壁下には掘削されていない。

床面はおおむね全面に貼床が施され、平坦で堅固に叩き締められている。住居南半分の壁下には南壁下中央が一か所断絶するものの、5cm前後高い床面が80cm前後の幅でめぐっており、所謂ベッド状遺構が設けられている。

炉は北側の支柱穴間に設けられる。径50cm程の円形を呈する地床炉で、南側に緑石（河原石）を置いている。床面からは浅く6cm程掘り窪められている。底面には焼土の堆積がわずかに認められた。

ビットは6個が検出された。支柱穴P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は竪穴住居内四隅に整然と長方形配置される。P<sub>1</sub>から径70・55・68・70cmの大型の円形柱穴で、床面からの深さはそれぞれ78・71・82・70cmを測る。炉の北側直上にあるP<sub>5</sub>は棟持ち柱で、径が32cm、深さ62cmを測る。南壁下にあるP<sub>6</sub>は貯蔵穴的な性格を持つと考えられ、壺の大型破片が埋まっていた。径70cm、深さ28cmを測る。

覆土は3層からなる。I層は住居中央にレンズ状に堆積する黒色土、II層は第1次堆積土に当たる黒褐色土である。

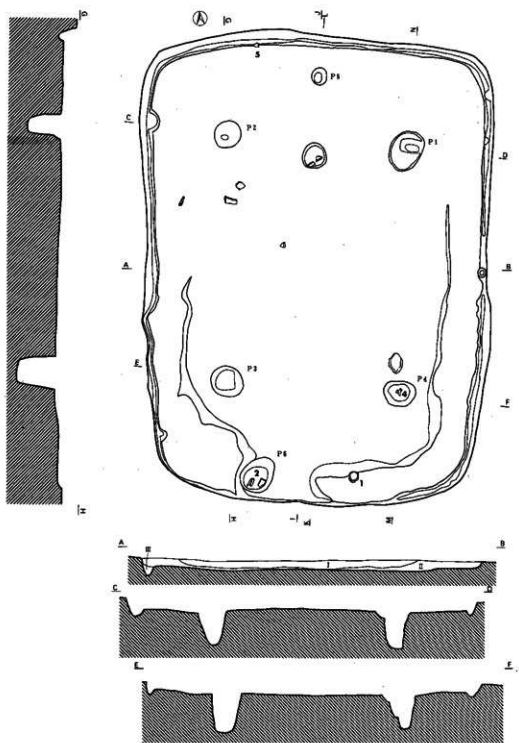
### 遺物 第159図

覆土中・床面上から弥生土器・土師器が出土しているが量は少ない。器種は壺・台付甕・高坏がある。図化したものは5点、拓影は6点である。

ほぼ全容を知り得る土器は4一点のみで他はいずれかが欠けている。

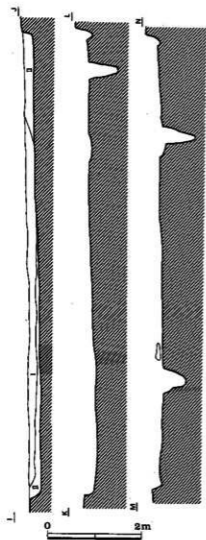
壺はベッド状遺構上に置かれていた1と入口付近のビット中にあつた2、また、細片ではあるが6がある。1・2は無文で在地の弥生土器の系譜からは円滑に発展し得ない器形を持つ。1は口縁部の幅が広い二重口縁壺、2は貼り付け口縁で球脚を呈する。6は在地の弥生土器の系譜上であり、受け口状の口縁部に櫛描波状文が施される。

甕は櫛描波状文が施される小片がある。



第158图 H-5号住居址实测图





- I層 黒色土10YR2/1  
 パミスを多く含む。
- II層 黒褐色土10YR3/2  
 ローム粒子を多量、パミスを多く含む。
- III層 暗褐色土10YR3/3  
 ローム粒子を多量に含む。

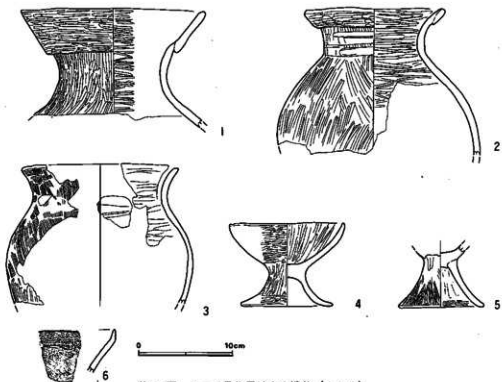
台付甕の3は口縁部から胴部中位までハケ調整され、下位はヘラミガキされる。

高坏4・5は東海系小型高坏を模倣したようであるが、脚部径が口縁部径を凌駕しないなど在地的な変容が著しい。高坏か鉢かは判別できないが赤色塗彩された破片もある。

#### 時期

本住居址の出土土器は1～5に象徴されるように無文で、在地の弥生土器からは円滑に発展し得ない外来要素の強い器種が多く、他の古墳時代住居址とは若干異なった土器様相を示す。つまり、やや後出的な感を受ける。とはいえ、本住居址が集落内で最大の位置を占める盟主的性格の強い住居であることを勘案すると、土器に先進性がみられても強ち不思議でない。

したがって、本址は他と同じく古墳時代初頭に帰属するものと考えておきたい。



第159図 H-5号住居址出土遺物(1:4)

第96表 H-5号住居址 出土土器観察表

図号	器種	高さ	器形の特色	文様及び調査	備考
1	甕 (土)	19.6 —	二重口縁で胴部は直く外反する。	外面—口縁部斜方向、胴部縦方向のヘラミダキを施す。 内面—縦方向のヘラミダキ。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色。 (10YR 7/4)
2	甕 (土)	14.5 —	張り付け口縁で胴部は直立 尖峰に直く外反、胴部は中 位で張り部を呈する。	外面—口縁部縦、胴一部までは縦方向のヘラミダキを施す。 内面—口縁—胴部縦方向のヘラミダキ、以下ハヤ割施。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色。 (10YR 7/3)
3	合作甕 (土)	16.6 —	口縁部はゆるく外反し、胴 部は球状を呈する。	外面—口縁部斜ナダ、胴部は中位まで斜方向の緩かいハヤ割施。下位は縦方向のヘラ ミダキ。 内面—口縁部—胴部丁寧なヘラミダキ。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色。 (10YR 7/2)
4	高 杯 (土)	12.1 8.7 8.8	厚縁筒状を呈し胴部は口縁 部を注脱する程度で合いが 大きく広がる。	外面—厚縁部、胴部縦方向の丁寧なヘラミダキ。 内面—厚縁部縦方向のヘラミダキ、胴部はナダの張、胴を縦方向のヘラミダキ。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色。 (10YR 7/3)
5	高 杯 (土)	— 8.8	胴部は大きく広がる。	外面—胴部縦方向のヘラミダキ。 内面—胴部ナダ。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色。 (10YR 7/3)

## (6) H-6号住居址

住居址 第160図

本址は、う-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は持たない。

その規模は東西5.00m南北6.68mで、平面形状は隅丸長方形を呈する。床面積は34.06㎡を測る。長軸方向はN-4°-Eを指す。

壁体は地山の砂層を利用するため脆弱である。壁残高は12~34cmを測り、北から南へ向かって低くなる。壁溝は掘削されていない。

床は全面に貼床が施され、堅固で概ね平坦な面を成すが、南東コーナーは若干盛り上がっており、いわゆるベッド状遺構を持つ。

炉は北側の支柱穴間に設けられる。径34cmの円形を呈する地床炉で、南側には扁平な石を置き、縁石としている。床面からは5cm程度浅く掘り窪められており、底面はおおむね平坦である。焼土の堆積は認められなかったが、底面は焼け込んだ痕跡が認められた。

ピットは8個が検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は支柱穴で住居四隅に整然と長方形配置される。平面形は円形に統一される。径はP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>が36~40cmでそろっているが、P<sub>4</sub>は68cmと大きい。また、深さはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>が68・61・61cmを測るのに対し、P<sub>4</sub>は19cmと浅い。北壁下中央にあるP<sub>5</sub>は113×67cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。この南側のP<sub>6</sub>は径25cm、深さ14cmと浅く、位置も中軸線からややずれているため、直ちに棟持ち柱とは断じ難い。南壁下のP<sub>7</sub>はその規模から7が入口関連、6が貯蔵関連のピットと考えられる。

覆土は、3層からなるが、住居を埋めたのはI・II層である。I層はきめの粗い黒褐色土で砂粒を多量に含む。II層はI層よりきめ細かい黒色土である。III層はピットの埋め土で砂が主体である。

遺物 第161図

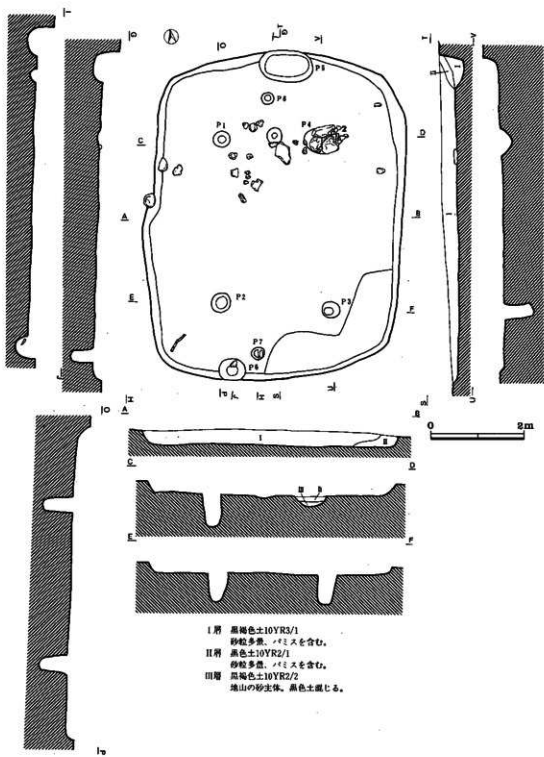
覆土中・床面上から弥生土器が出土している。総体的に出土量は少ない。

器種は壺・甕・台付甕・高坏・鉢などがある。ただし、壺・高坏は小片のため、図化しなかった。図示したものは3点、拓影は8点である。

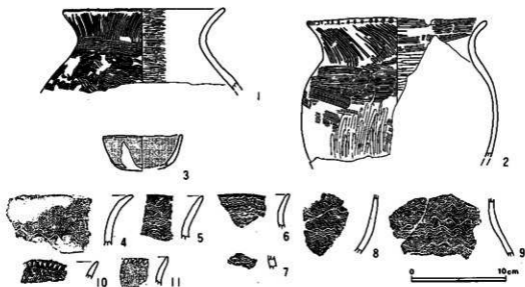
壺は胴部下半が瘦ける無彩の小片が出土している。

甕は胴部が球胴状に大きくふくらむ1がある。口縁部に櫛描斜走文、胴部に波状文を施した後、頸部に2連止めの簾状文が施文される。このほか、4~9はこれと同様の破片で櫛描波状文が施されている。

台付甕2は球形胴部から長く外反する口唇部に刻みが施される。口縁部から胴部中位はハケ調



第160図 H-6号住居址実測図



第161図 H-6号住居出土遺物(1:4)

第97表 H-6号住居 出土土器観察表

群	種	出土	器形の特徴	文様及び調査	備考
1	甕	17.1	口縁部は強く外反して開く。胴部は球状を呈すると考えられる。	外面→口縁部へ縦方向に近い帯状刺状文を一段、胴部に扇状刺状文を施した。胴部に帯状刺状文を施す。 内面→口縁部へ縦斜方向のヘラミガキ。	粘土は砂粒を多量、灰質褐色。(19YR 8/0)
2	台付甕	18.9	胴部は直立筒状で口縁部は強く外反する。胴部は球状を呈する。	外面→口縁部へ縦斜方向、胴部上段縦方向のハチ割線、胴部中位以下縦方向ヘラミガキ。 内面→口縁部以下ハチ割線の後、胴部以下に丁寧なヘラミガキ。	粘土は砂粒を多量、褐色。(5YR 6/3)
3	高杯?	8.4	口縁部はまっすぐ開く。	内外面赤色塗彩。縦方向の丁寧なヘラミガキ。	粘土は砂粒を多量、黄灰色。(19YR 5/1)

甕、中位以下はヘラミガキが施される。10・11も同様の破片である。

鉢3は手捏ね成形の小型品で碗状を呈する。赤色塗彩される。この他、細片ではあるが赤色塗彩される中型品もある。

#### 時期

以上の出土土器の様相から本住居址を古墳時代初頭に位置付ける。

## 4 後期古墳群と関連遺構・遺物

### (1) K-1号古墳 第162図

#### 位置

本址はい・う・5・6グリッドにおいて検出された。D-180号土坑を破壊する。

#### 墳丘

直径13m前後のやや東西に長い円墳であるが、第166図のように南側前底部が4.5m程張り出している。墳丘の中央、盛土（第II層）部分は大方が破壊されて、厚さ30cmが残る程度であるが石室の奥・側壁を構成した①②が盛土層内で旧位置を止めていること考えると余り高い墳丘であったとは考えがたい。

#### 主体部

主体部も旧状を止めず、石室を構築したと考えられる巨石①~⑩・礫の残骸が散乱していた。前述した石室の旧位置を止める①②から推定復元すると長さ3.2m幅1.5m程度の規模を持つ主軸方位N-32°-Wの横穴式石室であったようだ。ただし、羨道部については復元する手がかりさえない。同部に使用されたかもしれない⑦~⑩が遠く離れたD-165~168号土坑内まで運ばれ、礫とともに埋められてしまっていたからだ。また、石室東に走る暗渠についても古墳の付属施設であるか判然としない。

#### 周溝

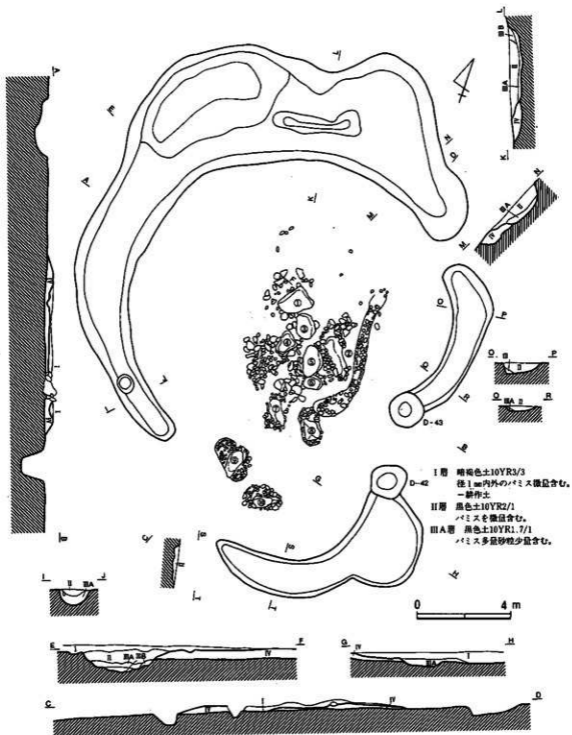
墳丘を全周せず東と南で断絶がある。広く確保される前底部の南に掘削される弧状の周溝とその北に接する周溝の先端にはそれぞれD-42・43号土坑が並ぶように位置しており、古墳に関連する遺構であった蓋然性が高い。

周溝の幅も一定でなく、特に北側は2箇所と南側1箇所が大きく突出している。深さは50cm前後である。

#### 遺物 第163図

覆土中を中心として須恵器が少量出土している。土師器はない。

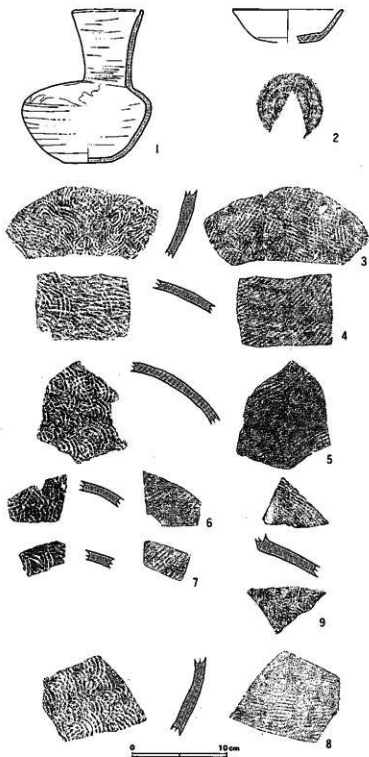
須恵器の器種には平瓶・杯・甕がある。平瓶1は周溝内の北側からまとも出土した完存品



III層 黒色土10YR1.7/1 バミス多量含む。

IV層 黒色土10YR3/1 バミス・ローム少量含む。一部丘頂黄土

第162図 K-1号古墳実測図



である。坏2は無台のやや小振りな坏である。底部回転へう切りがなされる。墳丘上のD-165号土坑から出土したが、この土坑は石室残骸を納めたものであるため、内部の出土遺物は古墳のものとして掲載した。3～9はいずれも甕の胴部破片である。内面は青海波状の当て具を用いている。4～7は同一個体の胴部上位破片で叩き成形の後、ヨコナデして調整している。ほかの3・8・9も叩き成形がなされている。

#### 時期

本址は上記の資料をもって、7世紀前半に位置付ける事ができよう。

第163図 K-1号古墳出土遺物(1:4)



第98表 K-1号古墳 出土土器観察表

群像番号	群像	法量	群像の特徴	文様及び調査	備考
1	平 瓶 (92)	7.4 16.8 5.4	瓶-口縁部にかけてはほぼ 直立し、上端やや円弧。 胴部は上位が狭る。	外面-口縁部-胴部中段まで 内面-口縁部。	瓶土は焼成され、灰白色。 (10YR 7/1) 胴部に緑色の自然附付物。
2	平 瓶 (90)	11.7 3.5 6.8	口縁-胴部は直線的に用 き、胴部はやや丸みを帯び る。	外面-口縁-胴部口縁部ナズ。 内面-口縁-胴部口縁部ナズ。	瓶土は焼成され、灰白色。 (10YR 5/1)

## (2) K-2号古墳 第164図

## 位置関係

本址はあ・い-5・6グリッドにおいて検出された。

## 墳 丘

直径12.5m前後の円墳である。墳丘の盛土部分（I II層）は大方が削除されて、厚さ40cmが残る程度である。

## 主体部

主体部も完全に削除されているため、旧状は不明である。

## 周 溝

墳丘を全周せず、断絶がある。特に大きく開口する南側は前庭部に当たると考えられ、その間隙を埋めるように直径6.60mの大きなD-52号土坑が掘削されている。覆土はしまりなく古墳築造・遺体埋葬時に埋め立てられていたとは考えがたい。

周溝の幅は一定でなく、北と東側は2箇所が大きく突出している。確認面からの深さは50cm前後である。

## 遺物の出土状況

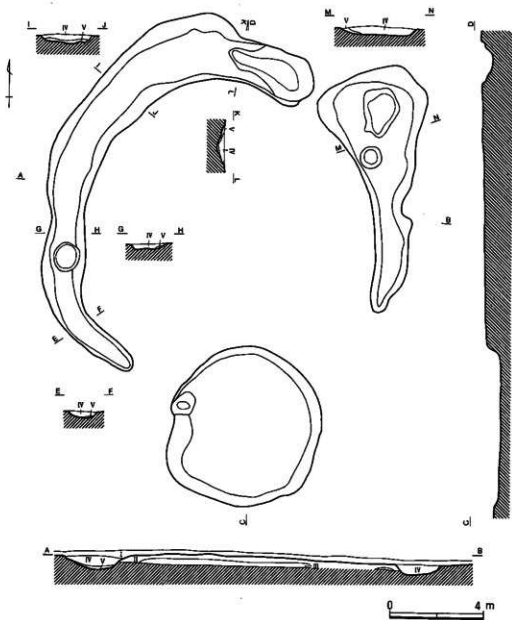
本古墳に伴うと考えられる遺物は極めて少なく、分布状況も散在的である。

## 遺 物 第165図

覆土中から須恵器が出土している。

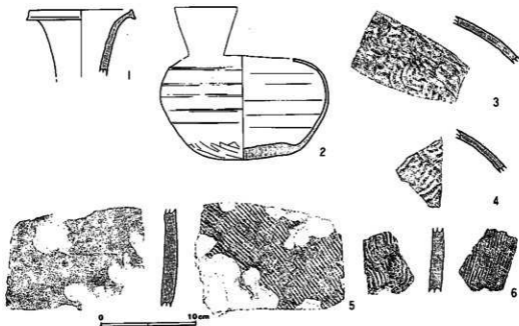
器種はほとんどが甕で、他は壺・平瓶がある。図示したものは2点、他4点は拓影である。

1は長頸壺の口縁部の破片である。



- I層 黒褐色土10YR2/3-耕作土  
 II層 黒色土10YR2/1  
 径10mm内外のバミス含む。  
 III層 黄褐色土10YR5/6  
 径10mm-拳大のバミスを多く含む。  
 IV層 黒色土10YR1.7/1  
 径10mmのバミスを多く含む。  
 V層 暗褐色土10YR3/4  
 ローム粒子多く含む。

第164図 K-2号古墳実測図



第165図 K-2号古墳出土遺物(1:4)

第99表 K-2号古墳 出土土器観察表

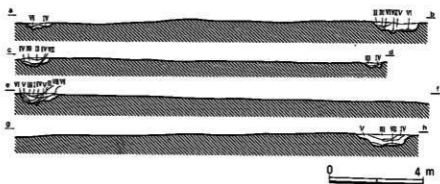
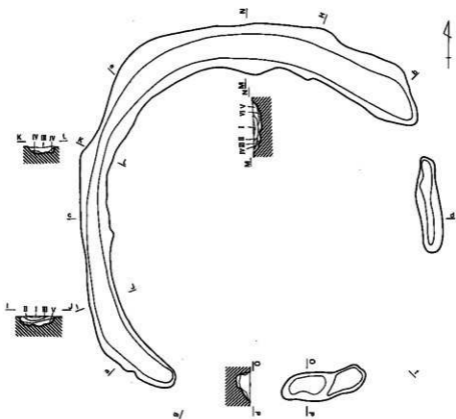
押印 番号	器 種	注目	器形の特徴	文様及び装束	備考
1 (印)	長頸瓶 (印)	10.8 -	口縁部はゆるく外反。肩部 で下半部に肥厚する。	内外面クロコナデ。	胎土は粘濁さ丸。褐色色。 (N 4/ 6/1)
2 (印)	平瓶 (印)	- 11.0	肩縁は上位で鋭る。	内外面クロコナデ。底面は手持ちヘラケズリ。	胎土は粘濁さ丸。灰色。 (N 4/ )

2は平瓶の口縁部が欠損したものである。これと同一個体ではないが、自然釉のかかった口縁部の破片が他にも出土している。

3～6は甕の胴部近辺の破片で、3・4については肩部に当たると考えられる。内面には青海波状の当て具痕が残る。5・6は大型甕で外面は平行叩きされる。

#### 時期

本址は、時期判定に有効な土器資料に欠けるが、K-1号古墳に近い所産期、7世紀代前半を想定しておきたい。



I層 黒褐色土10YR2/2  
パミス若干含む。  
II層 黒色土10YR1.7/1  
含有物なし。

III層 黒褐色土10YR2/2  
パミスを多く含む。  
IV層 黒色土10YR1.7/1  
パミスを多く含む。

V層 黒褐色土10YR2/3  
パミスを多く含む。  
VI層 暗褐色土10YR3/4  
ローム粒子を多量に含む。  
VII層 褐色土10YR4/4  
ローム粒子を大量に含む。

第166図 K-3号古墳実測図

(3) K-3号古墳 第166図

位置関係

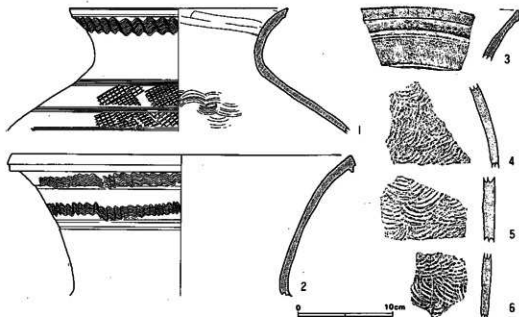
本址はい・う-3・4グリッドにおいて検出された。J-10・11・12号住居址、D-112・119号土坑を破壊している。

墳丘・主体部

直径13.2m前後の円墳である。墳丘の盛土部分・主体部はすべて削除されている。したがって埋葬施設については不明である。

周溝

墳丘を全周せず、2箇所断絶がある。特に大きく開口する南側は前庭部に当たると考えられ、その間隙に全長3.7mの短い溝を掘削している。ほかの周溝の確認面からの深さは20~60cmである。周溝の幅はおおむね一定で、K-1・2号古墳のような突出はみられない。



第167図 K-3号古墳出土遺物(1:4)

第100表 K-3号古墳 出土土器観察表

種類番号	形状	出土	器影の特徴	文様及び調整	備考
1 (器)	甕	23.2 (M)	胴-口縁部は広く外反し、 - 胴部は大きくよくらむ。 - 口縁部に尖帯を持つ。	外底-口縁部コナナテ。胴部平行円形。 内底-口縁部コナナテ。胴部管筒状の凸て具状。 文様-口縁部に波状文。胴部に波帯の平行線。	粘土は精選さ丸。黄白色。 (2 5Y 6/1)
2 (器)	壺	36.2 (M)	胴-口縁部は外反強帯に狭く開く。	内外面コナナテ。 文様-口縁部に平行線と波状文。	粘土は砂粒を含み。灰色。 (M 5/1)

#### 遺物 第167図

本古墳に伴う遺物は少なく、覆土中に散在する程度である。出土した土器の種類はすべて須恵器である。また、須恵器の器種はすべて甕である。

#### 時期

以上の出土土器から時期判定は難しいが、K-1号古墳に近い時期7世紀代前半の所産を考慮しておこう。

### (4) K-4号古墳 第168図

#### 位置関係

本址はう・え-4グリッドにおいて検出された。J-9・13・19号住居址、D-134・137・138号土坑と重複し、これを破壊する。

#### 墳丘・主体部

直径14m程の円墳である。墳丘の盛土部分・主体部はほとんど削除され、その残骸と考えられる石がわずかに散在する程度である。

#### 周溝

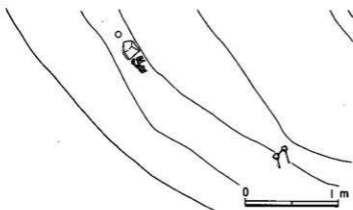
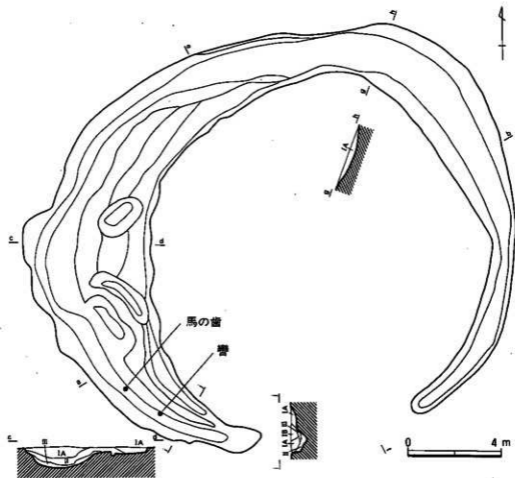
墳丘を全周せず、南側が大きく開口する。この部分は前庭部に当たると考えられる。

周溝の幅は一定でなく、特に西側がかなり幅広となっている。これは水流によるものかも知れない。確認面からの深さは30~90cmである。

#### 遺物の出土状況

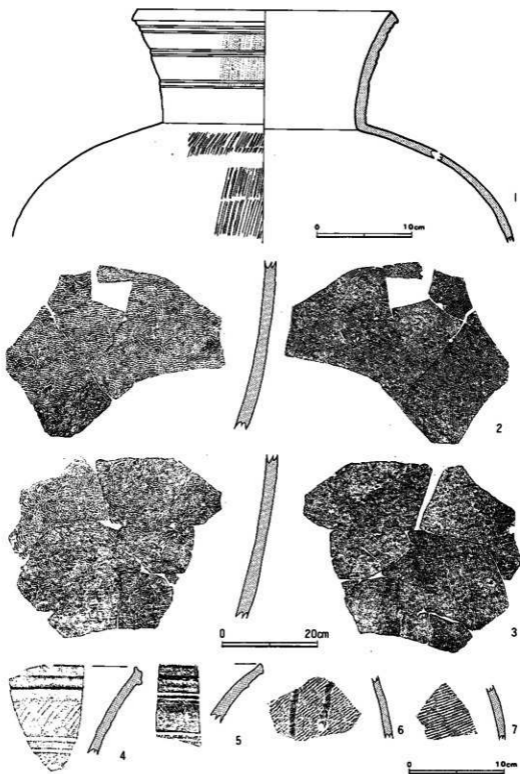
古墳に伴う須恵器は周溝の頂部・北側に破碎されたいし大型破片が散在する程度であるが、注目すべきは周溝内南西、溝底面から20cm程上から馬の歯と馬具の轡が出土したことである。両者は1.5mほど離れた位置から出土しているため、埋葬馬であるとすれば旧位置を保っているか定かでない。なお、ほぼ一頭分に当たる馬の歯から推定された年齢は10才±1、馬体は在来馬よりやや小さめとの所見をいただいている。したがって天寿をまっとうした馬ではないようだ。

また、本址の馬の歯と轡の出土の意味付けについては、後章で桃崎祐輔氏により詳述されているので参照されたい。



- I A層 黒色土10YR2/1  
パミヌ少量含む。
- I B層 黒色土10YR2/1  
パミヌ少量含む。
- II層 黒色土10YR1.7/1  
パミヌ少量含む。
- III層 II層と砂粒が混じる。

第168図 K-4号古墳実測図・  
馬歯と井の出土状況図



第169图 K-4号古墳出土遺物 (1:4, 1:8)



第101表 K-4号古墳 出土土器観察表

群別 番号	群名	出土 位置	器種の別名	文様及び装飾	備考
1 (副)	甕	22.0 -	口縁部はゆるく外反。胴部 は大きくふくらむ。	外側→口縁部ナズ。胴部平行叩き成形。 内側→ナズ。 文様→口縁部に曲線状工具の装飾。後、2本一組の沈線を3型めくらす。	取上げ時破れ、陶白色。 (10YR 6/1)

遺物 第169・170図

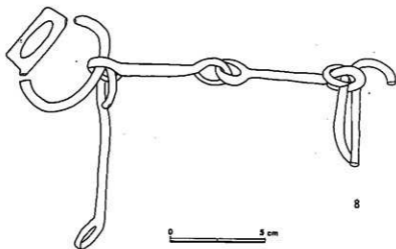
覆土中から須恵器が出土している。器種はほとんどが甕である。図示したものは1点、他6点は拓影である。

1は大型甕の口縁～胴部破片で、口縁部に2本一組の沈線が3体施される。2・3は同一個体でやはり大型甕である。内面に青海波状の当て具痕、外面に平行叩き成形痕が明瞭である。6・7については内面に青海波が見られない。4・5は甕の口縁部破片で4は平行沈線間に斜行沈線、5は波状文を埋めている。

馬の歯に接して出土した轡は部分的な欠損が認められるもの、おおむね全容が把握できる。直径6～7mmの断面円形の鉄棒を使用して作られた轡で、2本一對の「はみ」は長さ7.7cmで、両端の環に「鏡板」と「引手」が連結されている。鏡板は5.6×4.8cmの楕円環状、引手の長さは10cm程度で手綱側の環は35°程度曲げられている。

時期

以上の出土土器の特長から本址の時期決定をすることは難しいが、一応7世紀前半を想定しておこう。



第170図 K-4号古墳出土轡 (1:2)

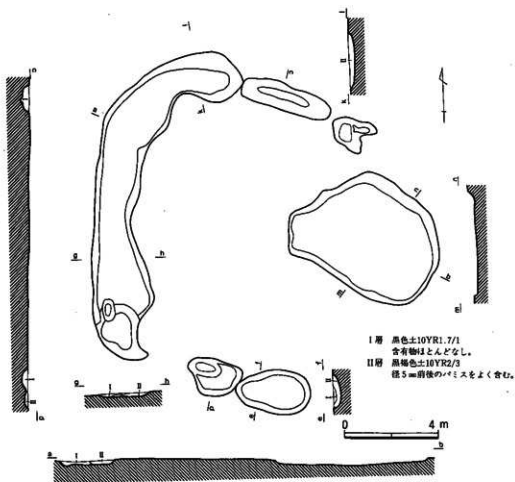
(5) K-5号古墳 第171図

位置関係

本址はう-4・5グリッドにおいて検出された。K-1・4号古墳に挟まれる位置にあり、J-18・19号住居址、D-152・162号土坑と重複し、これを破壊する。

墳丘・主体部

一辺11m程で崩れてはいるが方墳のように見える。塚田古墳群では最小の規模である。墳丘の盛土部分・主体部はほとんど削除され、埋葬施設が何であったのかわからない。



第171図 K-5号古墳実測図

## 周溝

墳丘を全周せず、5箇所の断絶を持つ。北側は長く掘削されるが、東・西両側は申し訳程度に短く掘削される。また、前庭部に当たると考えられる南側は大きく開口し、K-2号古墳と同様に大型の土坑D-108が掘削されている。周溝の幅は一定とは言えないが、他のように大きな突出は見られない。確認面からの深さは20cmで前後でかなり浅い。

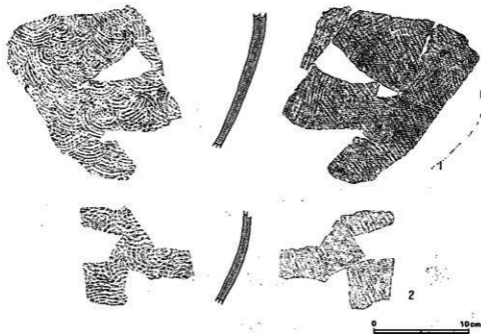
## 遺物 第172図

覆土中に須恵器が散在している。

器種はいずれも甕で、内面青海波状の当て具痕、外面平行叩き痕が明瞭である。

## 時期

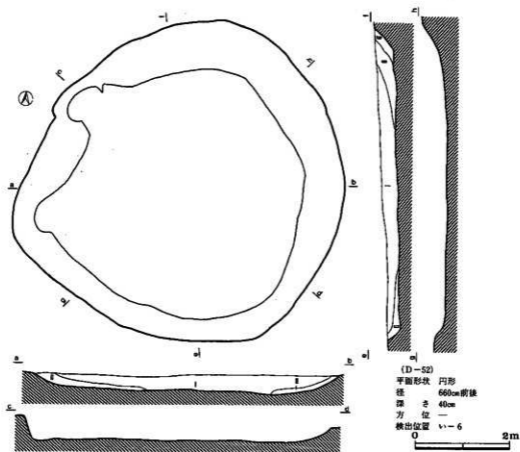
本墳は遺物から時期決定することは難しいが、K-1・4号古墳に挟まれる位置にあり、これらを侵さないように築造したためか、古墳群中でも最も平面形が崩れている。このような状況から見て本古墳は塚田古墳群造営最終段階の築造と推定しておきたい。



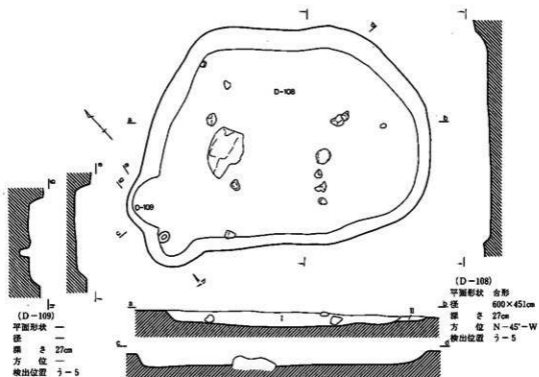
第172図 K-5号古墳出土遺物

(6) 古墳時代と考えられる土坑 第173・174図

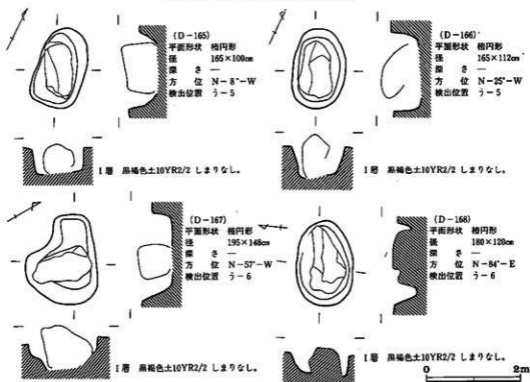
前述のように古墳時代前期の集落に対応する土坑を抽出することは難しい。また、後期古墳群に伴う土坑も明示できないが、次に図示したD-52・108号土坑については以下の2点からK-2・5号古墳との関連が指摘できる。第1点は共に長軸660・600cmを測り、本遺跡内では他に例をみない特大の土坑であること、第2点はこのずば抜けて大きな土坑が偶然にも周溝開口部に掘削されることである。古墳の周溝開口部・前庭部に当たる部分に大型の土坑を掘削する事例は、群馬県柏川村白藤古墳群などでも認められることから、この2つの土坑は古墳の前庭部に関連するものであった可能性が強い。



第173図 D-52号土坑実測図



第174図 D-108・109号土坑実測図



第175図 D-165~168号土坑実測図

## 5 近現代の土坑

遺構 第175図

K-1号古墳墳丘上の南側に集中して存在するD-165~168号土坑は、いずれも平面楕円形の坑内に古墳石室に用いられたと考えられる巨石1個と墳丘に用いられた多量の礫が充填されていた。

これらは当初古墳丘上の特異な埋葬形態の一種かと注目したが、土地の人の証言によると実態は畑を整地するに当たり、露出した邪魔な古墳の石（奥壁・側壁等）を処理するために、手近な場所に穴を掘って石を運んで落とした跡のようだ。したがって、掘削時期は昭和に入ってからのようなようだ。

IV

總括





# 1 塚田遺跡出土早期土器群について

中沢 道彦

## 1 早期第Ⅱ群土器について

塚田遺跡調査の成果として第Ⅱ群土器、つまり田戸上層式土器、もしくはそれに併行する土器群の良好な資料が検出された点があげられる。長野県内において田戸上層式土器の資料としては、大岡村鍋久保遺跡(第1図)、茅野市御座岩遺跡、望月町新水遺跡などがある。塚田遺跡出土資料においてもそれに匹敵する内容をもつものと評価できる。

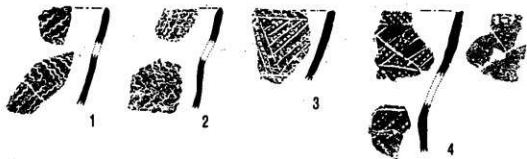
従来、長野県内における早期前半所謂沈線文土器群併行期においては、所謂押型文土器が研究の俎上にあげられる一方で、所謂沈線文土器の分析は比較的停滞の観があった。しかし今回の本遺跡や新水遺跡の調査成果から佐久方面では所謂押型文土器よりも、田戸上層式土器が主体的に分布するという仮説が提示でき、今後長野県内の早期土器研究においても田戸上層式土器をその研究射程に入れる必要があると考えるべきであろう。

これまでの編年研究の成果を援用すると、研究者相互の型式観の相違もあるが、関東方面と中部高地との型式と型式レベルの大雑把な対比では、平板式・三戸式と樋沢式、田戸上層式と細久保式・塞ノ神段階、田戸上層式と高山寺式の併行関係が予想される。これは神奈川県夏島貝塚、平坂貝塚、愛知県先苅貝塚、長野県伊那市浜弓場遺跡などの事例で確認される。

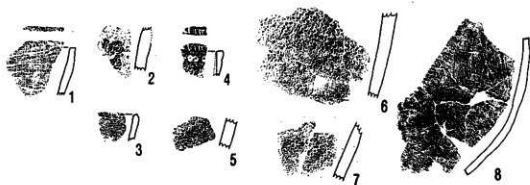
高山寺式土器については、開田村大原遺跡など木曾方面では資料的にまとまっている一方で、田戸上層式土器のまとまっている本遺跡や鍋久保遺跡では確認されない。長野県内の該期では地域ごとに主体的に分布する型式を異にし、少なくとも佐久方面では、また予察的には東信、北信では田戸上層式土器が主体的に分布すると考えられる。三戸式(竹之内式)土器は下諏訪町浪人塚遺跡、田戸下層式土器は塩尻市八窪遺跡、伊那市浜弓場遺跡、茅野市頭殿沢遺跡などで確認されるが、これらはむしろ押型文土器主体の遺跡である。三戸式、田戸下層式併行期において長野県内では押型文土器が主体となって分布する状況とは対峙的である。これは本遺跡調査による一つの成果といえよう。

さて本遺跡第Ⅱ群土器は遺構内出土や遺物集中地点など一括資料に値する出土状況にはめぐまれていない。また分布も充分にまとまりの傾向を指摘できないが、その資料の重要性には変わりはない。ここでは遺跡単位レベルの資料として若干の考察を進める。

本群の特徴としては、1～2mm前後の幅の原体による沈線、貝殻腹線による押圧、口端部は平坦に調整された後に沈線の原体か貝殻腹線による刻目をもち、外面は条痕調整され、胎土には織



第1図 長野県大岡村鎮久保遺跡出土資料 S=1/4



1~3 第53号土坑・4~8 第54号土坑

第2図 長野県茅野市天狗山遺跡出土資料



第3図 神奈川県夏島貝塚出土資料 S=1/4



第4図 神奈川県田戸遺跡出土資料 S=1/4

維を微量に含む他、雲母、白色鉱物、石英を含む点などが挙げられる。貝殻腹縁による押圧や外面条痕調整などは鍋久保遺跡、新水遺跡などでも確認され、これらが卓越する点は中部高地における田戸上層式の特徴として指摘することができる。

貝殻腹縁の押圧では、沈線区画内を充填するもの、貝殻腹縁の押圧のみのものがある。貝殻腹縁の押圧は田戸下層式で出現するが、田戸上層式で更に発達する。また貝殻腹縁の押圧のみの土器は東北方面では子母口式併行期においても確認される。貝殻腹縁の押圧のみのものは後述するが、中部高地でも田戸上層式直後に存在する可能性がある。長野県茅野市天狗山遺跡（第2図）では土坑内一括資料で貝殻腹縁の押圧のみ、条痕調整の土器が「判ノ木山西遺跡早期第Ⅲ類・第Ⅳ類土器」と併伴して検出された。天狗山遺跡出土資料では沈線文土器を伴わず、貝殻腹縁の押圧のみの土器が中部高地でも田戸上層式直後に存在する可能性を示唆する。またこれまで、「野島式・子母口式併行説」「早期末併行説」と見解が割れていた「判ノ木山西遺跡早期第Ⅲ類・第Ⅳ類土器」の編年的位置づけについても一定の見通しを与えるに至った。ただし本遺跡出土の貝殻腹縁の押圧のみの土器については、本遺跡では逆に「判ノ木山西遺跡早期第Ⅲ類土器」相当の土器など田戸上層式に後続しうる土器の出土が確認されない点を考慮すれば、田戸上層式の範疇で捉えるべきと考える。

また第11図24、25の押引状の連続刺突が施される土器については、茅野市御座岩遺跡、神奈川県ナラサス遺跡の例の如く、中部高地や関東西部方面の沈線内に押引や連続刺突がなされる土器との関係で現状では抱えたいが、類例の増加を待って論じたい。

胎土に繊維を微量に含む点は、田戸上層式に一般的な傾向といえる。田戸上層式の型式設定時において既に「繊維混入が甚だ少量であるが多くの土器に認められるもの」と山内清男に指摘された事項である。中部高地における田戸上層式においてもこの点が確認された訳である。

さて今回の調査では十分に確認しえなかった点としては、「沈文の他に細い又は太い隆線文様が見られる」とされ、田戸上層式の特徴とされた隆線をもつ土器の存在、また神奈川県夏島貝塚（第3図）、田戸遺跡（第4図）で出土した田戸上層式に組成する縄文施文の土器の存在が挙げられる。

隆線をもつ土器は、本遺跡や鍋久保遺跡でも確認されない。隆線をもつ土器が僅少なのが中部高地における田戸上層式の特徴なのか、またはまだ資料蓄積が少ない点によるのかは今後の検討課題としたい。

また縄文施文の土器についても本遺跡や鍋久保遺跡では判然としなない。しかし後述するが、後続する「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」の縄文施文、尖底深鉢の成立母体としても田戸上層式に組成する縄文施文の土器を仮定するならば、関東西部のみならず中部高地においてもその存在を論証する必要がある。

## 2 早期第Ⅲ群土器について

本遺跡では、県内において資料の蓄積が待たれていた「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」類似の完形個体が3個体、また若干の破片資料が検出された。

山梨県古屋敷遺跡の調査では火山性堆積物による包含層、また住居址床面より「古屋敷遺跡第Ⅲ群土器」(野鳥式土器)を伴い、「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」と分類された。厚手で胎土に金色雲母を大量に含み、条底調整を全く施さず、「口縁部周辺に段帯部をもつ尖底の深鉢で、縄文を主な装飾要素とする」土器や、「口唇部が肥厚して、断面形が外削状を呈する特徴的な無文土器」が検出された(第5図)。報告者の阿部芳郎によると、「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」の類似資料は長野県北相木村栃原遺跡、岡谷市下り林遺跡、洩矢遺跡、山梨県机遺跡など長野県中、南信から甲府盆地、富士山東麓に分布し、従来中部高地において茅山下層式併行の土器と扱われていた。しかし古屋敷遺跡の調査では「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」は鶴ヶ島台式、茅山下層式土器を含まず、野鳥式土器がほぼ単純な形で共伴した。「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」はその独自の構成、分布圏の独立性が予察しうる点から、野鳥式併行期の独自の土器型式として認定しうるものとした。古屋敷遺跡の調査成果は中部高地における縄文時代早期後半の土器編年研究の再編を余儀なくするものであり、その波紋は大きい。本遺跡においてその類似資料が完形3個体出土したことの意味は大きい。まずは本遺跡早期第Ⅲ群土器と「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」との比較検討を行い、若干の考察を加えたい。

本遺跡早期第Ⅲ群土器の特徴としては、特に完形3個体を中心とすれば、縄文施文、尖底深鉢で、胎土には雲母を多量に含む点が指摘できる。縄文施文では、施すタイミングが器面が若干乾いてから、もしくは施文時の力がやや弱めで、縄文の圧痕が浅い。土器製作技法では擬口縁がいくらか確認される。これらは本群が「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」と類似しうる点とした根拠である。

一方、本群と「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」との相違点として、本群は口縁部周辺の段部をもたない点、底部が若干丸底気味である点、「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」では口端部に縄文施文がなされるものが主体である対して本群では口端部に刻目をもつものがある点が挙げられる。刻目の原体は円形竹管か棒状工具の腹部によるものと推定され、むしろ本遺跡早期Ⅳ群第1種土器、鶴ヶ島台式土器のそれと類似している。

本群と「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」との相違点の意味するところが地域差なのか、微妙な時期差とみるべきかについては現状での資料蓄積では十分な結論を導き出すのは難しい。前述の如く、阿部によると「古屋敷遺跡第Ⅳ群土器」の主な分布域は長野県中・南信から甲府盆地、富士山東麓にかけてであるという。佐久方面については、栃原遺跡では主に第14層から第23層にかけて出土しているが、全体器形が確認できるものがなく、判然としない。また第16層から第23層で出

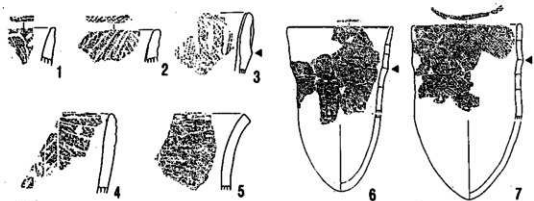
土した野島式土器、鶺鴒ヶ島台式土器との関係についても今後の検討課題といえよう。

さてでは本群と「古屋敷遺跡第IV群土器」との相違点を微妙な時期差と仮定した場合はいかか。先に「古屋敷遺跡第IV群土器」が中部高地における早期後半の一土器型式となりうるとした阿部の見解を紹介した。筆者も阿部の見解を基本的に支持する。ただその成立、また展開を考えた場合、その前後型式における粗製土器、または一列の土器の次元で存在する縄文施文の尖底深鉢の土器群を注視すべきであろう。まず「古屋敷遺跡第IV群土器」の成立母体として想定されるものとして、田戸上層式に伴う、厚手で口縁部が肥厚し、口端部断面形が外朗状を呈する縄文施文の尖底深鉢が考えられる。その例として神奈川県夏島貝塚の「夏島IV式土器IV f」（第3図）、田戸遺跡の「田戸遺跡第III群第10類第1種土器」（第4図）がある。しかし現状においては中部高地における田戸上層式土器に伴う縄文施文の尖底深鉢の存在について不明の点が多い。長野県大岡村鍋久保遺跡、望月町新水遺跡、山ノ内町上林中道南遺跡など田戸上層式土器を出土する県内主要遺跡での様相が今ひとつ判然としない。また田戸上層式に後続する子母口式併行期の縄文施文の土器の不明である。田戸上層式土器に伴う縄文施文の尖底深鉢から「古屋敷遺跡第IV群土器」への型式変化の検証にはこれらの問題点を解決する必要があるだろう。

また野島式土器に後続する鶺鴒ヶ島台式土器において、中部高地では一定量の縄文施文の深鉢が組成する。長野県辰野町上の山遺跡（第7図）、鶺鴒ヶ根市舟山遺跡出土資料がそれである。いずれも小破片が中心で完形復元できる資料ではないが、胎土に繊維を含み、内面に条痕が施され、口端部に刻目をもつものもある。また滋賀県錦織遺跡においてもピット内出土一括資料において、鶺鴒ヶ島台式の幾何学的な文様をもつ土器、条痕施文の土器に縄文施文の土器が共伴している（第6図）。鶺鴒ヶ島台式に組成する縄文施文の深鉢では小破片が多く、その実態に不明な点があるが、胎土には繊維を含み、内面条痕施文、口端部に刻目をもつなどの特徴が挙げられる。属性の差異はあるが、おそらく直前型式の「古屋敷遺跡第IV群土器」の縄文施文、尖底深鉢から系統的に連続するものと推定される。つまり、「古屋敷遺跡第IV群土器」のそのほぼ前後型式においても縄文施文の尖底深鉢の存在が確認できるわけである。

塚田遺跡早期第III群土器の特徴の口端部の刻目、内面条痕施文などの点を更に考慮すれば、本群が鶺鴒ヶ島台式に伴う縄文施文の尖底深鉢となる可能性も否定できない。

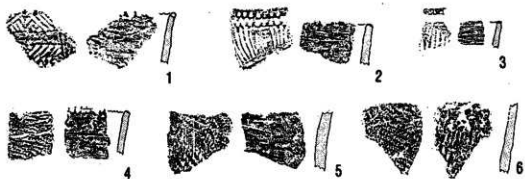
本遺跡においては野島式土器と明確に確認できる資料の出土はみられない一方で、本群と鶺鴒ヶ島台式土器とが共伴、もしくは出土分布傾向レベルで合致するなどの点も確認できない。現状では、本群の編年的位置づけについては、「古屋敷遺跡第IV群土器」の範疇から、鶺鴒ヶ島台式に組成する縄文施文の尖底深鉢の範疇の大枠で考え、今後の近隣地域での資料増加を待ちたい。



第5図 山梨県古原敷遺跡第IV群土器



第6図 滋賀県錦織遺跡出土資料 S=1/4



第7図 長野県辰野町上の山遺跡出土資料 S=1/4

### 3 早期第IV群第2類土器について

本遺跡の早期末の土器については、少数資料ながらも縄文地文に結条体の押圧や沈線が施されるものを主とし、また1点、斜方向に貝殻腹縁を押圧したのもも確認された。

中部高地における茅山上層式以降の早期末の土器編年については、1980年代以降、東海地方の編年成果を基軸として幾つかの変遷案が活発に検討されている。それは遺構一括資料や遺物集中地点、また遺跡全体での東海系土器との共伴関係等から土器群の変遷が論じられているが、基礎とすべき資料において出土状況、また型式認定について若干の問題点を含む部分を持ち、また型式学的な検討もこれからの課題とされる。研究者相互の理解において齟齬を来しているといえよう。今回は早期第IV群第2類土器の編年の位置付けを考察するにあたり、長野県内における早期末のこれら問題点を含めて筆者なりの変遷案（第8図）について簡単に触れた後、想定される位置付けについて述べたい。

早期末の所謂結条体圧痕文土器と茅山上層式、下層式との関係については、これまで結条体圧痕手法が茅山上層式を濁りうるか、否かで議論が割れていた。これは特に長野県和田村男女倉遺跡C地点出土のSK11出土資料の扱いが問題とされた。報告では結条体圧痕文土器が土坑内において柏畑式土器の下層部から出土し、かつ型式学的に文様構成が茅山下層式に類似する点からその結条体圧痕文土器を茅山下層式に併行させ、またC地点出土の一連の資料をもって「男女倉C式」と型式設定された。これに対して男女倉遺跡C地点出土資料を「子母口式=結条体圧痕文土器」とする見解から子母口式併行で考える見解、1980年前半期における関東の研究状況から上ノ山式以降に併行させる見解などがあり、類例の増加を待たれていた。子母口式については1980年代以降の研究成果から、早期末における結条体圧痕文土器の存在の再確認（註1）、子母口式土器の研究史の再検討作業や新資料の蓄積から子母口式土器が結条体圧痕文土器のみならず、刺突土器、隆線文土器、貝殻腹縁文土器などで組成する点が明確となり、結条体圧痕文土器を徒に子母口式土器に比定する見解は慎まれるようになった。また結条体圧痕手法の上限については福島県青宮西遺跡、埼玉県下段遺跡、長野県下り林遺跡などの資料から茅山下層式、上層式まで確認されることが明確になった。

男女倉遺跡C地点出土の一連の資料についてはやや外反する器形、内外面糸痕施文、横方向1条もしくは2条の結条体圧痕による区画と鋸歯状、斜方向、縦方向の結条体圧痕による文様の組合せのもの、刺突列による区画とく字状の沈線文様のものなどが特徴とされる（第9図）。男女倉遺跡C地点出土資料には上の山式から入海II式に併行するものも含まれるが、その主体は柏畑式、茅山上層式併行と考えたい。SK11での柏畑式との共伴関係を評価すべきであろう（註2）。

男女倉遺跡C地点出土資料に後続するものとして茅野市高風呂遺跡第39号住居出土資料（第10

図)が考えられる。やや外反する器形、貝殻条痕か絡条体条痕で内外面で施文、横方向に1条の低隆帯が貼付され、隆帯上は縦方向、隆帯脇の上下には横方向、隆帯で区画された上下には鋸歯状に絡条体圧痕が施されるものなどが特徴とされる。男女倉遺跡C地点出土資料の横方向2条の絡条体が押圧されたものが、高風呂遺跡第39号住居出土資料では2条の絡条体圧痕間に低隆帯が発生し、低隆帯上にも縦方向に絡条体が押圧され、更に横方向2条の絡条体圧痕(低隆帯)の位置は男女倉遺跡C地点例に比べてせり上がるなどの型式学的変化が想定される。

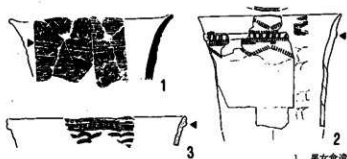
高風呂遺跡第39号住居出土資料は従来石山式併行とされている。これは第10図5の資料がこれまで石山式と扱われていた点、また鋸歯状の絡条体圧痕と関東の打越式土器の鋸歯状の貝殻腹線文との意匠の類似性などがその理由とされていたのであろう。しかし石山式とされた資料は内面に刺突がなされ、むしろ柏畑式の特徴をもつと考えるべきであり、また鋸歯状の意匠は男女倉遺跡C地点出土の絡条体圧痕の意匠でも確認される。高風呂遺跡第39号住居出土資料の位置付けは柏畑式と近似した時期と考えられる。現状では明確な根拠を提示できないが、筆者としては男女倉遺跡C地点出土資料に型式学的に後続する点、低隆帯が発生する点を考慮し、柏畑式に後続する上ノ山式に主に併行すると考えたい。

高風呂遺跡第39号住居出土資料に後続するものとして、第39号住居を切る同遺跡第40号住居も考えられるが、型式学的連続性を充分語るには至らず、また東海系土器の共伴もみられない。入海Ⅰ式併行の土器については、現状では不明な点が多い。

長野県岡谷市膳棚B遺跡1号住居出土資料(第11図)ではやや外反する器形、内面に条痕をもたず、外面に絡条体条痕、もしくは燃糸文が施文、絡条体が押圧された隆帯が口縁部付近に貼付され、かつ横方向や弧状に絡条体圧痕が施されるもの、縦方向、横方向、斜方向(X字状や鋸歯状)に絡条体圧痕が施されるものなどが検出された。共伴する東海系土器は入海Ⅱ式から石山式にかけての特徴をもつものであり、東海との併行関係は明確である。前述のとおり、入海Ⅰ式併行期の土器様相は不明な点をもつが、高風呂遺跡第39号住居出土資料と膳棚B遺跡1号住居出土資料を比較すると低隆帯からしっかりした隆帯へと隆帯が発達する点、隆帯が口縁部付近へとせり上がる点、地文では絡条体条痕から絡条体を回転させる燃糸文が発生する点に変化として確認される。また鋸歯状の意匠は男女倉遺跡C地点出土資料の時期より連続として存続するが、一方、膳棚B遺跡1号住居出土資料における弧状の絡条体圧痕の意匠は、鋸歯状の意匠からの変化とする解釈も可能である。地文においては絡条体条痕、燃糸文がみられる点は前述のとおりであるが、これに縄文施文の土器が伴うか否かについては判然としない。

膳棚B遺跡1号住居出土資料に後続するものとして、長野県岡谷市梨久保遺跡23号住居(第12図)、同遺跡75号住居出土資料(第13図)が考えられる。これらはやや外反する器形、内面に条痕をもたず、外面には絡条体条痕も一部確認されるが、主に燃糸文が施され、絡条体圧痕が押圧さ

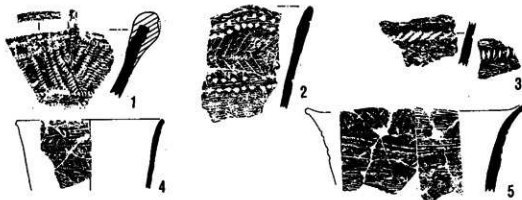




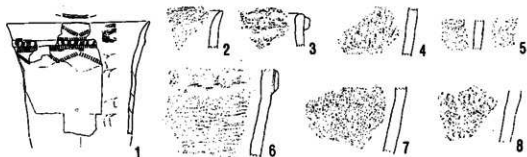
1の結晶体圧痕により区画された部分に、2では低隆帯が発生、隆帯上は結晶体圧痕が施され、3では隆帯が口縁部付近まで更にせりあがる。

1 男女倉遺跡C地点 2 高風呂遺跡 3 藤樹B遺跡

第8図 S=1/8



第9図 長野県和田村男女倉遺跡C地点出土資料



第10図 長野県茅野市高風呂遺跡39号住居出土資料 1 S=1/8・2~8 S=1/4



第11図 長野県岡谷市藤樹B遺跡1号住居出土資料

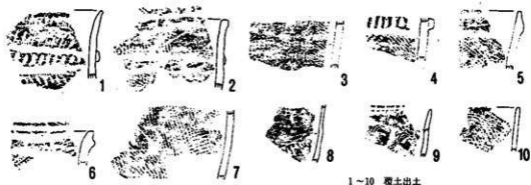
れた隆帯が貼付され、横方向に絡条体圧痕が施されるもの、また横方向、斜方向に絡条体圧痕が施されるものなどがある。尖底、口縁部付近に横方向、また逆T字状で、斜方向に刻まれた隆帯をもつ縄文施文のもの、また尖底、縄文施文のものもこれに伴う。共存する東海系土器は石山式、天神山式である。梨久保遺跡23号住居、75号住居出土資料を隣遺跡1号住居出土資料を比較すると、地文において捺糸文が盛行する点、縄文施文の土器が伴う点が確認される。また横方向多段の絡条体圧痕は弧状多段の絡条体圧痕からの変化とする解釈も可能である。なお梨久保遺跡23号住居出土の絡条体圧痕文土器の類似資料としては岡谷市海戸・丸山遺跡出土資料が挙げられる。長野県松本市坪ノ内遺跡出土資料、佐久市下茂内遺跡出土資料、八千穂村中松井遺跡出土資料など縄文地文に絡条体圧痕が施される例もほぼ同時期のものと推測される。

梨久保遺跡23号住居については、報告においては2棟の住居址の切り合いの可能性が指摘されているが、推測の域をでない。また75号住居では覆土において絡条体圧痕文土器、捺糸文土器、縄文土器の共存が確認される一方で、その上層では縄文施文の土器が主として出土する状況を踏まえ、縄文施文の土器は時間的幅、古い様相と新しい様相をもち、その古いものは絡条体圧痕文土器、捺糸文土器と伴うとの結論がなされている。

一方、本遺跡本報告に先立ち「塚田式土器」を型式設定した下平博行、賛田明は梨久保遺跡23号住居a・bの切り合い関係を積極的に評価し、絡条体圧痕文土器、絡条体条痕文土器、捺糸文土器の一部、石山式土器、天神山式土器で一時期として早期末、縄文施文の土器、捺糸文土器の一部で一時期として前期初頭と位置づけた。両氏の編年観に従えば、縄文施文の土器、捺糸文土器は両氏の提唱する「塚田式土器」の範疇に含まれるというのであろう。確かに「塚田式土器」の提唱は、中部高地における早期末から前期初頭における土器編年研究において大きな指針を示した業績として評価できるものと確信する。しかし一方、梨久保遺跡75号住居覆土において縄文施文の土器が絡条体圧痕文土器、捺糸文土器などと共存する点、両氏の編年観に従えば縄文地文に絡条体圧痕が施される土器の説明が難しくなる点、早期/前期の区分の定義が不明確な点(註3)、「塚田式土器」の標本資料である本遺跡D39号土坑、D51号土坑、D7号土坑、D91号土坑出土資料と梨久保遺跡出土の縄文施文の土器には若干の差異がある点など両氏の見解には些かの疑問点が残る。梨久保遺跡の尖底、縄文施文の土器では口縁部付近に横方向、また逆T字状で斜方向に刻まれた細い隆帯をもつことが特徴と挙げられるが、本遺跡の「塚田式土器」の標本資料の中には同様の資料が確認されない。これを諏訪盆地と佐久盆地との地域差と考えることも可能だが、群馬県下鶴谷遺跡では梨久保遺跡例の類似資料が出土している。一概に地域差とするのは難しい。現状では十分な型式学的な説明は逆T字状隆帯の連続性しか説明できないが、梨久保遺跡出土の隆帯をもつ縄文施文の土器は「塚田式土器」に先行する、またその成立母胎となるものと考えたい。なお梨久保遺跡出土の縄文施文の土器については、筆者も梨久保遺跡の本報告にお



第12図 長野県岡谷市梨久保遺跡23号住居出土資料 S=1/8

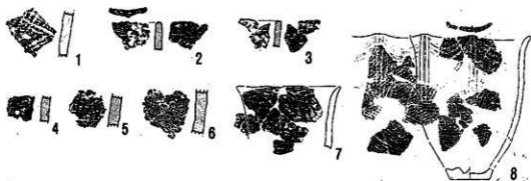


1~10 灰土出土



11~15 暗褐色下層出土

第13図 長野県岡谷市梨久保遺跡75号住居出土資料 S=1/8



第14図 山梨県中込遺跡出土資料 1~6 S=1/4 · 7~8 S=1/8

ける見解を支持し、絡条体圧痕文土器、燃糸文土器などに伴うものと燃糸文土器などに伴うもの  
とに将来的な細分は可能と考える。ただし梨久保遺跡の本報告の縄文、もしくは羽状縄文により  
安易に前期最初頭、また花積下層式併行に位置づける見解には納得できない。梨久保遺跡出土の  
縄文施文の土器は早期末の範疇で捉えられたい。なお蛇足ではあるが、「塚田式土器」に  
ついては早期末にかかる部分もちうると考える。

さて筆者はこれまで隆帯、地文、共存する東海系土器などを考慮し、大雑把ながらも男女倉遺  
跡C地点出土資料、高風呂遺跡39号住居出土資料、(+), 膳棚遺跡1号住居出土資料、梨久保遺  
跡23号住居・75号住居出土資料(23号住居はa/b、75号住居は覆土/暗褐色土層で将来的な細分  
が可能)、「塚田式土器」の一部と中部高地の縄文時代早期末の土器の変遷の見通しを述べた。で  
は本遺跡出土の早期末の資料の大雑把な位置付けを考えてみたい。

本遺跡出土の絡条体圧痕文土器については、少数資料だが地文に縄文が施され、斜方向、また  
斜方向の組合せによる鋸歯状、縦方向の絡条体圧痕が施されるものが特徴とされる。絡条体圧痕  
の施文帯については、おそらく横方向の絡条体圧痕により区画されるのであろう。口端部に絡条  
体が押圧されるものも多い。絡条体は0段、原体幅は4.4mm~7.0mmであるが、多くは5mm前後で  
ある。少破片資料のため何ともいえないが、隆帯をもつ資料、また東海系土器が確認されず、編  
年の位置付けを行うのに困難を伴うが、縄文地文に着目したい。縄文施文の土器は現状での確実  
な出土例でみ限り、梨久保遺跡23号住居、75号住居出土資料で確認される。本遺跡例も同様な  
時期、東海編年でいえば石山式、天神山式併行で考えたい。なお隣県の類似資料としては、山梨  
県中込遺跡第II群1類土器が挙げられる。中込遺跡の考察ではこれを天神山式併行としている(註  
4)(註5)。

縄文地文に斜方向や鋸歯状に沈線が施されるものについても、絡条体圧痕文土器と同じ時期と  
考えたい。縄文地文の点、絡条体圧痕による意匠と沈線による意匠との類似性などが根拠である。  
中込遺跡においても類似資料が1点確認される。

本遺跡1点のみ出土した早期末の貝殻腹縁文土器についてはその位置付けに迷う部分がある。  
本遺跡例は斜方向に貝殻腹縁が押圧される。関東の打越式土器の如く、貝殻腹縁の押圧が山形構  
成をとってはいない。関東方面で器面に斜方向に貝殻腹縁が押圧される資料は神奈川県宮ノ原遺  
跡、東京都練馬城址遺跡T13、T14遺物集中地点、埼玉県鶴巻遺跡などでみられ、現状ではおそ  
らく上ノ山式から入海Ⅱ式前後にかけてみられるものと考えられる。一方、山形状の貝殻腹縁の  
押圧を示標とする打越式は石山式、天神山式に併行する。本遺跡出土の貝殻腹縁文土器もその特  
徴から上ノ山式から入海Ⅱ式併行期で考えたいのだが、中込遺跡での状況が気にかかる。中込遺  
跡では縄文地文の絡条体圧痕文土器や縄文地文の沈線文土器に貝殻腹縁文土器などが伴う(第14  
図)。本遺跡での早期末の土器群と全体様相も類似する。ただし中込遺跡の貝殻腹縁文土器は小破

片資料のため文様構成をを知りえないため、本遺跡の例と直接対比ができないが、中込遺跡と同時期とする考え方も成り立つ。とすると本遺跡において絡条体圧痕文土器、沈線文土器、貝殻腹縁文土器が同時期のものとなりうる。いずれにせよ仮説の域をでない。中部高地における貝殻腹縁文土器については今後の資料蓄積を待ち改めて検討したい。

- 註1 茅山上層式から花積下層式までに至る早期末～前期初頭の型式ブランクについて指摘された岡本勇の先見性をまずは高く評価すべきであるが、1950年において既に茅山式から花積下層式にかけて絡条体圧痕文土器の存在を確認させしめた長野県八千穂村中松井遺跡の調査成果をも評価すべきであろう。また1969年の段階で長野県松川村有明山社大門北遺跡出土の絡条体圧痕文土器を早期末～前期初頭に位置づけた樋口昇一の見解も同様である。
- 註2 男女倉遺跡C地点SK11出土資料の問題点としては、資料の註記で確認した限り実際にSK11から出土した絡条体圧痕文土器は未報告であり、報告書でSK11出土と扱われた絡条体圧痕文土器はSK15出土である点が挙げられる。しかしSK11から精細式土器が出土している点は揺るぎえず、またSK11とSK15出土の絡条体圧痕文土器には時期差は殆ど無いと思われる。
- 註3 早期／前期の大別区分については、花積下層式土器の成立をもって前期とする見解が学史的にみても妥当と考える。花積下層式土器の成立については「燃糸側面圧痕の成立」もしくは「灰手状燃糸側面圧痕の成立」で考えるべきであり、縄文地文、もしくは羽状縄文の成立で考えるべきではない。
- 註4 本遺跡において「イモ虫状」の絡条体圧痕が1点確認される(報告第 図138)。「イモ虫状」の絡条体圧痕については、百瀬忠孝により早期末の絡条体圧痕の中でも古い様相と指摘されるが、筆者も基本的に百瀬の見解を支持するが、中込遺跡第II群土器の中でも確認される。本遺跡出土の資料についてはその位置付けを保留したい。
- 註5 新潟県豊後田1遺跡出土資料など、新潟方面の縄文地文に絡条体圧痕が押圧される資料について小椋輝史は東北の「縄文糸痕系土器群」との関係で理解されている。中部高地の縄文地文の土器との関係についても検討課題としたい。

#### 主要参考文献

- 金田達・小沢由香利他 1986 『梨久保遺跡』 長野県岡谷市教育委員会  
金田達・小杉康他 1987 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 長野県岡谷市教育委員会  
赤羽義洋他 1988 『上の山遺跡II』 長野県辰野町教育委員会  
赤星直忠 1948 『神奈川県野島貝塚』『考古学集刊』1 東京考古学会  
浅利可他 1990 『中込遺跡』 山梨県教育委員会  
阿部芳郎他 1989 『半蔵遺跡発掘調査報告書』 半蔵遺跡調査団  
阿部芳郎他 1990 『古屋敷遺跡発掘調査報告書』 富士吉田市史編纂室・古屋敷遺跡調査団  
飯塚博和・毒島正明 1987 『千葉県野田市丸山遺跡』 野田市遺跡調査会  
五十嵐幹雄 1951 『中松井遺跡調査報告』

- 宇野治幸他 1991 『小の原遺跡・戸入障子墓遺跡』 水資源開発公団 岐阜県教育委員会
- 岡本勇 1959 『三浦郡葉山町馬の瀬山遺跡』『横須賀市立博物館研究報告』3 横須賀市博物館
- 岡本勇 1961 『三浦市鶴ヶ島台遺跡』『横須賀市立博物館研究報告』5 横須賀市博物館
- 小熊博史 1989 『縄文時代早期終末における絡糸体瓦紋文土器の様相』『信濃』41-4
- 神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983 『縄文時代早期末・前期初頭の諸問題』『神奈川考古』17
- 神奈川考古同人会 1984 『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 記録・論考集』『神奈川考古』18
- 金子直行他 1992 『田戸貝塚資料』 奈良国立文化財研究所
- 金子直行他 1992 『子母口貝塚資料 大口坂貝塚資料』 奈良国立文化財研究所
- 群馬県考古学研究所他 1988 『第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題』
- 小林康男・百瀬忠幸他 1985 『堂の前・福沢・青木沢』 塩尻市教育委員会
- 近藤尚義・百瀬忠幸他 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2
- 近藤尚義他 1992 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 笹沢浩・佐藤信之他 1982 『中央道調査報告書 原村その5』 長野県教育委員会
- 島田哲男他 1990 『松本市坪ノ内遺跡』 松本市教育委員会
- 縄文セミナーの会 1994 『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』
- 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料 第一巻下』
- 杉原旺介・芹沢長介 1957 『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』
- 境原長則他 1985 『上林中道南遺跡』 長野県下高井郡山ノ内町教育委員会
- 友野良一他 1973 『浜弓場』 伊那市教育委員会
- 中沢道彦他 1991 『練馬城址遺跡調査報告書』 練馬城址遺跡調査団
- 中村健二他 1992 『錦織遺跡』 滋賀県教育委員会 滋賀県文化財保護協議会
- 樋口昇一他 1969 『有明山社』 松川村教育委員会
- 福島邦男 1981 『新水』 望月町教育委員会
- 藤巻幸男 1992 『群馬県における縄文時代早期末から前期初頭土器群の様相』『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 毒島正明 1983 『子母口式土器研究の検討』『土曜考古』7 土曜考古学会
- 百瀬一郎 1993 『天狗山遺跡』 茅野市教育委員会
- 百瀬忠幸他 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 森嶋聡・笹沢浩他 1975 『男女倉』 和田村教育委員会
- 守矢昌文 1986 『高風呂遺跡』 茅野市教育委員会
- 宮下健司 1988 『II 2(3)縄文早期の土器』『長野県史 考古資料編 全一巻(四)』
- 矢島宏雄・費田明他 1992 『史跡 森将軍塚古墳』 長野県更田市教育委員会
- 八幡一郎 1934 『北佐久郡の考古学的調査』
- 山内清男 1932 『縄紋土器の起源』『ドルメン』1-5
- 宮村達他 1972 『羽場下・舟山』 駒ヶ根市教育委員会

## 2 J-5号住居址出土土器について

下平 博行

塚田遺跡J-5号住からは、条が縦走る縄文を地文とし、先端が四角く、ささくれたような棒状工具を用い、斜行あるいは弧をなすような沈線を描く土器群が主体的に出土している。こうした特徴をもつ土器群は、長野県に於ける縄文系土器群にはみられず、県内でも初見である。塚田遺跡では、J-5号住居のほかにも幾つかの遺構で散見され、遺構外から少量ながらまとまって出土している。これらを集成し、その特徴を概観したい。

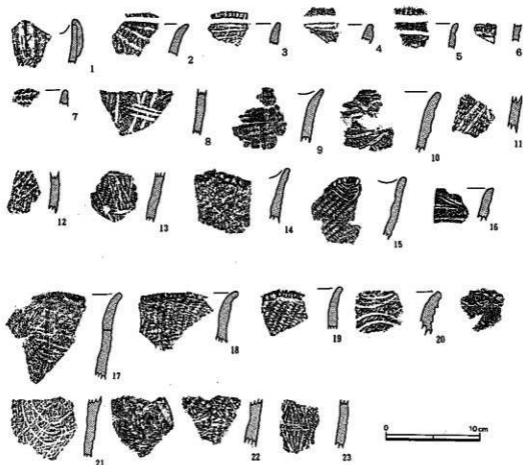
1は波状口縁の波頂部から短い隆帯を垂下させ、垂下隆帯以下胴部は単節縄文が施文される。隆帯上には2箇所径0.5cm程の小石をはめ込んだような痕跡が見られる。内面は平滑にされている。2は縦走る縄文を地文とし、口縁から斜行する沈線を施している。沈線は、浅く、断面形は四角くなる。また、口唇部には刻みが施される。3は縦走る縄文を地文とし、先端の鋭い工具で沈線が引かれている。口唇部には、地文と同一原体による押圧が施される。4は口唇部直下に沈線が引かれ、口唇部から内面にかけて縄文が施される。5は口唇部に刻みを持ち、口縁直下に先端の丸い工具による沈線が施される。6は縄文を地文とし、横位の沈線が数条ひかれ、沈線間に刻みが施される。7は横位に単節縄文の側面圧痕が施される。8は単節縄文を地文とし、先端のささくれたような工具により縦位、斜位に沈線が組み合わされる。9は17と同一個体であり、縦走る縄文を地文とし、先端が櫛状に分かれた工具により口縁部から放射状に沈線が施される。10・22は縄文を地文とし、先端が角い工具を用い、対弧状に沈線が描かれる。13・23は縦走る縄文を地文とし、先端の四角い工具により格子目あるいは縦位の変形を描いている。16は、波状口縁の波頂部に先端の尖った工具をもちい波頂部を囲むように連続する弧状を描く。口唇部には断面が丸い工具の押圧がなされる。14・18・19は同一個体である。口唇部が大きく外反し、刻みが施される。20は縄文を地文とし、沈線により上下に円弧が相対する構成をなす。21は縄文を地文とし、沈線により重弧を描き、重弧を貫くように斜行する沈線が施される。

以上、逐一それぞれの特徴を羅列してきたが、総じて次のような特徴をもつ土器群としてまとめることができよう。まず、1を除き、その大半が縦走もしくは縦走気味の縄文を地文とし、沈線により重弧・対弧・変形などの幾何学的な構成をとり、口唇部には縄の押圧や断面が丸い工具による押圧がみられ、21のように内面に条痕がなされるものもある。こうした特徴を有する土器群は、群馬県荒砥上諏訪遺跡・二之宮千足遺跡などにごく僅か類例が認められ、早期末に位置づけられている(谷藤 1994)。また、東北地方にはこれらに類似する土器群が数多く存在する。こ

これらの点から東北地方の影響を色濃く持つ土器群である可能性があろう。いずれにしても県内には類例が皆無であり、資料の増加を待ち再考すべきであろう。

1~7	J-5号住居址	11・12	J-23号住居址
8	J-16号住居址	13	D-145号土坑
9・15	D-6号土坑	14	D-178号土坑
10	J-20号住居址	16	D-122号土坑

17~23はグリッド出土



第1図 J-5号住居址出土土器及び類似の土器群



### 3 「塚田式」の設定とその様相について

下平 博行

#### 1 塚田式の提唱

塚田遺跡D-39号土坑・D-51号土坑から出土した縄文施文の土器群は、縄文を地文とし、口縁部に隆帯を貼付する点を特徴とする土器群である。塚田遺跡では上記の土坑以外にもJ-2・10・15・17・19・20・21・23の8軒の住居址及び多数の土坑から同様な土器群が出土しており、これらの土器群が一時期を成すと考えるに足る良好な資料となった。また、塚田遺跡に特徴的なこれらの土器群は、南箕輪村北高根A遺跡（山岡 1973）、御代田町下弥堂遺跡（賛田 1994）、茅野市天狗山遺跡（茅野市教育委員会 1993）、塩尻市矢口遺跡（小松 1994）等の住居址からまとまって出土しており、その分布も広範囲にわたることが予想される。

一方、塚田遺跡に代表されるこれらの土器群は、縄文施文の尖底深鉢形土器である点で「中道式」（児玉 1984）と極めて近い関係にあると考えられる。ところで、この中道式は中道遺跡SB09を基準資料とし、その特徴として、

- ① 肥厚口縁尖底土器形を呈する。
- ② ①の口縁部は波状小波状を呈するものが多い。
- ③ ②のものには波頂部からさらなる垂下肥厚部を有するものがある。
- ④ 文様は縄文重帯施文を主とするが、原体縄軸巻回転糸文も存在する。
- ⑤ 縄文重帯施文は羽状構成を採る例が多く、結節縄文もある。
- ⑥ ④・⑤の整合に拙劣さの観られるものも存在する。

が挙げられ、塚田遺跡などに見られる隆帯を貼付する土器群については「凸帯を有する口縁類は、類例が少ないことと同時に、ある形態のものは若干欄る可能性があるため、これも現段階では除外しておきたい。」と型式の概念から外されている。また、中道式の編年の位置付けに関しては、共伴する関東的な一段折り原体側面圧痕の変遷観を示しながら東信濃の前期初頭に位置付けている。（「J」内、児玉 1984 より引用）

こうした中道式の型式概念を塚田遺跡の土器群に当てはめたとき、両者の関係は密接なものであることが窺われる。しかし、中道式との最も大きな相違は、口縁部の形状にある。すなわち、塚田遺跡の土器群の口縁部には特徴的に隆帯が貼付され、中道式のそれとは趣を異にしている点である。

この隆帯をもつ縄文施文の尖底深鉢形土器については、塚田遺跡調査以前にも、1983年に神奈

川考古同人会縄文研究グループによって行われたシンポジウム時の資料集に散見され、その他にも岡谷市梨久保遺跡（小沢 1986）、真田町四日市遺跡（百瀬 1990）、茅野市芥沢遺跡（守矢 1990）などで報告されており、また中道式の提唱者である見玉卓文氏が隆帯に関しては中道式の概念からはずしながらも、その前後関係を予測していた点は注目すべきである。また、守矢昌文氏は中道式の特徴である肥厚口縁・小波状・波頂部の垂下肥厚部は、貼付隆帯の系譜上に位置するものであるとし、貼付隆帯の系譜を梨久保遺跡9号住出土の絡条体圧痕文が隆帯上に施される一群と密接な関係にあるとし、隆帯を持つ一群を、東海系の土器群との共伴事例から石山、天神山式のころ成立したと想定している（守矢 1989）。筆者も見玉・守矢両氏が指摘するように、隆帯を貼付する縄文施文の土器群が中道式の系譜上に位置するといった点では賛同する。しかし、隆帯の系譜および編年の位置付けに関しては、塚田遺跡の事例を考察するに、隆帯の形態が言わば関東的な隆帯（下吉井式、菊名下層式等）に近似しているものもみられ、隆帯の系譜が一元的なものであるか疑問である。また、編年の位置付けについては、塚田遺跡D-39号土坑にみられるように、隆帯によって区画される口縁部文様帯内に下吉井式に類似するモチーフが描かれるものも見られ、かつ、塩尻市矢口遺跡では住居址において貼付隆帯上に貝殻条痕あるいは櫛歯状工具による条痕のある木鳥式の共伴が見られることから早期末とするよりむしろ前期初頭に位置付けたい。

以上、塚田遺跡等に見られる隆帯を持つ縄文施文の土器群は、その系譜・一時期を成すに足る内容と空間的分布を有し、編年の位置付けも予想される点から、中道式の系譜上に位置し、下吉井式、木鳥式と併行関係にある縄文時代前期初頭の土器型式として、ここに「塚田式」の提唱を行いたい。

## 2 型式の概要

塚田遺跡D-39号土坑、D-51号土坑から出土した資料を基準とする。器形は垂下隆帯による波状口縁または平縁の尖底深鉢形と考えられ、胎土に繊維を混入し、隆帯の貼付により口縁部文様帯を形成する。また、器面には地文として縄文または捺染文が施され、羽状構成をとるものも見られる。現段階で確認されている資料を用い、隆帯の形態に主眼をおき、隆帯により区画される文様帯内の施文に留意し、以下のように細分した。














第1群 口縁部に明瞭な隆帯が貼付されるものを一括した。隆帯の形状により1類から5類に細分される。

1類 口縁部に水平隆帯と波頂部からの垂下隆帯とが連結する明瞭な逆丁字隆帯を貼付するもの。口唇部・隆帯上には刻みなどの施文が見られるものもある。

- a種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に地文がおよぶもの。(第1図1)
- b種 隆帯により区画される口縁部文様帯内が無文となるもの。(第1図2・3)
- c種 隆帯下に沈線によるモチーフが描かれるもの。(第1図4)

2類 口縁部に垂下隆帯と弧状隆帯が連結する明瞭な隆帯を貼付するもの。口唇部・隆帯上には刻みなどの施文が見られるものもある。

- a種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に地文が及ぶもの。(第1図5)
- b種 隆帯により区画される口縁部文様帯内が無文となるもの。(第1図6)
- c種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に弧状隆帯に沿うような沈線が数条施されるもの。(第1図7)



	a 種	b 種	c 種	d 種
第一類一類				+
第一類二類				+
第一類三類			+	
第一類四類			第一類 すべて塚田遺跡	
第一類五類				

第1図 塚田式の様相(1)

- 3類 口縁部に明瞭な水平隆帯を1条貼付するもの。口唇部・隆帯上には刻みなどの施文が見られるものもある。
- a種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に地文が及ぶもの。(第1図8)
  - b種 隆帯により区画される口縁部文様帯内が無文になるもの。(第1図9)
  - c種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に燃糸側面圧痕文が施されるもの。(註1)
  - d種 隆帯下に沈線による波状文が施されるもの。(第1図10)
- 4類 口縁部直下に明瞭な水平隆帯を1条、胴上半部に1条貼付し、垂下隆帯と連結させるもの。隆帯上には地文が及ぶもの、刻みが施されるものがある。
- a種 2本の隆帯により区画される文様帯内に地文が及び、沈線による波状文を数条施すもの。(第1図11)
  - b種 2本の隆帯により区画される文様帯内に燃糸側面圧痕文が施されるもの(第1図12)
- 5類 口縁部に明瞭な弧状隆帯を数条貼付するもの。口唇部・隆帯上には刻みなどの施文が見られるものもある。
- a種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に地文がおよぶもの。(第1図13・14)
- 第2群 口縁部に不明瞭な隆帯を貼付するもの。第1群に比べ、やや後出的な要素を持つものである。隆帯の形状から1類から4類に細分した。
- 1類 口縁部に不明瞭な垂下隆帯と水平隆帯が連結した逆T字隆帯を貼付するもの。隆帯上には刻みなどの施文が見られるものもある。肥厚口縁に近似し、第1群1類に比べ、やや後出的な要素を持つもの。
- a種 隆帯により区画される口縁部文様帯に地文が及ぶもの。(第2図15~17)
  - b種 隆帯により区画される口縁部文様帯が無文になるもの。(第2図35)
- 2類 口縁部に不明瞭な垂下隆帯と弧状隆帯が連結する隆帯をもつもの。隆帯上には地文が及ぶ。肥厚口縁に近似し、第1群2類に比べ、やや後出的な要素を持つもの。
- a種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に地文が及ぶもの。(第2図18・19)
- 3類 口唇部直下に不明瞭な水平隆帯を1条貼付するもの。隆帯上には刻み・縄文などの施文が見られるものもある。概して隆帯によって区画される文様帯は狭く、肥厚口縁に近似し、第1群3類よりやや後出的な要素を持つもの。
- a種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に地文が及ぶもの。(第2図20~22)
  - b種 隆帯により区画される口縁部文様帯内に沈線によるモチーフが施されるもの(第2図23)
  - c種 隆帯下に沈線が施されるもの。(第2図26)

d種 隆帯により区画される口縁部文様帯内が無文となるもの。(第2図27~29)

e種 隆帯に添うよう矢羽状の刺突を施すもの。(第2図30・31)

	a 種	b 種	C種	d 種	e 種
隆帯の幅が狭い			+	+	+
隆帯の幅が広い		+	+	+	+
隆帯の幅が広い					
隆帯の幅が広い		+	+	+	+
隆帯の幅が広い		+	+	+	+

※13・14・17・35 塚田遺跡  
15・16・18~23 下弥堂遺跡  
26~32・34 下弥堂遺跡

第2図 塚田式の様相(2)

4類 口縁部に不明瞭な水平隆帯を2条貼付するもの。隆帯上には刻み・刺突などの施文が見られるものがある。

a種 2本の隆帯間が無文になるもの。(第2図32)

第3群 口縁部に隆帯の貼付が見られず、沈線が巡るもの。(第2図34)

現段階では以上のように分類されるが、今後の資料の増加とともにバリエーションが増えると思われる。

註1 塩尻市矢口遺跡に類例が見られるが、未報告であることから記載のみに止める。

### 3 他遺跡における様相と他型式との共伴関係

新たに設定した塚田式は、先にも述べた通り、塚田遺跡調査以前にも数遺跡で確認されている。そこでここでは塚田遺跡を含め、他遺跡での塚田式の様相を他型式との共伴関係に注目しながら概観したい。

#### (1) 御代田町塚田遺跡D-51号土坑 (第3図)

塚田遺跡D-51号土坑からは、塚田式第1群2類c種(20)と、円筒形の器形全面に条が縦走気味になる縄文を施す土器(19)・尖底深鉢形の器形全面に、撚糸RとL2本による撚糸文で器面に対して横長の変形を数段構成する土器(18)・異原体を用い、縦位に変形を構成する土器(4)等が共伴する。このうち(20)は、群馬県富士見村久保田遺跡2号住(谷藤 1994)などにその文様構成が類似し(註1)、(4)の縦位に変形を構成する土器は、群馬県前橋市芳賀東部団地遺跡(前原 1990)・埼玉県下段遺跡(金子 1989)等数多く見られる。

#### (2) 御代田町塚田遺跡D-2号土坑 (第3図)

塚田遺跡D-2号土坑からは、塚田式第2群3類e種(2)と4単位波状口縁をもち、幅狭の口縁部文様帯に撚糸RとL2本揃えの原体を用い、横長の変形を構成する花積下層I式(谷藤 1994)(2)・異原体を用い、縦位に変形を構成する土器(3)が共伴する。

#### (3) 御代田町塚田遺跡D-39号土坑 (第3図)

塚田遺跡D-39号土坑では、塚田式第1群1類a種(1)と第1群4類a種(2)があり、これらに条の縦走する縄文を地文とし、横位の隆帯を貼付する土器(3)が見られる。

(4) 御代田町塚田遺跡D-124号土坑 (第3図)

塚田遺跡D-124号土坑では、塚田式第1群2類b種(1)と第1群2類a種(3)が出土している。

(5) 御代田町塚田遺跡J-20住 (第3図)

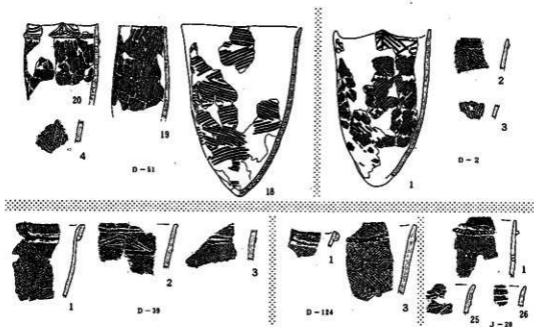
塚田遺跡J-20住では、塚田式第1群3類b種(1)がみられ、これらに条が縦走気味の縄文、系統が不明な土器(25・26)が出土している。

(6) 御代田町下弥堂遺跡J-2号住 (第4図)(註2)

下弥堂遺跡2号住では、塚田式第2群3類e種(1)と第2群1類a種(2)が見られる。

(7) 御代田町下弥堂遺跡J-14号住居 (第4図)

下弥堂遺跡14号住では、塚田式第2群2類a種(10)・第2群3類e種(12)・第2群4類b種(14)・第2群3類c種(5)・第2群3類d種(18)・第2群3類f種(17)等と器面全面に熱米文を施す土器(11)が見られる。



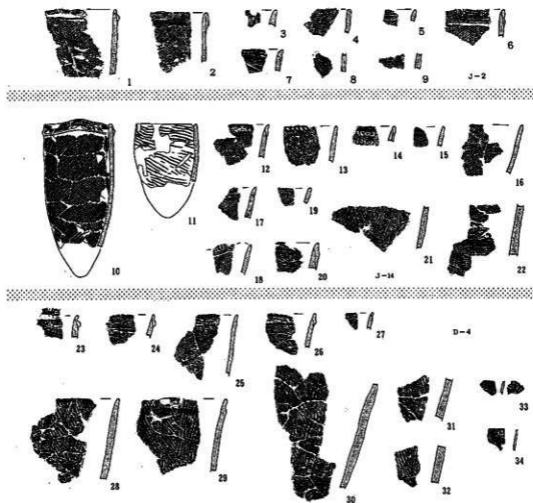
第3図 塚田遺跡の対比資料(番号は各挿図中のものを指す)

(8) 御代田町下弥堂遺跡D-4号土坑 (第4図)

下弥堂遺跡D-4号土坑では、塚田式第2群3類e種(23)・第2群3類a種(24)と、燃糸文を用い、縦方向の羽状構成を成す土器(28)・地文が燃糸文を縦方向の羽状構成にする第2群3類a種(29)・内面に指頭痕が見られる薄手無文の東海系土器(33)などが見られる。

(9) 御代田町下弥堂遺跡D-7号土坑 (第5図)

下弥堂遺跡D-7号土坑では、塚田式第2群2類a種(48)と砲弾型の器形で器面全面に縄文を施し、口縁部に隆帯を2条貼付し、隆帯上に縄文原体先端による刺突を施す土器(49)が見られる。



第4図 下弥堂遺跡(1) (1:8)





第5図 下弥堂遺跡(2) (1 : 8)

(10) 南箕輪村北高根A遺跡10号住 (山岡 1973) (第6図)

北高根A遺跡10号住では、塚田式第1群3類a種(5)・下吉井式(2)・隆帯上に貝殻条痕の施される東海系の木島式(1)・天神山式(4)等が出土している。また、遺構外からは塚田式第1群1類a種(14)・第1群3類b種(15)・第1群3類a種(16・17)の他、隆帯上に貝殻条痕の施される木島式(32・33)・口唇部がT字状に肥厚し、櫛状の工具による条痕が施される木島式(29)・絡条体圧痕文土器などが出土している。

(11) 奈川村位沢遺跡 (中部高地土器集成グループ 1983) (第6図)

位沢遺跡では、塚田式第1群1類a種(40)・第1群3類a種(36)等が出土している。位沢例は隆帯が太く明瞭で塚田遺跡に類似している。

(12) 長門町六反田遺跡 (児玉 1983) (第7図)

六反田遺跡では、塚田式第2群2類a種(1~3・8・12・16・18・19)・第2群3類a種(17・22)等が出土している。六反田の例は、御代田町下弥堂遺跡に類似して



第6図

いる。

(13) 岡谷市梨久保遺跡23号住居 (小沢 1986) (第8図)

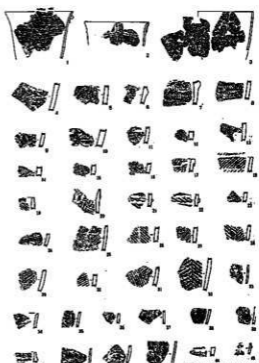
梨久保遺跡23住は2軒の切り合い関係が指摘されており、それぞれ23号住居a・23号住居bとなっている。切り合い関係は、23号住居bが新しい。23号住居aからは隆帯の貼付される絡条体圧痕文土器(1)、23号住居bからは塚田式第1群1類a種(2)と縄文施文の土器(3)がそれぞれ床面に接して出土している。その他、23号住全体から絡条体圧痕文土器・塚田式・天神山式・薄手で指頭痕の見られる東海系の土器が見られる。梨久保23住bの塚田式に見られる隆帯は、細く、坪ノ内遺跡の例に類似している。

(14) 茅野市高風呂遺跡集石4・5・7 (守矢 1986) (第9図)

高風呂遺跡では、集石4・5・7から塚田式第1群3類a種(9)・肥厚口縁の中道式(1・2・6・8)・隆帯の貼付される下吉井式(34~38)・波状沈線文の施される下吉井式(34~38)・隆帯上に貝殻条痕の施される木島式(39~44)・口唇部がやや肥厚気味になり、隆帯上に櫛状の工具に



第7図



第8図

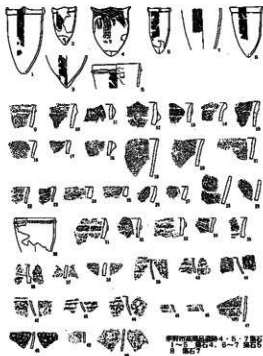
よる条痕が施される木島式・格子目状に細線が施される中越式(47)・絡条体圧痕文土器などが混在して出土している。(註3)

(15) 東部町鍛冶屋遺跡3号住居 (翠川 1988) (第10図)

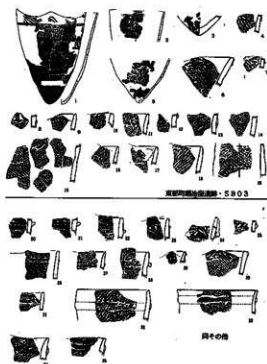
鍛冶屋遺跡3号住居では、第2群3類a種(4・6・7)等が出土している。これらと(1)のように口縁部文様帯にR・L2本揃えの原体を用い、撚糸側面圧痕文が山形状に施文され、蕨手状になる部分もみられる花積下層式が共伴する。また、3号住以外からも第1群3類a種(26~28)・第1群3類b種(20・21・23)・第2群3類a種(35~38)などが見られる。鍛冶屋の例はその隆帯の形態などの点で塚田遺跡に近似している。

(16) 信州新町お供平遺跡18号住 (松永 1989) (第12図)

お供平18号住では、塚田式第2群3類a種(1・4)・第2群1類a種(3)等が出土している。



第9図



第10図

(17) 松本市坪ノ内遺跡土器集中区 (松本市教委 1990) (第11図)

坪ノ内土器集中区からは第1群2類a種(1・2・4・13等)・第1群1類a種(12)及び、縄文を地文とし、横位の隆帯を貼付し、隆帯上に結条体圧痕文を施す土器(15)・撫糸文を地文とし、隆帯を貼付後、隆帯上に結条体圧痕文を施す土器(26)・隆帯をもつ結条体圧痕文土器(20~24)・東海地方の入海式(27・28)・石山式(29・30)・天神山式(31・32)・薄手で指頭痕の見られる無文土器(34~37)・関東地方の神之木台式もしくは下吉井式(33)等が出土している。坪ノ内遺跡例は塚田遺跡例と比較して、細い隆帯を貼付するといった点で異なる。また、隆帯の隆起をより明瞭にするように隆帯の上下を沈線でなぞるもの(6~9)も見られる。これらを同じく土器集中区から出土した隆帯をもつ結条体圧痕文土器と比較すると、結条体圧痕文土器の隆帯には隆帯の上下に平行するように結条体圧痕文が施されているものも見られ、極めて類似している。これらは、塚田式の隆帯の系譜を考える上で注目すべき点である。

(18) 茅野市芥沢遺跡 (守矢 1990) (第14図)

芥沢遺跡では、遺構は確認されていないものの、包含層から良好な資料が出土している。塚田式は第1群3類a種(1)がみられ、その他に中道式(6~8)・結節沈線文のみられる下吉井式(4)・刻みがある隆帯の下吉井式(3)・水平、波状の隆帯を組み合わせ、貝殻条痕を施す東海系の木島式(2)等が見られる。

(19) 真田町四日市遺跡 (百瀬 1990) (第12図)

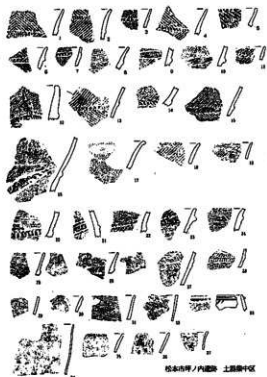
四日市遺跡では遺構外から、塚田式第1群3類a種(13・14)・結条体圧痕文土器が出土している。四日市遺跡の隆帯も坪ノ内遺跡の隆帯に類似する。

(20) 茅野市天狗山遺跡30号住居 (茅野市教委 1993) (第14図)

天狗山遺跡30号住居では、塚田式第1群1類a種(13)・第2群3類a種(10)と隆帯が貼付される下吉井式(17~20)・隆帯と波状沈線が見られる下吉井式(16)・薄手で条痕が見られ、指頭痕がある東海系の土器(21)が見られる。

(21) 茅野市中ツ原A遺跡 (茅野市教委 1993) (第13図)

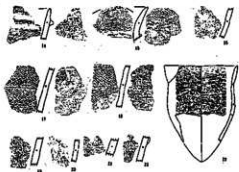
中ツ原遺跡では遺構外から塚田式第1群3類a種(14)・第1群3類b種(15)をはじめ含織維の無文尖底土器(23)等が出土している。



第11図



中野市田原1区土器断片

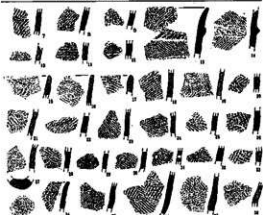


第13図

宇野市ヤツ原人遺跡



信州國司谷平18号住

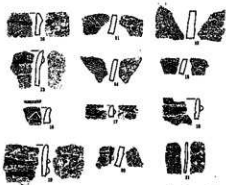


第12図

島田阿部田中遺跡



宇野市平沢遺跡



宇野市大沢山遺跡30号住

第14図

## (22) 中野市田草川尻遺跡 (第13図)

田草川尻遺跡では塚田式第1群3類a種(2・5～8)・第1群3類c種(3)等が出土している。田草川尻の例は、隆帯上への施文が刻みの他にやや太めの工具による連続する押し付けも見られる。

## (23) 塩尻市矢口遺跡 (註4)

塩尻市矢口遺跡からは16軒の住居が検出されており、それらの大半から塚田式が出土している。また、塚田式と共伴して、隆帯上に貝殻条痕の施される木鳥式・隆帯の貼付される下吉井式が見られる。また、遺構外からは、塚田式をはじめ、神之木台式・隆帯上に貝殻背圧痕文の施される木鳥式・天神山式が出土しているが、絡条体圧痕文土器は見られない。

(註1) 久保田遺跡の例は、胴部上半に具方向縄文を施し、下半に条の縦走する縄文を施している。

(註2) 御代田町下弥堂遺跡は塚田遺跡と同年度に報告される予定である。

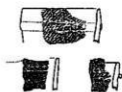
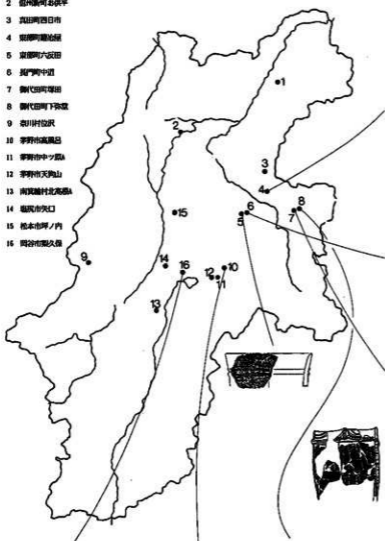
(註3) 報告書では、集石4・5・7各々に確突に伴う土器として、集石4には肥厚口縁の中道式と下吉井式、集石5には中道式、集石7には中道式が伴うとされている。

(註4) 塩尻市矢口遺跡は近日刊行予定であるが、平出遺跡考古博物館小松孝氏のご厚意により実見させていただき、本報告への記載の内諾を得た。

## 4 塚田式の分布について

現段階で確認できる塚田式の分布を長野県内を中心に概観したい。塚田式の分布は、千曲川水系を中心とし東信地方に濃密にみられる。また、諏訪湖周辺、及び松本平にも分布する。天竜川水系では北高根A遺跡のみである。こうした分布は、後続する中道式の分布とほぼ重なる。東信地方は他時期においてもより関東的な様相の強い土器群が見られ、特に、群馬県との関係は強いと思われる。一方、伊那谷は、より東海系の要素が強いため、塚田式の分布が希薄であると思われる。以上から、塚田式は東信地方を中心に長野県全体にはば分布し、東信地方以東の地域にも広がる可能性がある。

- 1 中野市田原川
- 2 飯沼河お伏平
- 3 真田河西日市
- 4 飯沼河船越
- 5 飯沼河六反田
- 6 長門河平道
- 7 飯沼河河原田
- 8 飯沼河河下孫田
- 9 森川村位沢
- 10 宇野川高瀬田
- 11 宇野川中ツ野山
- 12 宇野川天狗山
- 13 南箕輪村北高瀬田
- 14 堀原市矢口
- 15 松本市呼ノ内
- 16 岡谷市黒久保



第15図 塚田式の分布

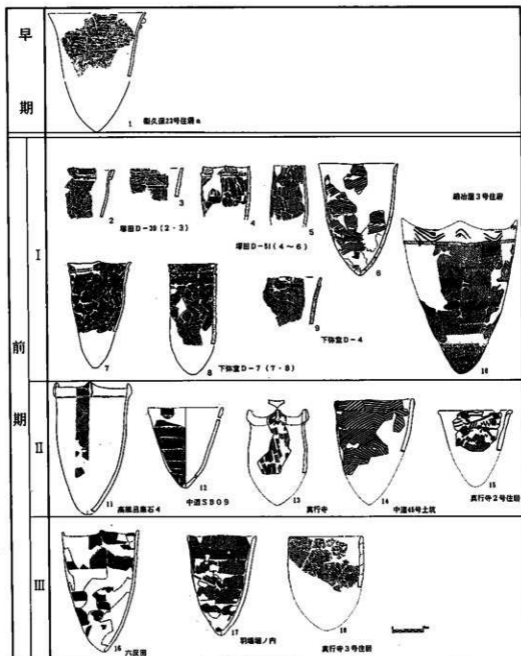
## 5 塚田式の編年的位置付けについて

塚田式・中道式を含む縄文施文尖底土器群は、塚田式設定以前から、梨久保遺跡報告書に見られる考察（小沢 1986）を含め、守矢昌文氏の一連の研究成果（守矢 1986・1989・1990）により、その編年的位置付けが試みられてきた。今回はこの成果を検討し、塚田遺跡・下弥堂遺跡の調査成果を交えながら塚田式の編年的位置付けを模索したい。

1986年に上梓された梨久保遺跡の報文には、23・75号住の出土遺物を中心に縄文時代早期末～前期初頭土器の分類と検討がなされている。この中で塚田式は第I群4類に分類されている。この4類土器については、23号住b床面における一括出土状態の例が挙げられ、絡条体圧痕文をもつ土器がこれに加わり、まとまってみられたとし、I群の2類（絡条体圧痕文土器）・3類（器面に燃糸文の施される土器）・4類はそれほど時間差は無く、ある程度のまとまりがあるとしている。また、先行する23号住a床面から出土した隆帯をもつ絡条体圧痕文土器との関係は、絡条体圧痕文をもつ土器が若干先行する可能性をもつと推測している。また、75号住については、住居址覆土の層位的な見地から、縄文施文土器が時間的な幅をもち、古い様相と新しい様相をもつものが存在し、絡条体圧痕文、燃糸土器は比較的古い段階の縄文施文土器との共伴を予想している。また、4類土器の編年的位置付けに関しては、「本来の花積下層期にみられる肥厚口縁や燃糸側面圧痕をもつものが非常に少なく、また結節による羽状縄文もみられない。」（「」内、本文から引用）ことを挙げ、花積下層初期に位置付けている。さらに隆帯の系譜については23号住bに絡条体圧痕文土器が見られる点や、23号住a出土の絡条体圧痕文土器にみられる隆帯の在り方から何らかの関係も示唆されるとしている。しかし、23号住は調査区の問題から多年度にわたる調査を行わざるを得ず、その結果2軒の切り合いが判明するといったまことに残念な調査経過があり、床面遺物として4類土器（塚田式）・2類土器（絡条体圧痕文土器）がそれぞれの住居床面から出土したという成果を残しながらも、23号住全体の覆土からの出土土器は、2類土器・3類土器・4類土器・石山、天神山式が混在して出土しており、確実な共伴関係がつかめず、4類土器（塚田式）の編年的位置付けの傍証になり得ないのが惜しまれる。

一方、守矢昌文氏は、共伴する東海系の土器群から縄文施文尖底土器群を検討した（守矢 1989）。それによると、縄文施文尖底土器群は石山～塩屋式以降まで幅広い時期に渡ってみられ、石山、天神山式等のごころ成立した口縁部に貼付隆帯をもつ一群が先行し、塩屋（木島Ⅲ）式には肥厚口縁、垂下肥厚部に貼付隆帯が変化して、塩屋式以降（木島Ⅳ～Ⅵ・Ⅶ）では垂下肥厚部をもつものはみられなくなり、肥厚口縁と口縁が肥厚しない平縁になると想定した。また、中道式の特徴である肥厚口縁・小波状・波頂下の垂下肥厚部は、貼付隆帯の系譜上に位置するものとし、さらに貼付隆帯の系譜を梨久保遺跡9号住居の絡条体圧痕が隆帯上に施される一群と密接な





第16図 長野県に於ける縄文時代前期初頭の土器変遷図 (1:12)

関係にあるとした。

さらに守矢氏は芥沢遺跡の報告(守矢 1990)において「県内に於ける縄文施文尖底土器群の変遷について」と考察を行い、東海系土器群との共伴事例をもとに、口縁部形態の変化に注目し変遷観を示している。それによると口縁部形態をA1~D1まで8分類し、「第1段階 口縁部にタガ状等の貼付隆帯をもつ。第2段階 貼付隆帯はなくなり、口縁部下が肥厚し垂下肥厚部等との組み合わせをもつ。第3段階 第2段階のような垂下肥厚部はなくなり平縁で肥厚口縁となる。」との3段階の変遷観を示し、第1段階の貼付隆帯をもつ土器が石山、天神山式頃に出現するとの編年の位置付けを行っている。

しかし、石山・天神山式期に隆帯をもつ縄文施文の土器群との確実な共伴事例を筆者は知らない。

さて、小沢・守矢両氏の研究成果を考慮しながら、先に挙げた他遺跡における様相を振り返ってみたい。塚田遺跡ではD-51号土坑、D-2号土坑において異原体を用い、縦位に菱形を構成する土器や花積下層式(谷藤 1994)等が共伴している。さらに、塚田式自身の文様構成をみると、D-39号土坑・D-51号土坑の第1群4類a種、第1群2類c種に見られる隆帯と沈線の組み合わせが下吉井式に類似している点、第1群3類d種・第1群4類b種にみられる燃糸側面圧痕が花積下層式である点に注目したい。また茅野市天狗山遺跡30号住からは隆帯の貼付される下吉井式・隆帯と波状沈線の見られる下吉井式がそれぞれ共伴し、塩尻市矢口遺跡では隆帯に貝殻または桶状の工具による条痕の施される木鳥式及び、隆帯の貼付される下吉井式の伴出がみられる。こうした様相から塚田式第1群は関東地方下吉井式・花積下層式、隆帯上に貝殻・桶状の工具による条痕の施される東海地方の木鳥式に併行する縄文時代前期初頭に位置付けられることが予想される。しかし、確実な共伴事例の乏しい現在、資料の増加を待って再考すべき必要がある。

一方、塚田式第2群土器は、塚田遺跡内では第1群土器との伴出例はなく、また下弥堂遺跡では第2群土器が主体をなす集落を形成している点が注目される。また、第1群と第2群との隆帯の間には後者にやや後出的な要素が見られ、第1群と第2群には時間差が予想される。さらに、第2群1類・2類の隆帯の形態は中道式に見られる肥厚口縁に近似しており、型式学的に中道式に先行すると思われる。以上から塚田式第1群→塚田式第2群→中道式への変遷が考えられよう。

## 6 隆帯の系譜について

塚田式を特徴付ける大きな要素の一つに貼付隆帯がある。この隆帯は長野県における縄文施文尖底土器群の変遷、即ち、塚田式から中道式への変遷の過程において重要なメルクマールになる要素であり注目される。そこで、ここでは隆帯の系譜について考察したい。

塚田式の隆帯でまず目につくのが第1群1類・2類にみられる逆T字隆帯もしくはそれに近似する隆帯である。これらの隆帯は波状口縁の波頂部からやや太めの隆帯を垂下し、やはり太めの横位の隆帯と連結させて作出されている。塚田遺跡では特に、耳状に大きく隆起させた垂下隆帯を貼付している。横位隆帯の断面形は高く隆起するU字状を呈し、鍛冶屋遺跡・位沢遺跡では断面が「コ」に近いものも見られる。隆帯上への施文は、斜位方向からの刻み・地文が及ぶもの・無文になるものの3種類が見られるようである。このうち、第1群1類は神奈川県菊名貝塚等の隆帯に類似している。こうした隆帯の形態から、関東地方の隆帯文系土器との関連性が窺えよう。また、第1群1類c種・2類c種・4類a種に見られるように、隆帯と沈線の組み合わせによる文様構成も存在する。このうち4類a種の隆帯によって区画される中に沈線による波状文を描くといった構成は神奈川県上浜田遺跡・菊名貝塚などの下吉井式にみられ、また、1類c種のように逆T字隆帯と沈線の組み合わせは、埼玉県天神山遺跡などの下吉井式に存在する。これらの点から、塚田式に見られる隆帯と沈線の組み合わせは関東地方の下吉井式との関係が深いと考えられる。

一方、梨久保遺跡23号住b・北高根A遺跡10号住・坪ノ内遺跡土器集中区などの土器にみられる隆帯は、塚田遺跡の隆帯とやや趣を異にする。梨久保遺跡に代表される隆帯は、細い粘土紐を貼付し、隆帯上に刻みが施され、不明瞭な隆帯を器面に撫でつけるように貼付する塚田式第2群の隆帯とも異なる。また、坪ノ内遺跡では、隆帯の隆起をより明確にするように隆帯の上下を沈線でなぞるものが見られる。こうした手法は、やはり同じ土器集中区から出土している隆帯上に結条体圧痕文を施す土器にもみられ、さらに、地文を縄文又は熱糸文とし、隆帯上に結条体圧痕文を施す土器が出土している。こうした点から結条体圧痕文土器にその系譜が求められる隆帯の存在も考えられるが、結条体圧痕文土器の系譜及びその変遷・編年の位置付けが明らかでなく(註1)、結条体圧痕文の様相の解明を待って隆帯の系譜を改めて論じたい。

以上、塚田式の隆帯の系譜は、関東地方の隆帯文系土器と信州の在地的な土器と考えられる結条体圧痕文土器からの系譜の2通りが予想される。

(註1) 長野県における結条体圧痕文土器の研究はその最終段階として前期最初頭まで残るとの小沢由加利氏の論考が研究の指針となっている(小沢 1986)(守矢 1986・1989・1990)(宮下 1988・1989)。しかし前期

最初頭とする根拠である梨久保遺跡23号住の様相は、先にも述べたとおり、確実なものとは言い難い。また、塚田遺跡・矢口遺跡では花積下層1式や東海系の木島式が見られ、前期初頭に位置付けられるものの、当該期の遺構からは絡糸体圧痕文土器の出土がみられず、疑問が生じる。しかしながら、長野県においては、梨久保遺跡23号住を除き、良好な資料が恵まれず、不明な点が多い。今後の資料の増加を待って、絡糸体圧痕文土器の研究を更に進める必要があろう。

## 7 まとめ

塚田遺跡から出土した土器群に対し、我々は「塚田式」の名称を与え、その系譜・編年の位置付けなどを論じてきた。その結果、塚田式は隆帯を特徴とする縄文施文の尖底深鉢形土器で、前期初頭に位置付けられることが判明した。また、塚田式設定により、現在まで不明瞭であった「中道式」の編年の位置付けが明瞭になるとともに、中道式の肥厚口縁が塚田式の隆帯からの変遷であることが予想された。また、長野県における縄文系土器群の様相が、塚田式（第1群）→塚田式（第2群）→中道式と変遷することが考えられた。しかしながら隆帯の系譜及び縄文の系譜、坪ノ内遺跡の土器群などに関しては、まだまだ再考すべき必要性を感じている。また、文中では触れなかったが、燃糸文を地文とするものの存在が絡糸体圧痕文土器とどのように係わりあうのか不明な点が多いのも事実である。また、他県における塚田式の様相にも興味深いものがある。今後の資料の増加を待ち、これらの点について再考したいと思う。

最後になってしまったが「塚田式」提唱にあたっては、渋谷昌彦・谷藤保彦両氏から型式設定についての御助言をいただいた。また関根慎二・綿田弘実両氏には平成6年2月5・6両日に行われた縄文セミナーでの発表に機会をいただき、その中で戸田哲也氏から多くの御助言を賜った。また、費田明氏からは全般にわたる御教示をいただいた。また、友野良一先生、守矢昌文氏、島田哲男氏、馬場保之氏、中沢道彦氏、小松学氏、水沢教子氏、岸崎浩実氏、縄文セミナー参加者の方々等、多くの方々よりお世話になった。また、御代田町教育委員会の小山岳夫、堤隆剛氏には拙い考察を報告書に載せることを快諾していただいた。皆さんに心よりお礼を申し上げたい。

### 主要参考文献

- 山岡栄子 1973 「北高根A遺跡」『中央道報告書—南箕輪村その1その2』長野県教育委員会
- 高橋雄三・吉田哲男 1978 「横浜市神之木台遺跡」神之木台遺跡調査グループ
- 桑山龍彦 1981 『菊名貝塚の研究』
- 渋谷昌彦 1982 「木島式土器の研究—木島式土器の型式細分について—」『静岡県考古学研究』11
- 児玉卓文 1982 「尖底底部穿孔の資料」『上小考古』11
- 児玉卓文 1982 『真行寺』東部町教育委員会
- 児玉卓文 1983 「江戸町遺跡の合繊織表裏縄文土器」『上小考古』14
- 児玉卓文 1983 「合繊織小波状肥厚雑土器群の覚書」『しなのろじい』No200 千曲川水系古代文化研究所
- 渋谷昌彦 1983 「神之木台・下吉井式土器の研究」『小田原考古学研究会々報』

- 神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983 「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』第17号
- 児玉卓文 1984 「長門町中道」長門町教育委員会
- 小沢由加利 1986 「梨久保遺跡」岡谷市教育委員会
- 守矢昌文 1986 「高尾呂遺跡」茅野市教育委員会
- 児玉卓文 1987 「長野県」『縄文前期の諸問題』第1回縄文セミナー 群馬県考古学研究所ほか
- 宮下健司 1988 「縄文早期の土器」『長野県史 考古資料編』4遺構・遺物
- 千野 浩 1988 「浅川端遺跡」長野市教育委員会
- 翠川泰弘 1988 「鍛冶屋遺跡」東部町教育委員会
- 宮下健司 1989 「東海条直文系土器様式」『縄文土器大観』1
- 守矢昌文 1989 「長野県における縄文時代早期末から前期初頭の土器群について」『全報』3 諏訪考古学研究会
- 松永調雄 1989 「お供平遺跡」信州新町教育委員会
- 金子直行 1989 「下段遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 松本市教育委員会 1990 「松本市坪ノ内遺跡」
- 友野良一 1990 「中越遺跡」宮田村教育委員会
- 百瀬忠幸 1990 「四日市遺跡」真田町教育委員会
- 守矢昌文 1990 「芥沢遺跡」茅野市教育委員会
- 近藤尚義 1991 「栗毛坂遺跡」『上信越自動車道報告書』2佐久市その2 長野県埋蔵文化財センター
- 岸崎浩実 1992 「真田氏館跡」真田町教育委員会
- 堤隆 小山岳夫 1992 「概報 塩野西遺跡群」御代田町教育委員会
- 近藤尚義 1992 「下茂内遺跡」『上信越自動車道報告書』1 佐久市その1 長野県埋蔵文化財センター
- 茅野市教育委員会 1993 「中ツ原A遺跡」
- 茅野市教育委員会 1993 「天狗山遺跡」
- 金井正三 1993 「飯山市誌」飯山市
- 谷藤保彦 1994 「群馬県における早期末・前期初頭の土器」『第7回 縄文セミナー 早期末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 下平博行・費田明 1994 「長野県に於ける縄文前期初頭 縄文系土器群の編年」『第7回 縄文セミナー 早期末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

## 4 縄文前期中葉の土器について

賛田 明

縄文前期中葉の土器は、関山Ⅱ式・神ノ木式・有尾式が出土している。これらを塚田遺跡の縄文時代前期第3群土器と一括して呼び、若干の考察を加えることにする。なお、本群で主体を占めるのは関山式と神ノ木式で、明確に有尾式と判断できたのは、J-7住居址より出土した1点にすぎない。

### 1 第3群土器の内面調整について

本群中、神ノ木式・関山Ⅱ式の内面調整について、若干触れてみたい。尚、有尾式は上記に示した通りなので、本項からは省いてある。

本群の土器に施される内面調整は、大旨次の通りである。

- ①ヨコ方向のナデを基本とし、器面を平滑に仕上げるもの。光沢を帯びる事もある。
- ②ナデ調整により仕上げを行うが、器面に若干の凸凹を残しているもの。
- ③ナデ調整を行うが、①・②に比して粗いもの。ザラザラとした感触をうけ、胎土に含有される砂粒が器面に露出している事もある。

①は関山Ⅱ式に見られる調整方法で、より丁寧な仕上げを行う事に特徴がある。関山貝塚出土土器の内面調整は、全般に胎土・整形等は非常に良好で良く磨きがかかったものである事が、報告されているが(庄野 1974)、①もこれに近い状態と思われる。

②は縄文のみを施す土器に多く行われ、土器整形時に残されたナデ・調整跡等が観察できる。また神ノ木式・関山Ⅱ式にも、この方法で調整された土器がある。縄文のみを施す土器はこの両型式に所属するため、②は共通した調整方法である事が伺える。

③は神ノ木式に見られる。①・②より雑で器面状態が悪いものも多く、神ノ木式として判別できた土器の中に、①の様な調整を行うものは存在しなかった。

この様に神ノ木式と関山Ⅱ式とは、内面の調整方法が異なる。関山Ⅱ式はよく一般的にイメージされる関山式の調整方法そのもので、関東地方の同型式と大差ない。一方の神ノ木式は、県下各地の神ノ木式に共通する調整方法なのかを見極めていく必要がある。

### 2 第3群土器の分類

本群は施文される文様の差異から、1～6類に分類される。

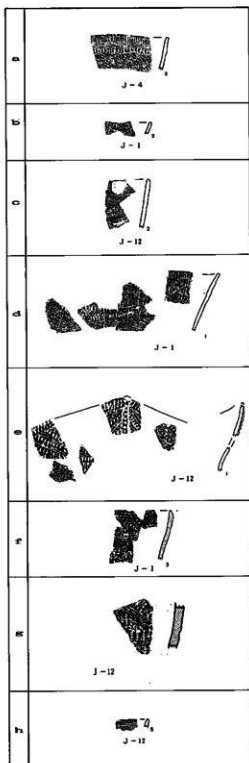
- 1類 歯状工具による連続刺突・条線・列点状刺突文で文様を構成するもの。

- 2類 肥厚部へ大きな爪形文を横位に施すもの。
- 3類 口縁部へ細かい爪形文を3段施すもの。胴部以下は無文になる。
- 4類 地文上に半截竹管状工具で幾何学的文様を描くもの。
- 5類 半截竹管状工具による爪形文で菱形文を描くもの。
- 6類 縄文を施文するもの。

### 3 出土土器について

1類は橋曲状工具で施文がなされる神ノ木式で(第1図)、連続刺突・条線・列点状刺突文によって口縁部文様帯を構成するが、列点状刺突文は主文様要素にはならず、条線の際に施文されるにすぎない。連続刺突と条線の組み合わせにより以下のようなヴァリエーションが見られる。

- a 肥厚部に連続刺突文および条線を交互に施すもの(1)
- b 口唇部直下へ連続刺突を行い、その下方に同刺突をナナメに施して文様を構成するもの。尚、下方へ施す連続刺突に沿って列点状刺突文が施されている。(2)
- c 口唇部直下へ2段の連続刺突を行い、その下方に条線をナナメに組み合わせる文様を構成するもの。条線に沿って、列点状刺突文が見られる。(3)
- d 肥厚部へ1段の連続刺突を施し、その下方に同刺突で多数の菱形を描くもの。菱形の交点に、円形文が見られる。(4)
- e 肥厚部へ2段の連続刺突を施し、その



第1図 神ノ木式土器の分類

下方に同刺突と条線を組み合わせてナナメに施文するもの。方向が途中で変わっている。

また、波状口縁の波頂部から、連続刺突が加えられた隆帯を垂下する。(5)

- f 肥厚部へU字状の刺突を2段行い、その下方に鋸歯状および平行の条線を描くもの。条線に沿って、連続刺突が認められる。(6)
- g 東の縄文を地文に施し、口縁部文様帯の下端を連続刺突で区画するもの。文様帯には、連続刺突・条線がナナメに施文される。(7)
- h 条線で文様を描くもの。(8)

2類は肥厚部へ爪形文を施文する神ノ木式で、平縁・波状口縁がある。平縁を呈する土器は、口唇部に三角状の突起を2個1組で貼付している。また波状口縁の土器は、波頂部下に円形の突起を施している。

3類は口縁部に細かい爪形文を施す土器で、J-13号住居址から1点が出土している。本類に類似する土器は、中越遺跡98号住居址(友野他 1990)に見られる。

4類は有尾式で、J-7号住居址で1点が出土している。

5類は関山Ⅱ式で、1類とともに遺構から豊富な量が出土している。縄文地文上に幾何学的文様を描く事の特徴とするが、縄文地文に組紐・単節縄文・ループ文が見られる。

6類は縄文を施文する土器で、1・2・4・5類の胴部に施文されるものも含まれる。確認できた原体は、無節縄文・単節縄文・複節縄文・反の撚りと思われる縄文・正反の合・附加条具節・多段ループ文・組紐・東の縄文がある。

次に本遺跡から出土した神ノ木式・関山Ⅱ式について見ていきたい。神ノ木式は、上記の通り鋸歯状工具による連続刺突・条線で文様を構成するもので、列点状刺突文は条線に添えられるだけである。こういった神ノ木式に伴う関山Ⅱ式は、単節縄文・組紐・ループ文を地文とし幾何学的文様を描くもの、正反の合、附加条、ループ文、組紐等で、組紐の存在が目立っている。

関山Ⅱ式は、組紐の変遷を目安にすることが有効であるとされる。奥野麦生氏は、組紐の変遷を出現期・盛行期・衰退期に分け、これを規準に神ノ木式の変遷を検討しているが(奥野1991)、本稿もそれに準じて出土土器の位置付けを行う事にする。

まず1号住居址であるが、1類b・d・f、6類の東の縄文等の神ノ木式、5類、6類の正反の合・組紐などの関山Ⅱ式が出土している。1類dは中越遺跡79号住居址に類例があり、そこでは清水ノ上Ⅱ式・無織維ながら関山Ⅱ式に類似する土器などとともに出土している。5類はループ文を地文としているが、本遺跡J-3・9・12号住居址にも同例が見られる。

3号住居址は関山Ⅱ式を中心に出土しており、神ノ木式は東の縄文だけである。5・6類で構成されるが、組紐盛行期の良好な資料であろう。



4号住居址には1類aの他、6類の単節縄文・正反の合・組紐・束の縄文が出土している。組紐が他の住居址に比べて少なく、また、5類も本住居址には見られない。口縁部文様帯を持った関山Ⅱ式が出土していない為に詳細は不明だが、組紐の出現期に相当するのかもしれない。

J-9号住居址では、2類・5類・6類が出土している。6類の中では単節縄文について組紐の占める割合が多く、組紐盛行期の住居址であると思われる。

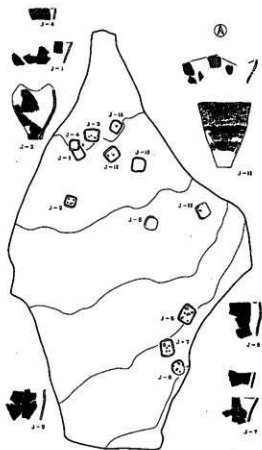
J-12号住居址では1類c・e・g・h、5・6類が出土している。また多段ループ文の存在が目立ち、鋸歯状に施文するもの等が見られる。組紐は5類の地文に使われており、9号住居址等と同時期であると思われる。

J-13号住居址では2・3・5・6類が出土している。5類は単節縄文を地文とし、幾何学的文様を描いている。組紐はそう多くない。

以上の様に本遺跡の関山Ⅱ式は、5類が4号住居址以外の全てに見られ、組紐が多く、正反の合が存在する事から、組紐盛行期に位置付けが可能であろう。また4号住居址は、上記の理由により若干先行する可能性がある。更に、組紐盛行期に併行する神ノ木式は、1類b~hということになり、これは、奥野氏によって示された神ノ木2期に相当しよう。4号住居址は、同1期になるのかもしれない。

本遺跡の第3群中、神ノ木式・関山Ⅱ式を中心に概観してきた。良好な資料にもかかわらず、時間の制約などにより、きちんとした検討ができずに残念である。

機会を改めて検討したい。



第2図 塚田遺跡の縄文前期中葉の集落と土器

## 5 塚田遺跡出土土器の胎土について

水沢 教子

### はじめに

土器の胎土は、文様、技法等とともに、土器を媒体として縄文社会を復元するための重要な属性の一つである。特に古くからの課題であった、複数の土器型式接触地域での搬出入を問題にした研究は、遺跡毎すなわち点的な土器群の特徴の把握から、今や複数遺跡を対象として面的に動態を論ずる段階に向かって進みつつあるといえる。今回の分析は、このような広域の動きを論ずるための基礎資料の一つとして塚田遺跡という土器型式接触地域の一遺跡での土器の動きに定点をすえ、中でも特に以下の3つの課題に照準をしばったものである。

### 1 分析資料

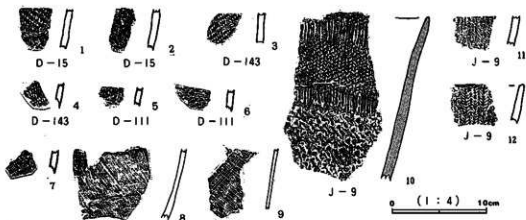
#### (1) 分析の目的

本報告で述べられたように塚田遺跡では、縄文早期から前期にかけての多くの系統の土器が出土している。そこで以下3つの問題設定を行って胎土分析を行った。

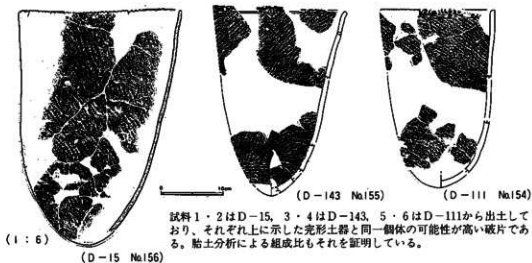
1. 肉眼観察で多くの黒雲母を含有する縄文早期第Ⅲ群土器（第1図1～6）を定量分析することで、まず黒雲母の含有状況を定量化し、御代田周辺の地質とこの土器群を構成する胎土の比較、検討を行う。また時期の明確な比較資料としては条痕文土器（7）を分析する。
2. 明らかに在地の土器でないとされる木鳥式土器（第1図8、9）の胎土を、御代田周辺の粘土と比較しこの土器が在地のものかどうかを判断する。
3. 本遺跡の関山式土器（第1図10）と神ノ木式土器（第1図11、12）は土器の観察表で述べられているように、型式学的な差のみならず見かけの胎土の感じもそれぞれ明確な特徴があり、比較的胎土と型式が一致する土器群である。今回これらのうちの代表的な土器を選択し胎土分析を行うことで、それらの肉眼的な差異がどの程度裏付けられるか、更にそれらが御代田周辺の地質と比較してどのように位置付けられるかを探っていく。

#### (2) 分析資料の観察

今回は第1図の12点の資料を選択した。まず早期第Ⅲ群土器は破片も含めて最低4個体が認定されているが今回はそのうち同一個体の可能性の高いNa1、2ならびにNa3、4とNa5、6の計



7~8グリッド出土



第1図 分析資料(上段)と帰属の推定される個体(下段)

(1)  
6破片を選択した。肉眼観察ではいずれも表面に黒雲母、石英の大片が目立つ。とりわけNo.1、2、5、6およびNo.4、5は胎土的にそれぞれ非常に類似している。また全体に空隙が多く非常に脆弱であるためそのままでの切断はとても不可能であった。

一方、条痕文のNo.7はよく焼けしまっており細粒の斜長石が見られるにすぎない。No.8とNo.9の木鳥式は更によく焼けしまっている。どちらも超細粒の透明な鉱物がまんべんなく分布しており、大岩片は極少量が見られるにすぎない。No.8には表面に黒雲母が少量見られる。

神ノ木、関山式は胎土、調整、型式がよく一致する(本文中「前期中業の土器について」を参

(2)  
照)。今回分析するNo10は関山Ⅱ式に主流の胎土のもの(本文中「調整A」)、No11は神ノ木式のうち調整が悪く混和物の多い類型の代表(同「調整C」)、No12は調整がよく混和物の少ない胎土の代表的なものである(同「調整B」)。3つとも一見すると良く焼けしまっているが、薄片を作ってみるとかなりの鉱物が剥落してしまっただけで樹脂で固めて再度作り直した。No10は緻密な胎土でかなり細粒の白色粒子、石英、斜長石を含むが量はNo11より少ない。No11は多孔質で細粒の有色鉱物、石英、斜長石などを非常に多く含む。このため器面調整のナデの後も凹凸が明瞭に残る。No12は非常に緻密な胎土で一部大岩片が含まれるものの粘土部分が多い。調整の磨きも念入りにおこなわれている。

## 2 分析の方法

### (1) 分析の視点

さて具体的な複数型式接触地域での分析の場合、在地型式をT、在地胎土をCとしたときに、TC(在地型式で在地胎土の土器)、 $\bar{T}\bar{C}$ (在地外型式で在地外胎土の土器)、 $\bar{T}C$ (在地外型式で在地胎土の土器)、 $\bar{T}\bar{C}$ (在地型式で在地外胎土の土器)の4つの理念的な分類が考えられ、土器の動き、あるいは人の動きの動態的解釈を行うための基礎となる(水沢1992)。そのため、分析の前提条件としての「在地胎土」をどのように認定するかは大きな課題である。在地胎土の認定には、①既存の地質図をはじめ地質学分野での調査研究成果を借用し、遺跡のある場所の傾向をつかむ、②大量の土器の胎土分析により遺跡内で最も量的に多いものを在地胎土とする、③周辺の河川砂を採集し、在地の砂の組成を検討することで更に狭い地域の傾向をつかむ、等の方法がある。特に②は沖積地などの地域別の顕著な差の見られない地方の遺跡での在地胎土の傾向性の把握を、③は①を裏付け、さらに細かい地域間の土器の移動を論じることが可能にした(河西他1989)。

今回分析をした御代田町は浅間山麓の火山砕屑物の分布する地域に属し、その周辺地域もそれぞれ特色あるいくつかの地層に細分される。このことから特に今回は①のみを在地胎土認定の基準とした。更に解釈にあたっては、信州大学教育学部の河内晋平先生から多くの御教示をいただいている。今後は今回の結果を踏まえ、更に②、③をも加えた、総合的な在地胎土認定を行っていかねばならないと考えている。

### (2) 遺跡周辺の地質 (第2図)

土器の胎土から情報を引き出す場合の手順としてまず、在地胎土であるかどうかの認定(1段階)が行われ、次に在地胎土でなかった場合この粘土を用いたと考えられるかの検討(2段階)へと進む。1段階の推定のみにとどまるか、2段階へと論理的に進めるかは、分析した地域の地



質学的特性とその土器がいかにその特性を代表する情報を含んでいるかにかかるところが大きい。

塚田遺跡は浅間山南麓の御代田町大字塩野に位置する。浅間山は大別して4個の火山体からなり、それらの堆積物が裾野に広がっている。(Aramaki, S. 1963) 塩野地域の基盤は約1万1千年前に堆積した第2軽石流堆積物で、岩質は紫蘇輝石デイサイト( $\text{SiO}_2=65\%$ )である。更に黒斑山中部層が遺跡の2kmほど北から浅間の頂部に向かって広がる。本層は紫蘇輝石普通輝石安山岩からなる。このように塚田遺跡の在り地胎土は、今回は1で述べた①にのみ基くとすると、浅間火山起源の安山岩およびデイサイトを含むものであると考えられよう。

一方御代田の西側周辺には、陸成の鮮新-下部更新統の小諸層群、中部更新統の北御牧火山岩類・伴野層が広がる。また、南部に見える平尾山、森泉山に分布する平尾火山岩類には角閃石安山岩、輝石安山岩および特徴的な緑色凝灰岩(第2図Aa)が分布する。この緑色凝灰岩は更に碓氷峠の付近、和英峠にも広がる。更に軽井沢町茂沢から南佐久郡大日向までは輝石安山岩質の志賀溶結凝灰岩(第2図Ahy)が分布する。

### (3) 分析方法

まず土器破片を岩石カッターでなるべく口縁と垂直になるように切断する。早期第III群土器は特に、神ノ木式、関山式も若干脆弱であったためエポキシ樹脂を含浸させ、補強した。硬化した後(4)に研磨材を使い、岩石研磨器でくりかえし資料を研磨し、やはりエポキシ樹脂でスライドグラスに貼付けて完成させた。

プレパラートを偏光顕微鏡下におき、メカニカルステージを用いて縦軸方向に0.3mm、横軸方向に0.5mmずつ動かしてポイントカウンティングを行った。各薄片とも鉱物が抜け落ちた部分やもとの穴も含めて端から500ポイント計測した。次にもう一度資料を隔ずりまで観察し、同じ表のカウンティングからは外れた鉱物名の欄に+を書き入れた。このことによってカウントのピッチが幾分大きいので、十字線の下から外れてカウントからもれた岩石鉱物名も記載できた。

さて最後にデータの表示法についてである。岩石学的手法の胎土分析には、重鉱物のみを抽出し記載する方法、岩石鉱物の全てを記載する方法、全てを鑑定しいくつかのグループに分けて記載する方法等が既に出され、データの提示方法も研究者の問題意識によって様々である。多くの地域で胎土分析データが出されるのが積み重なれば、土器型式と胎土の関係の把握のみならずそれぞれの在り地胎土がどのようなものであるかが次第に明らかになり、日本全国の土器型式編年網ならぬ土器胎土網の整備も夢ではなくなるのではないかと期待している。しかしながらそれぞれの分析の中で提示されるデータの量(一部を出すか、基礎データとして全部を提示して一部を議論の対象とするか等)が異なる現状では同一土儀でのデータの集約が難しいのが残念である。昨今河西学氏は岩石学的手法による多くの分析を発表しているが(河西1990b, 1992)、方法とし

ては岩石、鉱物のすべてを2000ポイントずつカウントし、まずそれを基礎資料として提示し、更に個別の組成グラフを載せている。筆者も土器の分析結果を周辺の地質や河川砂と対比するためにはやはり岩石、鉱物すべての提示が必要と考えており、また古屋敷IV群土器のデータを既に氏が提示していることもあるため(河西1990a)、今回は河西氏の表示法に準拠した。

### 3 胎土分析の結果

先ず、全体組成を表1に示す。今回は19種類の鉱物(第1表参照)と玄武岩、安山岩、デイサイト・流紋岩、凝灰岩、それらのどれか区別のつかない火山岩類、半深成岩、花崗岩類、ホルンフェルスを含む変成岩類、細粒のシルト・砂岩・砂粒等、を認識することができた。また、不透明鉱物には明らかな赤鉄鉱、磁鉄鉱と偏光顕微鏡では鉱物名が特定できないものがあったため一括して「不透明鉱物」とした。また赤、橙、褐色を呈する所謂粘土鉱物は、金属顕微鏡や蛍光X線をを用いないと名称の特定ができないため粘土鉱物として一括記載した。また穴としたものには、繊維が入っていたと思われる細い割れ目、鉱物が抜け落ちたらしい部分、土器の元々の穴がある。

#### (1) 土器の個別評価

先ず土器の観察表(表1)に基づいて個々の土器の粒径を中心にした特徴の概略を述べる。以下文中の「大型」は1/40mm程度、「中型」は1/80mm程度、「小型」は1/160mm以下を目安とする。また本文中の試料Noは第1図の土器Noと一致する。

No1 石英、斜長石ともに大型が非常に多く、中型が少ない(図版3-3)。更に多量の黒雲母(図版1-1)がその間隙を埋めている。斜長石は累堆構造が発達しバブルウォール型や液体包有物を含むものが多く、アルバイト式双晶が顕著に見られるものもある。これらを総合すると火山岩起源であることが想定される。また石英もバブルウォール型が多い。コランダム、火成岩の穴を埋める玉髓(図版1-2)は注目されるがその他の鉱物は極少量である。

No2 石英、斜長石、黒雲母の大きさ、量と特徴はNo1と同じである(図版3-1、2)。ただ試料中にサニディン(図版1-3)が少量、ジルコンが一つ認められた。

No3 石英、斜長石ともに大型が少なくむしろ中型が多い(図版3-4)。斜長石には絹雲母をインクルージョンとして持つものがある。ただ累堆構造の発達等の火山岩的な特徴についてはNo1、2と同様である。カリ長石が少数確認できたが黒雲母の量はかなり少ない。また鉄鉱を含むシルトの岩片が多い。

No4 No3と同様に石英、斜長石とも中型が多い(図版3-5、6)。ザクロ石とジルコン(図版1-5、1-6)の両者を含む点で他と異なる。

No5 石英、斜長石、黒雲母の大きさ、量とそれぞれの特徴はNo1に近い(図3-7、8)。ただ

No.1、2よりも中型の石英、斜長石の比率が幾分高い。角閃岩は比較的多い。

No.6 石英、斜長石、黒雲母の大きさ、量とそれぞれの特徴はNo.1に近い(図版4-1)。斜長石には燐灰石やガラスのインクルージョンが見られる。ジルコン、火山ガラスや、赤鉄鉱を含むシルトが若干入っている。

No.7 石英、斜長石ともに大型が少なくむしろ中型が多くNo.3、No.4に近い(図版4-3、4)。黒雲母はやはり多いがNo.1の等より細く割れている。逆に角閃石は大型のものが目立つ(図版1-7)。石英、斜長石の特徴はNo.1と同じである。ジルコンが1つ入っている。

No.8 中型鉱物、岩片が極少量ある他は全て小型である(図版4-2)。組成的には石英、斜長石の他には多くの白雲母が含まれる。中型岩片の中には董青石と普通輝石からなる変成岩(図版1-8)があった。

No.9 No.8と同様に石英、斜長石を中心に、中型鉱物が極少量ある他は全て小型であり(図版4-5)、多くの白雲母(図版2-1、2-2)が含まれる。唯一つカリ長石12、3個と燐灰石の組み合った花崗岩の超巨大岩片がある(図版2-3)。燐灰石は多少含まれるが、汚れた物が多く火山岩起源と思われる。

No.10 鉱物、岩片ともに中型、小型である(図版4-6)。石英が比較的多く特に波動消光するものが目立つ。また、カリ長石、直閃石、玉髓が少量認められる。また、ひん岩を含む。

No.11 鉱物、岩石共に中型、小型が多い(図版4-7)。本土器の特徴は大量の火山岩、火山ガラス、鉄鉱、赤鉄鉱を含むことである。まず安山岩と思われる火山岩片が多くみられる(図版2-4)。また、無数のクリスタライトを含むアサイト質ガラス片が多数みられる。火山ガラスは無色ガラスが多く(図版2-5)、褐色ガラスも入る。これら安山岩は志賀溶結凝灰岩か先に述べたように御代田周辺に分布する。特にこのような安山岩の多さは後者の地質学的特徴を最も顕著に反映しているといえよう。一方細粒の石英がモザイク状に組み合った岩片も入る。

No.12 本土器は石英、斜長石が極少量で、大型の岩片が多い(図版4-8)。鉱物は緑麻石(図版2-6)が全体に大変多く、それらが短冊状の斜長石のあいだを埋める塊間状組織の玄武岩(図版2-7)がいくつかある。この緑麻石は輝石が変質したものであろう。また、褐色または赤褐色を呈し、同心円状に広がる繊維状鉱物が非常に多い(図版2-8)。これは火山ガラス等が脱ハリ化を受けてできた緑泥石の可能性が高いと考えられる。また褐鉄鉱、緑泥石、斜長石を含む粘土化した凝灰岩も含まれる。以上の岩石鉱物いずれも緑色凝灰岩中に産する。本土器はあらゆる点からみて他の土器群と比べてきわめて特殊である。

## (2) 全体の傾向

以上おおまかな観察からの結果を見てきた。次に各々の薄片のポイントカウンティングの結果



から土器間の比較を行っていく。

第3図、第4図のグラフは第1表をもとに項目毎に割合を示したものである。全体組成(第3図)は全体数から穴の数を引いた数を基数としてそれぞれ岩石、鉱物、不透明鉱物、とそれら以外の部分(マトリックス)の割合を出したものである。大型の岩石鉱物がひしめきあうように薄片を埋める早期第III群土器はやはり比較的マトリックスの割合が低い結果となった。特にNo1、2、4、5、6は40%未満にとどまり、鉱物の割合が高いことが解る。全体に岩石の割合は鉱物に比べてかなり低い。

次に岩石、鉱物組成(第4図-1)は全体組成(第3図)の岩石、鉱物部分全体を100として各々の占める割合を示したものである。ただし重鉱物はそれぞれを足したものを一項目としている。まず石英、斜長石の割合を見ると、No1~No7はすべて斜長石の方が高いのに対し、No8~No11は逆に石英の方が高くなっている。一方No12は他に比べて石英、斜長石の割合自体が非常に低く、緑泥石の量が際立って多い。火山ガラスは早期第III群土器を中心に少量ずつ入る。岩石はNo8の変成岩、No9の花崗岩、No11の安山岩、No12の火山岩類が各々特徴的で、一土器一特徴を形成している。細粒のシルト、砂はNo8、9ではきわめて少ない。また重鉱物の全体量はNo7の条痕文土器が特に多い。

最後に重鉱物組成(第4図-2)である。No1、2、5、6、7、8、9はいずれも黒雲母が50%以上認められた。そのうちNo8、9は白雲母が多くなり似通った組成である。また組成的にはNo1~7は黒雲母、角閃岩、不透明鉱物が主体で似通っている。またのNo10と11は緑廉石の違いを除けば組成内容的にはかなり類似するが、それら個々の比率を見るとやはりかなり違っている。また、ここでもNo12は緑廉石が多く黒雲母が少ない点で、他とは全く異なる。しかしながら、緑廉石が輝石が変質して生じたとなると、No10との関連がうかがえるかもしれない。

このように土器毎の岩石、鉱物の組成の検討によっていくつかのまとまりがつかめた。まず「岩石、鉱物組成」の石英と斜長石の比率を中心にした違いによって早期第III群土器、条痕文土器とNo8~11、また特異なNo12の3つのグループが抽出された。次に重鉱物組成によって白雲母を主体的に含むNo8、9すなわち木鳥式土器が分離された。残るNo11は安山岩、デイサイト等の存在から在土器として分離された。そしてNo10はきわめて特異なNo12との関係も想定されるが今のところ別の類型としたい。結果として神ノ木式の二種類の胎土の存在および条痕文土器と早期第III群土器の類似性を除いては土器型式とかなり一致する5つの胎土類型を提示することができた。

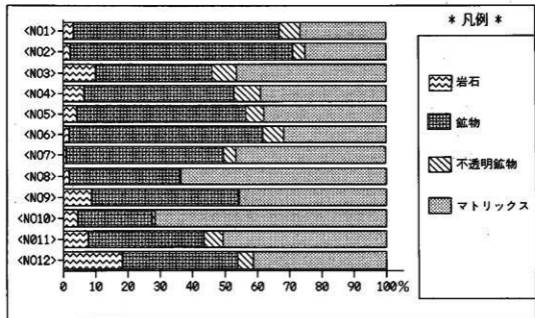
①No1、2、5、6、①No3、4、7

②No8、9

③No10

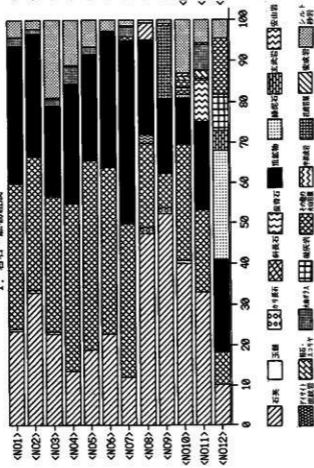
第1表 ポイントカウンティング基礎データ (数字はカウント数・+はカウントされなかったが、存在するもの)

名称	試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12
石	英	75	95	53	36	53	65	27	66	144	46	69	27
玉	隼	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
カ	リ	+	2	1	0	0	0	0	2	3	+	0	0
料	炭	115	95	77	106	132	117	84	29	19	33	42	21
炭	質	0	0	1	0	0	0	0	+	0	0	0	0
取	骨	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
用	器	65	63	7	20	37	60	68	16	17	1	1	3
白	器	0	0	0	0	0	0	0	13	19	0	0	0
角	閃	13	7	4	6	9	7	7	+	0	3	4	2
管	透	+	+	1	+	+	+	2	1	1	1	12	+
密	証	0	+	3	1	0	0	7	1	0	1	1	1
線	層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	+	0
シ	ル	0	+	0	2	0	+	+	0	+	0	0	0
焼	灰	+	0	0	0	0	+	0	0	1	0	0	0
ザ	ク	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0
電	気	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
録	泥	1	0	0	0	0	0	0	0	+	1	0	71
玄	武	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
安	山	0	+	0	0	0	0	0	0	0	0	21	0
ア	イ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
イ	ン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
結	石	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	4	0
火	山	7	4	4	11	5	+	5	0	+	0	13	0
火	山	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	24
結	石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	36
そ	の	0	+	+	0	0	+	1	0	0	2	1	0
中	心	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
花	崗	0	0	0	1	0	0	0	+	35(1粒)	0	0	0
実	成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
実	成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シ	ェ	14	6	44	25	19	8	3	1	2	15	12	12
不	透	30	17	36	38	27	28	16	1	2	4	27	25
粘	土	14	29	15	15	6	16	12	24	10	16	20	12
マ	ト	123	110	213	180	175	140	264	287	216	333	235	193
そ	の	コ	0	0	火	化	0	0	0	0	0	0	0
穴	ラ	36	65	38	32	30	54	51	38	17	19	33	24
不	明	5	7	1	5	6	5	11	12	9	16	3	6
合	計	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500

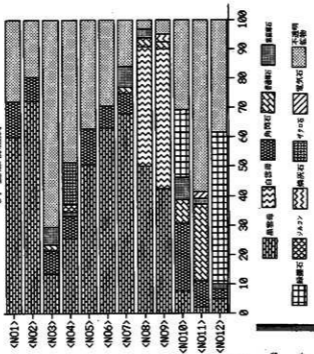


第3図 全体組成

1. 岩石・鉱物組成



2. 重鉱物組成



第4図 岩石・鉱物・重鉱物組成

④Na11

⑤Na12

### (3) 結果からの解釈

(2) で提示された5つのタイプのうちNa11は在地土器であるが、それ以外の類型がどこの地質学的な特徴を示すかをここでは考えていくことにする。

#### 早期第三群土器

早期第三群土器にはすべて多数の黒雲母、大形の石英、斜長石を含む。これを周辺の地質とくらべると、まず在地の浅間山の安山岩、デイサイトには普通、このような石英は入らず、大量の黒雲母もこの地域では考えがたい。このことから先ずこれらは在地胎土から外れる。次に石英、斜長石の一連の観察結果から火山岩起源であることが想定されたが、それらの中にパブルウォール型で磨耗していない尖った破片状のものがみられることから、河川を流れ下ってきたものを混和したというよりも比較的供給源に近い鉱物を含む粘土を使っていることがわかる。3種類の鉱物の多さと火山岩的な特色からあえて起源となる岩石を推定すると、流紋岩である可能性が高い。

(1) で観察上の粒径からこれらはNa1、2、5、6のグループとNa3、4のグループに分けられることを指摘した。重鉱物組成からもやはり3、4が分離され、さらにザクロ石の量の多さでNa4が際だっていることが解る。

本類の特殊鉱物としてはサニディン、ザクロ石、ジルコンが認められた。今回サニディンはカリ長石の染色を行わなかったのでNa2でしか確認できなかったが、斜長石とした物の中にサニディンが含まれている可能性もあるかもしれない。サニディンは周辺では和田峠付近で確認されており、先に鉱物組成から想定された流紋岩もやはり和田峠で一般的に産する。

Na4はザクロ石を含む。同土器に含まれるものはグロシュラライトの可能性が最も高く、つづいてスペサルティンの可能性もある。前者は石灰岩起源のホルンフェルスや広域変成岩に産出するが、佐久地方では佐久山地の古生層(第2図Dq)に含まれる。スペサルティンは和田峠(黒雲母流紋岩)に産するが、流紋岩の中に極少量入っているにすぎない。もちろん極少量のザクロ石が千曲川の河川砂に入る確率は大変低いし、浅間山麓では考えられない。

一方ジルコンは佐久地方では御岳第一軽石層(Pm-I)に含有されているものが主である(小林、清水他1966)。Pm-Iは南部ほど厚く、特に清里では80cmをこえるが、和田峠付近でも20cmほどになり千曲川沿いでは5cm内外である。佐久の東方の山地や御代田ではかなり薄くなるか殆どなくなると考えられ、そのような土がたまたま手に入る可能性は極めて低い。Pm-Iはジルコンで特徴づけられる他には黒雲母、角閃岩、輝石、鉄鉱等を含む。

このように三つの鉱物の存在の接点に加え、大量の黒雲母や火山岩起源の石英、斜長石から見る

と、本土器群は和田峠付近のPm-Iや黒雲母流紋岩（和田峠流紋岩）起源の岩石鉱物が混じった土を使ってつくったことが最も有力であることが解る。ただ、これらが六つのすべての土器に含まれているわけではないので今後資料数の増加によってここに挙げた他の推定地域の可能性が高くなることも否めない。

さて六つの土器全てが在地土器でなく、和田峠付近である可能性が高いということはいったいどういうことであろうか。本土器を分析している中沢道彦氏によれば塚田遺跡の早期第Ⅲ群土器は、野島式もしくは鶴ヶ島台式に並行し、山梨県を中心として中南信まで及ぶとされている古屋敷Ⅳ群土器を母体とする土器群である。しかしながら本群の佐久地方における様相は依然として明確ではなく、在地型式の可能性が高いものの分布の実態は将来にわたって明確にしなければならぬ課題とのことであった。また古屋敷遺跡の古屋敷Ⅳ群土器を分析した河西氏（河西1990）によると肉眼観察で非常に目立った黒雲母は花崗岩起源であり、産地については現時点では不明としながらも、同土器が単調な岩石鉱物組織を持つことから、遺跡から5～10km圏にある丹沢岩体もしくは甲府岩体等を示唆している。ところが本遺跡の土器に入る黒雲母は在地外の流紋岩起源の黒雲母かPm-I起源の黒雲母であり、現時点で認識できる御代田の在地胎土には含まれない。

一般に在地外胎土でできた土器の場合遠くまで粘土採集に赴いたか、搬入品である可能性が指摘される。しかしながら今回は分析土器すべてが在地外胎土であったわけである。そこで御代田に居をおく人々が約30km先の和田峠に粘土を採りに赴いたか、人々が土器を持って同地域から移動してきたかが考えられる。前者からは拠点集落を営し生活に必要な資源を持ち帰る定住的な集団、後者からは拠点を移しながら移動をする移動生活あるいは別の地点に拠点を置き狩猟採集等の理由で一時的滞在を行う集団の姿が浮かび上がる。当時の人々が型式・胎土規制（早期第Ⅲ群土器の場合は黒雲母）を守るあまり、すなわち古屋敷Ⅳ群土器に粘土まで似せようとするあまりに黒雲母を求めて遠くまで粘土を採りに行った可能性もあろう。現に石器石材の一部はまさに和田峠で捕獲されている。しかしながら現時点の調査例をも視野にいれると、この土器群の周辺地帯での分布の希薄さに加えて塚田遺跡でも今のところ調査範囲の中では住居は検出されていないということは、むしろ本土器が後者の活動によってもたらされた可能性が高いことを示しているとも考えられる。すなわち塚田遺跡にたまたま一時的に滞在した人々が前に和田峠にいた頃に行った土器を持ちこんだというケースである。しかしながら結論は、周辺遺跡の調査による本土器を用いた人々に関する情報の増加と、それらの同型式の土器の胎土分析（古屋敷Ⅳ群土器の規制の有無）、並びに塚田遺跡における比較的近い時期の土器群の分析結果（御代田人の粘土採集地の通時的な変遷）の蓄積を待って出さなければならないと思う。現時点では河西氏の分析の中で、八ヶ岳の反対側の塩尻市堂の前遺跡出土の古屋敷Ⅳ群土器のうち、Na27の胎土のみが「斜長石が

約60%を占め、石英、重鉱物を伴う。斜長石は累堆構造を持つ柱状自形結晶を含み、石英はときには $\beta$ 形外形の自形結晶を含む。「おそらくデイサイト～流紋岩質の火山灰との関係が強いと推定される。」(河西1990a)と記され、本遺跡の早期第III群土器の胎土との類似性が認められる。堂の前遺跡の分析試料のうち、黒雲母を大量に含む他の2点の土器が花崗岩をやはり多く含んでいたのに対し、このNo27は黒雲母を大量に含みながらもデイサイト～流紋岩起源が推定されており、この点でも本試料の早期第III群土器の胎土に類似している。もし、本遺跡の土器の胎土が和田峠に由来するとすれば、この堂の前No27との関係を今後考えていく必要がある。

佐久市下茂内遺跡ではやはり縄文早期の土器に黒雲母が多量に入るという指摘がなされている(近藤他1992)。ただ今回黒雲母は顕微鏡レベルで見た全体組成との絡みで和田峠の可能性が高いとしたが、たとえば八ヶ岳東麓の古期ローム相当層中に含まれる約27～30万年前の黒雲母浮石層など周辺には他にも黒雲母が大量に含まれる層が数層準ある(町田、新井1992)。そのため黒雲母が含まれているといっても全体組成を見ずに肉眼観察のみから産地を和田峠に限定することはできない。そこで、周辺地域に点在する黒雲母混入土器の黒雲母が含有物の全体組成とどう関係し、その結果当地方全体の当時の人々の通時的領域とどのように関わってくるのかは今後の課題としておきたい。さらに後で述べるように本遺跡でも同じ縄文早期の条痕文系土器の一個体の胎土が本型式の胎土に極めて近かったこともこの通時的領域を考えるための端緒になった。今回の結果を手がかりに、分析資料を増やすことによって今後縄文早期の移動、定住論を考えて行こうと思っている。

#### 条痕文系土器

条痕文土器は重鉱物が多いこと、黒雲母が微細であることを除くと早期第III群土器と、中でもNo3と、かなり良く類似していた。これもやはり在地土器ではない。また現時点の粘土採集地は早期第III群土器と同様である可能性が高い。

#### 木島式土器

木島式土器は花崗岩、接触変成岩、大量の白雲母で特徴づけられた。花崗岩類は佐久山地の古生層にみられ、そのまわりには接触変成岩が形成されている。また霧ヶ峰、美ヶ原高原地域にも花崗岩類が分布するが、白雲母は産出ししない。このことと全体の組成からこの土器の胎土は高遠町以南、伊那、木曾から東海地方にかけて分布し、高温低圧型の変成岩と白亜期の花崗岩からなる領家帯を起源とする可能性が指摘できる。

このように、所謂「東海系土器」が東海そのものであるかは別にしても東海を含む在在地域からの搬入品であることが明らかになった。

#### 関山式土器

本土器には特徴的な鉱物として玉髄、緑廉石、ひん岩、石英脈が見られた。更に、角閃石類に

属し、せんい状で多色性があり、正の伸長を示す鉱物が入っていた。また波動消光を呈する石英がやや目立った。この角閃石類の鉱物と波動消光する石英は変成岩起源の特色を示しているため、この両鉱物の起源は今後の課題である。ただしこれらを除く組成は緑色凝灰岩、中でも玉髄、ひん岩、石英脈から推定して碓氷峠付近に分布するものの可能性が高い(第2図Aa)。何れにしろ本土器の粘土採集地である緑色凝灰岩の分布する平尾山、森泉山は遺跡から5、6km、碓氷峠は10kmにあたる。本土器は在地土器ではないが在地に比較的近い(日帰り行動圏に含まれる)外縁部の土を用いている可能性が指摘できる。しかながら本土器の鉱物組成の中に異質なものが入っていたことも事実である。今後同型式の分析資料を増やすことで結論を補っていかねばならない。

#### 神ノ木式土器

No11が在地胎土であったのに対し、No12の神ノ木式土器は緑色凝灰岩起源の岩石、鉱物組成を示していることを述べた。緑色凝灰岩は御代田から最も近い場所としては森泉山、平尾山付近の新第三系の平尾火山岩層、先の碓氷峠付近の他に佐久市駒込、内山付近に分布する(駒込層)。同層は淡緑色の凝灰質砂岩や泥岩からなるとされる。No12は緑泥石、緑麻石を大量に含み、かなり変質が進んでいることからむしろこの駒込層(第2図Tug)を起源とする可能性が高い。若干含まれる石英は付近の志賀溶結凝灰岩からの流れ込みかもしれない。塚田遺跡のある塩野地区から内山地区までは碓氷峠と同様に10km以上あり、やはり本土器も在地に比較的近い外縁地帯の土でつくっている可能性が高いことが解った。ただ緑色凝灰岩は一搬に堅硬であるため土器作りには多分向きであり、これらが湿地的な場所に流れ込んだところの粘土を採ったことが考えられるとすれば実際の採集地までの走行距離は明確でない。

このようにNo10と11の結果から今回神ノ木式として選定した土器には塚田遺跡の基盤を用いて作った土器と、他の地域へ粘土を採りに行って作った土器の2種類があったことになる。

## 4 人間活動の復元に向けて

以上岩石学的手法による土器の胎土分析を行うことによって在地胎土の特定と、それらの構成胎土がどのものである可能性が高いかを検討してきた。全体では60km以上遠い地域の土(木島式)、30km圏の土(早期第三群土器)、10km圏の土(検討の余地を残すものの関山式、神ノ木式の一部)、在地の土(神ノ木式)で土器を作っていることが指摘された。そして特に早期第三群土器の粘土採集地である和田峠は旧石器時代から連綿と続く黒曜石の原産地であり、関山式や神ノ木式の一部の粘土採集地である緑色凝灰岩の捕獲地域は小型剥片石器の原石であるガラス質安山岩採集地である八風山に近いあるいはそこから塚田遺跡への帰路にあたるということが指摘できる。このことから定住と移動に関わらず石器の原石採集地と土器づくりのための粘土採集地がなら

かの行動系の上での関係を持っていたことが推定されるが、これもやはり今後の課題である。かつて「分析資料数の少なさは分析結果の散逸を招き、母集団に対する偏った資料選択は解釈に至った段階でその確実さを減ずることになる」(水沢1992)と述べたことがある。今回後者に対しては肉眼観察を一部併用することによって極端な偏りは防いだと思うが、まさに資料数という点では前者があてはまることは否めない。在地胎土の選定にしても資料数の増加や河川砂との比較によって新たな発見があるかもしれない。今後は遺跡内外の分析資料増加に努めると共に、搬入、搬出のみならず型式と胎土の規制、集団移動の可能性も視野にいられた課題を設定し、縄文社会復元の手続きとしての胎土分析を進めて行きたいと思っている。

#### 謝 辞

本分析を行うに当たって河内晋平先生からは岩石の同定から地質学的な解釈に至るまで多大なる御教示、ご援助をいただいた。また今回分析の機会をあたえてくださった堤隆氏、小山岳夫氏、ならびに白沢勝彦氏からは分析施設の借用をはじめとして多くの暖かいご支援、御協力をいただいた。更に酸化樹脂の使用分析方法等分析の方法に関しては河西学氏の御教示をいただいている。また本稿をまとめるにあたって綿田弘英氏、出河裕典氏、中沢達彦氏、費田明氏の御協力をいただいた。今回の分析は時間と体力との戦いでありいくつかの課題を残すものとなったが、この他日頃から多くの方々のお励みをいただき、2年という長いブランクを克服し分析を再開することができた。心から感謝すると同時に、今回の分析が手がかりとして長野県における縄文社会の解明へと進んで行きたいと願っている。

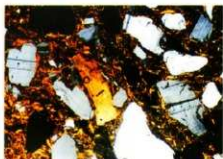
#### 注

- 1 No 1、2の推定燻属個体は第1図の7(D-15のNa156)、No 3、4の推定燻属個体は第1図の8(D-143のNa155)、No 5、6の推定燻属個体は第1図の9(D-111のNa154)となる。
- 2 組紐と、多段ループの上に縦長のコンパス文を施した土器(J-9住)
- 3 御代田町教育委員会蔵、マルトーカーターMC100
- 4 御代田町教育委員会蔵、マルトーマップML110N
- 5 (財)長野県埋蔵文化財センター蔵、オリンパス高級偏光顕微鏡BH5

#### 引用参考文献

- Aramaki, S, 1963, Geology of Asama Volcano. Jour. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. 2, vol. 14 pp. 229~443
- 植村武、山田智雄編, 1988, 『日本の地質4, 中部地方I』, 共立出版
- 大森昌衛、瑞山好和、樋口万吉, 1986, 『日本の地質3, 関東地方』, 共立出版
- 角塚淳一, 1992, 「城之腰遺跡の縄文前期の石器についての方法的要論」『城之腰遺跡』pp. 78~83
- 河西学、柳原功一、大村昭三, 1989, 「八ヶ岳南麓地域とその周辺に縄文中期土器の胎土分析」『帝京大学山梨研究所研究報告』第1集pp. 1~64
- 河西学、中村哲也, 1990a, 「古屋敷遺跡早期IV群土器の胎土、製作技法の特徴」, 『古屋敷遺跡発掘調査報告書』pp. 98~124
- 河西学, 1990b, 「大和田第3遺跡出土土器の胎土分析」『大和田第3遺跡』pp. 19~29
- 河西学, 1992, 「岩石鉱物からみた縄文土器の産地推定」『帝京大学山梨研究所研究報告』第4集pp. 61~90
- 久城育夫、荒牧重雄、青木謙一郎, 1989, 『日本の火成岩』岩波書店
- 黒田吉益、藤助兼位, 1968, 『偏光顕微鏡と岩石鉱物』共立出版
- 小林国夫他, 1967, 「御岳火山第一浮石層」『地質学雑誌』第73巻第6号pp. 504~521
- 近藤尚哉他, 1992, 「6出土遺物」『下茂内遺跡』pp. 166~183
- 長野県地学会, 1962, 「20万分1長野県地質図説明書」, 内外地図株式会社
- 町田洋、新井勝夫, 1992, 「火山灰アトラス」『日本列島とその周辺』東京大学出版会
- 水沢教子, 1992, 「縄文社会復元の手続きとしての胎土分析」『信濃』第44巻4号pp. 16~34

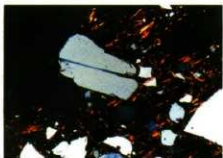




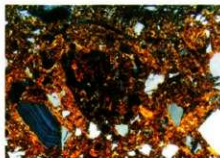
1 No 1の黒雲母と石英・斜長石○+ニッケル



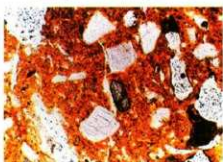
2 No 1の玉髄○+ニッケル



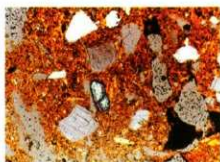
3 No 2のサニディン○+ニッケル



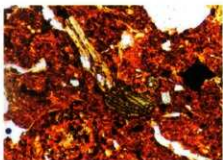
4 No 3のシルト○+ニッケル



5 No 4のジルコン○+ニッケル





6 No 4のジルコン○+ニッケル

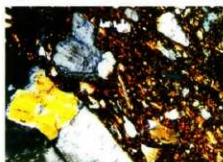


7 No 5の角閃石○+ニッケル

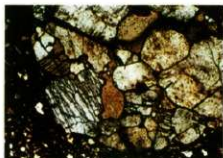


8 No 8の変成岩○+ニッケル

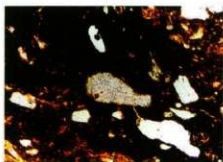
No 5、No 6、No 7  0.5mm  
 No 1、No 2、No 3、No 4、No 8  0.5mm



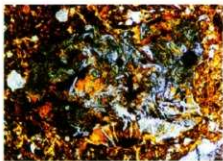
1 No 9の白雲母(中央)○+ニコル



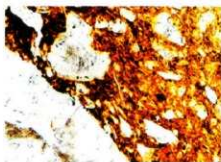
3 No 9の花崗岩○+ニコル



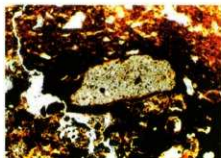
5 No11の流紋岩ガラス○-ニコル



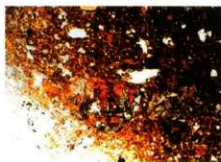
7 No12の玄武岩○-ニコル



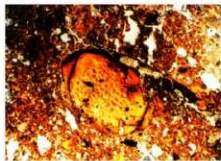
2 No 9の白雲母(中央)○-ニコル



4 No11の安山岩○-ニコル

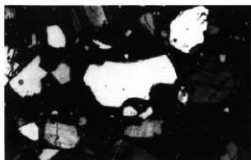


6 No12の緑簾石を含む火山岩○-ニコル

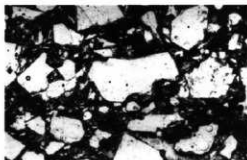


8 No12の繊維状鉱物○-ニコル

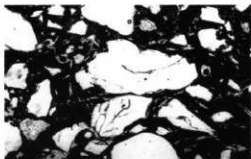
No 1, No 2, No 5, No 7  
0 0.5mm  
No 3, No 4, No 6, No 8 0 0.5mm



1 No. 2の組成+ニコル



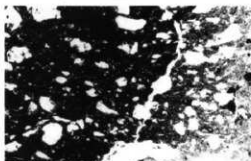
2 No. 2の組成-ニコル



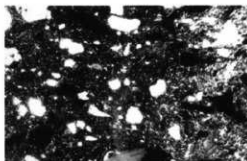
3 No. 1の組成-ニコル



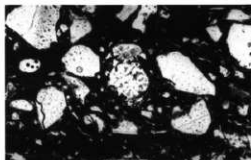
4 No. 3の組成-ニコル



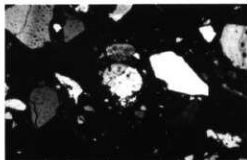
5 No. 4の組成+ニコル



6 No. 4の組成-ニコル

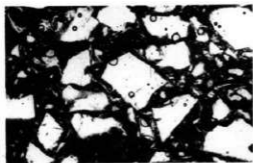


7 No. 5の組成-ニコル



8 No. 5の組成+ニコル

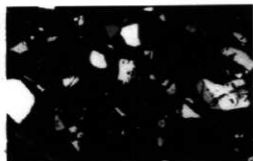
No. 1 ~ No. 8  $\frac{0}{0.5}$ mm



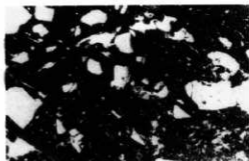
1 Na 6の組成-ニコル



2 Na 8の組成-ニコル



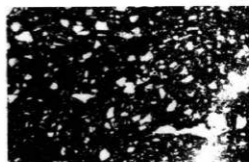
3 Na 7の組成+ニコル



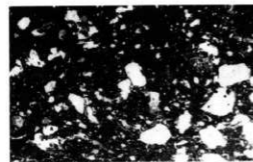
4 Na 7の組成+ニコル



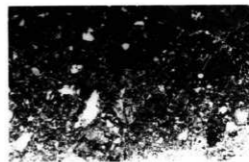
5 Na 9の組成-ニコル



6 Na 10の組成-ニコル



7 Na 11の組成-ニコル



8 Na 12の組成+ニコル

No. 1 ~ Na. 8 0 0.5mm

## 6 前期初頭と前期中葉の石器について

堤 陸

### 1 縄文前期初頭の石器

塚田遺跡の縄文前期初頭の住居12軒から検出された石器の内訳は第1表に、代表的な器種は第1図に示した。出土した器種は以下のとおりである。

石 鎌・石 匙・スクレイパー・ピエスキュー・石 錐・敲石・剥片および石 核。

石 鎌 石 鎌は24点出土している。基部の形態でみると凹基が9点(70%)・平基が4点(30%)で、凸基はない。凹基が全体の7割以上を占める傾向は、隣接する下弥堂遺跡も同様である。

石 錐 石 錐は両端の尖るものが1点出土している。

石 匙 石 匙は1点のみで(5)、ガラス質安山岩の横形の石 匙である。

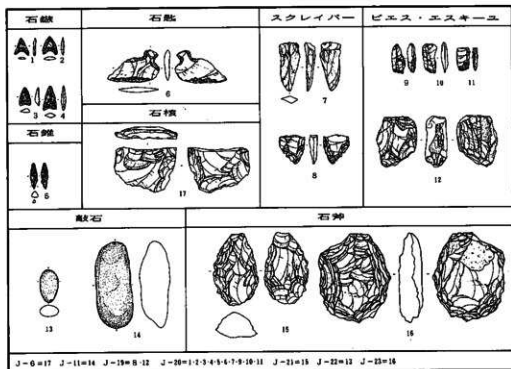
スクレイパー スクレイパーは数点出土しているが、その素材はよく用いられるガラス質安山岩が主である。

打製石 斧 打製石 斧は2点出土しているのみである。15のような小形の片刃石 斧は下弥堂遺跡でも出土しており、さほど数は多くないが当該期に特徴的なものである。ただ、中期的な打製石 斧は当該期の他の遺跡をみても認められない場合も多く、石器装備におけるそのあり方に留意しておくべきであろう。

第1表 前期初頭 住居別器種一覧表

器 種	石 鎌	石 匙	スクレイパー	ピエスキュー	石 錐	加削 し 解 の 片 の 有 る	敲 削 用 の 片 の 有 る	打 製 石 斧	敲 石	磨 石	石 重	剥 片	石 核	計
住 居	J-6	1										13	1	15
	J-11	4			1		1		1			24		31
	J-14													0
	J-15	2			1							12		15
	J-17	1								1		6		8
	J-18													0
	J-19	1		2	1							21		25
	J-20	10	1	1	3							250	6	271
	J-21							1						1
	J-22	3		1	3				1			25	1	34
	J-23	2						1				53		56
	J-24													0
計	24	1	4	9	0	0	1	2	2	1	0	404	8	456

未成熟も含む。



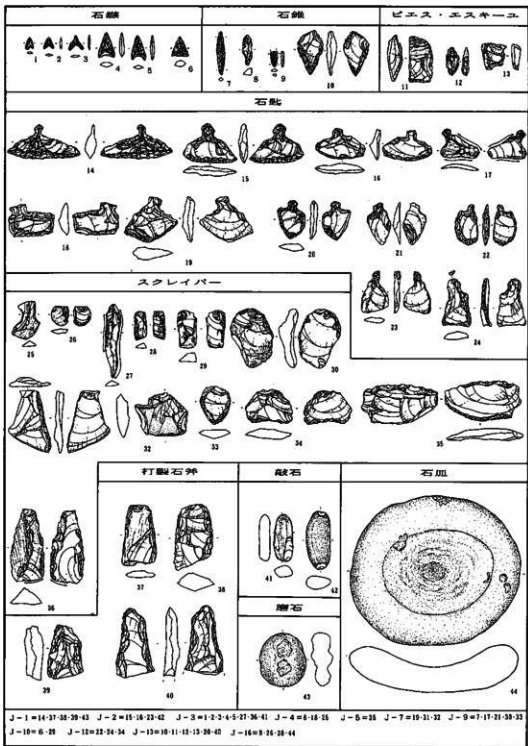
第1図 前期初頭の石器 (1:4・敲石1:8)

上記以外では、ピエスエスキーユも安定してみられる。また、石皿は出土していないが、あるとすれば当該期に特有な扁平な盤状石皿であろうか。このほか当該期では礫器が伴うことがままあるが、本遺跡では出土していない。

## 2 縄文前期中葉の石器

塚田遺跡の縄文前期中葉の住居12軒から検出された石器の内訳は第2表に、代表的な器種は第2図に示した。出土した器種は以下のとおりである。

- 石鏃・石匙・スクレイパー・ピエスエスキーユ・石鏃・磨石・敲石・石皿・剥片および石核。
- 石 鏃 石鏃は76点出土している。基部が残るものでは凹基が28点(85%)・平基が5点(15%)で、凸基はない。凹基がほとんどとなる傾向は前期初頭と同様。
- 石 鏃 石鏃は4点あるが、両端の尖るもの(7)・基部が幅広となるもの(10)がある。
- 石 匙 石匙は、横形(14~19)と縦形(20~24)の双方がある。石材にはチャート・硬質頁岩・ガラス質安山岩が主に用いられる。17は黒曜石製であるが、黒曜石は石匙の石材としてはあまり多くは用いられない傾向にある。



第2図 前期中葉の石器 (1:4・敲石・磨石・石皿=1:8)

第2表 前期中葉 住居別器種一覧表

器種	石皿	石匙	スクレイパー	ピュエスキーム	石皿	加割上蓋のある	他用蓋のある	打製石斧	磁石	磨石	石皿	剥片	石珠	計
住居別	J-1	6	1		2			1	3			119		123
	J-2	9	3		8				2	4		191	2	219
	J-3	10		2	6		1	1		1	1	149	2	173
	J-4	3	1	2	1	1		1				45	2	56
	J-5	3		2	2				1			32		40
	J-7	6	1	2	2			1		1	1	63	3	80
	J-8	1		1	2							24	2	30
	J-9	16	3	3	7	1		2		1	2	214	3	252
	J-10	3		1	4			2				122	2	134
	J-12	7	2	1	9						2	79		91
	J-13	3	1	1	4	1		3	1			94	1	109
	J-16	9		4	4	1		1			1	124	3	147
	計	76	12	19	51	4	1	12	4	6	10	1,238	20	1,454

未成品を含む。○は該当あり点数に含まない。

スクレイパー スクレイパーは安定して出土している。サイド・スクレイパーが一般的にみられるが(27~36)、ノッチド・スクレイパー(25)やエンド・スクレイパー(26)もわずかながらみられる。小形品には黒曜石が(25~29)、中・大形品にはガラス質安山岩や硬質頁岩が利用される傾向にある。

打製石斧 打製石斧は4点出土しているのみである。前期初頭よりは僅かに増加したといえないこともないが、それでも中期のように多量にみられるものではない。

石皿 ペッキングによって中央をくぼませた円形の石皿があり(44)、盤状石皿が一般的な前期初頭との相違をみせている。

### 3 縄文前期中葉の石材利用について

塚田遺跡の前期中葉の住居址から出土した剥片石器の石材には次の12種類が認められている。

黒曜石・チャート・硬質頁岩・ガラス質安山岩・頁岩・ホルンフェルス・粘板岩・流紋岩・鉄石英・黒雲母片岩・玉髓・凝灰岩である。

ここでは縄文前期中葉の石材利用をみるために、遺構としての遺存状況のよい住居(以下)をいくつか取り上げ、そのあり方を検討してみる。

対象住居: J-5、J-7、J-9、J-10、J-12、J-13

第3表には、各住居で検出された石材の重量を示した。この表からは、各住居における石材の重量比が、黒曜石が3~5割、ガラス質安山岩が2~5割、硬質頁岩は2割未満、チャートは1



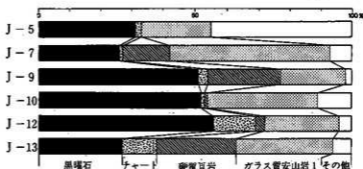
割未満を示していることが窺える。石材重量の半数を黒曜石が占め、これについてガラス質安山も一定程度みられ、これ以外にチャートや硬質頁岩が1～2割程度がみられるといった傾向である。黒曜石とガラス質安山岩で石材重量の8割方を占めるともいうことができる。

これらの石材の産地であるが、まず黒曜石は肉眼でみた限りでは和田峠周辺（男女倉・和田峠・星ヶ塔、本遺跡より35km）のものが主体で、八ヶ岳のものは少ないか、なさそうである。ガラス質安山岩は、本遺跡の12km東南、佐久市八風山産の原石であるという結果が蛍光X線分析により出されている（後編）。チャートは、本遺跡より25～30kmほど離れた佐久町十石峠から北相木村～川上村にかけての秩父群中に産出する。硬質頁岩は現在のところ産地がわからないが、本遺跡より20km以内の佐久盆地周辺の山地にその原産地が存在している可能性を考えておく

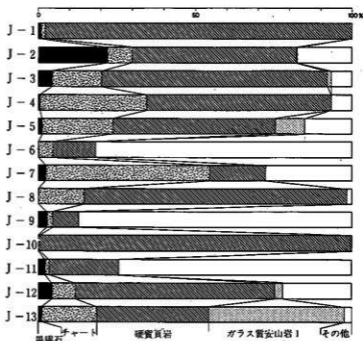
第3表 前期中葉 住居内出土石材・重量一覧表

石材	黒曜石	チャート	硬質頁岩	頁岩	ガラス質安山岩	ホフケルンズ	粘板岩	泥炭岩	鉄石	計
J-5	174.3 (31%)	3.0 (1%)	61.3 (11%)	67.9 (12%)	33.6 (6%)	213.5 (39%)	29.9 (5%)			454.2 (100%)
J-7	106.1 (28%)	1.0 (1%)	61.3 (16%)			213.5 (56%)	29.9 (8%)			412.7 (100%)
J-9	408.0 (51%)	23.0 (3%)	186.9 (24%)	22.3 (3%)	153.6 (19%)					804.3 (100%)
J-10	253.2 (52%)	8.0 (2%)	20.5 (4%)		147.8 (31%)	29.0 (6%)		21.1 (4%)		497.6 (100%)
J-12	148.9 (36%)	34.4 (8%)	7.1 (2%)	12.9 (3%)	48.7 (12%)					267.7 (100%)
J-13	129.9 (27%)	51.0 (11%)	118.6 (26%)		150.9 (33%)		3.0 (1%)	21.4 (5%)	6.5 (1%)	481.3 (100%)
計	1093.4 (35%)	119.3 (4%)	394.4 (12%)	102.5 (3%)	783.1 (24%)	589 (18%)	3 (1%)	42.5 (1%)	6.5 (1%)	3133.7 (100%)

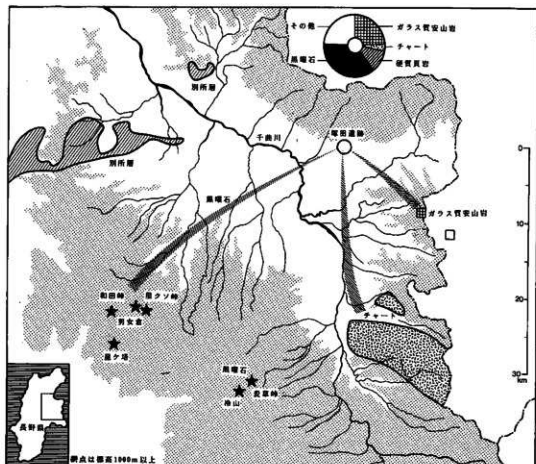
単位はグラム



第3図 塚田遺跡縄文前期中葉住居別石材重量構成比



第4図 下弥堂遺跡縄文前期初頭住居別石材重量構成比



第5図 塚田遺跡と石材原産地

ことができそうである。

ところで、本遺跡より1kmほど北にある城之腰遺跡(御代田町教育委員会1992)の当該期集落での石材利用の傾向をみると、石器石材の八割以上が黒曜石(おそらく和田峠周辺のものが主体)で占められていることがうかがえる。本遺跡にも増して高い黒曜石利用率である。

一方、本前期中葉の以前の石材利用はどのようなであろうか。第3図には、本遺跡の先の住居の石材重量構成比のグラフを、第4図には下弥堂遺跡の前期初頭の住居の石材重量構成比のグラフを示した。<sup>(1)</sup>両時期の石材構成については一瞥してわかるようにその差異が大きい。すなわち、

- ① 前期初頭では黒曜石の重量が石材総重量の1割に満たない場合がほとんどであるのに対し、前期中葉では3～5割と高い。
- ② 前期初頭ではガラス賀安山岩の重量が石材総重量の1割に満たない場合がほとんどであるのに対し、前期中葉では3～5割と高い。
- ③ 逆に前期初頭で5割以上という高い重量比をみせる硬質頁岩は、前期中葉では2割未満と低

い重量比となっている。

- ④ チャートは、大まかにいえば、前期初頭で2・3割平均の重量比をみせるが、前期中葉では1割未満平均の重量比となり、やや落ち込む。

以上、①～④をまとめると、前期初頭から前期中葉に移行した時点で、黒曜石およびガラス質安山岩の利用率の上昇と硬質頁岩の利用率の低下といった傾向が看取されようか。

ところでその入手形態については、石材分布域と集団領域をふまえたひとつの推測として、黒曜石が交換による入手、ガラス質安山岩・チャート・硬質頁岩等は直接採取といったあり方を想定しておくことができる。そうした場合、前者は外来系石材、後者は存地系石材として位置付けられよう。ここで本比較で得られた相違についてみると、前期初頭において存地系石材の直接獲得が主体的であった状況の中に、前期中葉になって交換による黒曜石供給が一定程度なされたことで、存地系石材利用の減少という変化をきたしたものと解釈されようか。

なお、ここで特に前期中葉の黒曜石利用率の上昇に着目しておく、その背景には、集団間をめぐる黒曜石交換システムの本格的な機能の展開、といった現象も予測されうるかもしれない(堤1994)。これについては、信州産の黒曜石がもたらされている他地域の当該期遺跡のデータをいくつか取りそろえたうえで解釈を進める必要があるだろう。

#### 注

- (1) 本来、本遺跡の前期中葉の石材利用の比較対象として、同じく本遺跡における前期初頭の石材利用状況をもちだしてしかるべきである。ただ、本遺跡の前期初頭の住居の遺存状況があまり良好でなく、他遺構との重複もまみられることから、真正な石材構成を抽出し難いと判断し、今回は分析の対象から除外した。これに対し、本遺跡に隣接する下弥堂遺跡は前期初頭の単純集落であり、住居の遺存状況も良いところから、分析データはより純粋なものと考えられ、その比較対象とした。

#### 引用参考文献

- 安中市教育委員会 1988 『注連引原II遺跡』  
岡村道雄 1983 「ビエス・エスキュー、楔形石器」 『縄文文化の研究』  
金山喜昭 1989 「文化財としての黒曜石」 『月刊文化財』298  
茅野市教育委員会 1986 『高風呂』  
堤 隆 1994 「石材利用をめぐる問題」 『下弥堂遺跡』  
東部町教育委員会 1982 『真行寺』  
長門町教育委員会 1984 『中道』  
御代田町教育委員会 1992 『城之腰遺跡』  
山本薫・金山喜昭・柴田徹 1991 「石材組成の実験」 『石器文化研究』3  
Renfrew, C 1975 Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication. *Ancient Civilization and Trade*.

## 7 縄文早・前期の集落様相

堤 陸

### 1 はじめに

塚田遺跡では、縄文早期・前期初頭・前期中葉の3時期にかかる遺構が検出されている。このうち時期の明確なものの数は以下のとおりとなる。

早 期 土坑4基

前期初頭 住居12軒、土坑24基

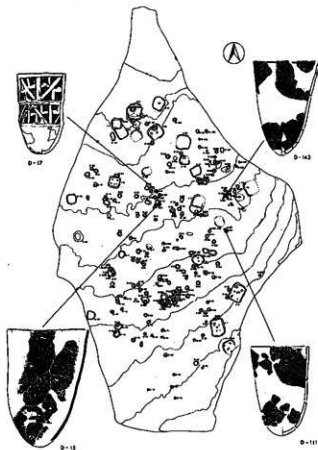
前期中葉 住居12軒

本項では、各時期の遺構群を再構成し、集落としての様相を垣間みることにしたい。

### 2 早期の集落

本書の中沢道彦による早期土器群の分類に基づいて、早期の時期細分を行なうと、およそ5時期の細分が可能である。すなわち、I期=押型文、II期=沈線文、III期=古屋敷IV群並行(条痕文)、IV期=鶺鴒島台(条痕文)、V期=結条体圧痕文など(条痕文)、の土器群で構成される各時期である。

さて、本遺跡で確実に早期に位置付けられる遺構は、土坑4基のみで、そのうちD-15・D-111・D-143の3基では古屋敷IV群並行の土器が検出されていることからIII期に、D-17は鶺鴒島台式が検出されていることからIV期に位置付けられるものである。これ以外にも早期に位置付けられる土坑



第1図 早期に属する土坑

はいくつかあるとみられるが、出土遺物の貧弱さから抽出がし難かった。

ところで、当地域において、縄文時代早期の住居址が検出された例はほとんどない。唯一の例外は望月町の新水B遺跡（望月町教育委員会1981）で検出された5軒の住居址のみである。このことは、おそらく早期の住居の掘り込みが全般に浅いことや、構造が簡素であるために、遺構として残りにくい状況を示しているものと推定できる。こうした状況を考えると、本遺跡が狩猟場やその他特殊な性格を有していない限りにおいては、住居は確認されていないものの、土坑などを伴った住居が存在した集落である可能性が考えられよう。そうした場合その遺物量からいっても、おそらく一時期で住居2～3軒程度か、あるいは単独で集落を構成したことを想定しておくのが無難といえようか。

一方、居住パターンでいえば、通年居住に限らず、季節的な移動をとまなう集落形成もありえたことを予測しておかなければなるまい。

### 3 前期初頭の集落

#### (1) 前期初頭の遺構

塚田式土器等を出土した前期初頭の遺構としては、竪穴住居址12軒と土坑24基がある（以下）。なお、本遺跡において検出された土坑のうち時期が特定できなかったものが149基あるが、これらの土坑の数割は本時期に帰属する可能性を考慮してよいものとおもわれる。

竪穴住居址 J-6・J-11・J-14・J-15・J-17・J-18・J-19・J-20・J-21・  
J-22・J-23・J-24

土坑 D-2・D-7・D-18・D-20・D-30・D-33・D-34・D-35・D-39・  
D-51・D-55・D-57・D-90・D-91・D-114・D-118・D-121・D-122・  
D-124・D-130・D-138・D-154・D-158・D-184

これらの土坑のうち、D-55は袋状を呈するもので貯蔵穴と考えられる。

次に竪穴住居の構造についてみておこう（第1表・第2図）。

床面積 床面積は8～12㎡の範囲に分布する。ちなみに本遺跡に隣接する下弥堂では5～8㎡程度のもの（小形）が6軒、10～15㎡程度のもの（中形）が5軒、20～25㎡程度のもの（大形）が3軒存在したが、本遺跡のものは下弥堂という中形の大きさに相当しよう。

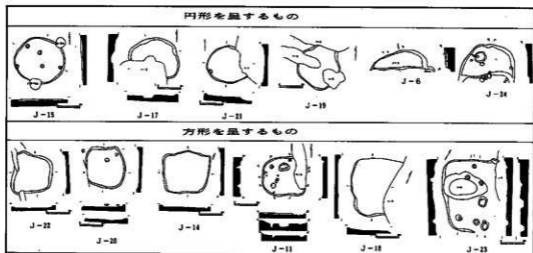
平面形 円形のもの6軒、隅丸方形のもの6軒あるが、全体にかたちの整わないものが多い。

掘込み 遺構確認面から床面までの深さはいずれも浅く、確認面がほぼ床面である場合も

第1表 塚田遺跡前期初頭住居一覧表

住居	形状	大きさm	面積m <sup>2</sup>	ピット	炉	住居	形状	大きさm	面積m <sup>2</sup>	ピット	炉
J-6	—	—	—	無	—	J-19	楕円形	3.3×3.6	—	無	無
J-11	隅丸長方形	3.5×2.9	9.8	4個	無	J-20	隅丸方形	(3.4×3.4)	(8.9)	無	無
J-14	台形	3.9×3.5	11.2	無	無	J-21	楕円形	—×3.5	—	1個	無
J-15	楕円形	4.1×3.6	11.9	5個	無	J-22	台形	(3.3×3.1)	(8.1)	無	無
J-17	楕円形	4.3×—	—	無	無	J-23	隅丸方形か長方形	—×5.9	—	7個	無
J-18 (長方形か方形)	—×4.7	—	—	無	無	J-24	—	—	—	1個	—

( )は推定値



第2図 前期初頭の竪穴住居の集成 (1:320)

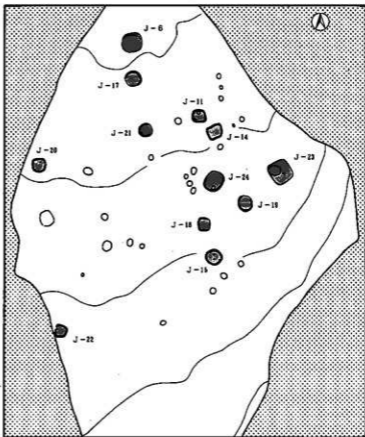
あった。恐らく本来の掘込みも全般に浅めであったと考えられる。

- 床面   いずれの住居の床面もほとんどしまりが無い。
- ピット   ピットをもたない住居は6軒、もつ住居は5軒ある。複数のピットをもつ住居でも明らかに柱穴とみられる規則的な配列をみせるピットをもつ住居はなかった。
- 炉   いずれの住居においても炉を確認することができなかった。ちなみに下弥堂遺跡では14軒の住居のうち炉を確認できたのは9軒で地床炉8軒・石囲炉1軒である。地床炉では炉縁石を伴う場合がある。当該期に石囲炉は例外的なようだ。

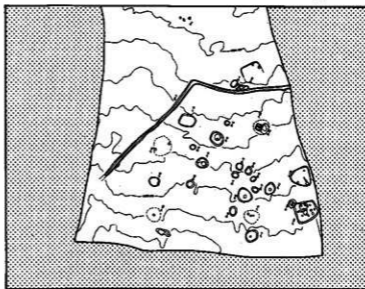
ちなみに、当該期の諸遺跡、下弥堂・高風呂・鍛冶屋・真行寺・中道遺跡の住居構造についてみると、その平面形では、これらいずれの遺跡にも不整形のもののみみられる反面、隅丸方形のものも僅かではあるが存在する。不整形・隅丸方形ともにピットをまったくもたない場合もあるし、柱穴と考えられるピットがあるものでも、その配置の規則性がみられるものは数少ない。ただ、かたちの整った隅丸方形の住居では柱穴の規則的な配置がなされる例も若干ある(下弥堂J-14住・高風呂3住)。なお、当該期の住居では炉が確認されない場合も少なくないが、確認される場合その大部分が地床炉である。

## (2) 前期初頭の集落

塚田遺跡の前期初頭集落は、標高815mの台地上に形成された住居12軒と土坑24基以上からなるものである。第3図には遺構分布を示してあるが、住居と土坑の位置関係を見た場合、全体的な傾向としては、台地のより外縁部に住居が位置し、より内側に土坑が存在する傾向がうかがえる。おそらく住居にゆるやかに取り囲まれた広場に土坑が配されていたものと考えられる。本遺跡と隣接する当該期の下弥堂遺跡においてもこれとほぼ同様な集落景観を描くことができるだろう(第4図)。ちなみに下弥堂における同時存在住居は数軒(3~5軒)と予測されたが、本遺跡においても住居12軒が同時に存在していたと考えるよりは、重複関係はないものの住居数軒程度で構成される集落の変遷が何段階かあったとみておくのが妥当だろう。



第3図 塚田遺跡の前期初頭集落(1:1,000)



第4図 下弥堂遺跡の前期初頭集落(1:1,000)

## 4 前期中葉の集落

### (1) 前期中葉の遺構

関山式・神ノ木式土器を出土した前期中葉の遺構としては、竪穴住居址12軒がある（以下）。なお、本期に属する土坑を抽出できなかったが、時期不明の土坑のうちのいくつかは本時期に帰属する可能性を考えてよいものとおもわれる。

竪穴住居址 J-1・J-2・J-3・J-4・J-5・J-7・J-8・J-9・J-10・  
J-12・J-13・J-16

次に竪穴住居の構造についてみておこう（第2表・第5図）。

**床面積** 床面積は11.2～28.6㎡の範囲に分布する。10～13㎡程度のもの（小形）が2軒、15～22㎡程度のもの（中形）が7軒、25～30㎡程度のもの（大形）が2軒存在する（第6図）。

小形 J-2・J-4

中形 J-1・J-3・J-9・J-10・J-13・J-12・J-16

大形 J-5・J-7

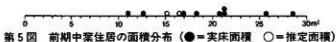
**平面形** やや不整のものがあるが、いずれも隅丸方形もしくは隅丸長方形をとる。不整円形の住居が目立つ前期初頭とは異なり、定型化が進んでいる。

**掘込み** 遺構確認面から住居床面までの深さは、前期初頭の住居と比べると全般に深めの住居が多い。最高で50cmを測る住居（J-4）がある。

**柱穴** 住居内に4～6個の柱穴が規則的に配置されるのは、J-2・J-7・J-5の三軒である。このうちJ-2・J-7では一方の壁際にも柱穴が対で配される。

**壁溝** 壁溝はJ-5・J-7・J-8に認められる。

**炉** 石囲炉はJ-3・J-7・J-10に認められる。それ以外の住居では地床炉・石囲炉ともに確認されていない。

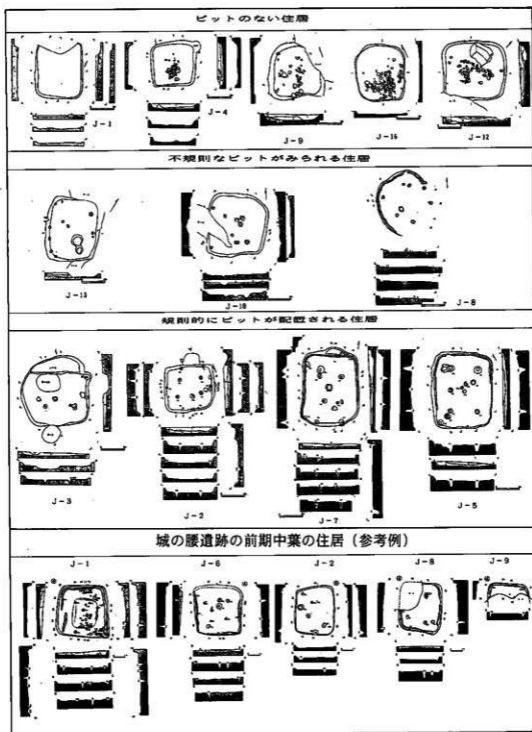


第5図 前期中葉住居の面積分布（●=実床面積 ○=推定面積）

第2表 塚田遺跡前期中葉住居一覧表

住居	形状	大きさm	面積㎡	ピット	炉	住居	形状	大きさm	面積㎡	ピット	炉
J-1	隅丸長方形	(3.7×4.6)	(16.5)	無	無	J-8	(隅丸長方形)	—	—	8個	無
J-2	隅丸長方形	3.8×3.6	12.8	11個	無	J-9	隅丸方形	4.0×4.2	(15.0)	無	無
J-3	隅丸長方形	5.4×4.3	21.4	2個	石囲炉	J-10	隅丸方形	4.8×4.8	21.1	8個	石囲炉
J-4	隅丸長方形	3.5×3.4	11.2	無	無	J-12	隅丸方形	4.9×4.7	21.5	無	無
J-5	隅丸長方形	4.9×6.2	28.6	11個	無	J-13	隅丸長方形	3.9×5.0	18.25	13個	無
J-7	隅丸長方形	4.5×5.8	25.9	10個	石囲炉	J-16	隅丸長方形	3.9×4.5	16.4	無	無





第6図 前期中葉の竪穴住居の集成 (1:320)

## (2) 前期中葉の集落

前期中葉に位置付けられる住居は12軒ある(第7図)。

住居12軒の全体的な分布傾向をみると、北群・中央群・南群の三者の大きなまとまりを認識することができようか(第8図)。

北 群 J-1・J-2  
J-3・J-4  
J-10・J-12  
J-16

中央群 J-9・J-13

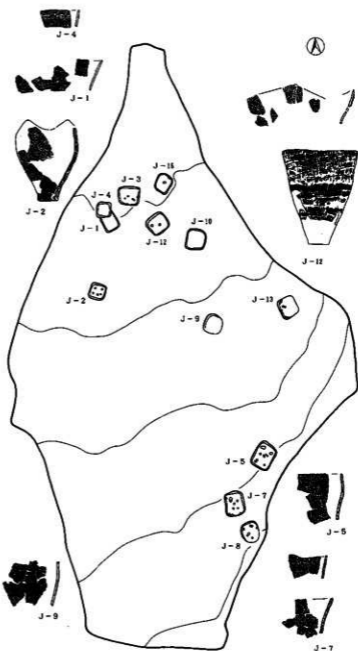
南 群 J-5・J-7  
J-8

住居の主軸方向は、北北東を指す一群と、北北西を指す一群の二群に分離される。

北北東 J-2・J-3  
J-4・J-5  
J-9・J-10  
J-16

北北西 J-1・J-7  
J-8・J-12  
J-13

一方、本遺跡の前期中葉の土器群を分析した賛田の教示によるなら、土器群それ自体の形態からは明確な時期細分は不可能であるという。ただ、J-1とJ-4号住居の重複



第7図 塚田遺跡の前期中葉の集落(1:1,000)

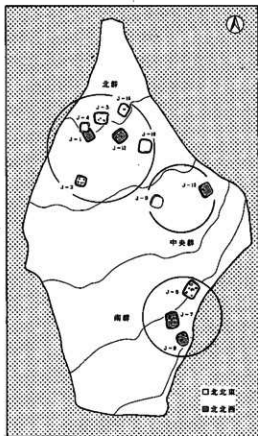
関係からは少なくともこれらの住居群において二段階の集落変遷があったことが理解される。

以上をみると、北群・中央群・南群のそれぞれのまとまりにおいて、二～三段階程度、同時並存住居数3～5軒程度の集落変遷があったものと考えられる。

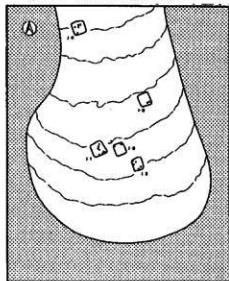
ちなみに本遺跡の北800mの位置にある城之腰遺跡（御代田町教育委員会1992）においても台地全体が調査され、当該期の住居5軒が検出されている（第9図）。城之腰遺跡では、住居2～3軒で構成される2段階程度の変遷が想定されており、本遺跡の事例とともに当該期の集落サイズを窺うことができる資料を提示している。

#### 引用参考文献

- 竹原久子 1992 「城之腰遺跡の集落の構造と変遷」  
 『城之腰遺跡』
- 角張淳一 1992 「城之腰遺跡の縄文前期石器についての方法的展望」『城之腰遺跡』
- 茅野市教育委員会 1986 「高風呂遺跡」
- 東部町教育委員会 1982 「真行寺遺跡」
- 東部町教育委員会 1988 「鍛冶屋遺跡」
- 長門町教育委員会 1984 「中道遺跡」
- 御代田町教育委員会 1992 「城之腰遺跡」
- 御代田町教育委員会 1993 「西駒込・湧玉・東二ツ石遺跡」
- 御代田町教育委員会 1994 「川原田遺跡」
- 御代田町教育委員会 1994 「細田遺跡」
- 御代田町教育委員会 1994 「下弥堂遺跡」
- 望月町教育委員会 1981 「新水A・B遺跡」



第8図 住居の群と主軸方向



第9図 城之腰の前期中葉の集落

## 8 塚田遺跡におけるC<sup>14</sup>年代測定

バリノ・サーヴェイ社

### はじめに

塚田遺跡は、浅間山南麓の標高810m内外の平坦面に位置する。浅間山南麓地域は、浅間山から噴出した軽石流や火砕流堆積物が広く覆っている。遺跡が位置する周辺は、軽石期に噴出した小諸第2軽石流堆積物に覆われている（荒牧，1993）。

本遺跡では、発掘調査により縄文時代早・前期を中心とする土壌群、前期の竪穴住居址、古墳時代初頭の竪穴住居址、古墳時代後期の古墳群が検出されている（御代田町教育委員会，1992）。古墳時代初頭の竪穴住居のうち、H-4号住居址からは、住居の構築材と考えられる炭化材が良好な状態で検出し、樹種同定の結果コナラ節を中心としていることが明らかとなった（未公表）。今回の分析調査では、縄文時代前期と推定される遺構から検出された炭化材について、放射性炭素（C<sup>14</sup>）年代測定を行い、各遺構の年代を確認する。また、J-3号住居内炉址から検出された燃料材と推定される炭化材について樹種同定を行い、その樹種を明らかにする。

### 1 試料

#### （1）放射性炭素（C<sup>14</sup>）年代測定

試料は、J-3、J-5、J-9、J-13号住居址（縄文時代前期後半関山期）およびD-39、D-114、D-134号土坑（縄文時代前期初頭中道期）から検出された炭化材9点（No.1、2、4～10）である。

#### （2）樹種同定

試料は、J-3号住居址の炉址内から検出された燃料材と考えられる炭化材1点である。

### 2 方法

#### （1）放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得た。

#### （2）樹種同定

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接戦断面）の断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

### 3. 結 果

#### (1) 放射性炭素年代測定

測定結果を表1に示す。なお、No 4の試料は、 $\beta$ 先計数率と現在の標準炭素についての計数率との差が2 $\sigma$ 以下であったため、測定値が得られずModernと表記した。

表2 年代測定結果

番号	試料名	推定時期	測定結果	Code No.
1	J-3 ①	縄文時代前期前半(関山期)	6530 $\pm$ 110 4400 B.C	Gak-17299
2	J-3 ②	縄文時代前期前半(関山期)	5900 $\pm$ 110 3950 B.C	Gak-17300
4	J-5 IV区II層	縄文時代前期前半(関山期)	Modern $\delta^{14}\text{C} = 23.9 + 2.9\%$	Gak-17301
5	J-9 I区I・II層	縄文時代前期前半(関山期)	6590 $\pm$ 160 4640 B.C	Gak-17302
6	J-13 II区III層	縄文時代前期前半(関山期)	11530 $\pm$ 180 9580 B.C	Gak-17303
7	J-13 一括	縄文時代前期前半(関山期)	12180 $\pm$ 230 10230 B.C	Gak-17304
8	D-39 一括	縄文時代前期初頭(中道期)	6660 $\pm$ 150 4710 B.C	Gak-17305
9	D-114 一括	縄文時代前期初頭(中道期)	11510 $\pm$ 180 9560 B.C	Gak-17306
10	D-134 一括	縄文時代前期初頭(中道期)	5170 $\pm$ 140 3220 B.C	Gak-17307

※放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5570年を使用した。

#### (2) 樹種同定

燃料材と考えられる炭化材は、広葉樹（散孔材）であることは観察できたが、樹種の特定はできなかった。

## 4 考 察

### (1) 年代測定値について

縄文時代前期は、これまで行われてきた放射性炭素年代測定の結果から、約6000～5000年前と考えられている(日本第四紀学会ほか編, 1992)。これにしたがえば、今回の年代測定結果は、No 2 およびNo10で縄文時代前期の値が得られている。しかし、他の7試料は、測定値が得られなかったNo 4を除いて、いずれも縄文時代早期およびそれ以前の値が得られている。炭化材は、炭素濃度が高く比較的汚染されにくいとされ(鈴木, 1976)、年代測定用の試料として適している。反面、木炭の吸着性・吸水性が高いことも知られており(岸本, 1984)、場合によっては古い炭素が吸着する可能性もある。

今回の結果を見ると、複数の試料について測定を行った遺構では、それぞれ近い測定値が得られている。この結果から、測定値に各遺構の埋積状況や使用した木材の樹種および性格(用途・樹種等)が関与している可能性がある。測定値が推定値よりも古くなる傾向は、隣接する下弥堂遺跡でも見られ、今後各遺跡・各遺構の出土状況や試料の性格等をさらに吟味する必要がある。また、周辺地域で同様の傾向が見られるのか否かを知るために、さらに資料を蓄積していく必要がある。

### (2) 燃料材の樹種

燃料材は広葉樹(散孔材)であった。試料の木材組織を観察するとカバノキ属に似ているが、全体的に保存状態が良くなく、樹種の特定はできなかった。そのため、今回の結果から燃料材の用材選択について検討を行うことは困難である。本地域における当該期の燃料材の樹種については、資料がほとんど無く、明確ではない。今後さらに資料を蓄積していくことが必要である。

#### <引用文献>

荒牧重雄(1993) 浅間火山地質図, 8p., 地質調査所。

岸本定吉(1984) 木炭の博物誌, 260p., 総合科学出版。

御代田町教育委員会(1992) 細田・下弥堂・塚田・下荒田遺跡—塩野遺跡群—発掘調査概要報告書, 62p.

日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫編(1992) 図解・日本の人類遺跡, 242p., 東京大学出版会

鈴木正男(1976) 過去をさぐる科学 年代測定法のすべて, 234p., 講談社

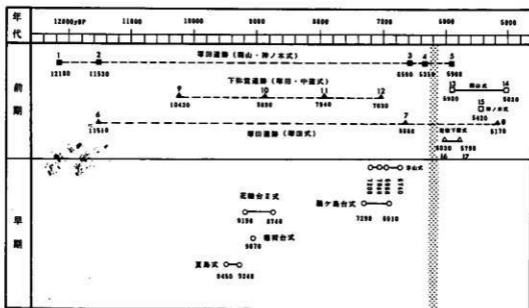
## 9 C<sup>14</sup>年代の測定結果について

塚田遺跡においては、前期中葉（関山・神ノ木式期）の竪穴住居出土の炭化材7点、前期初頭（塚田式期）の土坑出土の炭化材3点についてC<sup>14</sup>年代測定を実施した。その測定結果に若干のコメントを加えておく。

第1図の1～5は関山・神ノ木式期の測定年代の分布である。その幅は12180～5900yBPにおよぶ。ちなみに長野県大石遺跡の神ノ木式期のC<sup>14</sup>年代は5420±100yBP(15)、関東の幸田貝塚の関山式期C<sup>14</sup>年代が5900±115yBP(13)、日秀西遺跡が5020±190yBP(14)、縄文前期の年代幅は6100～4700yBPであるので（武藤・キーリ1982）、その一般的な数値の中に納まりそうなのは5の5900±110yBPの年代のみで、それ以外は平均的な年代幅から大きくかけ離れている。

6～7は、塚田式期の測定年代の分布である。その幅は11510～5170yBPにおよんでいる。ちなみに塚田式並行期の花積下層式の年代は、関東の下組貝塚のC<sup>14</sup>年代が6030±135yBP(16)、幸田貝塚が5790±140yBP(17)となっており、そのあたりの数値を平均的に考えると、6の数値はきわめて古く、7はやや古く、8はやや新しい年代となっている。9～12は隣接する下弥堂遺跡の塚田式期の測定年代の分布で、10430～7030yBP(9～12)とかなり古めの年代が出ている。

キーリ, C. T. 武藤康弘 1982 「縄文時代の年代」 『縄文文化の研究』 1



第1図 C<sup>14</sup>年代の分布

## 10 古墳時代初頭の土器群の位置付け

小山 岳夫

### 1 はじめに

塚田遺跡からは、北側に接する細田遺跡の弥生時代終末の集落と密接な関係があると考えられる竪穴住居址6軒から、比較的まとまった土器が出土した。そこでまず、これらの土器群に細田遺跡出土土器との比較を中心に置いた検討を加え、時間的位置付けを与えた上で集落の検討を行うことにしたい。

### 2 出土土器の分類

先に報告書が刊行された細田遺跡との対比を主眼に置き、その土器分類の基準に則り、塚田遺跡出土資料の分類を行う。

器種は壺、甕、台付甕、高坏、鉢がある。

壺 全容を知り得る資料に恵まれないが、在地の発展系譜上にある無彩のAと赤色塗彩されるB、在地器種からは円滑に発展し得ない外来器種E・Fがある。

形態—A Bとも胴部形態が一樣に大きく膨らみ球状を呈す点は一致する。口縁部は受口状を呈するものと、単純口縁があるが、受口が目立つ。胴下位は大概括れるようだ。

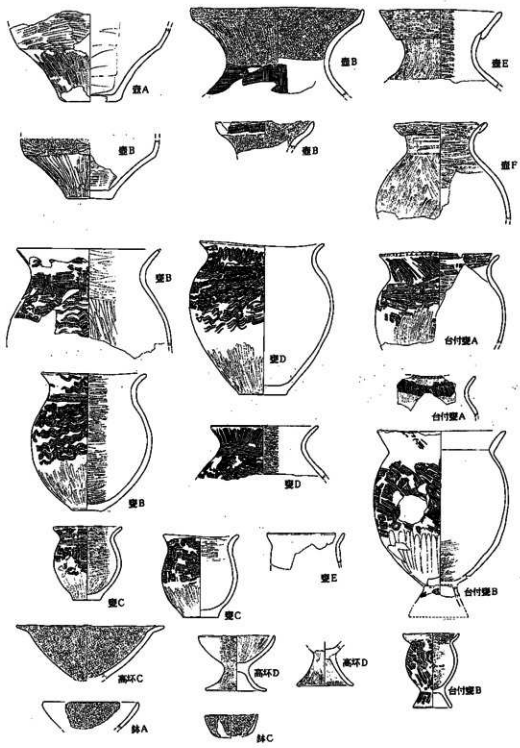
Eは所謂二重口縁壺、Fは貼付による折り返し口縁の壺である。

文様—A Bは頸部と口縁部に施文される。頸部は幅の広い帯描直線文に2本単位の縦スリットを加えた構成のものほか、細片だが裏状文を文様構成の上端に採用したものが見られる。

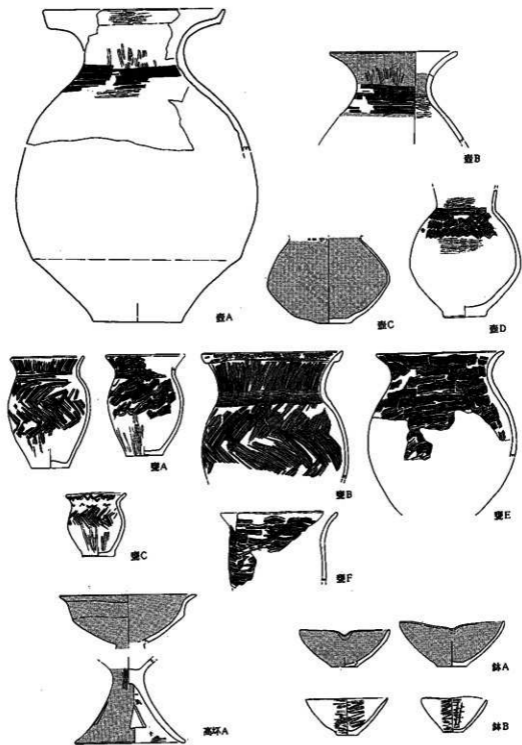
E・Fは無文である。

比較—在地系の壺A・Bは、全容を知り得る資料に恵まれない事情もあり、受口の口縁部が目立つほかは、細田遺跡の同壺との型式変化を指摘しがたい。最も大きな変化は器種内の組み合わせである。細田遺跡では在地系の壺A・Bに加え、在地器種が外来要素の侵入によって変容したと考えられる壺Cや、群馬県樽式の影響下にある壺Dなど間接的な外来要素あるいは近隣地区の外来系土器が共伴したのに対し、塚田遺跡では畿内・東海地方など広域を視野に入れなければならない外来





第1図 塚田遺跡の土器分類



第2図 細田遺跡の土器分類

系土器が共伴していることである。この地域もあきらかに古墳築造開始に伴う、日本列島規模の社会変革の波のなかに揉まれ始めたことを表す土器の組み合わせの変化である。

**甕・台付甕** 在地系の平底甕BCDEと外来系の台付甕A・Bが相半ばする。平底甕の文様は口縁部から胴部中位まで櫛描波状文が施されるものが多く、斜走文は少ない。第165図1に象徴される波状文、斜走文がひとつの個体に共存するものも認められる。なお、平底甕は文様差によって形態差が生じないため形態を主に分類する。また、台付甕は全容の知り得る個体に恵まれないため、形態差による細分は避け、口縁部刻みの有無で前者をA、後者をBと分類しておく。

**形態**—在地系の平底甕は、口縁部が弓状に外反し、胴部が中位で張り球状に膨らむB、口縁部が短く強く外反し、胴部が軽く膨らむ小型品を中心としたC、口縁部が短く外反し、胴部が球状に大きく膨らむ大型品を中心としたD、口縁部が緩く外反し、胴部が寸胴なEなどがある。口縁部は大概は単純口縁だが、まれに貼り付け口縁もある。

外来系の台付甕は、ほとんどが単純口縁であるが小型品には受口状も見られる。S字甕は見られない。

**文様**—在地系の甕BCDは前述のように口縁部から胴部中位まで櫛描波状文か斜走文を調整充填することを基本とする。頸部文様帯は櫛描簾状文（二連止めが多い）のほか、単なる直線文、通常甕に施文されるT字文など多様で、頸部文様帯を持たないものも多い。また、台付甕の影響のためか、刻みを持つ例も散見される。Eは無文である。

外来系の台付甕はA Bとも外面刷毛調整を基本とする。口唇部外側の陵の部分に刻みを持つAは口～頸部まで刷毛調整されるのに対し、刻みを持たないBは口縁部ヨコナアされる。外面胴部下半は在地的なヘラミガキが施される。

**比較**—細田遺跡の甕Aは塚田遺跡では消失する。甕Aは佐久地域の後期弥生土器の組成中で基本的な器形で、その消失は、当地域の後期弥生土器様式の解体を如実に示すものである。甕B・Dは細田遺跡から比べると口～頸部がやや短くなるものが目立ち、第160図5のように極端な短頸、球胴となるものもあらわれる。小型品を中心とする甕Cや甕Eについては特に変化を指摘できない。

台付甕は細田遺跡にはなく、塚田遺跡で新たに出現する器種である。佐久地域を初め、東山道を中心とする諸地域の後期弥生社会はおおむね平底甕の分布域で、

西は伊勢、東北近江から東は相模、武蔵の一部にまでわたって分布すると言われ  
(2)  
る台付甕は基本的に土器様式の組成中に含まれない。壺E F同様土器の広域な動きが始まったことを示唆する共伴例である。

高坏 細田遺跡の坏部下位で屈曲して陵を持ち直立した後、口縁部が強く外反するAはなく、それよりも古い要素の高坏Cがある。

外来系の高坏Dは無彩で、東海地方の元屋敷式の小型高坏を模したものと考えられる。裾部の径が口径を凌駕しないこと、脚部に円孔を持たないこと、全体の器厚が武骨で厚いなど元屋敷式のそれとの相違点も多いが、在地器種からの発展形態とは考えがたく、土器全体の雰囲気から元屋敷式の高坏の模倣を強く意図しながらも、結果的に完全な模写がなされなかったものと判断しておきたい。

比較一塚田遺跡の壺・甕の在地器種には微弱ながらも型式変化が見られるのに対し、在地系高坏の細田遺跡からの後退現象は不可解である。本土器が炉体として使われ、古い要素を保持する可能性が高いものにも注意を払っておかなければならない。全体としては外来要素の強い器種が加わる点、壺・甕のありかたと共通する。

鉢 赤彩品Aと赤彩で手捏ねのBがあるが、断片資料で比較にならない。

### 3 まとめ

細田遺跡出土資料との対比を行い、その違いを明確にしようと勤めてきた。

まず、塚田遺跡のH-1～6号住居址6軒の住居の同時性について検証しておこう。佐久平最大級のH-5号住居址は外来系土器の出土が主体を占め、在来器種は稀少である。土器型式の変遷からみればH-5住居址は他の5軒より後続していたと言うことになるが、遺跡内ではかに同時期の住居が見当たらない点、土器様相ではやや旧態とした他の6軒が本住居を中核に据えたかのような配置を持つ点を考慮すれば、ここでは本集落で盟主的な役割を果たしたであろう最大のH-5号住居に住んだ人間は、使用する土器についても先進的なものをいち早く取り入れていたと理解しておこう。

塚田遺跡の在地器種は甕B・Dに微弱ながらも変化が伺えるものの、他の在地器種は細田遺跡出土資料との間に明確な型式差が存在しないことが判明した。この点から見て、細田・塚田両遺跡の時間差はごく短いことが想定されよう。

一方、外来系土器は全体の器種組成の中では二重口縁の壺E、折り返し口縁の壺F、刷毛目調整の台付甕A B、元屋敷式の模倣と考えられる高坏Dなど外来系土器の侵入が顕著で、組成中に

おける割合もかなり高くなり、在地の弥生系土器が解体・消滅していく過程をあらわしている。この点が細田遺跡との大きな違いで、両者に時間差が介在する根拠となる。

さて、塚田遺跡で出土した外来系土器は胎土、形態、調整の諸特長から見て搬入されたものはなく、在地で模倣して製作された可能性の高いものである。先に指摘したなかで代表例をまとめると台付甕外面のヘラミガキの多用、変な形の小型高坏などである。

これら外来系土器製作に当たってのモデル地域いずこであったのか。刷毛目調整台付甕の分布域は西は伊勢、東北近江から東は相模、武蔵の一部にまで及ぶ。この中で塚田遺跡出土のような刻みを持つ台付甕は遠江以東に承譜を求められる可能性が高いようだ。同様な台付甕は、小諸市和原遺跡からも検出され、同遺跡の出土資料は外来系土器ばかりか、在地系土器も塚田遺跡の出土資料と類似しており、両者は時間的に近い関係にあったと考えられる。また、在地系土器からみれば、佐久市瀧の峯<sup>(3)</sup>2号墳、小諸市久保田遺跡<sup>(4)</sup>出土土器も同列に考えることができる。

以上を総括すると、塚田遺跡H-1～6号住居址から出土した土器群は在地系土器と外来系土器の混在状況からみて、当地方弥生終末段階に位置付けた細田遺跡に若干後続することは確実である。したがって、細田遺跡の対比資料、A系統B類のS字甕が共伴する上山田町御屋敷遺跡Y-4号住、上田市西光坊遺跡8号住の併行期<sup>(5)</sup>とされる東海地方の元屋敷式古段階、畿内地方の纏向3式などよりは後出ということになる。ただし、千曲川流域でこの段階に比定される長野市四ツ屋1・2号住、瀧の峯2号墳などの出土資料は、小型丸底土器の出現を見ることはないため、元屋敷式新段階、纏向4式までは下降しないだろう。

塚田遺跡のH-1～6号住居址出土土器は、佐久地域のみならず千曲川流域にあっては土器において東海色・越後色など外来色が濃厚になった頃の所産物である。私は地域編年を尊重する立場から塚田遺跡出土およびこれに類似する土器群をもってを古墳時代の土器、ひいては土師器と呼ぶことにしたい。

この時期、松本では弘法山古墳、佐久平では瀧の峯2号墳など墳形・土器両面に東海色を強く被った前方後方墳、および前方後方型の墳墓が成立した。

## II 塚田遺跡の古墳時代集落

小山 岳夫

### 1 はじめに

前項で塚田遺跡出土土器の分析を行った結果、概ね、同一時期に取り纏められ、当地域の古墳時代初頭、日本列島下の趨勢では古墳の築造が始まって間もない時期に位置付けられることが明らかになった。このような国内情勢の中で高冷地に忽然と姿を現した細田遺跡の跡を引き継いだ塚田遺跡の古墳初頭の集落の意味を考えてみようと思う。

### 2 塚田遺跡古墳初頭集落の沿革

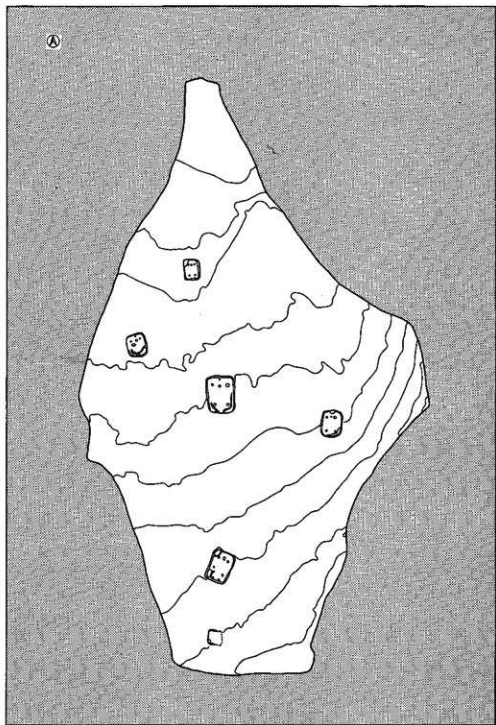
塚田遺跡は浅間南麓の裾野、鎌矢川の支水、糠水（はるき）沢によって形成された標高800m内外の狭小な地形を呈する第2段丘面上に立地している。弥生時代終末期いたって塩野の地での稲作実現を目指し、集落の営みを開始した人々が造営した細田遺跡は北に伸びる細尾根に接している。土器様相で細田遺跡からの連続性を持ち、また、周辺に塚田遺跡と同時期の集落が存在しないところからみて、塚田遺跡の古墳時代集落は細田遺跡を営んだ人々が移動して集落形成した蓋然性が高い。

今回の発掘では段丘面が先細りとなる南端のわずかな地域が未調査であるが、遺跡のほぼ全容を推測できる発掘調査がなされたと考えられる。なぜなら、未調査地区に近づくほど遺構は希薄になり、調査地区南端では遺構が皆無に近い状況になるからである。当遺跡の弥生集落は弥生終末期に集落形成した後は継続して営まれることがなく、南側直下に広がる一段低い沖積地に立地する6軒の竪穴住居址が検出された塚田遺跡へ古墳時代初頭段階では移住したようだ。

生産域は塚田遺跡の南方下段にある通称「ハルキ沢」と呼ばれる谷地にあった可能性が高い。なぜならそこは現在御代田町で冷害を被らない一等水田地帯だからである。今回の発掘調査ではこの谷地から明確な水田址を発見することはできなかったが、湿地面で地層観察を行ったところ旧水田面ではないかと考えられる土層（第V層 古環境研究所によりテフラ分析が行われているので後ページを参照のこと）が発見された。この土層は天仁元年（1108年）降下の浅間B軽石灰に覆われており、それ以前の段階で形成された比較的古い地層であることが確認された。

### 3 規模と構成

出土土器様相に大差が認められない竪穴住居が6軒検出された。おおむね同時併存の総数と考



第3図 古墳時代住居の分布

えておこう。同時期と考えられるの集落は小諸市久保田遺跡Y-1・2号住、和田原遺跡1・3～6号住などがあるが、集落規模の判明する調査例は塚田遺跡が初めてである。

分布は台地中央に最大のH-5号住居址が居座り、これを菱形に取り巻くように中規模のH-1・2・4・6号住居址が取り囲んでいる。また、H-4号住居址の南方には小規模で柱穴を持たないH-3号住居址が存在する。細田遺跡では南北2群に分かれて総数9件の同時併存集落が見られたが、塚田遺跡では戸数が半分減った反面、占地面积が拡大されている。

#### 4 竪穴住居の属性

各竪穴住居の平面形態は小型のH-3号住居址を除き、概ね千曲川流域の弥生後期住居から継続して採用される隅丸長方形基調で、規模は第1表に記した通りである。床面積は最小のH-3は12.5㎡、H-2は20.83㎡、H-1は28.76㎡、H-6は34.6㎡、H-4は45.7㎡、最大のH-5は68.7㎡で個々の大きさにかかなりの差がある。床面積20㎡前後の範囲に落ち着いていた細田遺跡の竪穴住居址とは対照的で、面積の平均値も35.1㎡と概して大型化していることがわかる。

柱穴配置は佐久地方で後期後半以降柱の本数が4本に統一されると矛盾しない。後期の住居に多く見られる棟持ち柱を持つ例は意外に少なくH-1・5号住居址に限られる。貯蔵穴状のピットはほとんどの住居に見られるが配置される場所は様々である。炉はすべて奥側の主柱穴間に設けられる。いずれも縁石を持つ地床炉で、H-2号住居址は非常に珍しい高坏の土器埋設炉である。以上の状況は佐久地方の千曲川右岸地域の様相と一致する。ベッド状遺構はH-3号住居址除く5軒に見られ、当遺跡では通常の住居となんら変わらない。

住居の長軸方向は細田遺跡ではかなりのばらつきがあったのに対し、塚田遺跡ではおおむね南北方向を向く。

第1表 塚田遺跡古墳住居一覧表

遺構名	検出位置	形態	長軸	短軸	床面積	長軸方位	炉	備考
H-1住	あ-4グリッド	隅丸長方形	5.82m	5.09m	28.76㎡	N-7°W	地床炉+縁石	
H-2住	い-3グリッド	隅丸長方形	5.15m	3.74m	20.83㎡	N地床炉+	縁石+土器埋設	焼失住居
H-3住	い-7グリッド	隅丸方形	3.56m	3.50m	12.65㎡	N-20°E	地床炉+縁石	柱穴なし
H-4住	い-6グリッド	隅丸長方形	7.70m	5.52m	45.70㎡	N-22°E	地床炉+縁石	焼失住居
H-5住	い-5グリッド	隅丸長方形	9.72m	6.95m	68.7㎡	N	地床炉+縁石	
H-6住	う-5グリッド	隅丸長方形	6.68m	5.00m	34.06㎡	N-4°E	地床炉+縁石	



## 5 焼失住居

H-2号住居址とH-4号住居址が焼失していた。大型のH-5号住居址を介在して南北線上に並ぶ住居である。土器など生活用品の出土は少なく、いずれもあらかじめ片づけた後、焼却した状況と考えられて、偶発的な火災ではなさそうだ。この住居出土の炭化材を分析したところ、ドングリの実をつける樹木を多用していることが判明した。

日本の弥生文化の源流を想定されているとされる高床住居に住む中国雲南省やタイの少数民族の集落は、現在でも移動あるいは伝染病などで住居を放棄する場合、住居を焼きはらう風習があるという。この民俗例をただちに中部高地の弥生集落に援用することは無理があるとしても、意図的な焼失の状況は塚田の集落を去るにあたって祭祀的な意味も込めて住居を焼きはらっていったと考えることもできそうだ。

## 6 まとめ

塚田遺跡では古墳時代に入ったとはいえ、地域の弥生社会の伝統を濃厚に残す集落が形成されていた。このような状況は竪穴住居の長方形プランの保持に象徴的で、東海・越後など外来系土器の直接的な進出の薄い、当該期の佐久地域の特性といえる。ただし、若干目を東側の小諸市に向けると状況は一変し、外来系土器の進出、住居の方形化が顕著となるのである。

### 註

- (1) 御代町教育委員会 1993 『細田遺跡』で評述
- (2) 小諸市教育委員会 1989 『和田原・鎌田原』で外来系土器については立花 実評述
- (3) 佐久歴史文化財調査センター 『瀧の峰古墳群』で三石宗一が詳細な土器分類を行い、位置付けを行っている。
- (4) 花岡 弘 1984 『久保田』 小諸市教育委員会
- (5) 宇賀神誠司 1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県歴史文化財センター紀要 2』
- (6) 1992. 10. 24 若林弘子先生の「高床式建物の源流」講演会より

## 12 弥生式竪穴住居の変遷

小山 岳夫

### 1 はじめに

佐久平の弥生土器編年(小山 1989)を基準として、形態・付属施設等全容が把握でき、かつ出土土器によって時期判定が明確にでき得る竪穴住居を抽出し、弥生時代中期後半から後期の変遷を考察する。それによって塚田遺跡の古墳初頭の竪穴住居形態の位置を明確にする。

表1表 佐久地方竪穴住居形態の変遷

	形態・規模	主柱穴	その他	炉
弥生時代 中期後半	古相 新相 小型 円・方形→方形 大型 ? →長方形	4本 (大型に 6本あり)	新相で 入口・ 棟持柱 顕在化	中央
弥生時代 後期前半	中相 新相 小型 方形→長方形 大型 長方形→長方形	4本 (大型に 6本あり)	新相で 入口・ 棟持柱 定着	中相→新相 奥主柱 奥主柱 穴間と 穴間 中央のみ
弥生時代 後期後半	古相 新相 小型 長方形→方形化 大型 長方形→長方形	4本	入口・ 棟持柱 常設	古相→新相 奥主柱 奥主柱 穴間 穴間と のみ 中央
古墳時代 初頭	小型 方形化 大型 方形化 長方形	4本	入口・ 棟持柱 多い	奥主柱穴間

## 2 竪穴住居変遷に関する考察

### 中期後半

中期後半段階の土器については前述の弥生土器編年では、古・中・新相（最新相含む）3段階に細分されている。竪穴住居形態・規模・柱穴配置については後で詳しく述べるが、中期後半全般を通じて炉は住居中央にあるのが基本で、地床炉かそれに緑石を配する例が圧倒的に多く、まれに埋甕炉が加わる。

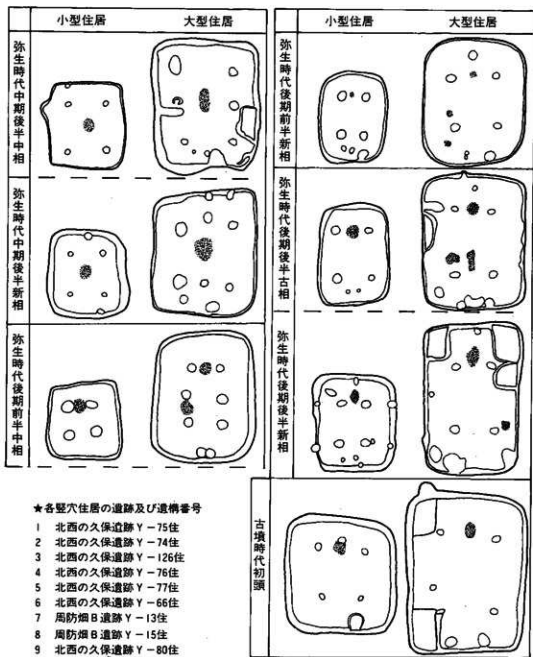
細別時期毎にみると佐久平では確実な古相資料が少なく、深堀・和田上南遺跡、北西の久保遺跡の一部に古相に近い資料が出土している。和田上南で円形住居一例がみられるほかは、方形が多い。入口に関連するピットの有無については良好な遺存例が少なく明白でない。

中相段階になると竪穴住居例も急増する。円形は消滅し、方形・長方形基調となる。床面積20㎡内外の小型住居は方形、40㎡を越える大型住居は長方形を呈する。柱穴配置は4本で方形配置が多いが、大型住居は6本長方形配置するものもある。入口に関連するピットについては明確なもの少ない。新相段階の竪穴住居は形態・規模とも基本的に中相を踏襲するが、北側主柱穴間上には棟持柱を設け、明瞭な入口に関連するピットを持つ例が急増する。また、小型住居の形態はわずかに長方形化の傾向が看取される。

### 後期前半

この時期は古・中・新相3段階に細別されることが予想されるが、佐久地域では古段階資料が欠落しており、実態が不明確である。炉は中期後半のように住居中央に付設されるものも残るが、住居奥側主柱穴間に移動する例が多く、この位置が後期後半まで続く。また、大型住居を中心に副炉を持つ例も多い。炉の形態は中期後半のように地床炉か、+炉緑石が多いことには変わらないが、微細にみると「L」・「コ」・「ロ」字形石囲炉が頻出するのは中相段階、土器敷炉が急増、主体を占めるのは新相段階である。中相段階の竪穴住居の形態・規模は北西の久保遺跡を例に取った場合、小型は方形、大型は長方形が多く、入口・棟持柱とも不明確な住居も多く、形態・規模・柱穴配置とも中期後半段階を基本的に踏襲したかのようである。大型住居に6本柱穴を採用する点も似ている。しかし、若干時期が下ると考えられる中相段階の周防畑B遺跡では、方形住居は10㎡以下の超小型住居に限られ、その他は長方形化が著しい。

周防畑B遺跡の新相段階では方形住居がなくなり長方形に統一される。規模は前代のような40㎡前後の大型・20㎡前後の小型に加えて、前の時期と同じく主柱穴を掘り込まない10㎡以下の超小型住居もある。このように規模の格差が大きい傾向は周防畑B遺跡特有でもある。入口・棟持柱は常設化し、設けない方が珍しくなる。後期型住居の完成期といって良い。ただし、大型住居



★各竪穴住居の遺跡及び遺構番号

- 1 北西の久保遺跡 Y-75住
- 2 北西の久保遺跡 Y-74住
- 3 北西の久保遺跡 Y-126住
- 4 北西の久保遺跡 Y-76住
- 5 北西の久保遺跡 Y-77住
- 6 北西の久保遺跡 Y-66住
- 7 周防畑B遺跡 Y-13住
- 8 周防畑B遺跡 Y-15住
- 9 北西の久保遺跡 Y-80住
- 10 北西の久保遺跡 Y-125住
- 11 腰巻遺跡 Y-6住
- 12 下小平遺跡 Y-2住
- 13 和田原遺跡 1住
- 14 塚田遺跡 H-4住

(1:188)

第4図 竪穴住居の変遷

に6本柱穴を採用するなど前代の要素も若干残している。

また、主柱穴には加工した長方形角材を使用したと考えられる長楕円形状も出現する。

この前の時期(後期初頭)、長野市吉田高校グラウンド遺跡をみると、すべての住居が長方形化しており、佐久平に比した善光寺平の変移の速さが伺われる。

#### 後期後半

土器様相では古・新2相に細別される。筆者は新相を御屋敷式土器並行と考えており、古墳社会の影響下にある土器と考えている。

炉位置は前代を踏襲し、基本的に奥側主柱穴間付近であり、新相に至ると稀に住居中央に設けられる場合もある。前代(前半新相)は土器敷炉盛行期であったが、後期後半段階ではむしろ終始地床炉+緑石が主体で、これに少数の石囲炉、土器敷炉、埋甕炉が加わる状況になる。ただし、土器敷炉がことさらに多いのは周防畑B遺跡だけであるため、遺跡差を考慮する必要もある。大型住居を中心に副炉を持つ例が多い点は前半と変わらない。

古相段階の住居形態・規模は前代を踏襲する。主柱穴配置は4本を基本とし、6本は消滅する。以降、平安時代まで4本柱穴配置した竪穴住居が基本となる。

新相では大型住居は長辺の一層の伸長化に伴い、床面積50㎡近い特大住居が出現する一方、小型住居は短辺の拡大に伴う方形化が顕著となり、次代に継承されて行く。

#### 古墳時代初頭

小諸市久保田・和田原遺跡、御代田町塚田遺跡などがある。同時期には佐久市で瀧の峯2号墳のような前方後方形の墳墓が成立している。

久保田・和田原遺跡など外来系土器の進出が顕著な遺跡の住居は、大小問わず竪穴住居はおおむね方形化する。一方、外来系土器の浸透が薄い土器様相を示す塚田遺跡では、旧態前とした前代を踏襲する長方形住居が採用されている。

炉の位置は前代と変化しない。

## 13 H-4号住居址から出土した炭化構築材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

塚田遺跡(御代田町塩野地区所在)は、浅間山南麓の標高810m内外の平坦面に位置する。浅間山南麓地域は、浅間山から噴出した軽石流や火砕流堆積物が広く覆っている。遺跡が位置する周辺は、軽石期に噴出した小諸第2軽石流堆積物に覆われている(荒牧, 1993)。

本遺跡では、発掘調査により縄文時代早・前期を中心とする土壌群、前期の竪穴住居址、古墳時代初頭の竪穴住居址、古墳時代後期の古墳群が検出されている(御代田町教育委員会, 1992)。古墳時代初頭の竪穴住居址のうち、H-4号住居址からは、住居の構築材と考えられる炭化材が良好な状態で検出された。構築材と考えられる炭化材が竪穴住居址から検出された例は、これまでに全国で数多く知られている。佐久盆地においても多くの遺跡で検出例が知られ、御代田町十二遺跡、根岸遺跡、広畑遺跡、小諸市鋤物師屋遺跡、和田原遺跡、関口遺跡、佐久市下聖端遺跡では、炭化材の樹種同定から構築材の用材選択に関する検討が行われている(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1988a, 1988b, 1989a, 1989b, 1989c, 1991, 1992)。これらの調査により、時代・遺跡を問わず構築材にコナラ属コナラ亜属クヌギ節およびコナラ節が多用されていたことが明らかとなっている。本遺跡に隣接する細田遺跡でもクヌギ節・コナラ節が全体の76.5%を占めていた。しかし、住居址から出土する炭化材は、燃焼とその後の埋積を経て現存したものであるため、当時の組成を正確に反映しているとは限らない。そのため、住居址から炭化材が出土した場合には、出土状況をおさえた上で可能な限り同定を行っていくことが必要である。

以上のことから、今回の分析調査では、H-4号住居址から出土した構築材と考えられる炭化材について樹種同定を実施し、住居構築材の用材選択について検討する。

### 1 試料

試料は、H-4号住居址から出土した構築材と考えられる炭化材244点(No.1~138, 140~245)である。

### 2 方法

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接戦断面)の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

### 3 結 果

同定結果を表1に示す。244点の試料の中には複数の樹種が認められるものが6点 (No102, 145, 170, 171, 236, 239)あった。これらの試料については、試料番号に小文字のアルファベットを付して同定した全樹種を表記した。試料には、アサダ、ハシバミ属の一種、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種、コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種、キハダ、クマノミズキ、イネ科の一種の7種類が認められた。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑 木本編<1・II>」(北村・村田, 1971, 1979)にしたがい、一般的性質などについては「木の辞典 第2巻~第8巻」(平井, 1979-1981)も参考にした。

#### ・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、内壁にらせん肥厚が認められる。放射組織は同性~異性III型、1~3細胞幅、1~30細胞高。年輪界はやや不明瞭。

アサダは北海道(中南部)・本州・四国・九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。またサクラの模擬材として市場に出されることもある。

#### ・ハシバミ属の一種 (*Corylus* sp.) カバノキ科

放射孔材~散孔材で、管孔は単独および放射方向に2~7個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、主として単列、1~30細胞高で、ルーズな集合放射組織が認められる。年輪界は明瞭。

ハシバミ属には、オオハシバミ(*Colyrus heterophylla*)とその変種ハシバミ(*C. heterophylla* var. *thunbergii*)、オオツノハシバミ(*C. sieboldiana*)とその変種ツノハシバミ(*C. sieboldiana* var. *mandshrica*)がある。このうちハシバミに関しては、オオハシバミと同一種としてハシバミ(*C. heterophylla*)とする見解もある。広義のハシバミ・ツノハシバミとも北海道から九州の山野に見られる落葉小高木~低木であるが、西日本にはやや少ない。材は重硬・強靱で、器具材や薪炭材などに用いられる。果実は食用となり、また搾油されることもある。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp)

ブナ科

環孔材で孔層部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のもの

複合組織よりなる。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ(*Quercus acutissima* Carruthers)とアベマキ(*Q. variabilis* Blume)の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、櫓木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮の Cork 層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect *Prinus* sp.)

#### ブナ科

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ(*Quercus mongolica* Fischer ex Turez.)とその変種ミズナラ(*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ(*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ(*Q. aliena* Blume)、カシワ(*Q. dentata* Thunberg)といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州(丹波地方以北)に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。

コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ(*Q. acutissima* Carruthers)に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・キハダ(*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科

環孔材で孔圏部は2~5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し紋様をなす。道管は単穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~40細胞高。年輪界はやや不明瞭。

キハダは北海道・本州・四国・九州の水湿地を好んで生育する落葉高木である。材はやや軽軟で、加工は容易、強度は小さいが耐湿性が高い。建築・器具・家具・薪材などの用途がある。キ



ハダの名は内皮が黄色であることによるが、この内皮にはアルカロイドを含み、胃腸薬として古くから知られ、また染料としても用いられた。

・クマノミズキ (*Cornus macrophylla* Wallich) ミズキ科

散孔材で、道管の分布密度は高くない。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性で、1~6細胞幅、1~30細胞高。年輪界はやや不明瞭。以上の特徴からクマノミズキに同定したが、同属のヤマボウシ (*C. kousa* Buerger ex Hance) もよく似た組織を有している。これらの2種を区別することは困難であり、今回の試料についてもヤマボウシの可能性もある。

クマノミズキ・ヤマボウシともに、本州・四国・九州に自生する落葉高木である。

・イネ科の一種 (*Gramineae* sp.)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。検出された試料は微細片のため、走査型電子顕微鏡による観察及び写真撮影は行えなかった。

#### 4 考 察

住居構築材は、検出された大部分がコナラ節であり、他にアサゲ、ハシバミ属、クヌギ節、キハダ、クマノミズキ、イネ科が各1~2点程度認められる。これらの出土状況を見ると、試料の多くは住居址の中央から放射線状に出土している(図1)。放射線状に出土している試料の内、大型のものは垂木に由来していると考えられる。樹種を見ると、垂木の多くは強度のあるコナラ節である。一方、コナラ節以外の樹種は、いずれも小型の試料に多く認められる。同様の傾向は、隣接する細田遺跡でも見られ、特にコナラ節と木材の性質が似ているクヌギ節が大型の木材に使用されていないことについて、樹種による用途の違いを推定した。今回の結果でも同様の可能性が指摘できる。

同定点数が少ない樹種以外は、コナラ節が圧倒的に多いという点で、隣接する細田遺跡と同様の傾向といえる。これは、本遺跡で生活を営んだ人々が細田遺跡から移り住んできたと考えられていること(御代田町教育委員会, 1992)と調和的である。しかし、両遺跡をとりまく植生に大きな変化がなかった結果とも考えられる。

これまで周辺地域で行われた構築材の調査では、弥生時代末から平安時代に至るまで住居構築材にコナラ節が多いことが明らかとなっている(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1988a, 1988b, 1989a, 1989b, 1989c, 1991, 1992)。これらの同定結果が当時の樹種構成を正確に反映しているとは考えられないが、コナラ節が多用されていたことは確実といえよう。このような傾向は、関東地方の住居址から出土した構築材についても見られ、広い地域でクヌギ節・コナラ節が利用されていたことが推定される。しかし、関東地方でも古墳時代に構築材の樹種構成が豊富になる地

域も見られ、住居構築材の樹種構成は遺跡周辺の植生と密接な関係があったことが推定されている(高橋, 1988; 橋本ほか, 1993)。このような地域的な違いを把握するためには、焼失住居址などから構築材が検出された場合には樹種同定を行い、その樹種を明らかにしていく必要がある。本地域においても、今後さらに資料を蓄積し、遺跡の立地環境と樹種構成について調査していく必要があろう。

#### <引用文献>

寛政重雄 (1993) 浅間火山地質図, 8 p., 地質調査所。

橋本高紀夫・馬場健司・田中義文・高橋 敦 (1993) 淡川市中筋遺跡(第7次調査)の自然科学 分析調査, 淡川市発掘調査報告書第34集「中筋遺跡 第7次発掘調査報告書」, p. 40-60, 群馬県淡川市教育委員会

平井信二 (1979-1981) 木の事典 第2巻~第8巻, かなえ書房。

木村四郎・村田 源 (1971, 1979) 原色日本植物図鑑 木本編< I・II >, 453p., 545p., 保育社, 御代田町教育委員会 (1992) 細田・下弥堂・塚田・下寛田遺跡—塩野遺跡群—発掘調査概要報告書, 62p.

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1988a) 十二遺跡出土炭化材の樹種同定, 「錫師屋遺跡群 十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—」, p. 393-399, 御代田町教育委員会。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1988b) 錫師屋遺跡出土炭化材同定, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「錫師屋遺跡群 錫師屋—長野県小諸市錫師屋遺跡発掘調査報告書—」, p. 116-117, 小諸市教育委員会。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989a) 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定, 「長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在 錫師屋遺跡群 根岸遺跡発掘調査報告書」, p. 291-293, 御代田町教育委員会。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989b) 和田原遺跡出土炭化材同定, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集「和田原遺跡群 鎌田原—長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書—」, p. 83-88, 小諸市教育委員会。

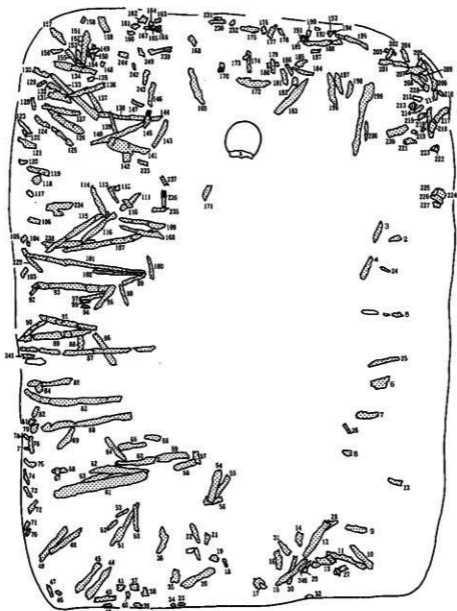
バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989c) 広畑遺跡出土炭化材の樹種同定, 「広畑遺跡—長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書—」, p. 35-40, 御代田町教育委員会。バリノ・サーヴェイ株式会社 (1991) 関口A・B遺跡出土炭化材の樹種同定, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口A・関口B・柏原遺跡群下柏原—長野県小諸市関口A・関口B・下柏原遺跡発掘調査報告書—」, p. 245-254, 小諸市教育委員会

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告, 佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集「国道141号線関係遺跡 長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書(本文編) 芝宮遺跡群下芝宮遺跡 I・II・III・IV、芝宮遺跡群上高山遺跡、周防知遺跡群下北原遺跡、近津遺跡群上宮原遺跡、下蟹沢遺跡、長土呂遺跡群上大林遺跡、長土呂遺跡群下聖端遺跡 I・II」, p. 355-391, 佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財センター。

高橋利彦 (1988) 中筋遺跡出土炭化材の樹種, 淡川市発掘調査報告書第18集「中筋遺跡 第2次発掘調査報告書」, p. 42-47, 群馬県淡川市教育委員会。







0 2m










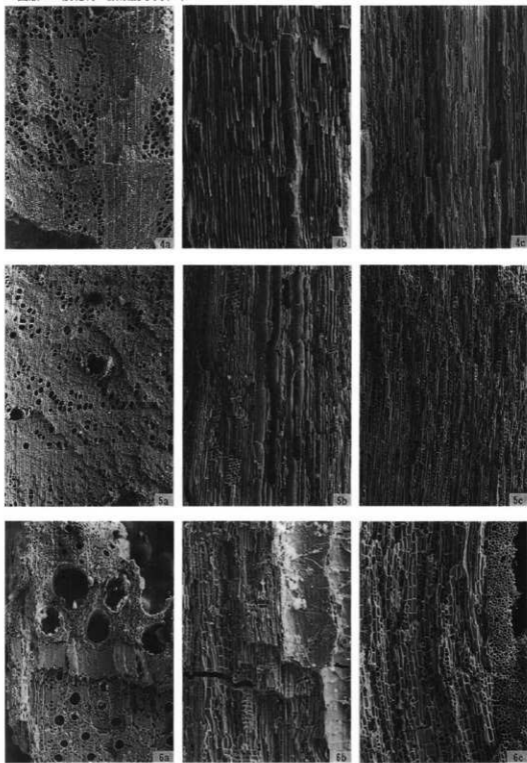
- |   |  |  |  |
|---|--|--|--|
|  ハシバミ属 |  アサダ    |  クヌギ節 |  コナラ節 |
|  キハダ   |  クマノミズキ |  樹種不明 |  未測定  |
|  5 石材  |  |  |  |

図1 Y-4号住居址から出土した炭化材の樹種

図版 I 炭化材の顕微鏡写真(1)



1. ハシバミ属の一種 (No239b)

2. アサダ (No170)

3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (No118)

a : 木口, b : 柎目, c : 板目

200 $\mu$ m : a

200 $\mu$ m : b, c